
十八歳の花嫁

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十八歳の花嫁

【Nコード】

N9030P

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

美馬藤臣 彼の前に一人の少女が立っている。醜い人間の欲望や悪意に巻き込まれ、無残にも傷つくであろう十八歳の少女。誰かに手折られ、踏み躪られる花ならば、いつそ自分の手で……。今の美馬は、その想いの呼び名を知らない。それは、西園寺愛実との運命の出会いだった。＊注意＊本作は「十八歳の愛人」（R18 / サイトで完結）のアナザーストーリーです。 / 番外編「甘くて切ない初めての夜」更新。

第1話 売春（前書き）

人物や団体・施設などの名称は、全て架空のものです。実在のものとは一切関係ございません。

本作は「十八歳の愛人」（R18 / サイトで完結）のアナザーストーリーです。家族構成や設定に違いがあります。混乱する可能性がありますのでご注意ください。

第1話 売春

「彼女が西園寺愛実さいおんじいつみか？」

「はい。間違いありません」

美馬の問いに第一秘書の瀬崎が答えた。

瀬崎は真面目を絵に描いたような男だ。わざわざ調査報告書を捲りながら確認をとる。

「それで、あれはどう見ても不特定の男を待っている風情だが……。旧伯爵家のご令嬢は、体まで売ってるのか？」

それはそれで利用価値は高そうだ。目的の為なら贅沢は言えないだろう。だが……。どうにも面白くない。

美馬は大きなため息を吐いた。

「いえ……。報告書にそういったことは書かれてありません。アルバイト先は宅配会社で早朝に仕分け作業を。他には、平日の夜と週末にファミリーレストランの厨房で皿洗いをしているようです。ただ

……」

何枚目かに目を通しながら、瀬崎は言いよどんだ。

「ただ、何だ？」

「はい。先週から闇金の取立てにあっているようです」

それはかなり執拗な取立てで、担保は遺族年金　本来担保には取れないものであった。だが実際は、十八歳の愛実の他に十三歳の妹もいる。相手が闇金であるなら、娘たちが担保代わりなのは明白だろう。

しかも、その借金をしたのは母親だと言う。

「母親は典型的な逃避型の浪費家です。貯金と借金の区別がつかない女性ですね。今回はそこに付け込まれて、何も考えずに借りたようです」

「生活費か？」

「いえ……学生時代の旧友が主催したパーティに出席し、借入れのほぼ全額を寄付しています」

美馬は目を閉じ、頭を左右に振った。

愚かな親はどこにでもいる。不幸な少女は彼女だけではない。彼自身、決して恵まれた子供時代を過ごしてはいなかった。そして今も、面倒な問題を押し付けられている。

「社長。あの少女を巻き込むのは如何なものでしょうか？ 私にはどうも」

「間違えるな、瀬崎。巻き込むのは俺じゃない。あのクソ婆だ」

「しかし……」

「ちょうどいい。あの娘の弱味を握れる」

調査書に男性経験の有無は書かれていなかった。

しかし、あどけない口元と従順そうな目元。真っ直ぐに切り揃えられた黒髪のが、胸の高さで揺れ……。見るからに清潔感を漂わせている。

（男の征服欲を見事に煽ってくれる容姿だな）

慎ましそうな少女が同じ場所に立ち続けてもう二時間。これまで何人かの男が声を掛けるが、彼女は慌てて逃げるような仕草を繰り返していた。だが金が必要なら、いずれ誰かについて行くだろう。そのほうが美馬にとっては楽になる。

だが、目の前の少女が男に組み敷かれる姿を想像して……美馬は

動いた。

「社長 まさか、本当に？」

「彼女が俺から逃げられないような、既成事実を作るだけだ。計画通りに頼んだぞ」

夜の新宿、路肩に停めた黒い国産乗用車の後部座席から、独りの男が降り立った。

みまふじおみ
美馬藤臣、間もなく三十歳になる彼は、国内有数の財閥・美馬グループの一員だ。彼自身、本社の専務と東部デパートの社長を務めている。

グループをワンマン経営でまとめて来た先代社長、美馬一志が亡くなって一ヶ月。今、グループは後継者問題で大きく揺れている。一志亡き後、グループ最大の株を保有し、後継者を選ぶ立場にいるのが一志の正妻、弥生。

あと数年、一志が生きてさえいてくれたら……全ては美馬のものになったのだ。彼は戸籍上、一志の孫にあたる。だが、最も後継者に近い男だった。

（死んだ人間に文句を言っても始まらない、か）

美馬は苦々しい思いで、新たな計画に一步踏み出した。

くくくくくくくくくく

今日で三日目 愛実に迷う時間など残されてはいない。生活のために何もかも売り払った。最早、彼女自身の身体しか残されては

いないのだ。

西園寺家は旧華族の家柄である。

曾祖父の代から不動産も株もろくな運用は出来ず……結果、絵画などの美術品や先祖伝来の品、はては調度品まで売って食いつないできた。典型的な没落貴族といえよう。

しかし、それも父の代で底を尽く。父は土地家屋を抵当に入れて事業を始めたが……それも失敗。いよいよ家を追われようか、という時に倒れて、あつという間に還らぬ人となった。

それが今から二年前、愛実が高校に入ってすぐのことだ。

残されたのは認知症を患いかけた祖母と、働くことなど知らないお姫様育ちの母、三歳下の弟、五歳下の妹、十一歳下の弟だった。

それでも何とか父の保険と遺族年金、そして愛実のバイト代で生活してきた。もちろん、生活費を切り詰め遣り繰りしてきたのは愛実である。

来春には弟、尚樹が中学を卒業する。しかし、高校の入学金すら用意できそうもない状況なのだ。男の子の尚樹には大学まで……最低でも高校には行かせてやりたい。こんなことなら、父が亡くなつてすぐ高校を辞め、就職すれば良かった。愛実の胸は後悔で一杯だ。

だが今はそれどころではない。

母が町の金融業者……いわゆる闇金に借金をしていたことが発覚したのである。しかも、父の遺族年金の証書を担保にしていた。金利は途方もない。なのに、母は父の保険金が永遠のように思っている。

「愛実さん、支払っておいてね」

丸つきり悪びれることなく言われ、愛実は返す言葉も出て来ない。母が借りたという二十万円は、利息を含めてわずか一ヶ月で四十

万円になっていた。

母の実家は、地方の田舎町で広大な敷地を所有する地主だ。両親は既になく、母の兄夫婦が跡を継いでいる。しかし、これほどの窮地でも頼るわけにはいかない。なぜなら、亡き父が一千万円以上の借金をしており、返済も滞ったままであった。

母の両親は生前、娘を甘やかし続けた。そんな母の辞書に？節約？や？貧乏？などと言言葉はない。

愛実はいっそもかも放り投げ、逃げ出したい衝動に駆られる。だがそれは、中三の弟に全てを背負わせることになってしまう。

高校生の愛実ですら立ち尽くすほどの状況に、中学生の弟や妹を置いてはいけない。ましてや愛実がいなくなれば、小学校に上がったばかりの弟、慎也はどうすればいいのだろう。

新宿駅の北口に立ちつくしていると、愛実は何人かの男性に声を掛けられた。二十代半ばのサラリーマン風の男性から、五十代くらいの中年男性にまで……。彼らは皆、そつと近寄ってきて、「いくら？」と訊ねた。

愛実慌てて、

「友達を待つてるんです！」

そう答えては男性から飛び退く……。その繰り返しだ。

（いい加減、覚悟を決めなきゃ。このまま帰っても借金取りが待つてるんだから）

次に声を掛けられたら付いて行こう。そう、愛実が覚悟を決めた瞬間、背後に足音が聞こえた。

「君は、いくらで買えるんだ？」

振り向いた彼女の目に映ったのは、三十代くらいのビジネスマン風の男性だった。

第1話 売春（後書き）

御堂です。

あけましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い致しますm（――）m

ということで、第1話をご覧いただきありがとうございます。

1～2話は、「十八歳の愛人」とほぼ一緒です（笑）

ここからR18には突入しますので、安心して（？）ご覧下さいませ。

「～愛人」より少し長くなるかも知れませんが、

よかつたらお付き合い下さい（^^）／

第2話 欲情（前書き）

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

第2話 欲情

「いくらかと聞いてるんだが？」

「あ、あの……五万……いえ、十万円」

「一晩にしちゃ高額だな。それとも、そんなに楽しませてくれるのか？」

愛実と同じ高校の友人が言っていた。

この辺りで立っていればすぐに声を掛けられる。相手がお金持ちならば、一ヶ月分くらいのバイト代は一日で稼げる、と。ただ、詳しい金額までは聞かなかった。

思わず口にした金額だが、そんなに高額だったのだろうか。ならば一体、何人の男性に体を売れば借金分を稼げるのか……。愛実は気が遠くなる。

「は、初めて、なんです……だから」

「私は処女に価値が見出せない男なんだが。まあいい、本当だったら払おう。来い」

十分後、二人は近くのラブホテルの一室にいた。

部屋の中は薄暗く、饅^すえた匂いがする。男と女が交じり合って放つ淫靡な香りなど、この時の愛実に判るはずもなく。彼女は奇妙な居心地の悪さを感じていた。

反面、チラリと横目で自分をラブホテルに連れ込んだ男性を覗き見る。

この三日間、愛実に声を掛けてきた男性の中で一番のルックスだ

ろう。とても道端で女子高生を買っようには見えない。百八十センチ以上はありそうな長身で、スーツは間違いなくオーダーメイドだ。黙っていても女性から近づいて来そうな、魅力的な男性だった。

（こんな素敵な人がどうして？）

胸の中で賛美し掛けて、愛実慌てて否定する。

理由は何であれ、この男性はこれが違法と判っていて愛実に金額を尋ねたのだ。とても、褒め称えるような行為ではない。無論、愛実も同罪だ。

その時、彼女は今回のことを教えてくれた友人の言葉を思い出した。

「あの……お金を先にもらえますか？」

「そのままシャワー中に消えるつもりか？」

「そんな……現金を持っているかどうか、判らないって。踏み倒されることもあるって聞いたんです。だから」

そんな愛実の言葉に、男性はあからさまに頬を歪めた。

「初めての割の詳しいんだな。あまりしゃべるとボロが出るぞ」

「お金が貰えないと困るんです。そのために、こんなことを……わたし」

彼は愛実に財布の中身を見せる。

そこには、彼女がお目に掛かったことのない厚さで一万円札が入っていた。

「カードは好きじゃなくてね。現金を持ち歩く主義だ。ご満足かな？」

愛実は無言で首を縦に振る。次はどうしたらいいのだろう……何も判らず迷っていると、不意に男性の手が伸びてきた。そのまま、両手首を掴まれ壁に押さえつけられる。

「あ……の。シャワーは」

「一緒に入るか？」

「い、いえ……それは」

「入って体を洗ってくれるなら、余分に払うと言えば？」

「それは、それは……でも、あの」

男性の顔が愛実の目の前にある。唇はほんの数センチ離れているだけ。それは初めての経験で、視線が定まらない。

彼女は軽くパニックを起こしていた。彼が何を言い、自分が何を答えているのか……判らなくなるほど。

「本当に、男と付き合ったことはないのか？」

「あ、ありません」

「好きな男もいないのか？」

「そんなこと……」

通りすがりのこの人に何の関係があるのだろうか。

言い返そうとした愛実の髪に彼の指が触れた。

ふと気付けば、愛実は両手を頭の上で組まされていた。男性は片手で彼女を壁に押し付けている。ただそれだけで、彼女は身動きも取れない。

愛実はその力強さに、小さな恐怖と不思議な感動を覚えていた。

父は穏やかで物静かな人だった。間違っても、今、愛実を押さえ込んでいるような、男性的魅力に溢れたタイプではない。他に身近な異性と言えば、弟たちくらいだろう。

そんな彼女が、薄いブラウス一枚隔てただけで男性に体を押し当てられている。初めて逢った人なのに、汚らしさは微塵も感じない。それどころか、水泳の授業で指導と称して腕や腰に触れる体育教師のほづが、よほどいやらしく感じるくらいだ。

愛実はそのな自分に戸惑うばかりで……。

「髪は黒だな。染めないのか？」

愛実はフルフルと首を横に振った。

男性の顔が髪に寄せられ、そのまま首筋に唇が触れ……。毛先をもて遊んでいた指が、ブラウスの上から胸の周囲をなぞった。

「胸は、そこそこあるんだな。肌も綺麗だ……。だが、あんな場所に立つなら化粧くらいしたほうがいいんじゃないのか？」

「それは……。校則で、禁止されていて」

低く掠れるような声が耳の奥で響く。愛実は膝から崩れ落ちそうだった。

だが次の瞬間、浮かれた心に冷水を浴びせられた。

「売春は禁止されてないのか？」

喉の奥に氷を詰められたようだ。

一言も言い返せない愛実を嘲笑うかのように、彼はスカートの中に手を入れた。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

思った通り、愛実の髪は漆黑で何の手も加わっていないかった。髪に顔を埋め、ペパーミントの淡い香りが彼を包み込む。

愛実の体には触れないつもりだった。なのに……。美馬は一瞬で惹き込まれ、彼女の首筋に口づけてしまう。

（シャンプーの匂いに欲情するとは）

彼は信じられないほど気持ちが高揚するのを感じていた。処女に興味を持ったことなど一度もない。好みのタイプは男を悦ばせる術を持ち、立場を弁えることの出来る大人の女。金で全ての片が付く女だけだ。

ところが、愛実を見ているうちに、なぜか追い詰めたくなり……。行為は予想外にもエスカレートして、愛実の太腿に直接触れてしまった。

そこは条件反射のように固く閉じ、美馬の侵入を阻んだ。

（どうやら……処女は本当らしいな）

美馬は愛実と体をピッタリ寄り添わせた。すると、彼の下半身は素直に反応し始める。

「コレはまた……信じられんな、こんな小娘に」

思わず声に出した瞬間……堪えがたい衝動が彼を襲った。津波のように理性を攪い、本能の海に引き摺り込む。美馬が抗い切れず、愛実の唇を奪おうとしたその時、スーツの内ポケットから携帯の着信音が鳴り響いたのだ。

美馬は勢いをつけ、少女から男の欲情を引き剥がす。

そして大きく息を吐き、携帯を取り出すのだった。

『社長、通報しました。数分でそちらに行くと思います。準備はよろしいですか？』

当然、瀬崎である。

準備など出来ているはずもない。ミイラ取りがミイラになる所だった、とは口が裂けても言いたくない。

『ああ、判った』

美馬は携帯を切ると、もう一度深呼吸して愛実を振り返った。

第3話 計画

「おいっ！」

愛実慌てた様子で衣服を整え、そのまま玄関に向かって駆け出した。

「あ、あの……すみません。わたし、やっぱり出来ません。ごめんなさい！」

叫びながら逃げ出した愛実の腕を、美馬は飛びつくように掴む。

「待て」

「いやっ！ 離して……お願いします」

「そうじゃない！ 下に警察が来てるんだ」

？警察？の言葉に、愛実の動きは止まった。

目を見開き、困惑した表情で美馬を見上げている。そのままゆっくりと彼女の拘束を解いた。

「そ、それって……どういう」

「どうもこうもない。さっきまで一緒だった同僚が知らせてくれた。君に断わられた男の嫌がらせかも知れんな」

美馬はさりげなく、警察が踏み込むのは愛実のせいだ、と刷り込む。

「で、でも……何もしないのに」

「こういったホテルに入るだけで充分だ。売春容疑で逮捕されたら、高校は間違いなく退学だな。それに、親に知れるぞ」

親のことを言われたら大概の子供は青褪めるものだ。だが、彼女は落ち着いた表情で小さく首を振った。

「高校はもう、辞めて働くつもりですから。それに母は……」

そこまで言い、愛実はハツと顔を上げる。

「あなたは？ あなたはどうなるんですか？ 捕まったら……会社をクビになったりしませんか？」

「君が高校生なら児童買春扱いで実刑だな」

美馬は愛実を試すつもりで大袈裟な言葉を口にする。女を追い込み、本性を暴いた上で踏み躪るのは悪くない。特に高潔ぶった女ほど、土壇場では滑稽な姿を見せてくれる。

この娘にしても同じことだ。旧伯爵家のご令嬢などと大それた肩書きを持つてはいるが……。所詮、体売って金を稼ごうとした今の女子高生に違いない。

「そんな……あ、わたしは高校生でも十八歳です。ですから」

「いいのか？ そんなことを言つて」

「え？」

「君が十八歳未満なら、罪に問われるのは私だけだ。だがそうでなければ……君も同罪になる。高校生の君は、私に騙されてこのホテルに連れ込まれた 警察が来たら、そう言ってみたらどうだ？ 君は単なる被害者になることが出来るかも知れない」

本当に言い出すような娘であれば、存分に利用してやろう。

青臭い少女など抱く気はなかったが、先ほどの感覚は悪くなかった。ならば処女を調教してみるのも悪くは……。

「あ……ありがとうございます」

美馬の善からぬ想像は、予想外の言葉で遮断された。

「今、何と言った？」

「わたしのことを気遣って下さって……どうもありがとうございます。でも、犯罪だと承知でここまで来ました。あなた独りに押し付けるつもりはありません」

愛実の声は震えていた。両手を胸の前で組み、潤んだ瞳で美馬を見上げている。

「わたしが同じ場所で何日もウロウロしていたから……。あなたのことも断れば良かったんです。なのに……こんなとこまで付いて来てしまつて。あなたの奥さんや子供さんにまで、ご迷惑をお掛けするかも……。本当に申し訳ありません」

その時、ドアの外に人の気配を感じた。おそらく、合鍵を使つて一気に踏み込むつもりだろう。

美馬は頂垂れる愛実の左手を取り、自分に引き寄せた。

「私は独身だ。だが、逮捕は避けたい。協力する気はあるか？」

「それは……もちろん」

「いいだろう。その言葉、忘れるな」

美馬は彼女の手をきつく握り締め。

く*く*く*く*

「警察だ。そのまま動く……な」

制服警官二名と、私服警官四名が部屋に飛び込んできた。内、私服の一名は女性だ。おそらくは少年課の婦警であろう。

彼らは時間を見計らい、行為の最中を想定して飛び込んで来た。

しかし予想に反して、中の二人は服を着たままだ。テーブルを挟み、小さなソファに向かい合って腰掛けている。

「何だ君たちは！ 例え警察といえど、許可もなしに客室に立ち入るのは不法侵入だ！」

美馬の怒声に愛実は身を竦めた。

愛実は後で知ったことだが……。

彼女が立っていた場所は、友人らが数ヶ月客引きに使い続けてきたポイントであった。警察の動きに気付き、愛実の友人はお金に困っていきそうな彼女に話をしたのだ。体の良い生け贄にされたのである。

そんな場所に愛実は三日も立ち続けた。警察に目をつけられて当然だろう。

しかも、「女子高生に声を掛けられた。今、他の男とホテルに入った」……そんな通報があつては、渡りに船である。

「許可も何も……往生際の悪い奴だな。この娘は、何日もその駅前に立って客引きをしてたんだよ。お前さんがそこで声を掛けて、ここに連れ込んだ所もちゃんと見てるんだ。服を脱いでないからセーフだと思うなよ」

「さあ、あなたはこっちに来て。高校生よね？ 何年生？ 歳は幾つ？」

婦人警官が愛実の両肩を抱き、立たそうとした。

「あ、あの、わたし……」

「彼女は十八だ」

「そりゃあそうだな。年齢くらい確認してるか。だが、本当だとは限らないぞ。すぐに確認を取って、十八歳未満の場合は児童買春容疑で現行犯逮捕させてもらうからね」

警察側としてはここは賭けである。児童買春と売春防止法では刑罰の程度が雲泥の差だ。

その直後、美馬は小さなソファに窮屈そうに座ったまま薄く笑った。そして彼は、警官らが驚くような台詞を口にしたのである。

「西園寺愛実、都立K高等学校三年、誕生日は平成 年四月十一日……今日で十八だ。住所は、東京都中野区……」

その場にいた全員が絶句した。

もちろん愛実も茫然としている。初めて逢ったはずの男に名前や住所、生年月日まで知られているなど、普通では考えられない。

「な、何をそんな……でたらめを言っつて誤魔化せると」

「誤魔化す必要はない。彼女は私の婚約者だ。知っていて当然だろう」

美馬はスッと立ち上がると、驚く警官たちの前を横切り、愛実の横に立った。

「そうだったな、愛実。私たちの婚約の証を見せてやるといい」

その指には、十八歳の少女に不似合いな大粒のダイヤモンドが燦燦と輝いている。

美馬は愛実の肩に手をやると、ごく自然な動作で抱き寄せた。

「私は東部デパートの社長、美馬藤臣だ。二日も約束をキャンセルし、今夜も随分待たせてしまった。早く二人きりになりたくて、場末のラブホテルに飛び込んでしまったが……。それが一体何の犯罪になるんだ？ 納得のいく説明を得られぬ時は、どうなるか覚悟するんだな」

多数の人間が息を呑み……ラブホテルの一室は、普段とは違う種

類の熱い空気に包まれた。

第4話 代金

美馬の言葉と態度、そして肩書きに、警察官たちはほうほうの体^{てい}で引き上げて行く。

彼らに踏み込まれてから二十分足らず、室内は再び、微妙な静寂を取り戻した。

「どう……して？　なぜ、わたしのことをご存知なんですか？　あなたは一体」

「美馬藤臣だ。連中に話した通り、君の婚約者だよ」

人を馬鹿にしたような返答に、愛実^{あいじつ}は声を荒げた。

「わたしは、あなたのことなんて全然知りません！　それを婚約なんて。第一、婚約者に金額を聞いて、それから……ラ、ラブ、ホテルに、連れ込むんですか？」

精一杯の理屈で返すが、美馬は余裕の笑みを浮かべたままだ。

そして彼が口にした理由は、愛実には全く心当たりのないものだった。

「私の祖母と、君の祖父の間で約束していたそうだ。遠い将来、歳の釣り合う孫が出来たら、結婚させようってね」

ほんの一ヶ月前、彼の祖母・美馬^{みま}弥生^{やよい}は夫を亡くした。

弥生には結婚を約束しながら、相手の親に反対され、引き離された恋人がいた。それが愛実の祖父・西園寺^{さいおんじ}亘^{わたる}だという。

泣く泣く別れた恋人との約束　夫の手前、弥生は長らく忘れて暮らしていた。だが、美馬家は弥生の生家である。婿養子の夫には商才があり、財産を増やしてはくれたが……。彼女は不実な夫を忘れ、若かりし日の願いを叶えようと思いついた。

「私が知ったのもつい最近だ。こんな場所に君を連れ込んだのは…

…この三日間、自分の拳動を思い出してみたらどうか？」

その言葉に、愛実は一瞬で真っ赤になる。

美馬は彼女の素性を知ったうえで、様子を窺っていたのだ。そして全てを見られていた。三夜も逡巡し、金のために男を物色して、ついには美馬を相手に体売ろうとしたのである。

それを考えると、八つ当たりを承知で言わずにはいられない。

「判りました。その降って湧いたような婚約話を、破談にする理由が欲しかったんですね。だったら、そう仰ってくれたら良かったんです！ 何もこんな……毘に嵌めるような真似をなさらなくても」

「君から断わる？」

「ええ、もちろんです」

愛実が胸を張って言う。

だが、美馬はいじわるそうに失笑すると、

「それは無理だな。君には断われない」

きっぱりと断定したのである。

この男が、東部デパートの社長であることは警察が確認した。

と、なれば、愛実の祖父の話は本当なのかも知れない。だが祖父は十年も前に亡くなっている。今となつては真実など知りようもないのだ。

現代においても、恋愛を模した見合い結婚が主流の社会は存在する。おそらく美馬家もその一つなのだろう。

かつては西園寺の家もそうであった。でも今は……。愛実はどう言つて説明すれば判って貰えるのか、懸命に考えるが答えは見つからない。

そして、先に口を開いたのは美馬のほうであった。

「どうやら、誤解があるようだ。確かに、黙って様子を窺っていたのは申し訳ない。しかし君は人待ち顔で駅前に立っていた。てつきりデートだと思ったんだ。君にそういった男性がいるなら、祖母に報告して考え直して貰おうと思った」

その言葉が真実なら、愛実は最低の姿を見せたことになる。

思った通り美馬は、

「だが、君が待っていたのは……処女を十万で買ってくれる男だった」

愛実はスツと顔を上げる。

「それ以上仰らなくても充分です。あなたのおばあ様にも、そうお伝え下さい。わたしはこれで、帰らせて頂き……」

「お父上が事業で借金を残したまま亡くなったそうだな。金の掛かる家族を抱えて、明日の夜も同じ場所に立つつもりか？」

「そんなこと……あなたに答える義務はないと思います」

「助けてやった恩を忘れたのか？ 私の機転がなければ、今ごろ君は警察の取調室だ」

「あなたも同罪じゃないですか！？」

愛実の問いに、美馬は事も無げに首を振った。

「婚約者となるはずの女性に、売春行為をやめさせようと説得していた。と言えはどうなると思う？ それだけじゃない。十分以内に弁護士が到着して、私は釈放される。その時、君はどうするんだ？ 弁護士どころか、身元引受人で来てくれる親もいないんじゃないか？」

愛実には辛い質問だった。

母はおそらく来ないだろう。誰のために、娘がここまで身を堕と

したか……判るような人ではない。

「判りました。助けて頂いてありがとうございました。でも、祖父が生前どんなお約束をしたにせよ、わたしには関係のないことですから」

「関係はある。君もきつと、結婚を承諾する気になる」

「そんな……愛し合ってもいないのに、結婚なんて」

「愛し合ってもいない男に、抱かれようとしたのはどこの誰だ？」

「それは……お金が、必要だったんです。だから」

父は子供たちに保険金を残してくれた。

だがそのお金は、半分以上が祖母の介護付き有料老人ホームの入居費用に消えたのである。祖母は現在、六十七歳。入居時に委託金として五年分の費用を支払った。三年後、月々の費用を払えなくなれば、祖母は帰されてしまう。その時、母に介護が出来るだろうか？ 愛実が介護に回れば、働き手がなくなる。

将来のことを考えれば、愛実にはどうしたらいいのか判らない。それでも、祖母は大切な人だ。華やかに装い、出歩くことが好きな母に代わり、愛実をはじめ弟妹の面倒を見てくれた。今となつては、老いと病で孫たちの区別もつかない。だが、例えばどんな思いをしても、愛実には見捨てることなど出来なかった。

（この人に、そんな話をして仕方がないわ）

愛実は左手の薬指から指輪を外し、コトツとテーブルの上に置く。「これはお返しします」

押し出すような声でそう言い、愛実は出て行こうとした。その時だ。

バサツという音と共に、指輪の横に札束が置かれた。

「とりあえず、五十万ある。小切手より現金がいいだろう?」

「意味が判りません」

「手付金とでも言っておこうか。金が必要なんだろう? 但し、売るのは君の処女ではない。短ければ数ヶ月、長くとも二、三年。君の時間を買おう。いくらだ?」

それは、道端で体の値段を聞かれた時より、屈辱的な言葉だった。しかも、そう言っただけで目の前に置かれた札束に、心が揺れそうになるのだ。

何より切ないのは……警察に踏み込まれる直前、美馬のことを運命の男性のように感じたことだろう。

だが彼は、答えを出さない愛実に苛つき始め……。

「何を考える必要がある? 君は一晚十万だったな。それで買ってやる。三年も経てばざっと一億だ。普通の売春でそこまで稼げると思うか? 女子高生にも判る簡単な計算だろう」

「嫌です! おじい様たちの愛情をお金に替えて、踏み躪るような真似は出来ません。どれだけお金を積まれても、心までは売れません!」

第5話 悲鳴

美馬は派手な看板の下をくぐり抜けた。

女と入り、セックスなしで出て来たのは初めての経験だ。

「お疲れ様でした。首尾はいかがでしたか？」

見計らうように美馬の横に車が停まった。彼は後部座席に乗り込みながら、車を運転する瀬崎の質問に答える。

「あの娘が出て行くのは見たんだろう？　それで俺に聞くのか？」

「ええ、そうですね。しかし社長、その割に随分愉快そうな表情ですが……」

瀬崎はにこやかに応じつつ、車を発進させた。

言われてみて、美馬は自分が愛実の対応に不満を感じていないことに驚く。

女子高生には勿体ないほどの金額を提示したのだ。それを一蹴されれば、頭にきて当然だろう。体を売るほど切羽詰っていないながら、よくもあんな綺麗事が言えたものだ。そう思っているのは確かだが……。

「じいさんたちの愛情を金には替えられんそうだ。一晚で十万も吹っ掛ける女が……笑わせてくれる」

可笑しそうに言う美馬に、瀬崎は眉を顰めた。

「社長、やはりどうあっても彼女と？　大奥様を止めることは出来ないのでしょうか？」

「俺でなきゃ、他の誰かがやるだけだ」

「しかし、あの大奥様に？　若かりし頃に叶わぬ恋の成就？　などとは……とても」

瀬崎は、信用出来ない、と声に出しては言わなかった。

無論、美馬も弥生を信じてはいない。彼が愛実と話した言葉は嘘ではなかった。しかし、真実からは程遠いものである。いや、彼自身も弥生の本心など判ろうはずがない。

「どちらにしても、猶予は一日二日だろう。すぐに俺が嗅ぎ付けたことは知られる。その前に、あの娘を手に入れておきたい。抱くのが早いと思ったが……」

どれだけお金を積まれても、心までは売れません！

（面白い。ならば、売る気になるまで積むだけだ）

「瀬崎、今夜中に片をつける。彼女のアパートに車を回せ」
「……はい」

ウインカーの音がやけに耳につく。十八歳の少女を、およそまともではない計画に巻き込もうとしている。そんな美馬に対する抗議のようだ。

静かに目を閉じ、聞こえぬフリをする美馬であった。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

最寄の駅に電車が滑り込む。愛実は重い足取りでアパートに向かったのだった。

美馬と言った……あの男は何を考えているのだろうか？

彼のおかげで、警察に連れて行かれずに済んだことは確かだ。そのことはもちろん感謝している。だが、初めから愛実の素性を知っていたなんて。そうになると、話は別ではないか。

馬鹿な女子高生に過ぎない愛実でも、美馬グループの名前くらいは聞いたことがある。

たった今、彼女が乗って帰って来た東部鉄道の親会社だったはずだ。彼自身は東部デパートの社長と言っていた。最近では行くこともないが、以前はよく利用していたデパートの一つである。

彼の祖母と愛実の祖父の関係は、気にならないと言えば嘘になる。十八歳の少女らしく、胸の中では切ない恋物語を思い描いていた。愛実が小学生の頃に亡くなった祖父は、一体どんな約束をしたのだろう。

今とは違う状況で、違う場所で、美馬と出逢いたかった。

もしそうなら、せめて彼の祖母に会い、事情くらいは聞いたであろう。その上で、美馬と恋を始められたなら……。

金が必要なんだろう？ 君の時間を買おう。いくらだ？

侮蔑に満ちた美馬の声を思い出し、愛実は軽く頭を振る。？ もし？ はないのだ。

と、同時に……愛実はふと、無造作に置かれた五十万円を思い出す。あのお金があったなら……。

「おうおう、やっと帰ってきたな、お譲ちゃん」

金融業者とは名ばかりだろう。どう見てもヤクザに思える男たちが三人、アパートの前で彼女を待ち構えていた。

途端に、ハッと我に返る。そうだ、この男たちに支払うために、

自分は体売ろうとしたのだ、と。

「で、金は出来たんだろうな」

男の一人が凄み、愛実顔に顔を近づけて来た。

「それは……あの、明日は必ず……」

「馬鹿にすんじゃねえぞ、コノアマ！ 明日まで待つてくれって言うから待つてやつたんだろうが！」

深夜にも関わらず、男は罵声を張り上げる。

「どうか、あと一日だけ待つて下さい。お願いします」

愛実はビクビクしながらも懸命に頭を下げた。

すると、三人の中で一番若い男が肩を怒らせながら彼女の前に立ち、

「きつちり八十万、耳を揃えて返してくれるんだろうなあ。ああっ！」

「は、八十……そんな！ 二ヶ月前に母が借りたのは二十万円で」

「利息があるんだよ！ そんだけ払っても、あんたの母親は貸してくれて言ったんだ！」

その言葉に愛実は眩暈を感じた。

五万、十万と作っても、翌月には倍の百六十万円になってしまふ。それは、今の愛実に到底返せる金額ではなかった。

「なあ、お嬢ちゃん、あんた十八になったんだよな？」

「は……い」

それまで後ろにいた男が、にやにや笑いながら愛実の隣に立った。酒臭い息が頬に掛かる。顔をしかめ、出来る限り体を引くが……。

「そりゃあ良かった。フロで働いて返せば八十くらいすぐだ。

さあ来いよ！」

いきなり手首を掴んで引っ張られたのだ。愛実は恐怖のあまり悲鳴を上げる。

「いやあっ！ 離して」

男は逃げようとする彼女を強引に引き摺り、車に乗せようとした。

この付近は安アパートが密集している。正直、治安はあまり良くない。ましてや、愛実の家に闇金業者が来ていることは周囲の誰もが知っていた。ちょっとした親切心から、殺されないとも限らないご時世である。誰も関わり合いになりたくないのだろう。少女の悲鳴にカーテンすら開く気配はなかった。

「あんたが嫌なら妹でもいいんだ。中一なら男の相手は務まるよな」
「やめて！ やめて下さい。妹には手を出さないで！」

真美^{まみ}にだけは、体を売るような真似はさせられない。愛実^{あいみ}は抵抗を止め、黙って男たちの車に乗せられそうになる。

「姉さん！」

アパートのドアから飛び出し、階段を駆け下りてきたのは、すぐ下の弟・尚樹^{なおき}だった。

「こんな真似して、ただ済むと思ってんのか？ 警察に通報してやる！」

姉の手を掴む男に尚樹は飛びついた。次の瞬間、中学三年の割に小柄な弟は顔を殴られ、地面に突き飛ばされていた。

「まだ子供なのよ！ 乱暴なことはいらないで！」

「借りた金を返さない、お前らのお袋のせいだろうがっ！ 恨むならバカな親を恨め！」

男の怒声が深夜の路上に冷たく響き渡った。

第6話 再会

「…………お姉ちゃん…………」

階段の上で妹の真美が末の弟・慎也しんやの肩を抱きながら泣いていた。

さすがに、ポツポツと周囲の窓に灯りが点る。

これほどの騒ぎになっても、母が出てくる気配はない。なぜなら、途中で起きると美容に悪いと言い、睡眠導入剤を飲んで寝てしまうせいだ。おそらく今夜も、上流階級に属していた頃の夢でも見ているのだろう。

しかし、父が生きていた頃から西園寺家の内情は火の車だった。

愛実は何度も訴えたが……。父は認めようとせず、母の生活レベルが変わることもなかった。

愛実の脳裏に、美馬の姿が過よぎる。

あのお金を受け取れば良かったのだろうか？ あの子の言いなりに金を貰い、二年でも三年でも時間と体売り渡していたなら。今夜、このまま弟たちから引き離されずに済んだのかも知れない。

或いは、警察に逮捕されていたら、愛実は助かったかも……。

そこまで考えた時、彼女は男たちの言葉を思い出した。彼女がいなければ、代わりに真美が連れて行かれただろう。それに、姉弟の実情が公的機関に知れたら、四人は引き離されるに違いない。会った事もない親戚に預けられるか、バラバラに施設に入れられるか。その時、祖母はどうなるのだろうか。

「尚樹……しばらくお願いね。借金を返したら、姉さんすぐに戻ってくるから。学校にはちゃんと行くのよ。お母さんに、遺族年金の証書と印鑑は絶対に渡さないで……」

「姉さん、駄目だ。母さんがしたことじゃないか。母さんが行けばいいんだ！」

愛実が首を振った。そんな理屈が通用する相手ではない。

母が無闇にお金を調達してくるのを、黙って見過ごしてしまった愛実にも責任はある。

昔の使用人に貸していたお金を、返して貰っただけ……そんな説明を鵜呑みにしていた。実際には、「相続の金額が大き過ぎて、手間取っているの。少しでも都合してくれないかしら？」耳触りの良い言葉で、母はあちこちから無心していたのだ。

そのうちの一人が、度々訪れる母に困り果て、金融業者を紹介したという。愛実が事情を聞きに訪ねた時、闇金だとは知らなかったと言われた。文句があるなら用立てた金を返せと迫られ、彼女は初めて母の行いを知ったのである。

それでも母は、「昔はよくしてやったのに……少しくらい返して貰って当然でしょう」まるで悪びれる様子もなかった。

まともな金融業者でないと、気付かないはずがないだろう。落ちぶれ果てた旧伯爵家の威光を笠に着た、母に対する仕返しの意味もあったのかも知れない。

「十八といえば立派な大人だ。ちゃんと責任取って貰うぞ。さあ、とつとと来るんだ！」

尚樹から引き離され、車に押し込まれる。

ドアが閉まった時、愛実の中で人生が終わった気がした。

直後。

狭い道路の真正面から車が一台侵入してきた。対向車両は、ライトを点けたまま引き下がる気配も見せない。三人の男たちはブツブツ言いながら車から降りて行く。

そして車のドアが開いた瞬間、聞き覚えのある声が愛実の耳に届いた。

「なるほど、この連中が待ち構えていたわけか」

ハッと顔を上げた時、そこに居たのは……美馬藤臣だった。

彼は横でうるさく騒ぐ闇金業者の男たちを無視して、愛実を車から引つ張り出す。

「連れて行かれたら、俺の時みたいに逃げ出すことは出来ないぞ」

美馬は耳元に唇を寄せ小声で囁いた。吐息が耳朵を掠め、愛実の全身が震える。その時、思い出したのだ。ラブホテルの壁に押し付けられ、美馬の唇が首筋に触れた甘美な瞬間を。

「美馬さん……わたしは」

何を言うつもりだろう。何か答えなければと思うが、言葉が見つからない。

美馬は決して正義の味方ではない。群がるハイエナになぶり者にされるか、一頭のトラの餌食になるか。それくらいの差しかないはずである。

なのに……美馬の顔を見た瞬間、ホッとしたのだ。

愛実の頬をはらはらと涙が零れた。ずっと我慢し続けてきた。これからも堪えるはずだったのに。気付けば美馬の胸に縋り、愛実は小さく声を上げて泣いていた。

くくくくくくくく

美馬が愛実のアパートに着いたのは、彼女とほぼ同時刻だった。

彼はやり取りの一部始終を見ていたのだ。

瀬崎の報告で、闇金業者の一件は知っていた。いずれ娘に手を出すのは判り切ったことだ。だがこの様子を見る限り、目当ては最初から愛実だったに違いない。

男たちは愛実をソーブランドで働かせるつもりらしい。そうなる
と数年……下手をすれば一生、その世界から戻って来ることは不可
能だろう。借金は借金を生み、雪だるま式に膨れ上がる。

しかし、当の愛実は弟に「すぐに戻る」と言っていた。

（世間知らずの、馬鹿な娘だ）

これほど金を必要としていたなら、ありがたく美馬の申し出を受
ければ良かったのだ。そうすれば、ほんの数年で済む。おまけに、
抱かれる男はたった独り……。

胸の奥でじりじりと何かが焦げつくようだ。裸で他の男に奉仕す
る、そんな愛実の姿を想像するだけで無性に腹が立つ。

更には、一人の男が口にした『恨むならバカな親を恨め』　そ
の言葉は、美馬の心に埋められた地雷原に踏み込んだ。

「二十万が二ヶ月で八十か……証書はあるのか？」

美馬は、腕の中で震える愛実に奇妙な感覚を抱きながら、闇金業
者の男たちを見据える。

「テメエ、こいつの男か？　女の前だからってカッコつけんじゃね
えぞ」

「それとも何か？　貴様がこの娘の借金払ってくれんのか？」

こけ威しの台詞など美馬には通用しない。彼は愛実を背後に庇う
と、懐から金を取り出した。そのままボンネットの上に放り投げる。
「五十万ある。それを持ってさっさと帰れ。但し、証書は置いて行

け。二度とこの親子に関わるな」

見る間に男たちの目の色が変わった。

だが、

「おいおい、兄ちゃん。借金は利息と合わせて八十万だぜ。足りないんじゃないのか？ 何だったら、あんたの腕時計でも……」

それは、最初に愛実に近づいた男だった。背丈は美馬と変わらない。だが、横幅が五割増しといったところか。男は美馬の時計に触れようと手首を掴み。

次の瞬間、男は逆に腕を取られ、顔からボンネットに押し付けられていた。男の肘は変な方向に曲がり、片方の手で必死に車を叩いている。

「少しでも脳ミソがあるなら、これで手を打つんだな。嫌なら仕方ない。警察と弁護士を呼ぶことになる」

美馬は軽く笑みを浮かべつつ、年配の男に話しかける。

「俺らに手を出したら、組の連中が……」

「面白い。どこの組か言ってみる。俺が直接話をつけてやる」

やれ？組？だ、？若い衆？だ、と言いつ出すのは、実際に暴力団との関わりが薄い証拠だ。

落ち着き払った美馬の様子に、利口なことに男たちは勝負を捨てた。大急ぎで金をかき集めると、愛実に証書を投げつける。

「どこで、こんな野郎を誑し込んだんだ？ ウブな顔して、最近の女子高生は怖えな」

美馬とは一切視線を合わせず、捨て台詞を残して車は走り去った

の
だ
っ
た。

第7話 現実

駅から直接東部デパートに入り、愛実は受付で名前を言う。すると、三十代くらいの髪をきちんと纏めた楚々とした女性が姿を見せた。彼女は礼儀正しく、制服姿の愛実を社長室に案内してくれたのだった。

昨夜、男たちが引き上げた後、
「ありがとうございました」

そう言つて、愛実が美馬に頭を下げた。
先のことを思えば恐ろしくて体が震える。だが、あの連中に連れて行かれた時のことを考えれば、美馬のほうは何倍もましではないだろうか。

美馬は軽くスーツの埃を払いながら、
「こんな時間にこんな場所で、簡単に済ませられる話ではないだろう。明日、東部デパート本社まで来てくれ。受付に話を通しておく」
時間は開店時刻を指示される。

「明日は午前中からバイトがあつて……」
休日は丸一日ファミリーストランの厨房で働かせて貰っているのだ。それが家族の生活費になっていた。

だが、美馬にとってそんなことはお構いなしである。
「休め。それとも、一日で五十万も稼げるバイトなのか？」

それは暗に、自分にいくら借りがあのか忘れるな、と言っているようだ。世間知らずの彼女でもすぐに気が付いた。
「判りました」

両手をグツと握り締め、愛実に逆らうことなど出来ず……。

「おじさん！ おじさんも金貸しですか？ 姉さんが……さっきのお金を借りたんですか？ お金は僕が働いて必ず返します。だから、姉さんを連れて行かないで下さい。お願いしますっ」

姉を押しつけ、尚樹は美馬の前に飛び出した。

尚樹の年齢になれば、十八歳の姉が連れて行かれたらどうなるか……。具体的には判らなくても、想像は出来るだろう。彼はいつも言っていた。逆なら良かった、男の自分が先に生まれていれば弟妹を守れたのに、と。十四歳の少年は自分の無力さに唇を噛み締め、美馬に頭を下げる。

愛実はその弟を見て、どう声を掛けていいのか判らない。「大丈夫よ」とは言えないのだ。美馬も、愛実を連れて行くつもりではない。それは判っていた。

「おじさん、か。私は金貸しじゃない。君のお姉さんとは……結婚の約束をしたんだ。近い将来、君は私の義弟になる。尚樹くんだったね、今の金は君が大学を卒業した時、働いて返してもらおう。それでいいかな？」

愛実は目を見開いた。何か言おうと口は動くのだが声が出ない。

美馬は彼女の肩を抱き、「明日だ。約束を破ったらどうなるか判ってるな」そんな言葉を残し、姿を消したのだった。

「待たせたね」

愛実が社長室に通されて十分後、落ち着いた焦げ茶色のスーツを着て美馬は現れた。

年齢は三十代半ばだろうか。独身と言っていたが、そうは思えない余裕がある。美馬グループの規模は愛実には想像も出来ない。グループと同じ苗字ということは、オーナーの血縁なのだろう。そうであっても、この大きなデパートの社長とは……きっと恐ろしく優秀な人に違いない。

そんなことを考えつつ、明るい陽射しの中、改めて彼の顔を見る。

やはり、お金で女子高生を買うような男性には見えない。昨夜は前髪を垂らしていたが、今朝は整髪料で左右にセットしていた。そのせいか、黒い瞳がくつきりと見える。窓から射し込む光が、後光のように彼を包み込む。愛実は思わず見惚れてしまった。

ラブホテルでは首筋にキスされ、胸の輪郭を指先でなぞられた。あの手がスカートの裾から入り、愛実の太腿を撫でたのだ。そして、アパートの前では彼の胸に抱きつき、泣きじゃくってしまった。

「どうした？ 掛けてくれ」

美馬の言葉に愛実は一瞬と我に返る。

（見惚れていてどうするの？ だから、女子高生なんて笑われるんじゃない）

「いえ、結構です。あの……どうして尚樹にあんなことを言ったんですか？ あんな」

ここまで案内してくれた女性が同じ部屋に居た。さすがに、昨夜の出来事を口にするのは躊躇われ……。

美馬も気付いたらしい。

「浅野くん、ここはもういい。下がってくれ」

「はい。失礼致します」

浅野と呼ばれた女性は一礼してドアを閉めた。数秒後、ハイヒールの靴音は次第に遠ざかって行く。

愛実が立つたまま深呼吸すると、

「お金は働いてお返します。ですから……弟に言ったことを取り消して下さい」

それが問題なのだ。尚樹は、美馬がどういう人間なのか、姉の体目当てではないのか、とかなり気にしている。

彼はソファに腰掛けると、スーツの内ポケットから煙草を取り出し火を点けた。

「私の提案が気に入らないなら、あの連中を呼び戻してやってもいいんだ。私が手を引いたと言えば、喜んで飛んでくるだろうな」

長い脚を組み、背もたれに腕を掛けて、片笑みを浮かべて愛実を見ている。

「あなたがそうする、と仰るなら……仕方ありません。あの人たちにも、ちゃんと働いて返すつもりでしたから」

「連中の言った？ フロ？ でか？」

「それが……お金になるなら」

「金にはなるだろうな。ただ、奴らに相当な上前を撥ねられて、手元に残るのはどれほどかな？ まあ、OLよりは多いだろうが。しかし、それくらいなら私の妻になる方がよほど楽じゃないか？」

実のところ、愛実には？ フロ？ の意味が判らなかった。売春に似た行為ということは想像できる。ただ、一週間から十日も我慢すれば家に帰れると考えていた。

愛実は、今さら「知らない」とは言えず……。

「結婚は愛し合ってするものです。そんな、神の前で嘘はつけませ

ん！」

「君は……将来愛し合って結婚する気なのか？」

「いつかは、そう出来たら」

俯きながら、小さな声で愛実は答えた。すると、弾かれたように美馬が笑い始めたのだ。

「何がおかしいんですか？」

「まったく、笑わせてくれる。二十代の稼げるうちは、ソープから抜け出すことは不可能だろうな。膨れ上がった借金の返済に、君は毎晩何人もの男に脚を開き、あらゆる場所で啜え込む羽目になる。君が取り返しのつかない病気になるか、三十を過ぎればようやく解放されるだろう。さて……どこの物好きが、そんな穢れた女を妻にするんだ？」

美馬の卑猥な言葉を聞き、背筋が凍りつく愛実だった。

第8話 魔性

八十万円くらいすぐに返せる。愛実はその言葉を真に受けていた。だが、少し考えれば判ることだ。それほどお金になるなら、あの連中が簡単に手放すはずがない。愛実の稼ぎだと言って母に毎月お金を渡し、それを彼女の借金にすれば……。美馬の言う通り、愛実が自由になる日は来ないだろう。

美馬に感謝すべきなのかも知れない。

でも、愛実はどうしようもなく悲しかった。娘がそんな酷い目に遭うと知れば、母は反省するだろうか？ それとも……知らなかった、自分のせいではない。母なら、そんな風に言うかも知れない。

どうしてこんなことになったのだろう。尚樹を高校に行かせるお金もなく。日々の生活にも困っている。それにも、母がまた同じような業者から借金でもすれば……。今度こそ、美馬の言う通りになるだろう。

愛実は全身の力が抜けたようになる。そのまま床に膝をつき、制服のスカートを握り締めたまま、涙が頬を伝った。

（全部、わたしのせいなの？）

四畳半二間とキッチンのアパートでは、祖母の面倒は見れないと思った。高額の家賃に預けたのは愛実の判断だ。五年も経てば生活も落ち着く。その頃には母も愛実も働いているだろう。尚樹が大学に行きたいなら、自分で働いて学費を稼いで貰おう。真美も高校生、慎也は小学生だが自分のことは自分で出来る歳になっている。父の残った保険にはなるべく手を付けず、高校までの学費として……。

現実には、貯金は底をつき、借金だけが増えている。

スカートの上にポトポトと涙の雫が落ちた。

その時、急に辺りが暗くなったのだ。顔を上げると、美馬が立ち上がり、愛実の頭上から覆い被さっている。そのせいで、影になっただけだった。

しかし、次の瞬間、愛実の体は宙に浮いていた。

「きゃ！ なに？」

そのまま、ソファの上に投げ出され……美馬が真横に座り、指で乱暴に頬を拭い始める。

「鬱陶しい。一々泣くんじゃない」

「す、すみません。全部、わたしが悪いんです。わたしが……」
言いながら、また涙が込み上げてくる。

「だから泣くなと言っている。私が泣かせてるみたいじゃないか」
「ごめんなさい。でも……わたしはもう、大勢の男性と……そういうことをするしかないんだって思ったら。後は……あなたの、愛人になるかしら」

愛実は嗚咽しながら、自虐的な言葉を口にする。

すると、美馬は大袈裟にため息をついた。

「君は私の話を聞いてないのか？ 誰が愛人にすると聞いた？ 妻になって欲しいと言ってるんだ。これは祖母の希望だ。昨夜は、君の本性を知りたかっただけだ。日常的に、ああいった真似をしてる女性を妻にするのはご免だ。一時的とはいえ……」

今度はポケットからハンカチを取り出し、美馬は愛実の頬に当て

た。片手で髪を撫で、身を乗り出して顔を覗きこむ。愛実はその彼の仕草に鼓動が早まり、涙が引っ込んでしまった。

「ど、どうして、い、一時的なんですか？」

吃りながら、どうにかそれだけ質問する。

だが、美馬の答えは……。

「昨夜、話したことが全てだ。祖母の希望で、私は逆らえない立場なんだ。だが、君をそんなに拘束するつもりはない。夫婦仲に不都合があると判れば……祖母も離婚を認めるだろう」

どうしてそこまで逆らえないのか……愛実にはさっぱり判らない。だが、美馬の祖母・弥生が愛実に拘る理由は、少しだけ彼が教えてくれた。美馬の家は歴史があり、豊かな財産もあった。だが爵位はなく、ただの商家だった。弥生が愛実の祖父・亘と出会ったのは戦時中だという。当時は身分制度が物を言い、伯爵家の後継ぎである亘と、商家の一人娘であった弥生は交際すら禁じられた。

「ただ、祖母も高齢でね。彼女が納得するまで芝居を続けても、そう長いことではないだろう。少なくとも、ソープランドに身を落とすよりは早く解放されるはずだ。さっきは済まなかった。君があまりにも、自分の置かれた状況を判ってないことに苛ついたんだ」

言われて見れば尤もだろう。

愛実はその優しさに、どうしようもなく心が揺らいだ。

「美馬さんは……本当におばあ様のことが好きなんですね」

祖母に逆らえないと言うが、逆らわないようにしているのはいか。愛実は優しく温かい祖母との想い出があり、それは美馬の優しさと重なった。

しばらくの間、美馬はジツと愛実を見つめていた。やがて静かに立ち上がり、愛実に背中を向ける。

「婚姻中の家族全員の生活費は私が責任を持とう。それから、君の弟妹が大学を卒業するまでの学費と、祖母上の入院費を先払いする。加えて、現在西園寺家が抱えている借金は、父上が親戚から借りた事業負債も含めて、婚約が整えば完済しよう。生活費以外は、婚姻期間の長さは問わず、全額保証する」

窓ガラスに向かって呟く美馬の言葉は、どこか冷ややかに聞こえる……。しかし、振り向くなり愛実に優しい笑顔を見せたのである。

「どうだい？ 条件は悪くないだろう？」

「……良過ぎて、怖いです。そこまでしてもらう理由が」

「まず、君でなければならぬんだ。そして、私たちは愛し合って結婚する。そうでなければ、祖母は喜ばないからね。だから、君には芝居に付き合ってもらおう」

美馬の言葉に愛実は一っだけ不安があつた。

「あの……芝居って、どこまで、でしょうか？」

「そうだな。多少は手や肩、腰に触れるだろう。それと、結婚式では誓いのキスもある。同じ部屋で寝起きしなければ怪しまれるだろう。そんなところかな」

愛実は俯き、

「いえ……あの……同じ部屋ということは……あの」

ベッドはどうなるのか。更には、ベッドの中で何が行われるのか。愛実にとっては重要なことであろう。

「ああ、そう言う事か。言っただろう？ 昨夜のことは君を試したただだ、と。私には十代の少女と遊ぶ趣味はない。私が買うのは君

の戸籍と時間だ。さっきの条件とは別に、離婚時には婚姻日数に十万を掛けた金額を支払おう。それとも、私は闇金の連中並に信用出来なかな？」

光を背に微笑む美馬の姿は、不思議な魔力を秘めていた。

愛実の心はこの時、完全にイエスに傾いていた。その直後、内線電話が鳴ったのである。

美馬は面倒臭そうに取り、『取り込み中だ。後にしろ』と返す。しかし……『判った。すぐに行く』舌打ちして、渋々承諾したのだった。

「済まない。どうしても行かなければならなかった。今日の夕方五時に君を迎えに行く。一緒に食事をしよう。返事はその時に」

「……はい」

そのわずか七時間で、愛実を取り巻く状況はさらに混乱を極めて行くのだった。

第8話 魔性（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

数年前に考えたもので、戦後何年かが微妙にずれています。
どうぞ、あまりに気になさらないで下さい（^^;）

引き続きよろしくお願い致しますm（——）m

第9話 邪心

「まさか、デパートに呼ばれたとは思いませんでした」

愛実が帰り、午後になつて秘書の瀬崎が東部デパートまでやつて来る。瀬崎は本社専務としての第一秘書なので、美馬の代わりに本社に居ることのほうが多い。

瀬崎は、愛実をデパートの社長室に呼んだことが不満のようだ。社員の口から、祖母や伯父らに知れる、と言つたところだろう。それ以前に、瀬崎は愛実に近づくこと自体が止めさせたいようではあるが……。

「ああいつた良家のお嬢様には、目に見える格式が必要だろう？ 案の定、私がこのデパートの社長に間違いないと判つた途端、目の色が変わつたぞ」

美馬は愛実の表情を思い出しながら答える。

彼女は信じられないほど無防備だ。ほんのわずか、美馬が笑顔を見せ言葉を変えるだけで、コロッと信用した。例の電話がなければ、あの場でイエスが聞けただろう。

それは美馬の目には、女の打算と浅はかさに映つた。

彼は知らなかったのだ。必死で家族を守り続け、誰にも守られたことのない愛実にとって、美馬は救世主であり、英雄であり、正義の味方に見えたことを。

「社長……西園寺愛実さんは誠実で善良な少女です。騙して、傷つけることだけは止めて頂けませんか？」

「おいおい、人聞きの悪いことを言うなよ。昨夜だって、俺は彼女を助けたんだ。違うか？」

「昨夜だけならそうでしょう。しかし、五十万の見返りを考えると」「何も求めちゃいけないさ。あらゆるものを提供して、しかもセックスは強制じゃない。親切この上ない提案だ。俺以外だと……こうはいかないだろうな」

従兄弟の顔を思い浮かべながら、美馬はそんな言葉を口にする。正確には義理の従兄弟だ。

「大奥様はご存じなかったのでしょうか？ 現在の西園寺家の窮状を」

「……さあ、な」

眉根を寄せる瀬崎から顔を背け、美馬は煙草に火を点ける。

あの弥生が知らぬはずがない。おそらくは、一家がどん底まで堕ちるのを見届けてから、救いの手を差し伸べるつもりだったのだろう。

売春婦となった愛実に恩を売り、引つ張り上げて自分の好きなように利用する。弥生であればそれくらい平気でするはずだ。

「確かに、社長の助けが一日遅れていれば、彼女は悲惨な経験をしたことでしょう。その点は、私も社長を見直しました」

瀬崎はホッとしたような表情で美馬に笑顔を向ける。

美馬にとってこの瀬崎は、人生で唯一心を許せる人間だ。褒められて悪い気はしない。

だが、問題はその後 「しかし、よろしいですか、社長」

（……思った通りだ。つたく、説教の好きな男だな）

「先ほど聞いた限りでは、彼女のことを思いやった素晴らしい条件です。ですが……本当に手を出さないと約束出来るんですか？ 何

「と言っても彼女はまだ未成年です」

「結婚すれば成人扱いだ」

「社長!？」

「勘違いするな、瀬崎。私は彼女を襲うつもりはない。ただ、男と女の間には色々ある。彼女が望めば……俺が断わる理由などないだろう? 違うか?」

あの様子なら、一週間も紳士ぶって付き合えば簡単に落ちる。

美馬の中に、それを楽しむ感情も芽生えていた。化粧は全くしておらず、清潔な香りのする肌理細やかな肌の持ち主。処女など面倒でこれまで触れたこともなかったが……。結婚するなら話は別だ。

どんな女とのセックスも楽しんだことなど一度もない。十代後半から二十代前半は性欲に駆られて無茶もした。だが今の美馬にとってセックスは、定期的に溜まったものを放出するだけの作業だ。

ラブホテルでの愛実の香りを思い出す。女の匂いを嗅いだけで、下半身に力が漲ったのは……何年ぶりだろう。

「ソープ嬢になるところを助けてやったんだ。あの娘も喜んで体を開くだろう。そのためなら、愛の言葉くらい囁いてやるさ」

「彼女はこれまでの女性とは違うんです。本当に、家族のために……」

あまりに熱心な態度に、美馬はからかい半分に言ってみる。

「どうした? いい歳をして、まさか、あんな小娘に惚れたわけじゃあるまい?」

「……いえ、私は……」

瀬崎は視線を落とし、口を閉ざした。

この、瀬崎幸次郎も苦勞人である。

美馬より二歳年上だが大学では同級だった。彼の実家は北海道で牧場をやっている。兄弟が多く次男坊の彼は自力で学費を稼ぎ、そ

の後大学に進学した。第一秘書の給料は、小さな会社の役員並はある。だが決して贅沢はせず、今も相当な額の仕送りを続けているはずだ。

瀬崎は美馬と違い、遊びで女と付き合うことは一切ない。調査段階で不遇な愛実に同情した可能性は高い。

美馬は常々、瀬崎になら女を譲ってもいいと思ってきた。女はみんな似たようなものだ。この男が欲しいと言うなら、自分は手を引いてやるう、と。

仕方ない。愛実には手を出さず、時期がくれば瀬崎に……瀬崎に……そこまで考えた時、胸の奥で何かがストップを掛けたのだ。

「残念……だったな。あの娘は、鬼婆に目をつけられた哀れな生け贄だ。婆さんは彼女を、俺も含めて畜生の餌にする気だぞ。欲しければ自力で攫え。お前に、守り切る自信があるなら、な」

一介の秘書に、美馬に逆らう力などあるはずがない。

瀬崎は何も答えず、眼鏡の奥の目を細める。その視線は哀れみに満ちていて……訳もなく美馬は苛立ち、押しつぶすように煙草の火を消した。

くくくくくくくくくく

「姉さん。姉さんは本当にあの人が好きなのわけ？」

それは何度目かの質問だった。

東部デパートから戻り、愛実は尚樹にだけ、「昨夜の彼と、結婚することになるかも知れない」と告げた。

「姉さんが好きで結婚したいならいい。でも、もしお金の為なら……高校には行かない。僕も働くから……そうしたら、母さんとは離れよう。僕ら四人で」

尚樹は母に失望していた。

あからさまに反抗する時もある。最近では真美も同じように言い始めた。だが母は、両親や夫に甘やかされて生きてきて、現実と向き合うことの出来ない女性なのだ。

「お母さんはまだ、お父さんのことが忘れられないだけよ。私たちのことだって嫌いな訳じゃない」

「でも、姉さんに苦労ばかり……」

「小学生になったばかりの慎也には、お母さんが必要よ。お願い、尚樹。姉さんは結婚しても、出来る限り様子を見に戻って来るから。だから……何も聞かずに、姉さんのことを信じて」

愛実は大馬の申し出を受けることに決めた。

他にも事情はありそうだが、祖母の為、という彼の言葉を信じることにしたのだ。ただ……。

『私には十代の少女と遊ぶ趣味はない』

それはありがたい言葉のはずなのに。

車から引っぱり出し助けてくれた。泣きじゃくる愛実の頬を拭ってくれた。あの強く大きな手が忘れられない。

幾重にも張られた罫に向かい、運命の歯車は廻り始めた。

第9話 邪心（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

ここで第一章が終わり、次回から第二章に進みます。

こうしてみると、ここまで「愛を教えて」と似たような展開ww
でも…美馬、超悪党ですねorz

後、美馬家の婆さんは鬼ですから（^^;） 「十八歳の愛人」
参照）

しかし、瀬崎さん…同じ秘書でもえらい違いだなあ、と感心してま
す（苦笑）（某背徳の誰かさんとは）

この先出て来る美馬和威くんも入れると、なんか逆ハーぱいかも？

第二章で美馬家に行きます。

小悪党も極悪人も満載です！（おいおいっ）

良かったら、お付き合ってくださいませm（——）m

第10話 急転

「待たせたかな？」

約束通り、十七時に美馬はやって来た。

昨夜は違う車に乗っていた気がする。帰るとき後部座席に乗り込んだので、おそらく運転手は他にいたのだろう。だが、今日は彼自身が運転していた。

白のポルシェ911GT2。もの凄く高価な車であることは愛実にも判る。

しかし、愛実が気になっているのは別のことであつた。

「あ、いえ……今、出て来たところですから。あの……一つ聞いていいですか？」

「何？ 一つでいいのか？」

最初に逢つた時は、冷たくて怖い人、という印象が強かつた。それに比べて今日は、勿体ないほど素敵な笑顔を見せてくれる。

家族のことにずっと一生懸命だつた。高校三年にもなつて、愛実には男女交際どころか片想いの恋すら経験がない。そんな彼女にとつて、美馬から優しい笑顔を向けられるだけで魔法にかけられた気分だ。

「あの……美馬さんつて、お幾つなんですか？」

「ああ、八月に三十になる」

「ええっ？ そんなにお若いんですか！？」

愛実は驚きのあまり、声が裏返つた。三十代半ば、ひよつとした後半かも知れないと思ひ込んでいた。愛実だけじゃなく、尚樹も

同じではないだろうか。

彼女の反応に、美馬が気を悪くしたのではないか、と思ったが……。逆に、彼は声を立てて笑い始める。

「私はそんなに年寄りに見えるのか？　そう言えば、君の弟にも『おじさん』と呼ばれたな」

「す、すみません。社長さんと聞いて……てつきりもつと年上の方だとばかり」

「別に私の会社という訳じゃない。デパートの社長とはいえ、売り場には立ったこともないし……。典型的な一族経営。縁故採用というヤツだな」

愛実の横に立つとスツと腰に手を添え、助手席の側まで連れて行ってくれた。ドアを開くと「どうぞ」とエスコートしてくれる。そんな美馬の動作に、愛実は自分でも呆れるほどときめき、舞い上がってしまう。

その直後、ふと顔を上げた彼女の目にサイドミラーに映る自分が映った。そこには、化粧もせず着古した普段着を身につけたみすばらしい少女がいた。大人の美馬にも高級外車にも似合わない。そんな自分の姿に、愛実は恥ずかしくなる。

俯く愛実の仕草に、美馬も気付いたらしい。

「明日、学校が終わったらうちのデパートに来るといい」

「え……あの、いえ。夕方からバイトが……」

「それに関しては、今夜中にいい返事がもらえと思ってるんだけどね」

「それは……」

もう、この場で返事をしてしまおうか。

愛実がそう思った時だった。

短い舌打ちが頭上から聞こえた。見上げると……美馬の表情が曇っている。彼は愛実ではなく、ポルシェの真後ろに停車した車を凝視していた。

車は黒のメルセデス・ベンツ、Sクラス。ベンツから下りて来たのは初老の紳士と、美馬より少し年上だろうか……かなりソフトな印象の男性だった。

「さすがだな藤臣くん。君が一番乗りかい？ 抜け駆けされたんじや信一郎くんたちが怒るだろうな」

若い方の男性がそう言った。

「何のことか判りませんね。抜け駆けなんて……人聞きの悪いことを仰らないで下さい」

美馬から先ほどまでの笑顔が消え、無然たる面持ちでその男性に答える。

男性は美馬の返答を軽く流し、愛実に手を差し出した。

「はじめまして、お嬢さん。君がシンデレラかい？」

「は？ あの……」

「僕はおおかわあきこ大川暁と言います。美馬物流に勤めていてね、美馬家とは姻戚関係にあるんだ。藤臣くんとも仲良くさせて貰ってるんだよ」

暁はまるで営業マンのようだ。屈託ない顔つきでにこやかに話しかけてくる。

だが、愛実には何がどうなっているのか全く判らない。

「美馬さん、あの」

尋ねてみようと美馬を見上げたが……。彼はスツと愛実から視線を逸らし、厳しい顔で中空を睨んだ。

「失礼致しました。西園寺愛実さんですね？」

「はい……そうですね」

フルネームで愛実の名を口にしたのは初老の男性である。

「私は、美馬家の顧問弁護士、ながくらしゅうぞう長倉秀三です」

そう言つと、丁寧の名刺を渡してくれた。

「美馬弥生様から、あなた方ご家族と連絡を取り、愛実さんを自宅にお連れするよう申し付かつて参りました。……彼に、何か聞かれましたか？」

長倉弁護士は探るような眼差しで美馬と愛実を交互に見る。その視線はかなり険しく、愛実は思わず美馬の後ろに隠れた。そして彼の上着の袖をギュツと掴む。

すると、美馬は愛実を庇うように立つてくれたのだ。そのまま長倉弁護士の質問にも答えてくれた。

「数日前に偶然知り合っただけですよ。今日も今から、二人で食事に行くところです」

その返事に愛実はびっくりした。数日前どころか、逢つたのは昨夜である。そのうえ？ 今日も？ なんて……まるで何度もデートしている関係のようだ。

結婚の話は、祖母の弥生のためと言っていた。だが、弥生の計画そのものを、美馬が知っていては不味いのだろうか？ 詳しい話はこれから聞く予定だったので、愛実には想像するしかない。

「ほう……食事に。藤臣くんも、随分女性の趣味が変わったようだ。大奥様もさぞかし驚かれることでしょうな」

銀色に縁取られた眼鏡を押し上げつつ、長倉弁護士の口調は明らかに美馬を軽んじていた。

「しかし、私が尋ねているのは愛実さんです。それとも、彼女への

質問は君を通さねばならないとか？」

息の詰まりそうな時間が流れ、愛実は一瞬美馬から手を離す。

「美馬さんのお名前は聞きました、随分親切にしてください。あの……わたしに何か？」

暁は『ふーん』と頷きつつ、美馬に思わせぶりの視線を送る。

「申し訳ありませんが、本日のデートは変更して頂けますか？ 愛実さんを美馬の本宅へご案内致します」

長倉弁護士は儀礼的な謝罪を口にするが、その言葉の内容は？ 命令？ としか聞こえない。

「え？ あの、そんな急に」

「弥生さまから直接お聞きになられたほうがご理解頂けるかと。さあ、遠慮なさらず、どうぞ」

そう言って彼らの車に乗るよう促される。

長倉弁護士の強引な態度に愛実は一瞬嫌悪を感じていた。仮に、美馬家に行くとしても、見知らぬ人の車に乗るよりは美馬の車に、そう思ったが……。

「それはちょっと不味いんだよね。藤臣くんは、あくまでもトボけるつもりだろうけど……。フェアを期すために、愛実さんにはこっちに乗ってもらおう。いいよね？」

（フェアっていったい、何が起こってるの？）

美馬に聞きたいことはたくさんある。だが、

「予定が変わって済まない。彼らの身元は私が保証する。君を傷つけるようなことにはならない。私も後を追うから……彼らと一緒に、美馬の本家に行って貰えるかな？」

愛実は黙って頷いた。

第10話 急転（後書き）

御堂です。

お待たせしました。

第二章スタートです。

よろしくお願い致しますm（——）m

第11話 条件

都内にこんな場所があったのだろうか？ というほど、閑静なお邸だった。

愛実の記憶に違いがなければ、ここは田園調布の真ん中である。レンガ造りの門柱、重そうな鉄製の門、石畳の上をゆっくりとベントツが進む。車が門から滑り込んだとき、正面玄関が見えず、彼女は声もなく驚いた。

かくいう愛実も、以前はそれなりの邸宅に暮らしていたご令嬢だ。しかし、この邸の比ではない。玄関前に降り立つと、門前の道路を走る車の音も、人の話し声も聞こえない。

観音開きの大きな玄関扉を通り抜けると、そこは彼女のアパートがすっぽり入りそうな玄関ホールであった。十人程の使用人がいて、「いらつしやいませ」と一斉に頭を下げる。

愛実も慌てて、

「あ、お邪魔致します」

頭を勢いよく下げ、小さな声で答えたのだった。

そのまま、宮殿のようなリビングに愛実は案内された。大川暁と名乗った男性も、弁護士も、そして美馬すらリビングにやって来る気配はない。

愛実の前にはメイドが出してくれた紅茶が置かれていた。マイセンの五つ花、三十六種類の花の中から様々な組み合わせで描かれるというシリーズだ。

マイセンは祖母の好きな食器であった。

愛実が幼い頃『アラビアンナイト』のセットを見せて貰ったことがある。祖母がお嫁入りの時に実家から持って来た物だ。アラビア

風の美女や盗賊、王宮など一つ一つ職人の手で描かれた貴重なセツトだと言っていた。父が亡くなり、家を売り払った時には何処にもなく、祖母に尋ねたが答えは返って来なかった。

これから何を言われるのかと思うと、とても紅茶に手をつける気にはならない。物音一つしない空間がどうにも恐ろしく、愛実は「早く帰りたい」それだけを考えていた。

その時、音もなしに扉が開き……。

「あなたが、西園寺愛実さん、ね。愛実さんと呼んでよろしいかしら？」

紅茶が置かれたテーブルを挟み、愛実の前に独りの老婦人が腰掛けた。祖母よりかなり年配に思える。口元には穏やかな笑み湛えるが、どこか人を値踏みしているような眼差しだ。

「はい。あの、失礼ですが……」

「わたくしは美馬弥生と申します。色々な事情は藤臣さんからお聞きになったでしょう？」

美馬は何も知らないといった様子で、暁や長倉弁護士に返していた。その思惑は判らないまでも、今の愛実にとって頼りは彼だけである。

愛実はギュッと指を握り締めた。

「美馬さんの、お名前とお仕事は何っています。……それだけです」
「そう」

弥生は、自分の前にたった今置かれたティーカップを手に取り、口を付ける。愛実の冷めたカップも下げられ、新しい紅茶からは白い湯気が立っていた。

「冷めないうちに召し上げね。それとも、お紅茶はお嫌い？」

「いえ、すみません、緊張してしまつて。……頂きます」

角砂糖を一つとクリーマーからミルクを流し入れ、愛実も口に運んだ。ダージリンの強い芳香が鼻に抜ける。ストレートで楽しむものだが、愛実はついついミルクをたっぷり入れてしまう。

「まあ、いいでしょう。わたくしはね、十六歳のときあなたのおじい様、西園寺亘さんと出逢いました」

そこから弥生の語った内容はほぼ美馬の言葉と重なった。

祖父が海軍士官として呉に行つてしまい、その間に弥生は結婚を決められたのだという。

「お孫さんが十八歳ということは……。おじい様は随分遅くにご結婚されたのね」

「祖父は、自分は家庭向きではないから結婚はしないつもりだった、と話していたことがあります。でも曾祖父が亡くなつて、曾祖母に泣きつかれたとか。西園寺家を継ぐために家に戻り、祖母と結婚したと聞きました。でも、とても仲の良い祖父母で……。あ、すみせん」

弥生の瞳が陰しくなつたのに気付き、愛実は急いで謝る。

絵画を見て廻ったり、演奏会を聴きに行ったり、素晴らしい景色の場所を旅したりするのが大好きな祖父であつた。子供心には楽しい祖父だったが、今になつて思えば一回り以上も歳の離れた祖母は大変だつたのではなからうか？ 数百万円はしたはずのティーセットを処分したのも、そんな事情があつたのかも知れない。

「あの……美馬さ……いえ、東武デパートの美馬社長さんに、とても親切にしてくださいました。それと、祖父の事と何か関係があるんでしょうか？」

美馬から聞かされたことを惚けるつもりはなかった。ただ、半分以上信じられない思いが強かつただけだ。弥生本人の口から聞いた

い。そう思つて尋ねたのである。

そして弥生の語つた内容は、美馬の言葉よりはるかに突飛で、到底信じられるものではなかった。

「わたくしも、いつ死んでもおかしくない歳になりました。先月夫が亡くなり、色々相続の問題が持ち上がつて……わたくしはこの家を、亘さんとわたくしの孫に継いで欲しいと思つたの。今はもう二十一世紀、身分がどうこういう時代ではありませんからね。ですけど、わたくしの男の孫は藤臣さんを入れて四人おります。わたくしが選べば不公平も生じて、家族内で裁判沙汰なんて、恥もいところでしょう？　それで、愛実さん、あなたに決めて頂くと思ひましたの」

なんと美馬弥生は、自分の相続人に愛実を指名したのだ。但し、弥生の四人の孫と愛実が結婚すれば、という条件つきである。

「待つて、ちよつと待つて下さい！　そんな……どんな条件でも、わたしが相続する筋合いの物じゃありません！」

愛実は血相を変えて断わる。

だが、弥生は予想していたのか、落ち着いたものだった。

「まあ、そう慌てて答えを出す必要はないでしょう？　弁護士の高倉からも報告を受けております。今の西園寺家は相当お困りの様子。あら……ごめんなさい。旧華族のプライドを傷つけるつもりはありませんの。でも、あなたがこの年寄りの我がままに付き合ってくださいなら……わたくしも援助は惜しみませんよ」

借金のことや困窮した生活を知られていることに、愛実は唇を噛み締めた。

しかも、それを察した援助の申し出である。

「そんな、とんでもないことです。結婚の約束を叶えることが出来なかった祖父と西園寺の家を恨むならともかく、ご親切にして頂く理由がありません。お氣遣いだけありがたく……」

「ただ、一つお願いがありますのよ。藤臣さんと親しくなさっているようだけれど……出来れば、彼を選ぶことは避けて頂きたいの」

その言葉の意外さに、愛実は気持ちには？お断り？から？疑問？に移った。

第12話 忠告

一度浮かし掛けた腰を再び下ろし、愛実は尋ねる。

「あの、それはどういう意味でしょうか？」

弥生は愛実から顔を背けると、

「藤臣さんは、三女夫婦の養子なのです。亡くなった夫の薦めで、孤児の少年を養子にしたの。出来れば、わたくしと、血の繋がった孫と結婚して頂きたいと思っています。でも、彼にも相続権がある以上、^{ないがし}蔑ろには出来ませんからね。ただ……わたくしの？お願い？は胸に留めておいて下さい」

伏し目がちの『お願い』は、やけに冷ややかな口調だった。

愛実は席を立つ機会を逃してしまう。顔見せに、とディナーに誘われ、そのまま美馬家に残ることになった。

リビングに取り残され、愛実はそこで呆然としていた。

弥生の話はあまりに唐突だ。しかし、顧問弁護士まで出てきた以上、彼女は本気なのだろう。それに比べて、昨日の美馬の話はどういうことだろうか。大筋は間違っていない気もするが、かなり都合の良いように端折ってある。

かつての恋人の孫である愛実と、自分の孫を結婚させ財産を継いで欲しいなんて……。その点は美馬の言葉に嘘はなかった。問題は

その候補者が彼を合わせて四人もいることだろうか。

美馬は「祖母の希望」「祖母が喜ぶ」といったことを盛んに口にしていた。だが肝心の祖母は、彼との結婚は本気で望んでいないよ

うだ。

その理由が、血の繋がった孫ではないから、と。

だから、親戚という大川暁が言っていたように、美馬は『抜け駆け』をしたのだろうか？

問題は他にもある。弥生の言うとおりなら、愛実が孫の結婚相手として望まれているだけでなく……。

その時、愛実の考えを中断するかのようになり、コンコンとドアがノックされた。

「失礼。ディナー用のワンピースを持って来たんだが。入ってもいいかな？」

それは、美馬の声であった。

彼は三着のワンピースを手を持ち、リビングに入ってくる。

「私の趣味で選んできた。気に入ってもらえれば良いが」

ピンク、イエロー、グリーンとどれも淡いパステルカラーだ。デザインは上品で可愛いイメージ、高校生の愛実に相応しく露出も最小限に抑えてある。

気になることと言えば、どれも値札は外してあるものの、一着で愛実の一週間分のバイト代が飛ぶだろう。

「ありがとうございます。でも、こんな高価な服は……」

「私の、というより、弥生様の命令だ。貰っておけばいい」

その声は酷く素っ気ない。美馬の様子が変わったことに、愛実の不安は急速に膨らんで行く。

「あの、わたしはどうあってもこの家の方と結婚しなくてはならないんでしょうか？」

「今朝話した通りだ。結婚すれば君も君の家族も救われる。もちろん

ん、私と結婚するなら提示条件は変わらない。ただ……他の連中を選べばそうはいかないだろう」

「それは……仰る意味がよく……」

愛実の頼りなげな返事に、美馬は苛々した表情を浮かべた。

「本当の結婚になる、ということだ。弥生様から聞いただろう？ 相続するのは君だ。当然、自由になる金は多いさ。但し、夫に選んだ男とベッドを共にし、そいつの子供を産む。君はまだ十八だ。家族のために決めた結婚で、残り六十年の人生を美馬の名に縛られることになるぞ」

そうなのだ。

弥生は愛実を相続人にと言った。昨夜も今朝も、美馬はそんなことは一言も言わなかった。もちろん、愛実には貰うべきでない大金を受け取るつもりは毛頭ない。だが、善意に思えた美馬の言動がその財産目当てであるなら……。

愛実は、大きく傾いた心が美馬から離れて行くのを感じていた。

「ほ、ほかの方も、あなたと同じ提案をされるかも知れません！」

懸命に言葉を返した愛実に、美馬は初めて逢った時のように妖しく笑った。

「覚えておくことだ。私と最初に出会った場所を。君が私にねだった十万の意味を」

そこまで言うと、スツと耳元に口を寄せる。

「ワンピースのサイズはピッタリだと思うよ。この手が君のサイズを覚えている」

一瞬で愛実は真っ赤になる。ラブホテルでの出来事が頭に浮かび、背筋に奇妙な感覚が走った。

「それは……あなたの提案を人に話したら、アノことを話すつて脅してるんですか？」

慌てて一歩飛び退き、震える声で、でもしつかりと美馬を睨んだ。すると、彼は否定とも肯定とも取れる皮肉っぽい笑みを作る。

「生まれたときから苦労知らずの三人が、こんな提案をするとは思えないな。仮に約束したとしても、守る気などないだろう。あの連中は勝った者が正義だと信じている。私以外の人間と二人きりで会えば、君の貞操は保障できないぞ。これは脅迫じゃない、忠告だ」

弥生は美馬を孤児だと言った。よほど、幼い頃に苦労したのだろうか？ その苦く切ない笑い方に、離れ掛けた愛実の心は絆^{ほた}され、訳もなく惹かれた。

美馬は愛実に着替えるように言い、自分は廊下で待つと告げて部屋から出て行こうとした。と、同時に、別の男性がリビングに入ってきたのである。

「なんだ、また抜け駆けか？ 大川から聞いたぞ。どうやって調べ上げたのかは知らないが、彼女とすでに密会してたらしいな。で、もう、お前さんのモノかい？」

一見すると美馬より若く感じる。髪は天然パーマだろうか、緩くウェーブが掛かっていた。薄いグレーのスーツを着た、細身の男性であった。

「ようこそ、美馬家へ。これはこれは……さすがに可愛いお嬢さんだ。僕も挑戦しがいがある。まさかもつ、藤臣の予約済みなんてことはないだろうね？ ああ、僕は美馬信一郎^{みましんいちろう}。この家の長女の長男、早く言えば正当な後継者だ。……奴は手が早いんだ、気をつけてくれよ」

信一郎は早口に捲くし立てる。どちらかと言えばのんびりした愛実には、挨拶をする隙も与えてくれない。

彼は冗談交じりにニコニコと話した。明るく朗らかで優しそうな雰囲気は、美馬より数倍親しみやすそうに思える。……が、眼鏡の奥の瞳に気付いた時、愛実の体は凍りつく。その目には、弥生と同じ冷酷な光が宿っていた。

美馬も時折、冷たい目で愛実を見る。目前でシャッターを下ろされたような気持ちになるが、怖くはない。

でも、この信一郎には恐ろしいものを感じるのだ。もし、この男性に美馬と同じ提案をされても、愛実はいえと言えないだろう。

「西園寺愛実です。夕食にお招き頂きありがとうございます。あの……結婚とか、相続とか急に言われて……わたし」

「まあまあ、落ち着いて。おばあ様は叶わなかった恋を孫たちで成就させたいんですよ。旧伯爵家のご令嬢を美馬家の嫁にしたいんだよ。言い方は悪いが、階級主義への仕返しの意味もあるんじゃないかな？ 悪いようにはしないから、先の短い年寄りの頼みだと思つて付き合つてやつてよ。ひよつとしたら、瓢箪から駒つてヤツで、恋が芽生えるかも知れない。　　だろ？」

愛実は声にならない声で「はあ……」と頷いた。

第13話 候補

愛実が親しげに話しかける信一郎を見てみると、どうにも腹が立つ。

美馬は可能な限り表情を殺し、

「信一郎さん、私は彼女にディナー用のワンピースをお持ちしたんです。私たちがいたら、着替えられないのでは？」

とりあえず追い払おうと画策する。

そんな美馬の思惑に気付いたらしい。信一郎はわざとらしく、愛実の肩に手を掛けて言った。

「ああ、そうか……良かったら手伝おうか？　つてのはまだ早い。か。次回のお楽しみにしておこう」

愛実が結婚を承諾した後なら、この部屋から蹴り出していただろう。射程に納めた獲物に過ぎない少女ではあるが……奇妙な想いに囚われる美馬であった。

「で、本当にもうやったのか？」

廊下に出るなり、信一郎は美馬の肩に手を回し尋ねた。

その口調は下劣極まりない。探るような目は、どうやら愛実の様子から男性経験を推し量れなかったようだ。

「偶然ですよ。彼女の困った時に居合わせて、知り合っただけです」
「とぼけるなよ。お前に偶然なんてあり得んだろう？　ばあさんの思惑を事前に知って、あのガキを探し出したに決まってる。あんな小娘、お前の手に掛かったらチヨ口いもんだよなあ」

無能な信一郎にしては的を射た答えだ。美馬は変なところで感心

しつつも、この家における彼の立場を弁えた言葉を返した。

「不埒な真似だけはなさないで下さい。彼女は高校生です。宏志^{ひろし}くんにも、それをしっかり言い含めておいて下さい」

宏志は信一郎の弟である。年齢だけは愛実が一番お似合いだ。だが中身は、兄と変わらぬクズ同然だと美馬は思っていた。

「なんだ。もう亭主気取りか？」

「そういう意味ではありません。弥生様が相続人に選んだお嬢さんです。無闇に傷つけたら、それだけで排除の理由にもなりうると思っただけですよ」

「それは処女を奪えばってことか？ 未経験なら尚のこと、一度やれば言いなりだ。ばあさんに言いつけたりはさせないさ」

「今回はライバルがいて、アンフェアな真似はすぐにバレるということをお忘れなく」

「最もアンフェアが得意な奴に言われたくないね」

信一郎は細身だが身長は美馬と変わらない。彼は指先でトンと美馬の肩を突き、リビングのある一階から階段を上がり姿を消した。

本音を言うなら、今日中に手を打たれるとは思ってもみなかった。瀬崎の言った通り、デパートに呼びつけたのが不味かったのかも知れない。だが、コソコソと呼び出したりしては、愛実^{あいみ}は美馬を信用しないだろう。デパート内部にまだ、弥生^{しん}か信一郎の父・信二の犬がいるらしい。

愛実には今夜中に返事を貰い、弥生が相続に関する取り決めを発表すると同時に引き合わせるつもりだった。信一郎の言う通りアンフェアかも知れない。だが、最も確実な方法だ。

第一、今回のことは弥生の悪あがきに過ぎない。

このまま指をくわえて見ていけば、間違いなく全てが美馬の手に堕ちる。それを阻止しようとした弥生の企みなのだ。

アパートの近くで会った時、愛実^{あいみ}は美馬の提案を受け入れようとしていた。

（あと半日あれば、あの少女は俺のものだったのに……）

だが、どのみち愛実^{あいみ}は美馬のものになる運命だ。

弥生は最初から長女の息子たち、信一郎と宏志の兄弟に継がせるつもりなどない。兄はロクでもない手段で女を手に入れることしか知らず、弟は風俗嬢としか関係出来ない腰抜けだ。どちらに任せても、弥生の愛するこの邸は三ヶ月と持たず競売に掛けられるだろう。問題は、兄弟揃ってまともな神経をしていない点か。金が絡めばレイプすら厭わない奴らだ。今時珍しいほど無垢な愛実である。万に一つも妊娠でもすれば、言いなりに結婚を了承しかねない。それくらいならいつそ自分が……。

（何を考えてるんだ、俺は）

美馬は軽く頭を振った。こうなった以上、焦らず慎重にことを運ぶしかないだろう。

どのみち、弥生の本命は次女の息子・美馬和威^{みまかずい}に決まっている。二十五歳の和威からは、浮いた噂も悪行も聞こえては来ない。入社二年目の平社員だが、仕事も真面目で周囲の評判も上々だ。

弥生は必ず、愛実^{あいみ}に和威を選ぶようプレッシャーを掛けてくるだろう。だが、肝心の和威自身は美馬を実の兄のように慕っている。その和威に愛実を近づけないことくらい、美馬には造作ないことだ。

美馬はゆっくりと振り返り、愛実のいるリビングの扉を見つめたのだった。

くくくくくくくく

食堂は天井が高く、大広間といった雰囲気だ。テーブルは窓に近い、中庭がよく見える位置にセッティングされていた。中庭は和風庭園の造りで、幻想的にライトアップされている。ほんの一メートル程度の高さではあるが、飛沫を上げて落ちる滝に愛実は見惚れてしまった。

長い食卓テーブルの上座に弥生が座る。右手に信一郎、宏志、和威、そして美馬が着席した。左手には長倉弁護士、真ん中に愛実、末席に大川暁が座った。

「この屋敷にはわたくしを除いて、三家族八人が住んでおります。まずは孫たちの四人に揃ってもらいました。一人ずつ……長倉、紹介してあげて下さいな」

弥生が口火を切り、長倉弁護士が「はい」と頷いた。

「まずは手前から、弥生さまのご長女・加奈子^{かなこ}さまのご長男、美馬信一郎さまです。今年で三十三歳になられます」

「やあ、さつきはどうも。サーモンピンクのドレスが可愛いね、藤臣の趣味だとしたら、ちょっと妬けるなあ。僕は美馬エレクトロニツクの社長なんだ。派手さ加減じゃ東部デパートには負けるけど、企業実績じゃそうは劣らないよ。コンピュータのことなら何でも相談に乗るからね。ああ、そうだ、愛実ちゃんって呼んでいいかな？」

「はあ……あの、ありがとうございます。呼び方は別に……お任せします」

リビングでも思ったが、機関銃のように話す人である。
愛実は一戸惑いながら、どうにか返事をしたのだった。

「お隣が、加奈子さまのご次男、美馬宏志さまです。愛実さんに最も年齢が近い二十三歳で、まだ大学生でいらっしやいます」

顔を合わせた時から、この宏志だけは愛実に辛辣な眼差しを向けていた。やたら調子のいい信一郎にまるで似ていない。兄弟だと言われなければ、きっと判らないだろう。容姿も一七〇前後で小太り、何にも不自由したことのない金持ちの息子といった雰囲気だけは兄と同じであつた。

宏志は少し顎を上げ、愛実を見下ろしながら口を開く。

「ふーん、伯爵家のご令嬢なんて、どんな女が来るのかと思ったら……。とんだ赤ずきんちゃんにビックリだ。君みたいな子が見知らぬ男の妻に、なんてさ……伯爵家ってよっぽど金に困ってんだね」

とことん蔑んだ視線と言葉遣いだ。ひよつとしたら、この場にいる全員に西園寺家の経済状況は知られているのかも知れない。それでも席を立てない悔しさに、俯く愛実だった。

第14話 和威

「と、言うことは見合いの男女は全部金目当てかい？ 僕も見合い当日に女房とは初めて会ったし……」

おどけた調子で場を和ましてくれたのは、愛実を迎えに来た暁であつた。

だが、この暁の位置が今ひとつ判らない。？姻戚？と言つていたので？血縁？ではないのだろう。弥生の孫娘の婿だろうか？ 愛実はそんなことを考える。

直後、長倉弁護士は小さく咳払いして続けた。

「そのお隣が、弥生さまの次女・千穂子ちほこさまのご長男、美馬和威さまです。今年二十五歳になられました」

「はじめまして、美馬和威です。東部鉄道に去年入ったばかりで……信一郎さんや藤臣さんは社長だけど、僕は平社員です。東部新宿駅を利用されることはありますか？」

「たまに……新宿のような賑やかな場所に出掛けることは滅多にないので」

つい最近新宿に行ったのは？売春目的？だった。美馬と逢つた時のことを思い出し、愛実の声は少しずつ小さくなる。

「ご利用ありがとうございます。では、東部新宿駅に降りられた時は駅事務室にありますので、お気軽にお立ち寄り下さい」

屈託なく微笑む和威に、愛実もホッとして「はい」と答えた。

四人の中で、この和威は裏表がなく、一番普通の男性に思える。美馬ほど高身長ではないし、一瞬で人目を惹くような華やかさはない。だが、一重の目元が誠実そうで好印象の男性だった。

「最後が、すでにご存知のことと思いますが、弥生さまの三女・佐和子さまのご養子、美馬藤臣さまです。今年三十歳になられます」

美馬はこの食堂に入ってから一度も愛実と目を合わさない。何か事情があるのだらうと、彼女も出来るだけ美馬を見ないようにしていた。

「……すまなかったね。こんなことになってしまつて。君とはゆつくり始めようと思つていたんだが」

さつきは忠告と言いつつ、脅すような口調だった。そうかと思えば、また優しい言葉をくれる。彼女の目に映る美馬は、まるでカメレオンのようだ。

ふと気付けば美馬に視線が固定し、彼から目が離せなくなる。

しかし、そんな愛実の様子に宏志から声が上がった。

「へえ、そうなんだ！ 兄さんはバージンを嫁に出来るって張り切つてたけど、どうやら、もう藤臣のお古になつちゃったらしいよ。僕は、こいつとキョーダイはご免だなあ」

唐突にぶつけられた卑猥な言葉に、愛実は吐き気すら覚える。最後の部分はよく判らないが、おそらくはセックスに関係した言葉だろう。

言い返すかどうか愛実は迷った。出来れば美馬に何か言つて欲しいが……彼はスツと顔を背けたのだ。

その時、美馬の隣の椅子が音を立て後ろに倒れた！

「いい加減にしてくれ、宏志！ そういった言葉遣いは改めろと、

何度言えば判るんだ？ 僕には不愉快で我慢ならない！」

おとなしく思えた和威が席を立ち、隣の宏志に向かって怒鳴りつけた。

「ええーっ、何が悪いわけ？ 僕はホントのことを言ったただだよ。丸つきり悪びれた様子もなく、宏志はのほほんと答える。

「女性の前で……失礼だと思わないのかっ！？ 信一郎さんも注意して下さい」

和威の視線は宏志を通り越し、信一郎に向かう。信一郎は少し肩を竦めただけで、特に注意する気もないらしい。

「相変わらずいい子ちゃんだねえ、和威は。まあそうか、誰の種か判らない上に、母親にも捨てられたんだもんねえ」。おばあちゃんに尻尾振って可愛がってもらわないと、住むトコもなくなるか」

笑いながら口にした宏志の言葉に、和威はいっそう色めき立った。

「だからなんだ！ 貴様だつて似たようなものだろうっ」

「僕は戸籍のことを言ってるんだ！ 私生児のお前らと一緒にすんなっ！」

「お黙りなさい！」

そこまで黙っていた弥生が声を荒げ二人を制した。

「愛実さんの前で、身内の恥を晒さないでちょうだい。和威さん、何を向きになってるの。……宏志さんも、和威さんの仰る通りですよ。愛実さんに謝りなさい。それが出来ないなら、出てお行きなさい」

愛実は、弥生が宏志を快く思っていないことに気が付いた。しかも信一郎も同じのようだ。実の弟であるのに庇う気配も見せず、知

らん顔をしている。

一方、和威は自分で椅子を元に戻し、座り直した。

「失礼しました。お騒がせして申し訳ありません。愛実さんも、驚かせてすみませんでした」

和威の謝罪に、続けて宏志の言葉も待ったが……。

逆に彼は勢いよく立ち上がった。

「ハッ！ 馬鹿馬鹿しい。こんな茶番に付き合ってらんないね。金目当ての赤ずきんちゃんに群がる、三十過ぎのおっさんや、口だけ立派なインポ野郎なんて……笑えるよなあ。僕はいち抜けた！」

わざとらしく大声を上げ、宏志は食堂から出て行く。

和威は宏志の揶揄に激怒し、再び席を立とうとした。しかし今度は、「よせ、和威」 隣の美馬が、グツと腕を押さえ込む。

「宏志くんは相変わらずだね。この分だと、もう二三年は学生を続ける気かな？」

美馬の向かいに座った暁が苦笑まじりに言う。

その言葉を受けて、ようやく信一郎も口を開いた。

「ごめんね、愛実ちゃん。悪い奴じゃないんだが、まだまだ学生だから……合コン気分が抜けないんだろうな。花婿候補には肩書きも重要だからね。それに血統も、ね」

弟を庇うというより、ただ自分の正当性をアピールしたいだけらしい。要約すると、和威は社長ではないし、美馬は養子だ、と。

ディナーの時間は終始この調子であった。

和威が愛実に対して真面目に話し掛け、信一郎が軽口でチャチャを入れる。そして、さりげなく両方をフォローするのが暁という役

回りだ。

美馬はというと、相槌程度で自分から話しかけることはない。だが、時折ジツと愛実を見ている。それは値踏みするような視線ではなく、何か言いたげな眼差しだ。

何を食べ、何を飲んだのかよく判らない時間が過ぎ、ようやく愛実が自宅に戻れることになった。

最後に弥生が口にしたのは、

「では、誰かに送らせましょう。愛実さん、あなたが決めて上げてくださいな。もちろん、結婚相手ではなく、安全なボディガードで構いませんよ」

この中で普通に選ぶとしたら和威だ。弥生もそれを望んでいる気がする。だが、美馬と二人になりもつと話したい気持ちもあった。その場合、間違いなく弥生の機嫌を損ねるだろう。愛実はしばらく悩み、口を開いた。

「あの……わたしは……」

第15話 獲物

「僕を気に入ってくれても、相続人にはなれないよ」

暁は面白そうに愛実に話し掛ける。

二人は、行きと同じくベンツの後部座席に並んで座っていた。

「いえ。奥様がいらつしやると仰ったので、つい……」

愛実は大川暁を指名し、その場にいた全員を驚かせたのだった。

当の暁は、愛実の返事を聞き申し訳なさそうだ。

「ああ、そうか……ごめん。見合い結婚は嘘じゃないんだ。でも、先週離婚が成立してね。だから今は独身なんだよね。送り狼が心配？」

「そんなことは……すみません」

失礼なことを言った気がして、愛実は謝った。しかし離婚と言うことは、暁は弥生の孫娘の婿ではなかったということだ。

「いやいや、君が謝ることじゃないよ。でも、ビックリしただろう？ 大丈夫？」

「はい。まだ、何のことも良く判ってないです。大奥様……でしたっけ。どうしてわたしを相続人にしようと思われたのか……。しかも結婚なんて、四人のお孫さんがお気の毒で」

財産など要らないと言ってしまえばいいのかも知れない。

だが現実には、そんな綺麗事だけでは生きていけないのだ。お金の苦労は愛実も嫌と言うほど知っている。彼らが財産目的だとしても、彼女に責めることなど出来ない。彼女自身がお金のために、美馬の提案に応じようとしたのだから。

「それは君が気にすることじゃないさ。彼らには断わる自由があるんだ。まあ、もし僕だったら……こんな可愛い女子高生と結婚出来るんなら、財産なしでも飛びつくけどね」

「そ、そんな……」

「ああ、ゴメン、ゴメン。逆に脅かしちゃったかな。三十代半ばのおじさんの冗談だと思って聞き流してくれよ」

笑顔の暁につられ、愛実はいち切って尋ねてみる。

「あの……大川さんと美馬……藤臣さんはどういうご関係なんですか？」

「えーっと、弥生様の三女佐和子さんの再婚相手が、僕の親父なんだ。親父は美馬姓を名乗ってあの家に住んでる。僕が大学生の時に再婚してね、卒業までは僕もあの家に住んでたんだよ。藤臣くんとは義理の兄弟になるのかな」

美馬と暁が再婚相手の連れ子同士とは考えもなかった。

「そうですか。それで……藤臣さんが大川さんと話すときは少し雰囲気違うんですね」

「違う？ そうかな？」

「はい。アパートの前では怒ったような感じで……お邸にいらつしやる時の藤臣さんは、能面みたいでした」

愛実の感想に暁は声を立てて笑った。

「能面か、それは良かった。他には？ 何か気が付いた？」

「他に、ですか？ 信一郎さんと宏志さんのご兄弟とは仲が悪いように見えました。でも、和威さんのことは好きみたい。大奥様から養子だと聞きましたけど……本当にそれだけでしょうか？ 何か、皆さん微妙に気を遣われているような気がして……」

頭に浮かんだことを素直に口にした。そんな愛実の言葉に、なぜか暁はずっと笑っている。

「あの……わたし、何かおかしいことを言いましたか？」

「ああ、いや。全部、藤臣くんのことばかりだと思ってね」

暁に言われて初めて気が付き、愛実は赤面した。確かに、美馬の感想を聞かれた訳ではない。なのに、愛実の心に焼き付いているのは、美馬の姿ばかりだ。

昨日ほどではないが、かなり遅くなってしまった。弟たちはもう眠っている時間だろう。愛実は元の服に着替えている。そのままでと言われたがそんな訳にもいかない。代わって美馬が持たせてくれたのは、弟たちへの土産であった。

ディナーを頂きながら、愛実は自分だけ美味しいものを食べることに罪悪感を覚えていたのだ。ため息を吐きつつ口に運ぶ彼女の様子に、気付いてくれたのは美馬だった。同じものを兄弟分用意して持たせてくれたのである。

冷たい素振りや厳しい言葉をぶつけながら、思いもかけぬ優しさを見せてくれる。

どうして、候補者が美馬ひとりでないのだろう。

愛実は胸の中で呟き……。

「和威くんはどうだい？ 食事中はいいムードだったんじゃない？」

暁の質問に、愛実は現実に戻された。

「そう、ですね、和威さんはとても誠実な方に見えました」

「だと思っよ。ただ彼は、女の子と付き合ったことがないって話だから、スマートじゃないかもしれない。逆に藤臣くんはあの通りの男だから……女性秘書にはほとんど手を付けてるし、邸のメイドも何人か……週刊誌には、東部デパートのイメージモデルが本命とか書かれてるけど、どうかな？ まあ、君次第だよ。苦労すると判つてても、惚れたらどうしようもないからね」

暁の言葉は、恋に落ちそうな愛実の心に冷水を浴びせ掛けたのである。

く　＊　く　＊　く　＊　く

アパートの前に愛実を降ろし、暁は彼女が部屋に入るのを見届けた。

ベンツの車内、後部座席で一人になった彼は内ポケットから煙草を取り出し、火を点ける。と、同時に、携帯電話が鳴り始めた。

『　　はい』

電話の相手は暁から愛実の様子を探り出そうと必死だ。それもそのはず、美馬の名に一番相応しくない男に、美馬家の財産を持って行かれそうなのだから。必死にもなろうと言っものだ。

『判ってますよ。協力すると言ってるじゃないですか。　こっちの件もよろしく頼みますよ』

暁は愛実と話すときに比べて五割ほど声のトーンが落ちている。そのまま電話を切り、ポケットに仕舞った。

落ちぶれ果てた旧伯爵家のご令嬢と聞き、どれだけ世間知らずのお姫様が来るのかと思いきや……。予想外にもしつかりした、観察力のある娘だった。

たったあれだけの時間で、藤臣を取り巻く空気に気付いたのだから大したものだ。

（いや、恋の成せる技ってヤツか）

藤臣に関することで嘘は言っていない。しっかりしてはいるが、男関係は不慣れと見える。ほんのわずか暁の体が触れただけで、愛実の全身に緊張が走った。ああいう反応をされると、構いなくなるのが男と言うものだ。

暁は煙を吐き出しながら軽く首を振った。思わず、苦笑いが浮かぶ。

今回ばかりは簡単に手を出す訳にはいかない。出来る限り慎重に、愛実にとって味方でいなければ意味がないのだ。相続人が愛実である以上、上手くやれば暁にもチャンスはある。

（全部奪い取って、追い出してやれたら爽快だろうな）

苦労したとはいえ藤臣も和威も、所詮は亡くなった美馬一志の血縁だ。唐突に人生に入り込み、振り回され続けた暁とは訳が違う。現時点では、藤臣が一步リードだろう。手慣れた分だけさすがに上手くやったな、というのが正直な感想だ。だが、勝負はまだまだこれから……。

暁の胸にほんのわずか愛実に対する同情が芽生えた。だが、獲物に同情するくらいなら、狩りそのものを断念したほうがいい。彼は思い直し、再び携帯電話を取り出した。

『……ああ、和威くんか？ 大川です。そう、ちゃんと送り届けましたよ。それで、彼女のことなんだけど……』

第16話 母親

愛実が美馬家を訪れた翌日。

学校から戻った愛実を待ち構えていたのは、美馬信一郎であった。

「やあ、愛実ちゃん。昨日はどうも。お母さんにデートのお許しを頂きたくて、ご挨拶に来たんだ。驚いたよ、お母さんには何にも話してなかったんだね。数日中に、おばあ様から話が来ると思うけど……。一応、僕からも説明させていただいたから」

そんな信一郎の言葉に愛実は焦った。母が金の亡者だとは思いたくない。だが、貧しさは人間を変えるのだ。

一度は藤臣の提案を受け入れようとした愛実だったが、美馬家を訪れて状況が変わった。藤臣は候補の一人に過ぎず、弥生は彼との結婚を望んではいなかった。それ以上に、結婚を受け入れたら愛実自身が弥生の相続人に指名されるのだ。それは幾らかの謝礼を受け取り、仮初めの花嫁になることは訳が違う。まるで財産目当ての詐欺を働くようで、簡単に藤臣の提案を承諾することが出来なかった。

だが、一家の経済状態が困窮しているのは事実だ。

他の三人を選べば詐欺ではなくなる。だが、愛実は本物の結婚をしなくてはならない。売春よりましだと言いついてみても、一度、藤臣に傾きかけた心を修正するのは容易ではなかった。

「まあ、愛実さん。こんな素晴らしいご縁を頂いて、どうして黙ってらしたの？ お母さんは反対しませんからね。こちらの信一郎さんは社長さんだと言っじゃないの。お若いのに立派な方だわ」

楽しげに笑う母の姿に、愛実は不安を覚える。

横から尚樹が姉の手を引き、

「どうなってるんだ？ あの夜の人と結婚するんじゃないのか？」

弟の質問は当然だろう。だが、とても一口で説明出来る事情ではない。黙り込む愛実の本心も知らず、尚樹は信一郎を示し、とんでもないことを口にしたのである。

「あの男……母さんに現金を渡してた。姉さんの支度金とか言ってたけど……」

「嘘でしょう？ そんなつ。母さんはそれを受け取ったの！？ 一体いくらなの？」

「金額なんて判らないよ。でも、相当分厚かったから、百万とかそれ以上かも。そんなの、母さんが断わるわけじゃないか！」

母にお金を渡さないように頼むため、愛実は信一郎に頭を下げた。結果、彼とのデートを約束する羽目になったのである。

その夜、愛実はお金を返すように母に迫った。正式に結婚を承諾したわけではないこと。それに、信一郎との結婚は考えられないことを伝える。

だが、

「何を言ってるの？ あなたは美馬家の花嫁に、と望まれているんですよ？ 四人のお孫さんの誰かと結婚すればいいなんて、こんな素晴らしいご縁はないわ。お金は美馬家からの支度金なのよ。あなたは旧伯爵家の娘なの。庶民のするような下働きは辞めて、お嫁に行きなさい。あの信一郎さんが嫌なら、他の方でも構わないわ。今度から、デートに誘われたらちゃんと応じるんですよ」

母はまるで話を聞こうともしない。そんな母の元に、更なる誘惑が舞い込んだのだった。

数日後、いきなりやって来た業者により、一家の荷物は運び出された。引越し先は、なんと父が亡くなると同時に担保で奪われた旧西園寺邸。

その昔、西園寺邸は九段坂と呼ばれる場所にあつたそうだ。曾祖父の代で成城の広い土地に移ったという。その時洋館を新築し、現在には築八十年ほど経っている。広かった土地は切り売りされ、今では百坪足らずだ。

しかし、そうは言っても、荒れ果てた広い庭と古びた洋館……ほぼ収入のない状態で、屋敷の維持が出来るはずがない。引越してしまえば、弟たちは転校を余儀なくされる。そんなことなど考えもせず、母は喜んで引越しを受け入れてしまったのだ。

元の生活に戻る　ただそれだけのために。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊

「お願いします。どうしても美馬さんに会いたいです。先日もこちらに来てさせて頂きました、西園寺と申します。お取次ぎ下さい」「そうは申されましても……」

引越しのことを聞き、愛実が駆けつけたのは東部デパートであった。

美馬家を訪ねるのはどうも敷居が高い。とくに、信一郎と会うのは怖い。あれからまだ連絡はないが、母が大金を受け取った以上、二人きりで会わないわけにはいかないだろう。弥生と顔を合わせるのも、気が重かった。

東部新宿駅に行くことも考えたが、やはり、愛実には藤臣を頼って

しまったのである。

「申し訳ございませんが、美馬社長は出張中でございます。今日、明日とこちらには出社しない予定と聞いております」

「……連絡は取れませんか？ 携帯番号が教えて頂けないなら、そちらで掛けて下さいませんか？ どうしても連絡が取りたいんです！ お願いします」

先日はすんなり通して貰えた受付が、今日は出張中で居ないの一点張りだ。とうとう警備員が近づいて来て、愛実は仕方なく受付を離れた。

連絡先はもちろん、出張先も帰る予定すら教えては貰えず、愛実は途方に暮れていた。やはり、美馬の邸に行くしかないのだろうか。一体、この引越しは誰の指示なのか……愛実にはそれすらも判らないのだ。

「愛実さん？ 西園寺愛実さんですね？」

肩を落としデパートを出ようとした愛実は、名前を呼ばれ振り返った。そこには眼鏡を掛けた三十代の男性が立っていた。

「私は美馬藤臣の秘書を務めます、瀬崎と申します。愛実さんのことは、美馬家の一件を含めて社長より伺っております。失礼ですが、何かお困りでしょうか？ 私であればお力になりますが」

瀬崎の言葉に愛実は縋りついたのである。

彼女が連れて行かれたのは、八階のレストランだった。コーヒーとカフェオレを頼み、しばらくすると支配人と書かれた名札の男性がやって来た。

「瀬崎さん、お疲れ様です。今日はお仕事ではなくプライベートですか？ 珍しいですね、女性連れなんて」

「いや、社長のお知り合いのお嬢さんでね。少し使わせてもらうよ」

「ええ、ごゆつくりどうぞ」

レストランの支配人は丁寧に頭を下げ、テーブルから離れた。

その時、愛実が気付いたのだ。瀬崎がデパート内のレストランに連れて来た理由を。

瀬崎は？美馬家の一件？を知っていると聞いていた。それは当然、縁談のことを指すのだろう。微妙な立場にある愛実のために、藤臣の秘書であることをさりげなく証明しつつ、誤解を招かないように知人の目がある所を選んだのだ、と。

候補者以外で、大川暁はとても親切そうに見える。美馬とも陰悪そうには見えず、相談してもいいのかも知れない。だが、何かが愛実に二の足を踏ませるのだ。

でもこの瀬崎は、不思議な安堵感をもたらしてくれる。

「あの、瀬崎さん、でしたよね。実は……」

愛実は引越しの件を彼に話し始めた。

第17話 味方

「それは、うちの社長ではありませんね」

愛実の話を聞いた瀬崎の第一声がそれだった。

「先日、信一郎様がお宅に伺ったと思うのですが。あれが大奥様の耳に入りまして、あなたへのアプローチは環境が整ってから、どこか指示が出たんです」

「環境、ですか？」

「おそらく、引越は大奥様のご命令でしょう。あなたが条件を承諾されて、ご納得いただけた後、美馬の本邸に招いて席を設けるそうです。それまで、個人的な接近は慎むように、と」

道理で、信一郎があればきり連絡をして来ないはずである。

美馬に会えなかったのもそれが理由なのだろうか。愛実がそのことを尋ねると、

「いえ、この先時間を空ける為に、片付けられる仕事を急いで済ませておられます。本日も香港に出張中なんですよ」

出張には秘書も同行するが、今回はデパート関係での仕事なので瀬崎は残ったという。彼は本社専務としての藤臣の秘書で、仕事は別になるらしい。

「弟さんたちの転校手続きは私がしておきましょう」

「待って下さい！ 困るんです。もし、今回の話がなかったことになって、すぐにまた引っ越せと言われたら……わたしたちは路頭に迷うことになります。今度は、小さなアパートを借りる費用も出せません。ですから」

「判りました。顧問弁護士に連絡をして、どんな形であれこの話がなくなつた時は、愛実さん一家を元の状態に戻すよう、契約書を作

らせましょう。契約前にお渡しした現金や贈り物などは、慰謝料や示談金の形にして返還は不要との一文も入れます。それでしたら、あなたのお母さんに賄賂を贈る者はいなくなりますよ」

そう言つと瀬崎はにっこりと笑つた。

愛実の目に見る見るうちに涙が浮かぶ。瀬崎の優しさは社長である藤臣のためなのかも知れない。それでも、愛実は温かな言葉が嬉しかった。

翌日、尚樹らは近くの公立小中学校に転校が決まり、瀬崎は約束を守ってくれたのである。

く*く*く*く*

『じゃあ、彼女の望みを叶えてやったわけか……さぞかしお前に感謝したろうな』

『私は社長の代わりに応対しただけです。愛実さんは社長に会いに来られたわけですから』

香港のビクトリア湾を一望するホテルペンシユラ。二十一階のハーバービュースイートから湾を見下ろしつつ、藤臣は瀬崎の報告を受ける。

『明日には戻る。わざわざ俺を香港に追っ払ったんだ。何か企んでると思つてたんだが……今のところ、動きはなし、か』

『はい。ただ、計画はあつたようです。どうやら和威様が迷つておられるらしく。愛実さんの気持ち社長に向いているのであれば、自分に出る幕はないとおっしゃって』

それは藤臣の予想通りであつた。

藤臣が美馬佐和子の養子になつたのは彼が十五歳の時だ。当時、和威は十歳だつた。

和威の母・千穂子は結婚してすぐに妊娠が判明。あまりに早い妊娠だつたため、見合い結婚の夫は疑問を持った。調査の結果、結婚前の妊娠が発覚し、千穂子は即座に離婚させられたのである。二人の関係は結婚後だつたらしい。

和威は出生直後に、戸籍上の父親から嫡出否認の訴えを起こされ、私生児となつた。

その二年後、千穂子は再婚。母親は和威を実家に残し、嫁いで行つた。現在では、再婚相手との間に二人の子供を儲け、家族四人で幸せに暮らしている。和威がこの二十三年間で母に会つたのは、わずか一桁に過ぎない。

弥生はそんな和威の母親代わりとなつて育てた。彼女は男の子を欲しがる夫のために、様々な努力をしたが恵まれなかった。そんな彼女にとって和威は息子も同然である。

しかし、和威は次女の息子で父親もいない。しかも、信一郎より八つ、藤臣より五つも年下だ。おまけに一志が残した遺言のせいで、和威は益々後継者から遠のいてしまい……。

十歳の少年は従兄弟たちにいつも苛められていた。そこに登場したのが藤臣である。長女の子供である彼らは、標的を養子の藤臣に変えたのだ。

ところが、藤臣は和威とは違つた。幼い頃から大人の都合で、数々の辛酸を嘗めて来ている。一筋縄でいく少年ではなかつた。

結果、美馬家では……？ 信一郎・宏志？ 対？ 藤臣・和威？ といった構図が出来上がる。

以来十五年、和威は藤臣を頼りにしてきた。弥生が藤臣に冷たく当たる分、和威は？血の繋がらない従兄？を思いやって来たのである。

和威は、藤臣が自分と同じ私生児で孤児だと思い続ける限り、味方であるだろう。

あの弥生が藤臣に関する真相を話すはずがない。他の連中にして同じこと。いずれ、和威が重役に名を連ねた時には、他の重役から知れるだろうが……その頃には会社は藤臣の物となっている。

『社長、愛実さんには携帯電話をお渡ししておきました。他に何かございましたら……』

『ばあさんが信一郎を止めてくれたのは幸いだ。ただ、母親を抱き込むことが出来ないとなると、奴がいちばん質たちが悪い。充分に気をつける』

『はい。了解しました』

別の意味で質が悪いのは瀬崎かも知れない。そんな思いを彼は呑み込んだ。

『では、お帰りの時刻に空港までお迎えに上がります』

『いやそれは……』

「ねえ、藤臣さん、まだあゝ」

隣のベッドルームから催促の声が上がる。

説教好きな瀬崎の耳に入ったに違いない。それを思つと藤臣は舌打ちした。

『社長……しばらくは女性関係を慎むというお話では？』

『仕方ないだろう。本店と香港支店のイメージモデルを共演させるのがコンセプトなんだ』

『それと、モデルが社長の寝室にいらっしやるのと、どういうご関係が？』

『瀬崎、俺の私生活の管理は頼んでない。言われたことだけやればいい』

電話の向こうから、深いため息と五秒ほどの沈黙が流れてきた。

『判りました。では、素晴らしい夜をお過ごし下さい。失礼します』
言うなり電話はプツンと切れた。

（つたく！ なんなんだ！ 社長より先に電話を切る奴があるかつ！？）

苛々としながら、美馬は携帯電話をソファに叩き付けた。

長瀬久美子 ながせくみこ 現在二十六歳、そろそろ下り坂のモデルだ。一七

〇センチの身長とスレンダーなボディライン。売り物の体を惜しげもなく晒して、女がベッドに横たわっている。

学歴はないが損得勘定には長けており、与えた物の金銭的価値によつて、腰の振り具合が変わってくる判り易い性格の持ち主だ。イメージモデルとしての専属契約を結んで二年目、同じ時に愛人契約を結んだ関係であつた。

「ねえったら、藤臣さん」

「うるさいぞ。電話中に邪魔をするなど何度言えば判るんだ」

「だってえ。ね、今夜が香港最後の夜でしょ？ 一度くらい楽しみ

ましようよお」

ベッドから下りて、久美子は藤臣の腕に手を回し、甘ったるい声で擦り寄った。

その直後、彼は久美子を力任せに振り払う。

「俺に命令するな！ そんなにやりたければ、勝手に男を漁って来い。但し、東部デパートの仕事はこれで終わりだ。代わりのモデルはいくらでもいる。それを忘れるな」

藤臣の剣幕に久美子はすごすごと引き下がった。

彼の手には愛実の肌の感触が残っている。それを打ち消すことが出来ない藤臣だった。

第18話 来訪

瀬崎はもちろん弥生や長倉弁護士にも話してくれたようだ。口頭で約束した通りの契約書が愛実の元に届けられた。

しかし、それを持って来たのは美馬和威であった。

「長倉先生がどうしても行けないと言われて……。でも、愛実さんが気にされてるだろうから、祖母に早く届けるようにと言われたんだ」

そう言うたバツが悪そうに和威は頭を掻いた。

藤臣と信一郎は出張中で東京都内にはいないという。宏志は和威と一緒にには行きたがらず、代わりに、弥生は中立の暁に同行を命じた。

ところが、西園寺邸に着いた直後、暁の携帯に緊急連絡が入った。急遽会社に戻ることにになり、暁は愛実に挨拶だけすると帰ってしまったのである。

「えっと……僕も帰ったほうがいいですね？」

「はあ、どうでしょうか……。でも、遠くまで来て頂いて」

愛実にはどうすればいいのか判らない。

普通であるなら、引越して片付いていないとは言え、お茶くらい出すだろう。このまま追い返していいものかどうか、和威と同じく愛実も玄関に立ったまま悩んでいた。

「まあ、美馬和威さんかしら？ あなたのおばあ様から連絡があり

ましたのよ。大切な孫に契約書を持って行かせました、と。ほら、愛実さん、ぼんやりしてないで中にご案内して。契約書ならすぐにサインなさいな」

奥から出て来た母がそんなことを言い始める。

いつの間にそんな連絡があつたのだろう。愛実には初めて耳にする話だ。

「あ、どうもはじめまして、美馬和威です。あの、差し出がましいかも知れませんが、契約書はよく内容をご覧になった上でサインなさって下さい。納得がいかない点は僕では説明出来ませんので、長倉先生に確認されてからが良いと思います」

「和威さんは真面目で誠実な方ですのねえ。愛実も真面目な子ですよ。お二人は気が合うんじゃないかしら」

ホホホホ……愛実の母は甲高い声で笑った。

確かに和威はとても好感の持てる男性だ。愛実はエプロンを外しながら、「どうぞ」とスリッパを出したのだった。

「藤臣さんの秘書の瀬崎さんから話があつたと聞きました」

契約書をテーブルに置きながら、和威は藤臣のことを口にした。

昨今の不景気で、邸は誰の手にも渡らなかつたらしい。アンティークとまでは言えない古い家具や調度品は売却出来ず、以前のままであつた。

愛実はその中の少し傷んだ赤いビロードのソファに和威を案内した。

彼の言葉に、お茶を差し出す手が一瞬止まる。

「困った時に頼るのは、やっぱり好きな人ですよ。実は、あなたに贈る予定だというエンゲージリングを、藤臣さんから見せられたんです」

「いえ、あの、抜け駆けとか、そう言うのじゃないんです。何と云うか……偶然出会ってしまつて……色々助けて頂いて、それで」

咄嗟に、愛実が藤臣のことを庇っていた。

しどろもどろになる愛実を和威はどう思ったのか、

「判つてます。彼は僕にとって兄のような存在なんです。その……暁さんは色々心配してましたが、彼が真剣なら僕に争う意思はありませんから、安心して下さい」

和威は、ご存知かも知れませんが、と前置きして藤臣の過去を口にした。

藤臣は水商売の母親の元で私生児として育つた。その母親が亡くなり、小学生の頃から施設で育つたという。

「佐和子叔母さんは子供の産めない人らしくて、祖父が藤臣さんを養子に、と決めたんです。でも、祖母は大反対で」

藤臣の養母・佐和子は当時三十二歳。確かに、十五歳の少年を養子に迎えるくらいなら、姉の子供である十歳の和威と養子縁組するだろう。弥生もそれを薦めたらしい。

だが、弥生の亡き夫・一志が強硬に言い張り、藤臣を引き取つた。「祖父は藤臣さんのことを誰より期待してました。彼は優秀だからそこを見込んだんだと思います。でも、祖母や加奈子伯母さんたちはそれが気に入らなかつたらしく……。子供の目にも理不尽にしか見えなかつた。でも、僕には何の力もなくて……。逆に、僕は藤臣さんには助けてもらつてばかりでした。だから、彼には幸せになつて欲しいんです」

和威は申し訳なさそうに話し、「藤臣さんをよろしくお願いします」と頭を下げた。

優しい和威の言葉は、愛実の胸にチクチク刺さった。

お金目当てで花嫁役を引き受けるかどうか悩んでいる。そんな彼女の本心を知れば、和威は軽蔑するだろう。藤臣に惹かれる気持ちに嘘はない。

だが、

私には十代の少女と遊ぶ趣味はない。

藤臣はキツパリと言っていた。「よろしく」の言葉にとても「はい」とは言えず、愛実は俯き黙り込む。そんな彼女を和威は都合よく解釈してくれた。

「ああと、ごめんっ！よく考えたら、婚約指輪を用意してるなんて、僕が言っちゃマズかったよね？聞かなかったことにして下さい！」

「あ……はい」

「それから、今日来たのはもう一つ、どうしても訂正しておきたいことがあって……」

そう言うつと見る間に和威は真っ赤になった。愛実には何のことが判らず、じつと見つめていると次第に耳まで赤くなる。

「あの、何か？」

「いや……この間、宏志くんが言ったことなんだけど」

おそらく、美馬邸でディナーを頂いた時だろう。それは判ったが、何を言ったかまでは思い出せない。

「彼は僕のことを誤解してて、でも、決してそういう理由で候補者を降りると言ってるわけじゃないから……。だから、その点だけは誤解して欲しくなくて」

和威は藤臣に比べるとかなり幼く見える。大学生と言っても通るのではないか。とはいえ、愛実にすればかなり年上の男性だ。その大人の男性が、額に玉のような汗を掻く姿に驚いていた。

「あの、申し訳ありませんが、わたし……」

「いえ、ですから、決して自信はありませんが……結婚出来ない体と言っわけじゃありませんからっ！　それだけは、ちゃんとお伝えしておきたかったんです！」

「は、はい！　判りました」

何かよく判らないまま、とりあえず返事をした愛実だった。

くくくくくくくくくく

暁が引き上げたのは予定通りである。

こうでもしなければ、和威は重い腰を上げようとしないうだろう。どうやら、出張前に藤臣が和威に釘を刺して行ったようだ。これだけでは不十分だが、他の連中を焚き付ける理由にはなる。

暁は会社に戻り、デスクの上に置かれた封筒の中身を確認した。薄い笑みを浮かべると、彼は携帯電話を取り出す。

「ああ、いいモノが手に入りましたよ。それと、大奥様の指示で和威くんが彼女の元に出向きました。さあ、そこまでは……。藤臣く

んが戻るのは今夜の最終便じゃなかったか、と。彼が戻るとすぐに動くと思います。早めに手を打たれたほうが』

封筒から取り出した数枚の写真を、暁は手の中で弄んだ。
そこに写っていたのは。

第19話 拉致

頭がガンガンする。

愛実の耳にJ・POPの流行曲だろうか、やかましい音楽が聞こえて来た。切れ切れに、水音も聞こえるようだ。

しばらくして、愛実はゆっくりと瞼を開いた。最初は重くて中々開かず戸惑った。混濁した意識も、少しずつだがハッキリしつつある。

しかし大きな疑問が一つ、愛実には自分の置かれた状況が全く判らなかった。

くくくくくくく

和威が西園寺邸を引き上げた少し後、瀬崎から渡された携帯電話が鳴った。

番号を知っているのは瀬崎くらいだろう。おそらく、転校や契約に関することに違いはないと思い、愛実は急いで電話に出たのだった。

『やあ、愛実ちゃん。聞いたよ、引越したんだってね。もう少し早く帰ってきたら、僕も和威と一緒に行けたのになあ』

そう言って掛けて来たのは、信一郎であった。

携帯番号は公平を期する為に、長倉弁護士から全員に教えられたという。愛実はこの信一郎から母が受け取った現金のことを考えていた。

『契約書の写しを見たよ。いやあ、先手を打たれちゃったなあ。でも、個人的なプレゼントのやり取りは構わないよね？』

『あの……わたしはまだ、お話をお受けすると決めた訳じゃありませんから。贈り物を頂いても……それに、母には絶対に渡さないで頂きたいんです。先日、母に用立てて頂いたお金は、将来ちゃんとお返しするつもりです』

契約書を盾に踏み倒すつもりなど全くない。それは藤臣に借りたお金も同様だった。ただ、母にこれ以上借金を増やして欲しくないだけだ。

愛実の言いたいことが伝わったのかどうかはともかく、

『もちろん僕も、愛実ちゃんに約束を守って欲しいだけさ。デートしてくれるって約束だったよね？』

信一郎はこれから会いたいと言い出したのだ。

だが、弥生の命令で個人的な接触は控えることになったと瀬崎が言っていた。

愛実はそのことを告げるが、

『僕たちの約束のほうが先だったろう？ 君にお土産があるんだよ。それを渡したいだけなんだ』

信一郎に譲る気配はない。

そして愛実にとって駄目押しとなった言葉は、

『藤臣が香港に出張中なのは知ってるよね？ 彼が誰と一緒に知りたくないかい？ おばあ様より先に、君に伝えたくて……。少しだけでいいんだ。会ってくれるよね？』

出張と言えば仕事のはずだ。瀬崎はデパートの仕事と言っていた。一体誰を連れて行くと言うのだろうか。

愛実が藤臣のことを知りたいと思った。その感情に？ 好奇心？ と呼び名を付け、彼女は信一郎と会う約束をしてしまう。それが？ 嫉妬心？ だと気付くのは、愛実にとってまだ先のことだった。

くくくくくく

（そうだわ……銀座のレストランに呼び出されて……）

レストランは個室に通された。少し躊躇ったが、そんなレストランで何が出来ると言うのだろうか。見せたい物があるから、人目のあるところでは、と言われ愛実は同意した。

食事の後、信一郎に見せられたのは、藤臣が背の高い女性を連れ立って歩く写真だった。二十代の素晴らしく綺麗な女性だ。彼女は東部デパートのイメージモデルで、長瀬久美子だと信一郎が教えてくれた。

写真は何枚もあり、そのほとんどに二人は腕を組み寄り添い写っている。男性との交際経験がない愛実の目にも、特別な関係だと判る親密さだ。

「香港の九龍半島にあるホテルペンシユラって知ってるかな？
そのこのスイートに仲良く泊まったらいいね。二人はもう何年も付き合ってるみたいだから、マスコミも嗅ぎつけて明日のスポーツ紙に載るってさ。おばあ様も酷なことをするよ。藤臣には結婚を約束した恋人がいるのに」

数十枚の写真と信一郎の言葉は、愛実に衝撃を与えた。

その後、信一郎に何と答え、何を口にしたのか思い出せないくらいに……。

ボンヤリとした頭で、見上げた天井にはなぜか鏡が張られていた。その鏡に、自分の姿が映っている。大きなベッドに横たわり、虚ろ

な目で鏡の中の愛実はこちらを見ていた。

（どうして、こんなところに寝てるのかしら？）

愛実は身体を起そうとするが、微かに指が動く程度で、四肢にはまるで力が入らない。

（わたし、どうなってしまったの？ なぜ、体が動かないの？）

比較的鷹揚な愛実も、この尋常でない事態に焦り始めた。だが、慌てれば慌てるほど、考えが纏まらない。体が思い通りに動かないことが、これほど恐ろしいものだとは知らなかった。次第に恐怖心が高まり……その時、音楽の合間に聞こえていた水音が止んだ。ドアの開閉音がして誰かが近づいて来る。

（誰？ 誰がいるの？）

姿を見たくても首が回らず、尋ねたくても声が出ない。

「あれ？ もう気がついたのかい。随分早いんだなあ。もつと量を増やすべきだったかな」

そう言って覗き込んだ顔は、美馬信一郎だった。

くくくくくくくくくく

弥生の本命が和威であることくらい、信一郎も察していた。信一郎にとって藤臣は邪魔者に他ならない。彼が邸に来た十五年

前から、祖父・一志に散々比べられては出来が悪いと罵られてきた。だが、所詮デキレースなのだ。勝者の決まったレースに引き摺り出されるほど苦痛なことはない。

その一志が亡くなり、ホツとした矢先に今度は弥生だ。

弥生は手塩に掛けて育てた和威が可愛くて仕方がないのだ。その和威に美馬家を継がせるため、わざわざ『結婚を誓った男性の孫娘に財産を譲る』、などという茶番を仕組んだに違いない。

（ま、おかげでこっちにもチャンスが回ってきたけどな）

一志亡き今、長女の長男である自分が後継者となるのに最も相応しい。

そのために、この娘を利用する。それは信一郎にとって、当然の権利だと思っていた。

藤臣の写真を見つめ、呆然とする愛実にソフトドリンクを勧めた。オレンジジュースにシロップとワインを混ぜ、炭酸で割ったワイン・クーラーだ。ワインの量を極力抑え、即効性の睡眠導入剤を混ぜた。

それは信一郎が普段からよく使う手段だ。

お目当ての女性をごく普通のレストランに誘う。アルコールに慣れた女性相手の場合、非合法の催淫剤を使うこともある。効き目は個人差があるが、大概は乱れに乱れて信一郎を楽しませてくれること請け合いだ。後日、記念のDVDを進呈すると、その先は信一郎が飽きるまで言いなりに出来る。

（この娘もさつさと犯^{ちゃ}って孕ましてしまおう。そうなれば、四の五の言わずに結婚するさ）

ふらつく愛実を車に乗せながら、信一郎の凶悪な本性が爪を研ぎ始めた。

弥生がどれほど長生きしても後五年。愛実が財産さえ相続すれば、すぐに自分の名義に書き換える。その後、子供は信一郎の子じゃない、と偽の証明書を医者にかせればいい。金を積みあげてもする医者は大勢いる。そうなれば離婚も簡単だ。子供に相続権は無くなり、養育費も払わずに済む。

（こんな血縁でもない小娘に、一円だつてくれてやるもんか！）

信一郎の車はどんどん都心から離れて行く。夜の街を三十分以上走り、車は郊外のモーターに滑り込んだ。

部屋が一棟ずつ離れて建っている。フロントを通らずに済み、車を建物に横付け出来るのだ。ぐったりした娘を連れ込むのに大した距離を歩く必要もない。叫び声が届く心配もなく 女を犯すには最適な場所であった。

第20話 姦心（前書き）

陵辱的なものを思わせる表現があります。苦手な方はご注意ください。

第20話 姦心

『見失った、だと!?』

夜の九時、飛行機は東京国際空港に到着した。連れはおらず、藤臣は最後の税関検査を抜け外に出る。

久美子は彼女の希望で九龍半島に残してきた。愛人^{パトロン}が消えれば彼女のことだ、現地の男とよろしくやるだろう。ターミナル前に立った直後、電源を入れたばかりの携帯に着信が入った。

『申し訳ありません。深夜工事の為、道路が規制中でした……』

瀬崎は、彼らしくない慌てた様子で電話口で叫んでいる。

藤臣の不在中、信一郎と和威の動向には充分に気を配るよう命じて日本を出発した。

和威はともかく、信一郎には特に注意するよう言ったのだ。あの男は前科こそないものの、それに匹敵する無法を繰り返している。それが、信一郎の車を追跡していたとき、交通規制に掛かって眼前でストップを喰らったという。しかし、場所は成城の西園寺邸に向かう道。瀬崎は、そのまま自宅に送り届けるもの、と思っただけ。逸る気持ちを抑え、瀬崎が西園寺邸に到着した時、信一郎の車には影も形もなく、当然、愛実の姿もなかった。

『馬鹿野郎! 何のための尾行だ!』

『……お詫びの言葉もありません。信一郎様の携帯に掛けるんですが、電源を切っておられるようです。私はこのまま警察に』

『警察が何の役に立つ? 被害者がいなければ動かんし、愛実がや

られてからじゃ遅いんだっ！」

『では、どうすれば……』

藤臣がターミナルを出たタイミングを見計らい、目の前にポルシエが横付けされた。

運転手付きの車両^{リムジン}が苦手な彼は、大体において自分で運転する。

空港にも自分の運転で来て、高級車専用の空港駐車場に預けるといふサービスを利用していた。ターミナル前で受け取れるのは、上客だけの特別サービスだ。

いつものスタッフが愛想笑いを浮かべ、揉み手せんばかりに藤臣を出迎えたが……。

『成城より西にある奴がいつも利用するモーターを探せ！ 五軒もないはずだ。グズグズするなっ！』

藤臣の怒声に駐車場スタッフは顔を引き攣らせ固まった。

書類にサインをし、特別料金^{チップ}を押し付けるようにして運転席に乗り込んだ。そのまま、怒りに任せてアクセルを踏み込む。白のポルシェは残像を残し、あっという間に走り去ったのだった。

（なんて馬鹿な娘だ！ あれほど忠告してやったのに、よりもよって信一郎と二人きりで会うなど……最悪だ！）

和威には「財産はお前にやるから、愛実には手を出さないでくれ」と告げた。素直な和威は、藤臣の言葉に感動し、愛実には近づかないと約束したのだ。

宏志は論外だろう。仮に何かを企んでも、奴に実行できる性根はない。遠くから吼えるくらいが精々である。

しかし、信一郎は違う。一志の腐った根性と、弥生の冷酷さを受

け継いだ、まさしく美馬家の人間だ。

その時、ふと頭を掠めた。？腐った根性？なら藤臣も引けは取らない。信一郎に愛実を犯させればいいじゃないか、と。

居場所を見つけてもすぐには踏み込まず、コトが済むまで静観する。時間が経てば、愛実は奴に説得されるかも知れないが、レイプされた直後なら別だろう。現場で犯罪の証拠を押さえれば、信一郎とて逆らえまい。

間に合わなかったとはいえ、事後のフォーローに回れば、愛実も藤臣の言いなりに……。そこまで考えた時、彼の脳裏に浮かんだのは、愛実の笑顔だった。

ありがとうございます。

マッチポンプさながら、愛実をラブホテルに連れ込み、警察に通報したのは藤臣だ。後日調査されても、二人の関係が以前からだとあの場にいた警官たちが証言してくれるだろう。愛実を追い詰めるだけじゃなく、彼にはそんな思惑もあった。

なのに、愛実は礼を言い、逆に藤臣を氣遣った。

女はすべて強欲な詐欺師だ。利用される前に、利用しなければならぬ。少しでも気を許せば、死ぬまで金を搾り取られることになる。それは、三十年弱の人生で藤臣が学んだ教訓である。

彼は心に浮かんだ愛実の顔を懸命に振り払う。

「黙れ！俺に礼なんか言っくなっ！」

藤臣の叫びを打ち消すように、携帯が鳴った。

瀬崎が場所を特定したに違いない。急いで車を路肩に停め、通話

（どうして信一郎さんが？　ここは何処？　どうして動けないの？）

聞きたいことは山のようにある。

それなのに、愛実は思うように声も出ないのだ。

「……う、うう……」

喉の奥から必死で空気を押し出しても、小さな唸り声にしかならない。

愛実は流行の音楽は何も知らない。友達と遊ぶ時間も、お金もないのだから仕方ないことだ。今はその音楽が耳障りでどうしようもなかった。これでは、どんな大声で叫んでも掻き消されてしまうだろう。

唯一自由になる目で、愛実は可能な範囲を見回した。

そして判ったのだ。ここはラブホテルか、それに類する場所に違いない、と。藤臣と一緒に一度だけ入った場所である。そこは独特の空気が漂い、性的欲情を煽る生々しい気配に満ちていた。

同じ匂いを感じ、愛実は身震いする。

その時、信一郎の手が愛実に伸びた。羽織っていた薄手のジャケットはすでに脱がされ、白いブラウスと淡いブラウンのロングスカート、靴は履いておらず白いソックス姿の彼女が天井の鏡に映っている。

ブラウスの前で結ばれたリボンが、信一郎の手によってスルスルと解かれた。

愛実は懸命に首を振り、抗議の声を上げようとする。

「暴れると怪我するよ。おとなしくしてたら、すぐに気持ちよくなる。タツプリ子種を流しこんで、すぐに孕ませてやるからね。いい

子にしてなよ、愛実ちゃん」

信一郎は理解しがたい台詞を口にしつつ、目を血走らせ、涎を垂らさんばかりに愛実に跨った。

最初は行儀良くボタンを外そうと試みるが、次第に苛つき始める。遂には両手でブラウスの胸元を掴み、左右に引き裂いた。布が破け、糸の切れる音がして、横を向いた愛実の目に弾け飛んだボタンが映り……。

「……うう、あ……や、や、めて……」

掠れた悲鳴は音の洪水に飲み込まれ、彼女自身の耳にすら聞こえなかった。

第21話 暴力（前書き）

陵辱的な表現があります。苦手な方はご注意ください。

第21話 暴力

キャミソールの上から信一郎は愛実の胸を揉みしだいた。それは徐々に力を増し、愛実は痛さに顔を顰める。

「へえ、さすが現役の女子高生だ。肌触りや弾力が違う。こいつは楽しめそうだ」

信一郎は舌なめずりしつつ、薄いキャミソールを力一杯引き裂いた。

「い、や……や、めて」

愛実の口から、ようやく声らしきものがこぼれる。

それは信一郎の耳にも届いたらしい。彼女の顎を掴むと上を向かせた。

「どうせ誰かに犯^やられるんだ。落ちぶれ果てた伯爵家の肩書きなんざ、何の役にも立ちやしない。そんなお前を、正当な後継者の妻にしてやると言ってるんだ。感謝してくれよ。言う通りにしてりゃ、母親に渡した金ぐらいくれてやるよ」

信一郎はそう言つと、ニヤニヤ笑いつつ愛実から離れた。ベッドのすぐ横に三脚が立ててあり、その上にはビデオカメラがセットされている。

「待つてろよ。俺から離れられないように、ちゃんと記念撮影してやるからな。お前、藤臣には抱かれてないよな？ 奴のお古なんてそれだけは勘弁してくれよ」

愛実は冷たいレンズがこちらを向いていることを知り、背筋がゾツとした。

信一郎は羽織っていたバスローブを脱ぎ、全裸で愛実に覆い被さる。そのまま、ふつくと盛り上がった胸元に顔を埋めたのだ。

生温かい舌が胸の谷間を這う。まるで、なめくじを体の上に置かれたような気色悪さだ。愛実の鼻先に信一郎の頭が来て、髪からは男性用整髪料の匂いがした。その強烈な匂いに思わず顔を背ける。

（こんな……こんな男の妻になるなんて……）

愛実は悔しくて堪らなかった。信一郎と結婚なんて、ソープランドに売られるのと大差ない。それくらいなら、例え詐欺に協力したことになっても藤臣を選ぶ。

（美馬さんに触れて欲しい。他の人じゃイヤッ！）

藤臣のことが好きだ……愛実は初めて恋を自覚した。

心の中で強く願った直後、彼女の全身に少しずつだが力が蘇る。

手足に神経が戻って来て、信一郎の拘束から逃れる為、メチャクチャに動かしだした。

「うっ！ く、く、う……」

愛実の膝が、偶然にも信一郎の大事な場所にヒットした。

信一郎が怯んだ隙に、彼女は必死でベッドから体を起こした。なんとか立ち上がると、ドアに向かって走ろうとする……が、酔っ払いのように足が纏れて前に進めない。どれだけ力を入れても、膝が笑ったようになってしまう。

「この、ガキい！」
「きやつ」

いきなり、後ろから髪を掴まれた。そのまま引き摺り倒される。頭も背中も痛くて、愛実^{あいみ}は泣きながら叫んでいた。

「やめて……お願い。もう、やめてっ！」

「うるさい！ この俺に逆らいやがって……ただで済むと思うな！ このクソガキがっ」

愛実^{あいみ}は床の上に仰向けに転がされた。信一郎は馬乗りになると、彼女の顔を数回平手で叩いた。唇が切れて、口の中に血の匂いが広がる。

人に殴られたのは初めてで、愛実^{あいみ}は目がくらくらした。抵抗する気力が急速に萎^{しぼ}んで行く。

「ホラ、どうした？ 俺から逃げられると思ってんのか？ 殴られたくないや言う通りにしろ！ 今度逆らったら骨をへし折るぞ。判ったな！」

すでにボロ布のようになったブラウスとキャミソールを、強引に愛実^{あいみ}の腕から剥ぎ取った。上半身が真っ白のブラジャー一枚になる。直後、信一郎は真ん中のリボンが付いた辺りを驚づかみにし、ブラジャーを力任せに引き剥がそうとした。

「痛い、痛いからやめて……引つ張らないで！」

背中の中のホックが曲がり、壊れたことに気が付いた。壊れたホックが肌を傷つけ、背中や脇がひりひりして痛い。

とうとう上半身を裸にされてしまった。わずかに硬さの残る乳房は、桜色に息づいた先端を際立たせている。そして、信一郎の手がスカートのファスナーを下ろし始め……。痛みと悔しさ、そして怒り、今の愛実^{あいみ}には泣くことしか出来ない。

警察に訴えてやる。絶対に泣き寝入りはしない。どれだけ貧しくても、この男の妻にだけはならない！　そう、決意した時だった。

激しい勢いでドアが殴られた。叩くと言つような生易しい音ではない。室内に流れる音楽を凌ぐ勢いで、誰かがドアを壊そうとしている。

「信一郎！　さっさとここを開けろっ！　開けなきゃぶち壊すぞ！」

凄まじい音と罵声に、二人の動きはピタリと止まった。

「美馬さん……助けて……助けてっ！」

藤臣の声を聞いた瞬間、頬を殴られて萎縮していた愛実の心が一気に浮上した。

「無駄だ。ドアには鍵が掛かってる、チェーンもだ。無理に押し入ったら不法侵入で、警察に突き出してやる」

信一郎が勇ましいのは言葉だけだ。彼はビクビクした顔でドアを凝視している。

そんな信一郎を睨みつけ、愛実は言い放った。

「その時は、あなたにレイプされそうになったって、訴えてやるからっ！」

「なんだとお……全部、お前のせいだ。この身の程知らずが！」

邪魔が入った憤りも合わせて、信一郎は再び愛実に手を振り上げる。

くくくくくくくく

「しゃ、社長………いったいどの道を通ってここまで」

藤臣の連絡を受け、瀬崎は彼より余程近い場所から駆けつけたはずなのだ。ところが、到着は五分の差もなかった。

瀬崎がモーテルの責任者と話をつけている最中に、藤臣のポルシェが飛び込んで来た。

「そんなことはいい。鍵は？ 部屋はどこだ、早くしろっ！」

苛々して掻き毟ったのか、藤臣は髪を振り乱し、目は血走っている。全身から殺気がオーラのように立ち昇り、身長一六〇センチもなさそうなモーテルの責任者は、ガクガク震えていた。

おそらく、藤臣を堅気の商売とは思っていないだろう。

責任者は建物の前まで案内し、「穏便に話をつけて下さい」と瀬崎に懇願する。だが、今の藤臣の辞書に「穏便」の二文字は見つかりそうもない。

まずは声を掛けてから、という責任者を突き飛ばし、藤臣はドアの横に置かれた傘立てを掴んだ。鉄製の傘立て一気に振り上げ、なんと、ドアをガンガン殴り始めたのだ。

その半狂乱ぶりに瀬崎は声も出ない。

「おい、何をしてる、さっさと鍵を開けろ！」

「で、で、ですが……」

「中で犯罪が行われてるんだぞ！ 俺の婚約者がレイプされたら、貴様も共犯で刑務所に いや、地獄に叩き込んでやる！」

管理人は鍵を瀬崎に押し付け逃げ出した。瀬崎は慌てて鍵を開け

るが、ドアにはチェーンが掛かっている。

「社長、チェーンカッターを借りてきます」

瀬崎は大急ぎで先ほどの責任者を追おうとした。
だが、

「そんな時間はない。退けっ！」

藤臣はそう言つとドアのノブを掴んだ。

少しチェーンを緩め、一気にドアを引く　　すると、チェーンの
留め金が見事に壊れ飛んだのだった。

第21話 暴力（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

アルファポリスさんの恋愛大賞にエントリー致しました！
よろしければ、応援してやって下さいませm（――）m

次回で2章が終わります。

引き続き、よろしく願いいたします（^^）／

第22話 救出（前書き）

暴力的な描写があります。苦手な方はご注意ください。

第22話 救出

部屋に飛び込んだ瞬間、手を振り上げる信一郎が目に入った。全裸で愛実に跨る姿に、藤臣の中で何かが切れた。

「貴様ーっ！」

藤臣は靴のまま駆け上がり、信一郎に飛びついた。力任せに彼女から引き剥がし、ベッドの反対側まで投げ飛ばす。

そして、恐る恐る愛実に視線を移した。

ほんのわずか、セックスに関する言葉を口にするだけで、頬をピンクに染めるのだ。その反応が可愛らしく、からかい半分でつい口にしてしまう。そんな彼女の初々しい桜色に頬が、今は真つ赤な薔薇の花びらを押し潰したようになっていた。ふっくらとした唇には血が滲み、フルフルと震えていた。

それだけではない。

男の力で思い切り驚づかみにされたのだろう。瑞々しく張り詰めた二つの乳房に、爪痕がクッキリと残っていた。

そんな藤臣の視線に愛実は気付き、懸命に体を起こして胸元を隠そうとする。

だが、信一郎は違法な薬を使っただけに違いない。完全に抜け切れておらず、彼女の体は今にも倒れそうなほどふらついていた。

「やあ、藤臣。いや、違うんだ……俺と結婚したいって、自分からここまで来たんだよ。でも、お前の声を聞いた途端、急に暴れ出して……つい」

信一郎はへらへらと笑いながら、ベッドの向こうに身を起こした。口から出るのは、金目当ての女子高生に嵌められた、という責任転嫁、後は言い訳だ。

その言葉は藤臣の中に残った最後のブレーキを粉碎した。

彼は無言で上着を脱ぎ、愛実の肩に掛け……ユラリと立ち上がる。

「そんな怖い顔するなよ。お前だって抜け駆けしたんだ。お互い様じゃないか……」

全裸の信一郎は周囲を見回し、床に落ちたバスローブを手繰り寄せようとした。直後、男の絶叫がモータールの個室に響く。

床に伸ばした信一郎の手を、藤臣の革靴が踏みつけたのだ。藤臣は体重を乗せ、煙草の火を消すように踏み躪る。

信一郎がもう一方の手で藤臣の足を掴もうとした瞬間 叫び声を上げる男の顎を、今度は蹴り上げた。信一郎はもんどりうって床に倒れ込む。

「社長！ 落ち着いて下さいっ！ 社長！」

背後で瀬崎が制止する声と、愛実の悲鳴が聞こえた。

刹那 記憶の底から、母の悲鳴が藤臣の耳にこだまする。

ほんの短い間、父と呼んだ男が母を殴り、母を庇おうとした藤臣も殴った。そんな母も藤臣を見るたび「お前を産んだせいで」そう罵った。

信一郎の姿がその男と重なる。

母に集り、母を殴りつけ、言いなりにさせたあの男に。八つの少

年に、母を救うことは出来なかった。だが、今は違う。

ベッドの傍らにセットされたビデオカメラが目に映り、藤臣は三脚ごと掴み、信一郎の上に振り翳した。^{かさ}

直後、ふいに音楽が止んだ。静寂が訪れた室内に、信一郎の呻き声が広がる。そして、藤臣の背中に愛実が抱きつき……。

「死んじゃうから、やめてーっ！」

三脚を信一郎の頭上に振り下ろした瞬間、藤臣はハッとして我に返った。

躊躇に手が止まる。先端に取り付けられたビデオカメラは、信一郎のこめかみを掠め、床に叩き付けられた。廃棄物^{ゴミ}と化したカメラを横目に、信一郎は声もなく床に転がっている。

「美馬さん……お願い、もうやめて」

藤臣は愛実の言葉に自分を取り戻した。

短い時間を閉じ、額を押さえ、落ち着かせる。

（愛実は駄目だ。誰にもやらない。この娘だけは……俺の物なんだ！）

滾る^{たぎ}ような想いが溶岩のように噴き上げて来て、藤臣を苛んだ。^{さいな}

「……た、たすけてくれ……悪かった、もうしない。その子には二度と手を出さない。だから……たすけてくれ」

藤臣は二―三度深呼吸すると、

「貴様の犯罪の証拠はすでに掴んでる。俺がバックアップすると言ったら、告訴するという女が何人もいる。弁護士には金を掴ませているようだが、公になると知ったら奴も飼^{はあさん}い主に報告するだろう。」

貴様は終わりだ」

冷静さを取り戻し、従兄に向かって言い捨てた。

信一郎も嫌味の一つくらい言い返してくるかと思ったが、どうやら、それどころではないらしい。

「わ、わかった……もう、しないから……頼むから、救急車を呼んでくれ。手の骨が砕けたみたいだ」

泣きながら縋る様は見苦しく、藤臣は信一郎から顔を背けた。

「瀬崎、呼んでやれ。ここの始末を頼む。病院に弁護士の長倉を呼んで、念書を書かせろ」

「む、むりだ！ 骨が……」

「右手が駄目なら左手で書け。それとも、その粗末な息子を潰されたほうが良かったか？ 信一郎、示談の慰謝料と口止め料は安くないぞ。美馬の家を追われなければ、黙って払うんだな」

それだけ言うと、藤臣は背中にしがみ付いている愛実を掬うように抱き上げた。

「あ、あの……あの……」

「何も言うな……言わないでくれ」

美馬は入股で部屋を横切り、覗き込むモーターの従業員をひと睨みで散らせる。彼はポルシェの助手席に愛実を乗せ、あつという間に走り去った。

くくくくくくくく

約一時間後、藤臣は美馬家に内緒でキープしているホテルの一室にいた。隣には巨大遊園地があり、間違っても藤臣が出入りするとは思えない場所だ。

そのホテルの一般客には貸し出さない部屋、プレジデントスイートに愛実を連れて入る。

医者呼び、寝室で愛実の手当てを頼んだ。その間に女性用の着替えを用意して貰い、彼はそれを手に、寝室に足を踏み入れた。

「キャッ！」

「ああ、済まない」

愛実は胸元を毛布で隠し、医者に背中を見せていた。室内には女性の看護師もあり、藤臣は彼女に着替えを渡して、そそくさと立ち去ろうとする。

その時、目にしてしまったのだ。愛実の体の至る所に残った青紫の痣を。

藤臣は弱者に対する暴力には、過剰に反応する。

彼自身、小さな頃から様々な暴力に耐えてきた。加害者は義父だけでなく、被害者は母と藤臣だけではない。藤臣には腹違いの妹がいた。その妹を必死で守ろうとした幼い自分が、愛実の姿と重なる。

愛実は無かな母を庇い、祖母や弟妹を守るために体すら売ろうとした。藤臣の提案に応じようとしたのも、家族のためだった。それ

は、瀬崎に相談した話の内容からも判る。

藤臣は彼女を、贅沢な生活が捨て切れず、売春に走った愚かな娘だと割り切るつもりだった。だが、そうでないなら。瀬崎が言ったように？誠実で善良な少女？であるなら……愛実を弄^{もてあそ}び捨てることは、自分自身を否定するに等しい。

（彼女の家族に対する想いが真実なら……俺が抱く訳にはいかない）

その考えに、彼の体は悲鳴を上げた。

愛実のどんな姿にも、体が反応する。今もそうだ。痛々しい姿を目にしながら、あの傷跡に口づけ、彼女の恐怖を取り除きながら、体一つに重ねたいと望んでしまう。

二十代に入った頃から、自制心と性欲のコントロールには鉄壁の自信を誇ってきた。どんな女もダッチワイフ以上でも以下でもない。それが愛実にだけは、出逢いからブレーキが甘くなっている。

愛実を手に入れたい。

だが、愛実を手に入れる訳にはいかない。

自分の中に芽生えた矛盾する感情の答えが見つからないまま……。

藤臣は結婚に向かって駒を進める決意をした。

第22話 救出（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

次から第三章となります。

引き続きよろしくお願い致します。

第23話 流言

「藤臣さん、聞きましたか？」

事件から四日後、藤臣も四日ぶりに美馬邸に戻った。彼が私室に入り、デスクに座るなり飛び込んできたのが和威だ。そして興奮した様子で話しかけてくる。

「どうしたんだ。落ち着いて話せ」

「ここ数日、信一郎さんを見なかったんですが……実は入院してるらしいんです。何でも、暴漢に襲われたとか」

和威は声を潜める。

「暴漢？ それは気の毒だな、どこで襲われたんだ？」

しらっとした顔で、藤臣は言い返した。

「いえ、それが……よく判らないんです。警察にも届けてないらしくて。噂だと、ヤクザの情婦に手を出して、色々やっているとところに乗り込まれて酷い目に遭わされた、とか。入院も極秘扱いみたいですよ」

（なるほど、俺はヤクザなわけか……）

真剣な和威に合わせて、藤臣も深刻そうに頷く。その一方、手で口元を覆い、苦笑を隠した。

和威はそれを、藤臣も本気で考え込んでいると誤解したらしい。

「まあ、いい薬ですよ。気に入った女性は恋人や婚約者がいても、かなり強引にモノにする、という噂ですから。いつか、痛い目を見らると思ってたんです」

「奴のことはいいさ。自分が痛い目を見ないように気をつけろよ」

「僕はそんな、藤臣さんほどモテませんから。第一、覚えなきゃならない仕事がたくさんあって、女性と付き合ってる暇なんかないです」

藤臣の忠告に和威はソファに腰掛けつつ答えた。

和威は宏志から言われたことを気にしている。下半身についての揶揄だが、藤臣はそれに気付き、遠回しに切り出した。

「愛実に聞いたよ。熱心に否定していたが、何のことが判らなかつたと言っていた」

藤臣の言葉に、和威はホツとしたような、残念そうな、微妙な表情をした。

「そうですか……でも、会いに行ったのは祖母と母の命令ですから。藤臣さんは、本当に愛実さんと結婚されるつもりなんですよ？」

念を押すような和威の言葉に、藤臣は怪訝そうに顔を顰めた。

「不満か？ だったら、降りる必要はない。ただ、目的は財産が愛実か、はつきりさせておいてくれ」

「暁さんから聞いたんです。この間の出張、いつものモデルが同伴だった、と」

和威の口調は藤臣の不貞を責めるかのようだ。

スイートルームに久美子と一緒に泊まったことが、写真週刊誌に掲載されるところであった。印刷前に掲載を止めさせ、写真は全て回収済みだ。持ち込んだのはフリーのカメラマンだという。

その写真の存在を教えてくれたのは愛実だった。

信一郎は彼女を呼び出し、藤臣は女性同伴で香港に出張した、と匂わせた。愛実に久美子の写真を見せ「藤臣が結婚を約束した女性」と説明したのだ。

それが間違いだと、必死で言い訳をしたのは初めてのことだろう。

しかも、十八歳の少女相手に。

「てっきり、そういった女性関係は清算されたばかり思っていたので……。愛実さんは、遊びでどうこうされる方じゃないと思うんです。だから藤臣さんも」

「お前には関係のない話だ」

デスクでキーボードを打ちながら話していたのを止め、藤臣は立ち上がった。

和威とテーブルを挟んで正面のソファに座る。藤臣はテーブルの上に置いてあるタバコケースから、無造作に一本抜き火を点けた。

藤臣の突き放した言い方に、和威はムツとしたようだ。

「そういう言い方はないだろう？ 僕だって候補者なんだよ」

愛実と会い、話をしたことが原因らしい。和威の中で、彼女の存在が大きくなりつつあった。

「だったら何だ？ 愛実が選ぶのは私だ。第一、お前に結婚は不可能なんだろう？」

一瞬で和威の頬は紅潮し、数秒後には気色ばんだ。

「違いますよ！ ただ信一郎さんや藤臣さんみたいに、女性をセックスの対象だけとは思いたくない。それに、どんな人間の血が流れているか判らない僕に、子供を作ることなんて……。だから、女性との付き合いも、結婚も考えないようにしているだけです！」

私生児であること。

和威のコンプレックスの源はそこだった。彼は藤臣にも同じものを感じていたが、それは和威の思い込みに過ぎない。

藤臣も私生児であった。だが、三月初めに亡くなった美馬一志は、遺言で藤臣を実子として認知したのだ。藤臣は和威の義理の従兄で

はなく、血の繋がった叔父にあたる。和威と宏志を除く美馬家の人間と、長倉弁護士、本社重役が知っている事実だ。

美馬一志は藤臣にかなり有利な相続権を与えた。それは遺留分を差し引いても、半分以上を彼が受け取る計算だ。さらには次期社長の椅子も、ほぼ藤臣に決まっていたのである。

だが、彼が欲しいのは？美馬家の全て？だった。

「だったら、愛実との話も考えないようにするといい」

一言答えて、藤臣は煙草の火を灰皿で押し消した。眉根に皺を寄せ、煙を吐き出す。ソファからデスクに戻ろうとした時、その背中に和威は言葉をぶつけた。

「藤臣さん。信一郎さんのことで、妙な噂もあるんです。彼を襲ったのはあなたで、愛実さんを連れ去った、と。彼女は、本当はあなたとの結婚を望んでいない。承諾させるために、あなたは彼女を監禁している……」

和威の言葉に藤臣も驚いた。

どうやら表立って手の打てない信一郎側が流した噂らしい。

それは一部事実だ。愛実はある日以降、家には戻っていない。弟妹に心配を掛けぬため、と藤臣が持ちかけ、顔の怪我が完全に治るまでホテルで療養中である。

愛実の母親にはそれなりの金を握らせた。弟の尚樹には、美馬の家は金持ちで藤臣との結婚に反対する人間がいる。どうか内緒にしないで欲しい……そんな電話を愛実に掛けさせてある。

尚樹は愛実の不在中に訪れ、母親に金を渡した信一郎のことを毛嫌いしていた。そして、姉が好きな人と結婚出来るなら、と協力を約束したのだ。

「実際、愛実さんは今週になって一度も高校に通ってない。家に連絡しても、旅行に出た、と言われるだけで」

「家族がそう言うなら問題はあるまい」

「そんなっ！　いくらなんでも不自然でしょう！？」

食い下がる和威に、藤臣は見下ろしながら言った。

「和威、真相が知りたいなら自分で調べる。知ったところで、というなら、無駄な詮索はするな。誠意と正義だけでは人も会社も動かないぞ。愛実を欲しければ、俺から奪ってみろ。お前に出来るならな」

いつもと違う藤臣の様子に、和威は席を立ち一礼してどのノブに手を掛けた。

「和威」

名前を呼ばれた瞬間、彼の肩がピクリと動く。

「暴漢には気をつけろ」

あとに続く言葉に、和威は食い入るような眼差しで藤臣を見たのだった。

第23話 流言（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

アルファポリスさんの恋愛大賞、始まったばかりにも関わらず、たくさんのご投票ありがとうございます（感涙）
信じられない好順位に、ただただ感謝の言葉だけです。

の割りに、もの凄いな規則な更新ですみませんっ！orz

本日から第三章となります。

よろしくお願い致しますm（——）m

第24話 疑惑

藤臣の様子がおかしい。

和威は従兄の部屋を出て、階段に足を向けた。三階から二階に下りる途中で足を止め、考え込む。これまで和威に対して、藤臣がどんな好戦的な態度を取ったことはなかった。

藤臣が愛実を監禁、という馬鹿げた噂は、暁が笑いながら教えてくれたことだ。

「ありえないよな。藤臣くんの場合、そんな手段を取らなくても簡単にベッドに連れ込むさ」

和威もそう思う。

第一、西園寺家を訪ねた時、愛実が藤臣に結婚の意志があることを知っている様子だった。弥生の話は関係なく二人は惹かれ合ったのだ、と藤臣を庇っていた。

仮に何かの事情で愛実と信一郎が会っていたとしても、藤臣は冷静で礼儀正しい男だ。病院送りにするような暴力を振るうとは思えない。

（信一郎さんが愛実さんに何かしたのか？ 藤臣さんを怒らせるような何かを）

ため息と共に和威はゆっくり首を振った。足元を確かめるように一段一段下りて行く。

藤臣はここ数日美馬邸に戻って来なかった。

「いつものホテルに泊まった様子はない。仕事には行ってるらしい

が。さあて、何処に泊まっていることやら」

愉快そうに暁は言っていた。

信一郎は美馬邸とは別に都内にマンションを所有している。他にも至るところに別荘があり、ハワイにはコンドミニアムもあるらしい。学生の宏志ですら勉強用と称して他に部屋を持っていた。

一方、藤臣は「管理が面倒だ」と言い、別荘はおるか賃貸マンションすら借りていない。

例のモデルにはマンションを買い与えたと、数ヶ月前の週刊誌に載っていたが……。そのことを藤臣に尋ねた時、「ホテル以外では抱かない。女は信用出来ないからな」それは、肯定とも否定とも取れる返事だった。

二階の廊下に立ち、和威は自分の部屋に向かう。位置的には、藤臣の真下だ。スイートタイプで入ってすぐのリビングと奥に寝室があった。寝室にバスルームとトイレがついている。

藤臣のリビングは書斎代わりで、いつも山のように仕事を持ち帰っていた。女性を家に連れて来ることもなく、仕事以外では外泊も旅行もしない。和威が「たまには女性とのんびりして来たら？」と言つと、「必要ない。セックスは一時間もあれば終わる」と、にべもない言葉を返された。

愛実の西園寺家はお金に困っているという。

弥生は和威に、

「確かな形で援助してあげたいのよ。わたくしにとって、初恋の方のお孫さんですもの。それにね、愛実さんにお会いして、楚々とした良いお嬢さんだと思いました。年の頃も和威さんとお似合いでし

よう。この家はわたくしが生まれ育った家です。実の孫である、あなたに受け継いで頂きたいの。それに……」

祖父の遺言状の内容を知らされていない和威には、そこまで祖母が必死になる理由が判らない。祖父の遺産は祖母と三人の娘で分け合うはずだ。様々な事情で祖父の名義になっているとはいえ、娘の誰かに相続させれば済むことではなからうか。

思い悩む和威の耳に窓の外からエンジン音が聞こえた。

3600cc 水平対向6気筒　タイトでスタイリッシュなポルシェ911GT2のエンジン音だ。藤臣は一時間も家におらず、出て行くつもりらしい。この様子だと、どうしても必要な書類があり戻って来ただけのようだ。

和威の耳に弥生の言葉が続いた。

「それに、藤臣さんが愛実さんに何をするか……。藤臣さんの女性関係はわたくしも知っています。ねえ、和威さん。せめて愛実さんに、お金のことは心配しないようにお伝えなさいな。早まった決断はしないよう　あなたもね」

財産ではなく愛実が欲しい、藤臣の言葉は本心からだろうか？
暴漢には気をつける　あれが脅迫だとしたら……。

和威は部屋着を脱ぐとスーツに着替えた。

くくくくくくくくくく

今日でもう丸四日になる。愛実テレビの電源を切り、三人掛けのソファにゴロンと転がった。西園寺邸と同じベルベットの布張りソファだが、色は優しいオフホワイト。しかも手入れが行き届いており、傷一つない。

リビングの窓からは巨大遊園地のロマンティックなお城が見え、愛実が寝泊りしているセカンドベッドルームの窓からは海が見えた。

（こんなところで、のんびりしていいのかしら？）

藤臣に言われるまま電話を掛けたが……弟たちはちゃんとご飯を食べているだろうか。掃除は、洗濯は、そして新しい学校に移る手続きは誰がやっているのだろうか。

信一郎に襲われたショックで、何も考えられずにいる彼女に、藤臣は言ったのだ。

「そんな顔で自宅に戻ったら、弟たちが心配するんじゃないか？」

愛実が洗面所の鏡で自分の顔を見た時、その言葉に納得せざるを得なかった。

事件の翌日、都内の大学病院に連れて行かれた。顔を殴られていたので、頭部を中心に検査を受けるよう言われた為だ。結果は異常なしだった。

頬の腫れは昨日あたりから引き始めたようだ。しかし、口元にはまだ青い痣が残っている。上半身を中心に無数の内出血や擦過傷があったが、傷あとは残らないと言われたのだった。

あれからずっと、藤臣と一緒にこの部屋に泊まっている。もちろん寝室は別々だ。バスルームは一つしかない為、愛実が使

用する時は藤臣は寢室から出て来ない約束である。

朝はリビングで朝食は取り、藤臣は出社する。定時には仕事を終え、ここに戻って来て一緒に夕食を食べるのだ。一昨夜は館内を案内してくれ、併設のショッピング施設まで連れて行ってくれた。昨夜はホテルの周囲と一緒に散歩して……。

愛実 は壁に掛かったアンティーク調の振り子時計を見上げた。真鍮製の掛時計は、ベージュに統一された壁のアクセントになっている。時刻は間もなく夜の七時。

美馬邸に寄ってから戻るので少し遅くなる、夕食は先に食べていなさい、と言われたが……独りでは食べる気にならない。

今日の愛実は、ネイビーのAラインロングTシャツ、下は黒いスパッツというかなりラフなスタイルだ。

（まだかな……美馬さん、早く帰って来て）

一人のスイートはもの凄く広い。

信一郎は入院したと聞いたが、藤臣の話では弟の宏志にも注意が必要だと言う。それに、あの和威とて判らない。藤臣と争う意思はないと言っていたが、愛実を油断させる手ではないかと疑ってしまう。色々なことが頭をよぎり、彼女は全てが恐ろしかった。今のままでは、一人ではこの部屋から出ることも出来ない。

藤臣が傍に居てくれなければ……。

愛実の心は少しずつ、^{から}搦め捕られて行くのだった。

第25話 距離

ボタン。

扉の閉まる音を愛実^{あいじ}は夢の中で聞いていた。扉が閉まったということは、少なくとも一度は開いたということだ。それは、部屋の中に自分以外の存在を示している。

その瞬間、愛実の脳裏に激しい音楽が流れ始めた。自分に覆い被さる黒い影、声も出せず、指の一本すらまともに動かない。そして、大きな男の手が彼女の頬に向かって何度も振り下ろされ……。

「いやあつ！ やめて、やめて、叩かないでっ！」

愛実^{あいじ}は臍^{へし}に映った黒い影を懸命に振り払った。

「私だ！ 愛実、私だ。目を覚ませっ！」

それは藤臣の声だった。

「こんなところで、うたた寝する奴があるか。ひよつとして、飯も食わずに待っていたのか？ 遅くなると言っただろう」

「美馬……さん。美馬さんっ！」

愛実^{あいじ}は思わず、藤臣の胸に縋り付いてしまふ。直後、彼女の鼻腔を甘ったるい匂^{くすぐ}いが擦った。

漂ってくるのは母親が使っていた香水と同じ ジバンシーの？ オルガンザ？。母は「官能的な香りなのよ。あなたにはまだ早いわね」と笑っていた。

「信一郎のことを思い出したか？ 心配しなくていい。この部屋に入って来れるのは私だけだ。瀬崎は私たちがここに居ることを知っ

てるが、入るなと言ってある。他は、誰も知らない」

藤臣の笑顔は変わらない。

あの事件以降、少しでも愛実の気分が晴れるように、と心を砕いてくれる。だが、こうして抱きついて、彼女の体には決して触れない。それどころか、彼の全身に緊張が走るのだ。彼女の方から離れて行くのをジッと待っている。

愛実は一悲しくなり、体を引いてソファの上に座り直した。

「ごめんなさい。つい……怖くて……わたし」

「気にしないでいい」

藤臣はそう言いながら、愛実と三十センチほど空けて座った。

何気ない仕草でワイシャツの第一ボタンを外し、ネクタイを緩める。シャツの隙間から鎖骨が見えて、藤臣に男性を感じ、愛実は一慌てて目を伏せるのだった。

くくくくくくくくくく

ボートネックのAラインワンピースは、愛実が俯くと藤臣にとつて拷問であった。高い位置から見下ろす為、どうしても真っ白い項^{うなじ}が目に入ってしまう。

彼はわざとらしく視線を逸らし、腕時計に目をやった。九時を少し回っている。美馬邸からホテルまで車で約三十分、帰宅ラッシュに巻き込まれたら一時間か。それが、家を出て二時間余りが過ぎていた。寄り道の理由は、言わずもがなであろう。

藤臣は愛実と一定の距離を取ったまま声を掛けた。

「じゃあ、改めて……ただいま。夕食はまだかい？」

愛実は恥ずかしそうに彼を見上げ、

「あ、お帰りなさいませ。……はい。もう、九時を回ってたんですね。美馬さんは夕食はお済みですよ。」

「いや、まだだ。ルームサービスで何か取ろうか」

藤臣は立ち上がり、電話の前に行く。電話機の横には館内ガイドが置かれ、その下にルームサービスのメニューがあった。それを手に取り、愛実に見せようとしたが、

「あ、わたしはハヤシライスで」

その言葉に藤臣は小さくため息をつく。

「……ルームサービスと言えばカレーライスかハヤシライスだが。君の好物か？ それとも料金を気にしているのか？」

メニューのトップにあるその二品のみ、千円台の金額が書かれてあった。

「い、いえ、後は豪華なお食事ばかりで……量が多くて」

藤臣が軽く「残せばいい」と答えると、愛実は向きになって反論した。

「そんな勿体ない！ 学校も仕事にも行かず、家事も放り出してこんな所でのんびりしてるのに」

「その原因を作ったのは私の従兄だ。君は遠慮せず、傷が良くなるまでここに居ていいんだ」

愛実は申し訳なさそうに身を縮め、「はあ」と答えた。

「それから、言い忘れていたが。君の実家には、子供たちの面倒を見るべく家政婦を雇った。引越しに伴う各種手続きは瀬崎が全て完了した。三日ほど学校に行けなかったようだが、昨日からちゃんと近くの公立学校に通っている」

藤臣が家族の様子を話した途端、愛実の目が輝いた。

つくづく、この少女は家族が大事なのだと思います。藤臣

が仕事でいない昼間、隣の遊園地で遊べばいい、と用意したパスポートも使おうとしない。

「慎也は一度も来た事がないんです。傷が良くなってから、一緒に連れて来てやつてもいいですか？」

それはそれとしてまた用意する、今は君が楽しめばいいと伝えても、「わたし一人では楽しめない」と言うのだ。

美味しそうにハヤシライスを食べる彼女の口元を見つめつつ……。唇についたソースを舌先でペロリと舐め取ったとき、彼の背筋が痺れた。微量な電流に体を貫かれた気分だ。途端に息が上がり、スラックスの前が窮屈に感じ始める。

藤臣は目を閉じ、口元を押さえ、何度か息を吐く。

「あの……わたしが一緒だと寛げませんよね？ 部屋に戻って一人で食べても」

「違うんだ！ あ、いや、とにかくそうじゃない。仕事で色々考えることがあって、だから君のせいじゃないんだ」

（クソッ！ わざわざ久美子をホテルに呼び出し、抱いて来たのに、どうしてこうなるんだ！）

これまでは週に一度、多くて二度……仕事が忙しい時期は数ヶ月セックスなしでも平気だった。それが、この愛実にはだけは出逢った夜から下半身が顕著に反応する。

愛実は確実に藤臣のほうを見ている。最初の計画通り、「君と本当の夫婦になりたい」そう言っただけ？ 愛？ という言葉を使えば、今夜にも彼女は藤臣のものになるだろう。だが……。

彼は自分の興味が三ヶ月も持たないと判っていた。財産を相続するまで、義務的に抱き続けるくらいは出来るだろう。別れる時、藤

臣の愛が偽りと聞いても、愛実には傷つかず去って行くだろうか。彼の脳裏に、泣きじゃくる愛実の姿が浮かび、胸が締め付けられた。

「お仕事、そんなに大変なんですか？」

愛実は心配そうに尋ねる。

純粹な気遣いであろう。判っていても、彼の口から出た言葉は、
「そんな顔をしなくても、君がイエスと言ってくれたら、約束しただけの金を支払う用意はある」

「そういつつもりじゃ……」

「ああ……そうだな。済まない。色々あつてね……。気分転換に、今から泳いで来ようと思うんだが。君も行かないか？」

言った後で、藤臣は墓穴を掘ったことに気付き青くなる。

だが、愛実の返事は「まだ、背中への傷が酷いので」彼女は小さな声で、せつかく誘って下さったのにごめんなさい、と付け足した。

その傷は藤臣の目にも焼き付いている。完全に消えるには数ヶ月の時間が必要だ、と医者は言った。

「悪い……まだ、痛むか？」

「シャワーの時くらいです。手首の痣は薄くなったんで、やっと包帯が取れました。手首に包帯を巻いてると、自殺未遂だと思われるしまつて」

愛実の小首を傾げて可愛らしく微笑む。だが、藤臣には笑うところではない。信一郎は全治三ヶ月と聞いたが、やはり別の場所を踏み潰してやればよかったと思う。

「君が行かないならプールは止めだ。こんな時間だから遠出は出来ないが。どこか行きたい所があるなら、私でよければお供しよう」

藤臣の言葉に愛実が口にした場所は……。

第26話 誓約

毎夜、二人はただ遊んでいたわけではない。藤臣は最初の頃のよ
うな脅迫めいた言葉は使わず、根気強く愛実を説得し続けていた。

今回のことで、しばらくは信一郎も表立つては動けない。だ
が君の決断が長引けば、ほとぼりが冷めた頃にまた何か企むだろう。
卑怯なだけなら宏志も何をするか判らない。和威はそんな愚か者
ではないが、父がいない、判らないことを恥じていて、肝心なとき
に前に出ようとしないんだ。

私なら君を守る。相応の金を動かせるポジションにいる。

祖父は遺言で私を後継者に指名し、ほとんどの遺産を残してくれ
た。一点に集中させることで美馬の牙城を守ろうとしたんだ。昨今
の経済危機は、高校生の君の耳にも入っているだろう？ そうしな
ければ守れない。だが、祖母は血の繋がりに拘り、金も力も分散さ
せるつもりなんだ。

本丸が傾けば、いったい何千人の社員とその家族が路頭に迷うこ
とになるか……。

考えてみてくれ。子供が生まれたばかりの社員もいる、家のロー
ンや教育費に金の掛かる社員も、親の介護にどれほどの金と人手が
掛かるか、君もよく知っているはずだ。

祖母が君を巻き込んでしまったことは、本当に申し訳ないと思っ
ている。だが、冷静に考えて欲しい。君が高校を辞めて働くだけで
今の状況が打開出来るか？ 君は弟たちに、中学を卒業してすぐ、
働かせるつもりなのか？

四日間、藤臣は愛実に対して必要以上に近づいては来ない。

逆に、愛実のほうで藤臣の傍に行きたくなくなってしまふ。優しさを示されるたびに、彼の笑顔を見るたびに、愛実は想像してしまうのだ。

『本当に君のことが好きになった。期限なしで私の妻になってくれないか？』

そんな風に言われたら、イエス以外に返事が見つからない。

でも藤臣は、愛実が結婚を承諾するのはお金の為だと思うだろう。そう思われたくなくて、藤臣のお金を自分の為に使うのは嫌だった。

「ここは……チャペルか？」

愛実は行きたい所を聞かれ、ホテル内のチャペルに藤臣を連れて来た。

天井部分には澄み渡る青空が描かれ、バージンロードは下からマリンブルーにライトアップされている。左右に木製のベンチが並び、正面の祭壇には十字架があった。

「今日の昼間、結婚式があつたんです。少し見せていただいて……とつても素敵でした」

純白のドレスを着て、床に引く長いレースのベールを纏った美しい花嫁。愛実の年齢で憧れないと言えは嘘だろう。

「隣の遊園地でも結婚式が出来るそうなんですよ。ご存知でした？」
「いや……だが、私たちが結婚するなら丁国ホテルだろうな。個人的には……君の望むところで挙げさせてやりたいんだが」

藤臣は申し訳なさそうに口を開いた。まだ、ちゃんとした返事はない。だからこそ、愛実の様子が気になるようだ。

バージンロードは歩かず、彼女は一番後ろのベンチに腰を下ろし

た。

「もしわたしが、遊園地で式を挙げてくれたら結婚します、って言うたらどうしますか？」

愛実が見上げた時、彼は面喰らったような顔をしていた。

だが、わずか三秒後、藤臣の顔が綻んだ。

「OKだ！ どこでも君の望む場所で結婚式を挙げる」

言うなり、彼は愛実の隣に座った。

「立场上T国ホテルは外せないが、どうせ形だけだ。遊園地に君の弟妹を招いて挙げればいい。もちろん、友人でも親戚でも」

「どうして？ どうして、そんなに優しくして下さるんですか？」

そんな……わたしなんか」

愛実は驚き過ぎて言葉が上手く出て来ない。ただ、食い入るように彼を見つめた。

「それは君が……」

藤臣も同様に愛実を見つめていた。

チャペルの中は静謐せいひつな気配に包まれている。ここは、偽りではなく真実を、そして真摯に愛を請う姿が最も相応しい場所。愛実は言葉に出来ない想いを、懸命に瞳で伝えた。

「君が……必死で家族を守っているからだ。私は母と共に父から捨てられた。その母も死に、父親違いの妹も死んだ。助けてくれる人間は、私には一人もいなかったからね。だから、君を助けたい」

愛実はありがたいと思いつながら、落胆を禁じ得ない。

「それ、だけですか？」

彼女のこの質問を、藤臣は別の意味に受け取ったようだ。

「そんなに私が心配かい？ ここ数日、私たちは同じ部屋で寝起き

しているが、君に身の危険を感じさせたことがあったかな？」

「いえ……それは……」

愛実 は心を決めると顔を上げた。

「わたし、あなたと結婚します」

十代の女子高生である自分は、彼にとって子供に過ぎない。でも、あの写真の女性のように美しくなれば、藤臣も振り向いてくれるかも知れない。結婚を本物にしたいと思ってくれるかも……。この人の家族になれるように、藤臣に尽くそう。もし、愛してもらえなくて別れる日が来たら、必要以上のお金は全て返して出て行こう。

愛実 は複雑な想いを胸に、藤臣の全てを受け入れる覚悟をしたのだった。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

愛実 の？イエス？に、藤臣は得体の知れない緊張感を覚えた。

結婚が現実のものとなる。一生、結婚はしなないと思っていた彼にとつて、それは恐怖であるはずだった。なのに、愛実を妻にすると思っただけで、彼の心は浮き立つようだ。

「ありがとう。君のお気に召さないかも知れないが……この指輪をはめて貰えるかな？」

それはティファニーのオーバルダイヤモンドだ。三カラットは下らない。ラブホテルで一度は愛実の指にはめられた指輪だった。

「美馬さん、あの、これは……」

「内側を見てくれ」

藤臣は楽しそうな声で愛実に告げる。彼女は恐々^{こわくわ}指輪を掴むと、プラチナ部分の内側を覗き込んだ。

そこには『Fujiomito Itumi』の文字が刻まれている。

「これは、いつの間に彫られたんですか？」

「最初に渡した時にはもう刻んであったんだ。君は気付かなかったが」

その瞬間、愛実は大好きなガトーショコラをお土産にもらった時と同じ顔をした。

何でも買ってやると言い、ショッピング施設を連れ歩いて、愛実は何一つ欲しがらない。これが久美子であつたら、両手に持ち切れないほどの買い物をするはずだ。いや、藤臣の知っている女は全てがそうだった。

金を与えれば女は言いなりになる。高額になればなるほど、彼女らは藤臣の奴隷同然だ。だが愛実の笑顔は金では買えない。

？大好き？という言葉覚えておいて、買って帰ったわずか数千円のケーキで手に入る至宝。

「何だか、本物の婚約みたい。でも、わたしの名前なんて彫ってしまつたら、他の人に渡せないんじゃない」

屈託ない笑顔で、藤臣の心を射抜いた。そして……次の瞬間には、奈落の底に突き落とす。

愛実の言葉には裏も表もないのだ。ひたすら家族を思う、無垢で純粋な魂の持ち主。自分のような穢れた男が、欲望を満たす為に触れることなど赦されない。

彼女の心も身体も、必ず守り抜いてみせる！

祭壇に飾られた十字架に、誓いを立てる藤臣であった。

第27話 情事

赤いビロードの指輪ケースを取り出し、豪華なエンゲージリングを左手の薬指にはめてみる。愛実小さくため息をつき、すぐにケースに戻した。

愛実が結婚を承諾して、昨夜の藤臣は本当に嬉しそうだった。今朝も上機嫌で仕事に向かったくらいだ。

だが時折、苦しそうな表情をしている。きっと、愛実のような子供と結婚する羽目になったことが辛いだろう。

それを考え、今度は深くため息をつく愛実だった。

まさか藤臣の苦悩が、愛実に対する性的欲求など彼女に判るはずもなく……。

午前中に自習を終えた愛実は、昼食の後、することもなく暇を持て余していた。館内をブラブラしてもいいが、一人は退屈である。やはり部屋で藤臣の帰りを待とう、愛実がそう思った時だった。

いきなり鳴り始めた電話に、彼女はビクツとした。

藤臣ではない。彼なら携帯に掛けてくるだろう。そこまで考えて、愛実はフロントかも知れない、と思った。ホテル内で何かあり、その連絡事項なら……。愛実は少し迷って、受話器を上げた。

『はい』

『……』

愛実の返事が聞こえなかったのだろうか？ 相手は無言だ。

『あの……フロントですか？』

そう付け足した愛実の耳に、信じられない声が響いた。

『……驚いた。まさか、本当に君がそこにいたなんて』
それは、美馬和威の声であった。

和威は、すぐ下の個室から掛けている。一階のカフェレストランまで下りて来て欲しい。……そう言うと、愛実の返事を聞かず電話は切ったのだった。

瀬崎以外は知らないと言っていた。どうして和威がこのホテルまで来たのか、愛実には訳が判らない。それに、和威の声はどこか怒ったような様子で、彼女の胸をざわめかせる。

愛実は迷いながらも藤臣に連絡を取ろうとするが……。彼の携帯電話に出たのは、女性だった。

『あの……美馬、藤臣さんをお願いできますか？』

携帯電話の場合、普通は本人が出るものだ。女が出たら訝いぶかって当然だろう。だが、こういった経験のない愛実には、何が普通なのかよく判らない。

『……どちら様でしょう？』

電話の向こうの女性は明らかに不機嫌そうな声を出す。

『あ、すみません。えっと、西園寺愛実と言います。美馬さんに用があつて……』

愛実是谁も居ない空間に頭を下げながら、低姿勢で話しかけた。

『彼は……今は出られないわ。忙しいの 判るでしょう？』

『はい。そうですね。どうもすみませんでした。あの、電話があったことだけ』

それだけでも伝えておいて貰おうと付け足すが、その前にプツリと切れた。携帯電話を抱え、途方に暮れる愛実だった。

くくくくくくくく

満を持して復讐劇はスタートした。

愛実の了解で、弥生は墓穴を掘ったも同然だ。

美馬一志は息子欲しさに、二回りも年下の祇園の芸妓を愛人にした。だが藤臣が産まれた直後、婿養子の一志は弥生に逆らい切れず、認知もせずに愛人と息子を捨てたのだ。しかも弥生は、夫の子供を産んだ藤臣の母を執拗に攻撃した。母は祇園にもいられなくなり、水商売を転々とした挙げ句……。

日陰の身を承知で愛人となった母にも責任はあるだろう。だが、半分の年齢の女に子供を産ませ、父親の責任を果たすどころか、住む場所も仕事すら奪った連中である。どんな正当な理由があつたとしても、子供は間違いなく犠牲者だ。

母親が死んだ時にも引き取ろうとはせず……。施設で過ごした六年間は、傷ついた少年をさらに追い詰め、彼の心を見事なまでに打ち砕いた。

藤臣はシャワーのコックを捻る。お湯は途切れ、ポタポタとタイルに雫が落ちた。

もう少して、全部奴から奪ってやれたんだ。それをさっさと死にやがって。目の前で奪い取り、会社も美馬の邸も、跡形もなくぶち壊してやるつもりだったものを。

まあいい。全てが手に入れば、予定通り、バラバラにして売り払ってやるう。美馬の名前すら残らないほど……。奴が死ぬまで否定した息子の手腕を、じっくり見るがいいさ。文句があるなら、いず

れ地獄で顔を合わせた時に聞いてやる。

頭を振り、髪から水滴を払うと、藤臣はシャワールームから出た。

「どうした？」

目に入ったのは本社の秘書、奥村由佳^{おくむらゆか}である。クローゼットの前に立ち、藤臣のスーツを掛けるところだった。この時間に相応しくなく、ホテルの白いバスローブ姿だ。

「あ、いえ、シワになるといけないと思ひまして」

由佳は従順そうな目で彼を見上げ、静かに微笑むとそんな言葉を返した。

中流家庭で育ち、世間一般で有名私立と言われる大学を卒業し、美馬の本社に入社した女性だ。年齢は藤臣より二つほど若い。美馬本社の秘書は総合職採用で、秘書室の男女比は半々。他社に比べれば、男性秘書の比率が高いと言えよう。そこに配属される女性はトップクラスの成績で入社したと言われている。

事実、由佳はあらゆる意味で優秀な秘書だった。パートナーが必要な席では隣に座り、申し分ない受け答えをしてくれる。藤臣が望む時に体を差し出し、自分からは求めず、結婚も迫らない。

この時、藤臣は千代田区内のホテルにいた。彼が年間を通じて契約し、公私ともに利用しているホテルNのスイートルームだ。昨夜は久美子を呼び出し、慌しく抱いたベッドが目の前にある。

「それほど長くいるつもりはない」

シャワーを浴びるのは、いつも女を抱いた後だ。

だが今日は、微かに残る愛実の清潔な香りが、邪な欲望に溺れる藤臣の良心を咎めた。彼は無言で上着の内ポケットから携帯を取り出し、素早く着信履歴を確認した。

シャワー中に電話が掛かった形跡はない。

そのまま戻すと、

「由佳……来い」

藤臣は彼女の腕を掴み、ベッドに押し倒した。

第28話 激昂

『……はい。はい、やっぱりそうですか。判りました。どうもありがとうございます』

礼を言い、和威は携帯電話を切った。

これまで、身内の調査などしたこともなかった。だが、昨夜の藤臣の様子がどうしても気になり、彼は懇意にしている大川暁を頼ったのである。

暁は、午前中には藤臣の宿泊先をメールで報告してくれた。しかも女性と一緒に滞在中と書かれ、メールには画像が添付されていたのだ。

その画像に和威は愕然とした。写っていたのは、間違いなく西園寺愛実本人だったのである。

二人は堂々とホテルの内外を歩き、食事やショッピングを楽しんでいる様子だ。それはどう見ても監禁されている少女の表情には思えない。仲の良い恋人同士の姿に、和威は眩暈を覚えた。

（まさか、藤臣さんが未成年の少女を騙すなんて……）

彼はある意味、藤臣以上にセックスに嫌悪感を抱いている。

母親に捨てられたことを、ずっと自分のせいだと思ってきたからだ。せめて祖母にだけは捨てられまいと、懸命に自分を律してきた。そんな彼が性に目覚めた頃、出生の秘密を知らされたのである。

教えたのは、信一郎や彼の妹・朋美^{ともみ}であった。

落ち込む和威に祖母の弥生は、

「千穂子はわたくしにとって恥です。ふしだらな母親のようになら

ぬよう、そして、どここの馬の骨が判らぬ男の血が目覚めぬよう。和威さん、あなたは自分自身に厳しく生きなければなりません」

もし和威が墮落した時は、美馬家から出て行ってもらおう。弥生はキツパリと言い捨てた。

彼は祖母の言いつけを守り続けた。女性との付き合いも経験しないまま、この年齢まで来てしまったのだ。宏志が揶揄したような理由ではないが、セックスの経験がないのも事実である。藤臣に言った「女性をセックスの対象だけとは思いたくない」という言葉も、自分の血を分けた子供を持つことが怖いのも本当だった。

愛実とは和威が出会ったこともない少女だ。

可憐な一輪の花のような少女を、得体の知れない自分のような男が穢すくらいなら……。同じ私生児とはいえ、藤臣とは能力も自信も違う。信一郎や宏志には任せたくないが、藤臣になら、そう思っていた。

だが、今の電話ではつきりしたのだ。

藤臣はこんな真つ昼間から、本社の秘書をホテルに連れ込んでいるという。

（許せない！ 結婚を餌に愛実さんを弄ぶなんて。これじゃ、信一郎さんと変わらないじゃないか！）

藤臣は信頼に値する男ではなかった。

それならいつそ自分が 和威の胸に芽生えた初恋は、彼の自尊心に火をつける。そして炎は、従兄への対抗心に燃え移った。

く　＊　く　＊　く　＊　く

細長い回廊のようなレストランであった。

大きな窓に沿ってテーブル席がずらりと並ぶ。窓には白いレースのカーテンが掛かっている。全席から噴水のある庭園が見え、フロア全体に春の陽射しが燦々と降り注いでいた。

レストランの入り口に立った瞬間、愛実は藤臣のことを思い出す。二日前の夜、藤臣に連れて来て貰った。その時はディナーだったので外は真っ暗だ。店内の照明は食事に差し障りない程度に落とされ、テーブルの中央に置かれたキャンドルがロマンティックに揺らめいていた。

（大事な仕事だったのかしら？ 電話なんかして……子供はこれだからって思われた？）

数分待ったが折り返しの電話もなかった。愛実は藤臣を怒らせたのではないかと不安になる。まさか、昨夜プロポーズを了承した男性が、他の女性と親密に過ごしているとは思えない。

だが、和威にはどう言えいいのだろう。

結婚を承諾したことすら、伝えて良いか判らないのだ。藤臣を選ぶと決めた以上、彼のマイナスになることはしたくない。愛実は何も言わないことを決めて、和威に会うことにした。

今日の愛実には薄っすらと化粧をしている。

傷を隠すため、ファンデーションと淡い色の口紅を塗る程度だ。

しかし、ほんの何日か前に比べたら、愛実の印象はガラリと変わっていた。しかも普段着とは違う、藤臣の買い与えた上品なワンピースに着替えている。

和威は彼女の顔を見るなり、目を見開き　直後、怒りに見える感情を露わにした。

「あの……お待たせ致しました」

穏やかな印象を持つ和威から、険悪な波動が伝わる。愛実は少し怖くなり、なるべく彼から遠くの椅子に手を掛けた。

「やあ。驚いたよ、藤臣さんが女性とスイートに泊まっているというから……まさか、君だなんて」

和威は席を立ち、「どうぞ」と着席を薦めた。

「信一郎さんが入院していることは、藤臣さんから聞いたかな？」

愛実は椅子に腰掛け、コックリと頷く。

「重傷らしいんだが、信一郎さんの怪我と君は何か関係してるの？」
彼女が黙っていると、和威は大きく息を吐いた。

「そうか……藤臣さんから口止めされているわけか」

何も答えられず、愛実は俯きテーブルに置かれた水のグラスをジッと見つめる。

「君はまだ高校生だろう？　今、自分が何をしているのか、判つて
るのかい？」

和威の口調は俄に愛実を責め立てた。だが、彼女には言葉の意味が判らず、

「何をつて……わたしが何か？」

「彼と一つの部屋で寝泊りしているだろう！？　君らがどういう関係か、誰だつて判る。高校生でありながら、学校を休んでまでこんな……。しかも、君に化粧なんて似合わない！」

和威は苛立たしげにコーヒークップに手をやり、空になっていることに気付いた。音を立ててカップを置くと、代わりに水を飲み干す。

（どうしよう……誤解して怒ってらっしやるんだわ。でも、信一郎

さんのことを言ってもいいの?)

愛実 は和威の言葉に頬を染め、顔を背けた。その仕草が一層誤解を招くとは思ってもせず……。和威は目を細めて、食い入るように愛実を見つめている。

「愛実さん、君は藤臣さんのことを愛しているのかも知れない。でも彼はそんな愛情に値する男じゃないんだ」

「いいえ！ そんなことはありません。美馬さんは……いえ、藤臣さんは」

愛実の否定を遮るように、和威はテーブルを叩き立ち上がった。

「君は彼に騙されてるんだ！ 藤臣さんは、君が生涯を託せるような人間じゃない。確かに、企業人・経営者としては立派だろう。でも男としては、誠実から真逆の位置にいる人だったんだ！」

和威の激昂ぶりに愛実 は目を見張った。

周囲のテーブルから好奇の視線が注がれ、和威は咳払いして慌てて座る。

「誠実から真逆なんて……この間は、幸せになって欲しいって」

二人のやり取りを知らない愛実 は、和威の変化に付いて行けない。藤臣に多くの女性がいることは、暁からも聞かされた。だが、それが事実かどうかは判らない。香港には間違いなく仕事で行っただけだ、と彼は言った。愛実 はその言葉を信じている。

何よりもこの五日間、藤臣は彼女に指一本触れようとはしない。

和威や周囲の人間がどう思おうと、それが真実なのだ。

「和威さんにどう言われても、藤臣さんはこれまで何度もわたしを助けて下さいました。わたしには誠実な方です」

おどおどした様子は消え、愛実 は凜として言い返した。

そんな十八歳の少女に押されつつも、和威とてこのまま引つ込む訳にはいかない。

「いいだろう！　じゃあ、僕と一緒に来てくれ」

「え？　あの、どこにですか？」

「藤臣さんの所に、だ。今どこにいるか、誰と何をしているのか、僕は知ってる。さあ、来るんだ！　君に真実を見せてやる！」

和威は声を上げ、再び立ち上がった。

第29話 愛人（前書き）

性的描写があります。R15でお願いします。

第29話 愛人

「ねえ……お願い、キスして……」

由佳はいつもセックスの最中にキスをねだる。

彼女の癖なのだろう。だが、藤臣は一度も応じたことはなかった。強引に奪われた十代半ばの頃はともかく、自ら唇を重ねたことなど一度もない。彼には由佳を……女を喜ばせるつもりなど全くないのだ。挿入に必要な潤いがあればそれでいい。後は自分の為に動いて、溜まったものを吐き出せばお終いだ。

（二日連続で女を抱くなんて、いったい何年ぶりだ？）

愛実の傍にいただけで、どうしようもなく身体が高ぶる。藤臣は、深夜に彼女の寝室をノックしそうな自分が怖かった。

欲望は手近な女でさっさと解消するに限る。

声を上げ、顔を歪ませる女を冷ややかに見下ろしつつ……。くだらない征服感が彼の空虚さを満たしてくれた。これまでは。

由佳の顔がふとした拍子で愛実に変わる。

その瞬間、冷水を浴びせられたように、女の中に押し込んだものが萎えそうになるのだ。藤臣は由佳をうつ伏せにして、背後から抽送を繰り返すが……。

「あ……せ、専務？ あ……」

唐突に由佳から体を引き離れた。

彼女は不思議そうな声を出す。それもそのはず、これまで一度も藤臣が満足する前に、女を解放したことなどないのだ。

「どうなさったんですか？ 私、何でも仰る通りに致しますから」
愛情と約束さえ求めなければ、標準以上に気前のいい男である。
由佳にすれば、機嫌を損ねて秘書室での立場に響くことが心配なの
だろう。

「いや……今日はもういい。一休みして、本社の仕事に戻ってくれ」
目的を達することなく、使用済みの避妊具をゴミ箱に投げ捨てる。
由佳の背後に回ったのが失敗だった。彼女の茶色に染めたセミロ
ングのボブが、愛実の黒髪に顔を埋める妄想を打ち砕いたのだ。
実を言えば、昨夜も今日と大差ない。
無駄に時間を掛けただけで、結局最後までは……。

（何なんだ！ 俺の身体はどうなったんだ！）

藤臣は欲求不満を解消することなく、バスルームに戻る羽目にな
ったのである。

くくくくくくくくくく

そこは皇居にほど近い一流ホテルであった。
和威はフロントに「美馬です」と声を掛け、当然のように奥に進
んで行く。本館の十五階までエレベーターで上がり、高級感漂うフ
ロアで二人は降りた。十代の少女にはいささか不似合いで、愛実は
落ち着きなく周囲を見回す。

「大丈夫だから。こっちだよ、おいで」

少し時間が経ったことで、和威も愛実に対する気遣いを取り戻したらしい。苛立つ仕草も、腕を引くような真似もせず、紳士的にエスコートしてくれた。

そして重厚な扉の前に立ち、呼び出し用のインターホンを押したのだ。

一分も待っただろうか、インターホンから『はい。どちら様でしょうか?』と女性の声が聞こえた。

「美馬和威です。藤臣さんに緊急の用があつて来ました。入れて下さい」

それから十秒ほどでノブの辺りからカチリと音がした。扉が開き、姿を見せたのは二十代の女性。

肩までの髪を片方だけ耳に掛け、青磁色のスーツを着ていた。彼女の少し吊り上がった目尻と薄い唇が、グレーに近い青のスーツと相まって愛実は冷たい印象を受ける。

「まあ、お久しぶりですわね、和威さん。緊急なんて、大奥様の御用でしょうか?」

眼鏡を押し上げながら笑顔を見せるが……。

彼女の声を直接聞いた途端、愛実はドキッとした。

(ひょっとして、美馬さんの携帯電話に出た人?)

「どいてくれよ、奥村さん。話は藤臣さんにする。……さあ、入って」

愛実は戸惑いながらも和威に急かされ室内に足を踏み入れた。

「お待ちになって下さい、和威さん! 美馬専務に叱られます。私のご案内致しますから」

背後で先ほどの女性　由佳が叫ぶ。だが、和威は気にも留めていない。

「藤臣さん！　居るんだろう、早く出て来てくれ！」

和威は大声で藤臣の名を呼びつつ、一つ目のドアを開ける。

そこは広めのリビングだった。愛実たちが泊まっているホテルのアンティーク調の内装とは違い、シンプルなインテリアで纏めてある。実用的な大きなソファとテーブルが置かれ、隅のデスクにはノートパソコンが開いてあった。

「和威さん。こんなことなさって、失礼じゃありませんかっ!？」
「うるさいな！　君は引っ込んでいてくれ！」

引き止めようとする由佳を怒鳴りつけ、和威がリビングの奥にあるドアを開けようとした時　。

「和威!？　一体何を騒いでいるんだ！」

一寸早くドアのノブが回り、姿を見せたのは藤臣だった。

彼の姿は…… たった今、シャワーから出たばかりといった風情だ。上半身は裸で、腰にはバスタオルを巻いている。髪は濡れて…… 明らかに情事の後を思わせた。

愛実が藤臣の姿に、驚きと羞恥心で目を逸らす。

「何の真似だ、和威。なぜ、愛実をこんな場所に連れて来た」

それは怒りと動揺が^な絢い交ぜになった、彼らしくない声だった。よほど見られなくなかったのだろう。来なければ良かった、と愛

実は思った。何も知らなければ、未来に夢だけ見ていられたのだ。でも知ってしまったば……。

「これで判っただろう、愛実さん。彼女は藤臣さんの秘書で愛人なんだ。君とホテルで過ごしながら、こうやって秘書とも……。彼は君が愛するのに相応しい男じゃない。目を覚ますんだ！」

「そう、言われても、わたしには」

混乱した頭で必死に言葉を探すが、何をどう判断していいのかも判らない。愛実はこの場所から走って逃げ出したい気分だ。

「和威さん。こちらは美馬専務のお部屋です。こんな不法侵入のよきなことをなさって。いくら、お身内でも度が過ぎますわ」

由佳は警備員を呼びかねない口調で和威を責める。

だが、それに受け答える和威も辛辣だ。

「君は黙っててくれ。上司と、それも勤務中に関係を持つような女性と、対等に話す気にはなれない」

和威が愛実に向ける目と、由佳に向ける視線はまるで温度が違った。

一方、由佳も肩書きのない和威を頭から見下した態度である。

「何を仰いますの？ 私は専務秘書です。オフィス代わりのこちらに、同行していても不自然ではないと思いますけど。愛人だなんてセクハラで訴えてもよろしいのよ」

「ここをオフィスや接待に使うときは、第一秘書の瀬崎さんを同行すると聞いている。女性を連れ込むのは……。奥の寝室を使う時だけだって、藤臣さん本人から聞いたことだ！ そうでしたよね？」

和威は藤臣に話を振るが、彼は一言も返さない。腕を組み、目を閉じたままだ。

「そ、そういうことにお使いになるのかも知れませんかっ！ で

も、それが私だとお聞きになったの？ 何か証拠でもあるのかしら
っ」

由佳の反論に和威も口を引き結ぶ。

藤臣が答えなければ、和威としてもこれ以上責めようがないのだ。
由佳もそれが判っているのだろう。

「ところで、そちらのお嬢さんは何方かしら？ 部外者をこちらに
お通しするわけには行きませんのよ。お二人とも、すぐに出て行っ
て下さいな！」

由佳の刺す様な眼差しが愛実に向けられた。その激しさに「すみ
ません。すぐに失礼しますので」愛実は慌てて頭を下げるが。

「その必要はない。彼女は私の婚約者だ」

冷静さを取り戻した藤臣の声がリビングに響き渡った。

第30話 真理

五分も掛からなかったように思う。

藤臣は三人にリビングで待つようお願い、奥の部屋に引っ込み、すぐに戻って来た。白いシャツを着て朝と同じスラックスを穿いている。ベルトはちゃんと締めていたが、ネクタイは結ばず首に掛けただけだ。白蝶貝のカフスボタンを留めながら、藤臣は愛実の隣に腰掛けた。

「婚約なんて嘘だろう？ 第一、おばあ様が認めなければ正式なものとは言えない」

藤臣が戻るまでの間、和威は愛実に言い続けたが……。彼女は沈黙を貫いた。由佳もしばらくは微動だにせず、やがて藤臣とは反対側のドア 玄関に向かう方に消えた。由佳がお茶を手に現れたのは、藤臣がソファに座った後だった。

藤臣は軽く咳払いすると、

「昨夜、正式にプロポーズを承諾してくれた。彼女は婚約者の西園寺愛実さんだ。愛実 本社秘書室の奥村くんだ。君の知ってる瀬崎の下だと考えてくれていい」

最初の言葉を和威に向かって、続けて由佳に愛実を紹介した。最後に愛実彼女の名前を聞き、

「はじめまして、西園寺愛実です。あの……携帯に出られたのは奥村さんですね？ どうもすみませんでした。お仕事の邪魔をしてしまって」

愛実の言葉に、由佳より先に反応したのが藤臣だ。

「携帯？ 愛実、私に電話を掛けたのか？」

「はい。お話があつて……でも、お忙しい時に掛けてしまったみたいで」

彼は少し考えるような仕草をした後、チラッと由佳を見る。

「いや、こちらこそ悪かつたね。で、用件は……こういうことかい？」

何事もなかった態度で、藤臣は愛実に語りかける。愛実自身も何と言つていいのか判らず、ごく自然に笑みを浮かべ頷いた。

そんな二人の様子に怒りのやり場を失つたのが和威だ。

彼は信じられない、といった顔で愛実に噛み付く。

「愛実さん！ 君はさっきの格好を見ても平気なのか！？ それだけじゃない。彼が女性と一緒にだと知りながら、なぜ怒らないんだっ！」

和威の言うことも判らないではない。

多分、普通の婚約者であればさっきの半裸を見ただけで泣き出し
ているかも知れない。でも、愛実にはそんな資格はないのだ。藤臣
に助けられ、家族の生活すら彼の心一つに掛かっている。

信一郎や宏志とは結婚したくない。和威なら、愛実が望めば家族
のことも助けてくれるかも知れない。だが……。

藤臣のどんな姿を見ても、ただ切ないだけで嫌いになどなれない。
その都度、愛実は対象外なのだ、と思い知らされるだけだった。

「和威、そう興奮するな。秘書と一緒に何が問題なんだ？」

黙り込む愛実に代わつて、軽い口調で藤臣が言い訳を始める。
しかしそんな態度すら、潔癖な和威の癪に障つたようだ。

「これまでの生き方を改め、愛実さんに結婚を申し込む。そう
言つたはずだ。それを……まだ、こんな女と。少しは恥を知つたら
どうだ！」

「お前は道德の講義に来たのか？ どうあつても、真昼の情事と決

めつけてるが」

「その通りだろう？ 隣の寝室には、乱れたシートと使用済みのコンドームがあるんじゃないのか!？」

怒りに任せて和威は叫んだ。

愛実 は 唾 然 と し た が、その内容に頬が熱くなる。

「言葉遣いに気をつけなさい。彼女の前だ」

あくまで冷静な藤臣の注意に、今度は和威のほう が 赤 面 し て 愛 実 に 頭 を 下 げ た。

「すみません。変な言い方をしてしまつて」

愛実 は 即 座 に 「 い え。 気 に し な い で 下 さ い 」 と 言 葉 を 返 す。

その様子を立つたまま冷ややかに見つめていたのが由佳だった。
由佳は唐突に口を挟み、

「では、そちらのお嬢様を寝室にご案内してはどうでしょう？ ベッドが未使用で、ゴミ箱の中に使用済みの物が無ければ、ご納得いただけるのでは？」

彼女は極めて挑戦的で、強張った笑みを愛実に向けた。それは見られても平気だからではなく、まるで見せ付けて愛実を打ちのめしたいかのような艶笑だ。

愛実だけでなく、きっかけを作った和威も息を呑む。

「それは未婚女性が人前で口にすべきことじゃない。奥村くん、君は秘書としての慎みを忘れたようだな」

この中で、一番窮地にあるはずの藤臣が、最も攻撃的に由佳を睨んでいた。

そして、

「愛実、君が決めればいい。誰の言葉を信じるか……その上で、寝室を確認したいと言うなら、喜んで案内しよう」

藤臣は、何も後ろ暗いことはない、とばかりに言い切る。

幾ら恋愛経験のない愛実でも、由佳の表情から寢室の状態くらいは想像がつく。だが藤臣は、子供には判らないと思っっているのか、或いは、知られても大したことではないのだろう。

万が一、愛実が不満を口にすれば、最初に出逢った時の彼女の行為を突きつければいいのだから。

「美馬さんは、こちらでお仕事をされてたんですね？」

「ああ、そうだ。シャワーを浴びたのでさっきはあんな格好だった
が……それだけだ」

和威は口の中で「白々しい」と吐き捨てるように言っている。

だが、愛実は違った。

「判りました。私は美馬さんを信じます」

愛実には、彼の自由を縛るロープはない。

愛されて結婚を望まれた訳ではないのだから。愛実は心の片隅で芽生えた嫉妬に気付かないふりをして、静かに微笑み返したのだ
た。

くくくくくくくくくく

藤臣が女性との関係に冷酷なのは、実の父である一志の影響だけではない。

彼が七歳の頃、母は横浜のスナックでバーテンをしていた年下の男と結婚した。借金をしては藤臣の母に押し付け、酷い暮らしを余儀なくされた。子供心にも「なぜあんな男と」^{おかし}と思ったものだ。今となれば、入籍から半年後に妹の忍が誕生したので理由は明白だろ

う。

義理の父は藤臣の前でも構わず、母にセックスを強要していた。無論、当時の彼には判るはずもない。だが、辛そうな母を見るたび、自分が生まれて来たせいだと思い続けていた。

それから二年も経たず、立て続けに母と妹が亡くなり……。

藤臣が初めて女を知ったのは中学に上がった十二歳の時だ。

相手は彼より二十も年上の施設の女性職員だった。標準より体格が良く、早熟だった彼に女性職員は性的虐待を繰り返した。逆らえば食事を抜かれ、風呂にさえ入れて貰えない。義務教育を終了し、施設から出られる日を彼は待ち侘びた。

その直前、藤臣に美馬家との養子縁組が舞い込んだ。

彼は母親から美馬に対する恨み言を聞いて育った。だが、早く逃げ出したい一心で、藤臣は一志の申し出を受け入れたのだった。

そんな彼を女性職員は罠に嵌めたのである。

養子縁組が成立した直後、彼女は「藤臣にレイプされ妊娠した」

と言い、美馬家に慰謝料を要求したのだった。

一志から、関係は事実かと問われたら……否定出来るはずがない。三年近くに及ぶ自堕落なセックスは、十五歳の少年を貶めるに充分だった。自制心など培う土壤もなく、求められるまま快楽に耽る日々を過ごした。

だが、レイプは事実じゃない。

善良で品行方正な三十代の女性職員と、生意気な孤児の言い分だ。藤臣の言葉は取り上げてすら貰えず。美馬家の人間は一斉に彼の不行状を罵り、世界中に味方は独りもいなかった。

信じます、と愛実は言った。

もし十五年前、たった一人でも信じてくれる人間がいたなら。
レイプなどしてない、中学生の自分を襲ったのは彼女だ、と……
その言葉を信じてくれる誰かがいたら、人生は違ったものになって
いただろう。

同時に、平然と嘘を吐く自分の姿が、あの女性職員と重なり
藤臣は唾棄すべき自らを知る。

第30話 真理（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

設定はあくまでフィクションです。

施設の職員を貶める意図はありませんのでご了承下さい。

「く愛人」のほうは愛実とのセックスが彼を変えましたが、「く花嫁」は無償の愛が彼を変えます。

自制心にいささか欠陥のある美馬藤臣ですが…（^^;）
どうか見捨てずにお付き合い下さいませ。

第31話 微笑

「そうか……判った。……ありがとう」

これまでと何かが違う藤臣の笑顔だった。

優しく、暖かな、それでいて何処か寂しそうな眼差しに、愛実は目が離せなくなる。

彼は和威に向き直ると、

「これで判っただろう。和威、これからは私の婚約者と二人きりで会うのはやめてくれ」

「まだ……正式に婚約したわけじゃない。おばあ様が……」

「弥生様は関係ない。言ったはずだ。お前の目的が愛実でなく財産なら、相当額を私が支払おう」

「そうじゃない！ 僕は」

ここに愛実がいて、全て承知の上で彼女自身が選んだことであつた。これ以上和威が口を挟めば、それこそ金目当てに見えるだろう。

口を噤む従弟を尻目に、藤臣はシャツの第一ボタンを留める。すると、彼の傍にスツと由佳が歩み寄り、床に膝をつくと、あろうことかネクタイに手を掛けたのだ。

藤臣の首に掛かったネクタイは、今朝、愛実が結んだものであつた。「結婚後は毎朝頼む」そんな風に言われ、震える指で一生懸命整えたのを覚えている。それは由佳の手によって外され、彼女はきつと、愛実より上手に結ぶのだろう。

結婚してもずっと、綺麗に結び直されたネクタイを見なきゃならない。それは恋する愛実の胸に、拷問のように感じた。

（やっぱり、来なければ良かった。わたし、こんな所で何をしてるのかしら……）

手慣れた様子でネクタイに触れる由佳の手首を、藤臣が押さえた。
「君はいい。愛実、結んでくれないか？」

そう言うと、藤臣は体を愛実に向ける。

由佳は無理やり笑顔を作りながら、「専務、今は勤務中ですので、私がお世話させて頂き」

「いいと言ってるんだ。これからは勤務中でも、君の世話になることはないだろう。ここでの君の仕事は終わった。本社に戻りたまえ」

これ以上はない拒絶に、由佳は言葉を失った。

「愛実、今朝教えただろう？」

「あの……でも、時間が掛かるし。まだ、綺麗には結べないし」

「私が手を貸そう」

藤臣は愛実の手を取り、強引にネクタイを掴ませた。仕方なく顔を上げると、由佳がもの凄い目でこちらを睨んでいる。一瞬だけ視線が絡み、直後、彼女はフィツと背を向けた。

愛実の高校はブレザーにネクタイ着用の制服、結び方はもちろん覚えている。だが他人の……それも男性の首に結ぶのは、恥ずかしさもあってもたついてしまう。しかも時折、藤臣の指が愛実の指と重なり、それを由佳や和威が見ているのだ。

愛実は手の平にびつしりと汗を掻いていた。

その時、フツと頭の中によぎった。朝、婚約者の結んだネクタイを、昼間、愛人に解かせ、それをまた婚約者に結ばせようとしている。

（わたしが本当の婚約者なら、このまま首を締めちゃうかも……）

そう思うと可笑しくて、愛実は一瞬、張り詰めた糸がぷつりと切れたように、クスクス笑い始めてしまった。

「何が楽しいんだい？」

よく判らないまま、藤臣も緊張が解けたような笑顔になる。愛実が笑うので、といった感じだ。

「だって……このまま締めちやったりして」

「浮気の罰に？」

「浮気したんですか？」

「……いや……してないよ。もちろん」

慌てて否定する藤臣の表情がひどく幼く見え、愛実はもう一度ニッコリと微笑んだ。

愛実のことは自分がホテルまで送ると言う藤臣に、本社から呼び出しの電話が掛かる。

「すまないが、やはり和威に送って貰ってくれ」

彼は申し訳なさそうに口にした。

「あの、タクシーなら一人でも平気ですけど……」

「駄目だ。何処に危険があるか判らない。この和威は、女性には誠実な男だ。君の嫌がることはしない、と信用している。和威、

彼女を送り届けたら本社に来てくれ。話がある」

ここまで言われては和威の返事は一つであろう。

「……判りました」

愛実が来た時と同様、和威に連れられ都心のホテル後にしたのだ。つた。

くくくくくくくくくく

「ご婚約、おめでとうございます。予め教えて頂ければ、もっと適切な対応が出来たのですが……」

本社に戻る車中で、由佳は皮肉めいた言葉を口にした。

さすがの藤臣も勤務中の移動にはハイヤーを使う。二人並んで後部座席に座るが、密談には適さない。運転手には丸聞こえなので迂闊なことは言えないのだ。

「今日、彼女が訪ねて来る予定はなかった。この次はもう少し、礼儀正しく応対してくれ」

取引先の希望で、急遽会議に同席することになった。藤臣はその資料に目を通しながら、どうでも良さそうな口調で返す。

そんな男の態度に、女の嫉妬が秘書の領分を超えたようだ。

「随分お若いお嬢様に見えましたが」

「都立高校の三年生で十八歳だ」

驚きの余り、由佳は目を剥いた。

「そんな、若い方とご婚約なんて。専務の趣味からは考えられせんわ。それに、和威さんも随分ご執心のようでしたけれど……大奥様がどうか仰られて……」

由佳は弥生の企みなど知らない。元々、会社のことには口を出さない弥生とは接点がないのだ。美馬家主催のパーティに弥生が出席した時だけ、本社の重役秘書として挨拶をするくらいである。

「彼女は弥生様と……それなりに縁がある。和威の嫁に、と考えていたらしい。今は格式だけになっているが、旧伯爵家のご令嬢だからな」

藤臣の説明に由佳もやっと理解出来たとばかり、大きく頷いた。

「そういうことでしたか。でも、あんなにお若いお嬢様なら、ご結婚は数年先かしら？ それまでは秘書の私が充分にサポートさせて

頂きます。もちろん、お嬢様のご機嫌を損ねるような真似は」

バサツと音を立て、藤臣は資料を閉じた。

そのまま小さく息を吐き、由佳に視線を向ける。

「プライベート用の携帯には出るな、と言っておいたはずだ」

「申し訳ありません。西園寺様のお名前を聞いておりませんでしたもので……」

「着信履歴を消したことは？」

由佳は口元を引き結ぶと、「単純な操作ミスです。申し訳ございません」しゃあしゃあと言い訳をする。

だが、三文芝居なら藤臣も引けは取らない。

「なるほど……。では、秘書室から新しい人間を廻して貰うことにしよう。携帯の使い方知らない秘書は不要だ」

「私の……仕事ぶりには、充分ご満足頂けていると思っておりましてのに……」

由佳の声が震えている。？満足？がベッドの上での仕事ぶりを指すのは明らかだ。

「満足？」

仮面のような藤臣の顔に表情が浮かんだ。

それは愛実に見せる笑顔とは違い、愛人を見下す男の冷笑。

「私は君に与えられた以上の対価を払ってきたつもりだ。不満なら新しいボスを見つけてくれ」

取り付く島がない、とはこのことだろう。

独身の藤臣にとって秘書やモデルとの関係は別に秘密でも何でもない。ギブアンドテイク、由佳との間にあるのもそれだけだ。この

男に人並の感情はあるのだろうか、と由佳は考えたことがある。

彼女自身、ボスに恋している訳ではない。女の中にありがちな感情の一つ　独占欲とプライドで、愛実に対抗したに過ぎない。

由佳の中で、最大の敵はモデルの久美子だった。

マスコミの取材を受けるような華やかな席で、藤臣は決まってパトナーに久美子を選ぶ。宣伝のためと判っていても、容姿が劣ると言われているようで……。由佳を嘲笑する久美子の目に、何度悔し涙を流したか知れない。

あの久美子が藤臣の妻になれば、最悪だと思っていた。だが、彼が選んだのは十八歳の高校生。それを知った時の久美子の顔を想像し、ほくそ笑む由佳だった。

第32話 接触

「言っておくけど、奥村さんだけじゃないよ。手を切つてないなら、藤臣さんには軽く五人以上の女性がいたと思う。信一郎さんと比べても、それほど品行方正つて訳じゃない。君が本気なら、今日のようなことは簡単に許すべきじゃない！ お金のことが心配なら、結婚とは別に僕が用意する。だから、もう一度ちゃんと考えてみてくれ」

ホテルのロビーに立ち、和威は愛実の両肩を掴むと必死の形相で言った。その勢いに押されて、愛実は二度三度と頷いた。

愛実は一人で部屋に戻り、奥村由佳のことを考えた。

藤臣のネクタイを結ぼうとした時、彼女は凄い目で愛実を睨んだ。おそらく嫉妬であろう。女性からあれほどまでの悪意をぶつけられたのは初めての経験で、愛実はどんな態度を取っていいのか判らなかった。

(……わたしって、意地悪なのかも知れない)

藤臣が愛実の手を取った瞬間、彼女の心の中に優越感が生まれた。これまでのことはともかく、彼は由佳より自分を選んだ。きちんと「婚約者」と紹介してくれたのが何よりの証拠だろう。そんな嬉しさもあつて、楽しそうな声を上げはしゃいでしまった。さぞ、嫌われたに違いない。

和威は、許すべきじゃない、と言うが、愛実に何を怒れと言うのだろう。

容姿も肩書きも非の打ち所のない藤臣に、お付き合いしていた女性がいらないはずがない。複数いることは問題だが、それを責めるのは実際に交際中の女性たちだろう。彼女らにとって、いきなり現れて恋人を奪ったのは愛実だ。恨まれこそすれ、恨む筋合いのものではない。

和威は二人の関係を誤解しているだけなのだ。藤臣が愛実に対して真摯で誠実な態度を取っていることを知れば、きっと判ってくれるに違いないが……。

藤臣が愛実を愛していないことを言う訳にはいかない。

それに、今はもうお金の問題だけではなくなった。片想いとはいえ、恋する男性と結婚できるのだ。もし、万に一つ、両想いになればなら……。そうなってはじめて、愛実が藤臣に「浮気はしないで」と言えるだろう。

ただ、藤臣と話し合う必要はあるかも知れない。

結婚後も女性たちとの関係を続けるのかどうか。それだけは確認しておかなければ、愛実にも心構えがいる。

（きつと、わたしじゃ駄目なのよね）

重い足で寝室に戻り、ベッドに倒れ込む愛実だった。

くわくわくわくわく

和威が続いて、瀬崎の小言まで聞いていたら遅くなった。

藤臣はプレゼントスイート直行のエレベーターに乗り、今度は愛実に、今日のことをどうやって切り出すか考える。

ただの秘書で押し通すか、それとも……。

「ただいま……遅くなって済まない」

「お帰りなさい！」

藤臣がスイートの玄関に足を踏み入れるなり、愛実が飛び出して来た。出迎えの言葉と共に、変わらない笑顔を見せる。

昼間は和威の目もあつたので見逃してくれたのだ、と思っていた。二人きりになると、手ぐすね引いて待ち構えているだろう。或いは、ホテルから出て行こうとするかも知れない。藤臣は不安に駆られ、思わず支配人に連絡したくらいだ。

「ど、どうした？ 何か良い事でもあつたのかい？」

そう言つて藤臣はネクタイに手を掛けた。

「あ……いえ、私が結んだままだから。あ後は解かなかったんだなつて」

愛実の視線は彼の喉元を見て、嬉しそうに笑う。

藤臣も気が緩んでしまい、

「一日に二度も密会はしないさ」

「そうじゃなくて……結び直すんじゃないかつて」

「……すまん」

どうも、失言が続いてる。

本来、藤臣はこれほどうつかり口を滑らせる男ではない。他人の中で育ち、ギリギリまで神経を張り詰め生きて来た。それが愛実の前では、何もかも調子が狂いつ放しであつた。

玄関からリビングに移動し、ベルベットのソファに愛実を座らせ

ながら藤臣は口を開いた。

「黙っておくのもアレだから、言ってしまうが。奥村とはそれなりの付き合いがあった。君も本当は気付いているんだろ？」

「それは、まあ。そんなに子ども扱いしないで下さい」

藤臣は軽く頭を下げ、「申し訳ない」と愛実に謝罪する。

愛実から暁や信一郎、和威の忠告を聞かされた。どれも、藤臣に複数の恋人がいるという話であった。

「その……そういう方がいるのに、わたしと結婚してもいいんですか？ 形だけとはいえ、わたしだったら、絶対に嫌です」

藤臣は深いため息をつき、愛実の隣に腰を下ろす。

「恋人はいない。私には人を愛することが出来ないんだ。女性に幻想が抱けない。ただ男だから……厄介なことに欲望だけはあって、愛情がなくても女性の身体には反応してしまう。君は軽蔑するかも知れないが、彼女らとはそういう関係なんだ」

色々考えていた言い訳はいつの間にか消え去り、有りの儘を告白していた。

「あ、あの……」

愛実は頬を薄っすらとピンクに染め、真っ直ぐ藤臣の顔を見た。二人きりでそんな顔は止めてくれ、と叫んでしまいそうだ。

「男の人はそういうものだ、と聞いてことがあります。だから、仕方がないのかも知れませんが……結婚しても、あの方たちとお付き合いは続くんですか？」

別れてもいい、君が代わりに相手をしてくれるなら……。

藤臣はその言葉を飲み込みながら、「君はどうして欲しい？」と尋ねる。

「わたしは……わたしは……わたしには、そんなことを言う資格が

ありません」

「資格は関係ない。君はどうして欲しいのか？　と聞いてるんだ。答えてくれないか？」

「わたしは……嫌です。でも」

「判った。関係のある女性とは結婚までに全て手を切る。ああ、そんな顔はしないでくれ。君に代わりを求めるつもりはない。婚姻中は結婚の誓いを守って、誠実な夫であることを約束する。だから、君も一つだけ約束して欲しいんだ」

愛実の表情が変わったことに、藤臣は機先を制したつもりだった。まさか「君を求めるつもりはない」という言葉が、愛実を傷つけたとは思ってもせず……。

「私に誠実であって欲しい。和威はもちろん、婚姻中に他の男とだけは」

「あ、あたり前です！　そんなこと、わたしはしません！」

「いや、済まない。誠実でない女性しか知らないんだ。だから……」

「美馬さんは、誠実でない女性が好きなんですか？」

唐突な愛実の質問に、藤臣は声を失った。

「あ、ごめんなさい。そういう方と付き合っている、ということは好きなタイプなんだと思って。でも、わたしなら嫌です。お付き合いしている男性が他の女性とも　なんて。色々親切にして頂いて、美馬さんには感謝しています。美馬さんは素晴らしい男性だと思うけど、そういう所だけは尊敬出来ません。生意気なことを言って、ごめんなさい」

愛実の言葉は衝撃だった。

誠実でない、金目当ての女を選び、愛を求めなかったのは彼自身

である、と。

藤臣は自分を臆病な野良猫だと思った。爪を立て、牙を剥き、毛を逆立てて威嚇する。どんなに優しそうな人間でも、近づくなり彼を殴るか利用した。もう一度、愛情を求めて裏切られたら、今度こそ息の根を止められるだろう。

彼は戸惑っていた。

愛実の差し出す手は、彼が深層で追い求めた甘美な誘惑だ。欲しくて堪らないものを、彼女は藤臣の前にちらつかせている。

（罠ではない、と……誰か証明してくれ！）

無意識で伸ばした指が、愛実の頬に触れ……柔らかく瑞々しい肌に囚われた瞬間、藤臣は我に返る。

愛実の大きな瞳がさらに大きく見開かれ、食い入るように彼を見つめていた。心臓の鼓動が徐々に大きくなる。まるで新幹線が猛スピードで近づき、彼の全身を駆け抜けたような感覚だ。そのまま顔を寄せて、唇を重ねれば……。

直後、藤臣は弾かれたように立ち上がった。

「頬の傷も目立たなくなったようだ。週末には弥生様に報告して、君のお母さんの了解を取りに行こう。正式な婚約者となれば、誰も手出しは出来ない。今から用意すれば……六月辺りには」

衝動をごまかす為に、思いつくままを口にした。

「ジューンブライドなんて、素敵ですね」

次の瞬間、愛実の周囲に色鮮やかな花が咲き乱れ。
藤臣の？誓い？は、試練の場に引きずり出されることとなる。

第32話 接触（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

ここで第三章が終わりです。

第四章は正式な婚約に…

黙っていない人が当然います（苦笑）

無謀な約束をした彼に未来はあるのか…

引き続き、よろしくお願い致しますm（——）m

第33話 婚約

「そう……聞いてはいましたけど。やはり、そう言うことになったのね」

日曜日、愛実は藤臣と一緒に美馬邸を訪れた。

弥生は思っていたよりあっさりと二人の結婚を承諾する。あれほど言ったのに、と怒られることを覚悟していた愛実には、些か拍子抜けだ。

藤臣の表情も硬く、彼にとっても弥生の態度は予想外だったらしい。

「そんな顔なさらなくても、前言を撤回したりはしませんよ。その約束で、愛実さんを相続人にしたのですから。長倉から、信一郎さんのことを聞きました」

弥生は苦々しげに口にする。

長倉弁護士も、さすがに信一郎の行動に危険を感じたらしい。弥生が和威にこの邸を譲りたいのは明らかだ。しかし、このままでは信一郎が全てを台無しにする恐れがある。

「この美馬家をわたくしの代で潰すなど許されません。その為には……藤臣さん、あなたなら信一郎さんや宏志さんに後れを取ることはないでしょう」

愛実は弥生の言葉に驚いた。

自分と話した時のような「初恋の思い出」云々は影を潜めている。弥生にとって重要なのは美馬の家だけで、後を継がせたいと望んだ和威すら、どうでもいい様に見えるのだ。

「もちろんです。ただ、簡単には行かないでしょうね。何と言って

も旦那様は生前、ご自分と同じ婿養子の信二さんを重用された。今は彼が本社長です。信一郎さんは社長令息で本社の副社長だ」

藤臣は弥生の言葉に嫌味っぽく答える。

旦那様とは先代の社長、一志のことであろう。藤臣の話では、随分可愛がられ、後継者に指名されたと言っていたが……。

愛実の疑問は弥生が口にくれた。

「何を仰るの？ 夫の遺産はほとんど持って行ったではありませんか。六月の総会で、あなたが新社長に就任するのは間違いないですよ」

「これでも三十にもならない若輩者ですから……大奥様の後押しを頂ければありがたいのですが」

言葉の内容とは逆で、藤臣は自信たっぷりの言い方だった。

弥生もそれが癪に障ったようだ。口をへの字に結び、杖を手に席を立ち上がった。

「結婚を機に、わたくしも後継者に支持する、と発表すればよろしいでしょう。関連会社や取引先も胸を撫で下ろすことでしょう。やはり独身主義は、会社のトップにはそぐわない主義ですからね」

背中を向けたまま言い捨て、弥生はリビングを後にしたのだった。

シンとした空気がリビングの中を漂う。

結婚の報告とは思えないほど殺伐とした雰囲気だった。後継者問題に終始していたように思うのは気のせいだろうか？

弥生を見送る時、愛実は立ち上がり頭を下げた。だが、女主人は自分が引きずり込んだ花嫁に対する気遣いも、祝いの言葉すらなかったのである。愛実は言葉もなく、弥生の消えた方向をジッと見つめていた。

「驚いただろう？ 悪かったね。君には聞かせたくなかったんだが」
振り返れば、美馬も立ち上がり窓際に近寄っている。
幅の広い棧に腰掛け、思いがけず優しい眼差しを愛実に向けていた。

「おばあ様は……やっぱり、祖父のことを恨んでいらつしやるんですね。結婚を許してもらえなかったことに、心残りというか……わだかま蟠りがあるんだと思います」

考えたくはないが、愛実に対する思いは親切心ではなく、仕返しのつもりが大きいのかも知れない。信一郎が最初に言った言葉が真実に近いのだ。そう思うと、少し切なく、そしてホツとした。

「でも良かった。おばあ様を悲しませることになるんじゃないか、と不安でした」

和威を選んで欲しかったが、信一郎に継がせるくらいなら藤臣のほうか……。弥生の気持ちとその程度で済んで良かったと、愛実は安堵していた。

「君は、優しすぎる。人間はもっと汚いもんだ。そんなんじゃ、いずれ悪党の餌食にされるぞ」

最初は藤臣の冗談かと思ったが、彼の瞳があまりに真剣で、愛実は一瞬戸惑った。

「あの……でも、その時は……美馬さんが守って下さいますか？」
笑いながら愛実は本当の気持ちを言葉にする。

だが、「ああ、婚姻中はそのつもりだよ」藤臣は心底困ったような顔をして答え、愛実はそれ以上は笑うことができなかった。

一週間後、愛実は美馬邸のパーティに招かれた。

母も一緒に来たが、弥生の「正式な婚約披露パーティではないので、保護者は不要です」という一言に却下されたのである。

母は愛実に「母親の許しがないと結婚出来ないのを判つてらっしゃるのかしら!？」そんな不満をぶつけた。

愛実自身、美馬家の親族が集う席にたった一人は不安で堪らない。多少問題のある母でも、一緒に居てくれたほうが心強いのは確かだろう。

しかも直前になり、藤臣から迎えに行けないのでハイヤーを回したと告げられ……。愛実には彼に贈られたパーティドレスを着て、これ以上ないほどの緊張に包まれたのだった。

「あなたが西園寺愛実さんかしら？」

立食形式のパーティフロアに足を踏み入れるなり、神経質そうな中年女性が愛実のもとに近寄った。年齢の割りに背が高く、きつい視線で愛実を見下ろす。その目元が信一郎とそっくりで、愛実はすぐにこの女性が弥生の長女、加奈子だと判った。

愛実が気を取り直し、「はじめまして……」と挨拶しようとした時だ。

「最近の女子高生は恐ろしいこと。お金のためなら、見ず知らずの男と結婚しようだなんて。あなたもこの家にお住みになるのね。間違っても、うちの息子たちを誘惑しないでね。お母様がどんな気紛れを起こされようと、正当な跡継ぎは信一郎さんなんですからお判り!？」

加奈子の大きめの声に周囲の人間が一斉に振り返る。

今回は親戚のみで招待客は五十人もいないという。だが、およそ加奈子と歳の変わらぬ人たちばかりだ。愛実は到着するなり、メイド姿の若い女性にパーティ会場である大広間に通された。藤臣を呼んで欲しいと頼んだが、フロアにおられるのでお探し下さいと、にべもなく突き放される。

仕方なく自分で探そうとした途端、加奈子に頭ごなしに怒鳴られて……。周りの視線はある者は冷ややかで、またある者は嘲笑に満ちていた。

愛実は、立派な鯉の泳ぐ池に放り込まれた、小さな金魚の気分だ。頭から食べられてしまいそうで、初めて履いたヒールの足元が震える。

「加奈子さん、それ以上私の婚約者に暴言を吐くようなら、こちらにも考えがありますよ」

いきなり肩を掴まれ、藤臣の声が頭上から響いた。

第33話 婚約（後書き）

御堂です。

第四章のスタートです。

色々波乱含みのスタートですねえ…

四章丸々掛けて、この一日を描く、という（^^;）

まだ出てきてない美馬家の人々とか、藤臣の女（おいおい）とか、この章は和威に代わって暁の出番が増えますね。

では、引き続きよろしくお願い致しますm（——）m

第34話 応酬

愛実を迎えに行く予定だった。

ところが、入院中の信一郎の仕事が回って来てしまい、専務の藤臣が本社に行く羽目になってしまったのだ。苛立ちを覚えたが、仕事では仕方がない。彼は会社で契約しているハイヤーを愛実の家に回し、美馬邸まで送らせることにしたのだった。

だが、もし邪魔が入ったら、愛実に何かあつたら、と思うと気が気でない。

無事送り届けました、の一報を運転手から受けたのは、藤臣自身が美馬邸に戻る途中のこと。何事もなく良かった、と彼は大袈裟なほど胸を撫で下ろした。そして、すぐに美馬邸に連絡をして、愛実には玄関フロアで待つよう言付けを頼む。

ところが、藤臣が帰り着いた時、愛実はすでにパーティフロアに向かった後で……。

「あら、藤臣さん。まったく、あなたって人はお金の為なら何でもやるのね。こんな女子高生とまで結託して……。母親の血かしらね」

加奈子は表向き叔母にあたるが、実際は腹違いの姉だ。藤臣にはそういった姉が三人いることになる。そんな中で弥生と手を組み、彼を追い出す為の急先鋒となっていたのが、この加奈子……正確には加奈子一家であつた。

藤臣は愛実の肩を抱き、彼女を後ろに下がらせた。加奈子との間に割り込むように、自分の体を滑り込ませる。

「父親も似たようなものですからね。この美馬家に引き取られて感

謝していますよ。加奈子さん」

加奈子は当然、藤臣が異母弟であることを知っている。一志のことを指した嫌味に、加奈子の頬は小さく痙攣した。

彼女は父親の財産分与を当てにしていたが、そのほとんどを藤臣に奪われ腹に据えかねているはずだ。だが、それを公にしたり、遺留分を求める裁判を起こせば、一家揃ってこの邸と会社から追われる羽目になる。

今回、弥生が巻き起こした騒動で、最も信一郎の尻を叩いていたのはこの加奈子であった。それも、ある男を協力者として……。

「父親と言えば、あの刑務所に入った男かしら？ ああ、あれは義理の父親だったわね。身持ちの悪い母親を持って、あなたも大変ねえ」

「ええ、実の父は幸運にも刑務所に入る前に亡くなりました。そう言えば 信一郎さんが酷い怪我をされたとか。妙なことに巻き込まれて警察沙汰にならないように気をつけて下さい。会社のイメージを損ねますので」

一瞬で加奈子の顔色が変わった。

信一郎も一歩間違えば刑務所行きだと、藤臣の言葉の真意を悟ったらしい。加奈子は「余計なお世話だわ！」ヒステリックに叫ぶと藤臣の前から立ち去った。

藤臣はあらためて愛実に目をやる。

「遅くなって悪かった。玄関で待ってるように言っただが、使用人に上手く伝わらなかったようだ」

「いいえ……びっくりしましたけど。でも、美馬さんが来て下さるって思っていました」

愛実の笑顔はどうしてこうも暖かいのだろう。肩を抱いたまま、その眼差しに吸い込まれそうになる。

「あ、あの、美馬さん、肩が……その」

「ああ、すまない。でも？美馬さん？は止めてくれ。ここでは、ほぼ全員がそうなる」

「では？藤臣さん？でいいですか？」

ただ名前を呼ばただけだ。たったそれだけで反応しそうになる自分が信じられない。

今日の愛実 は 薔薇色のドレスを着ていた。

胸元をしっかりと覆った、フロント部分のシャーリングがエレガントなデザインだ。膝丈のスカートはシフォンでボリウムを持たせている。上から真つ白のボレロを羽織り、露出した肩を見せないようになっていた。同色の靴とバッグ、一粒ダイヤのイヤリングとネックレス。全て藤臣が選んだものであった。

髪は少しアップにして、垂らした毛先をカールさせている。いつもの自然なスタイルより、幾分大人びて見える。藤臣は、薔薇の花を象った髪飾りも用意すればよかった、と考えていた。

彼はわざと愛実の肩を抱いたまま、ドリンクの置かれたテーブル付近まで移動した。

「彼女は、我が子が一番、というタイプなんだ。信一郎は学生時代から色々問題を起こしていた。でも、信一郎に責任はない、と言って聞かなくてね。その結果、宏志も同じようになってしまった」

加奈子について説明しながら、愛実にオレンジジュースを取って手渡す。

「じゃ、あんな風に言われたのは……わたしが信一郎さんを選ばなかったから？」

藤臣の手が肩から外され、愛実 は ホツとしたように口を開いた。

「そんなところかな。だが、夫の信二といい、子供たち三人もまともな性格じゃない。足を引つ掛けた後、そっちが当たって来たから怪我をした、と難癖つけてくるタイプだな」

吐き捨てるように言った後、藤臣はジンジャーエールを手に取り、口に含んだ。

すると、予想外にも愛実は楽しそうに笑い始めた。

「私は何か面白いことを言ったかな？」

「だって、美馬さ……藤臣さんがやられっ放しになってると思えなくて。どうせ怪我をさせたって言われるんなら、最初から足を踏んづけてやれって感じたもの」

あまりの凶星に藤臣も可笑しくなり、声を立てて笑った。

和威はじつと耐えるかストレートに殴り返すタイプだが、藤臣は違う。盗みの犯人にされそうになった時は事前の察知し、逆に信一郎を罠に嵌めてやったくらいだ。

「君くらいだよ。私にそんなはつきりと言う人間は」

「どうして？」

「私が怖いらしい」

一志から認められる為、可能な限り感情を殺して生きてきた。それなりに卑怯な手段で他人の足を引っ張ってきただろう。ここ数年、真っ向から藤臣に意見する人間は、瀬崎独りだった。

「最初は……わたしも怖かったけど。でも、今は……」

「今は？」

もう一度、愛実の肩を抱き寄せ、耳元で「今はどう思ってるんだい」と尋ねたら……。

「藤臣さん、いい加減私たちにも紹介してくれないかしら？」

二人の背後から声を掛けたのは、弥生の三女で養母・佐和子であった。

長女の加奈子とは十歳も歳が離れており、まだ四十七歳。藤臣の母親と呼ぶには気の毒なほど若い。一志は藤臣を引き取る時、将来に備えて美馬姓を名乗らせようとした。だが、認知だけは弥生が認めようとせず……。結果、不妊が発覚し離婚された佐和子に婿養子を取り、藤臣を養子とさせたのだ。

「はじめまして、藤臣さんの義理の母です。若いお嫁さんで嬉しいわ。年上のお嫁さんを連れてきたらどうしようかと思っていたのよ」

佐和子はおっとりした性格で、美馬家の中で唯一強欲から外れた人間かも知れない。積極的に藤臣を可愛がることはしなかったが、特別に苛めることもせず。何でも父親である一志の命令に従う、藤臣の目には主体性のない女性だった。

「こんにちは。あなたのことは暁から聞いてます。藤臣くんは義理だが出来の良過ぎる息子でね。難点と言えば、独身主義だけだったが、あなたに会ってあっさり返上したようだ」

見るからに仲の良い夫婦と言った感じで、佐和子に寄り添っているのが美馬弘明である。藤臣にとって二人目の義理の父だ。

好人物に見えるが、藤臣はその裏にあるものを知っていた。

弘明は金と地位を得る為、佐和子との結婚を承諾。その証拠に結婚当初から愛人を囲っている。相手に子供を二人も産ませ、週の半分はそちらに帰るといふ二重生活を送っていた。

「西園寺愛実です。何も判りませんが、どうかよろしくお願いいたします」

おそらくは二人の笑顔を額面通りに受け取っているのだろう。丁寧にお辞儀をする愛実を、このまま攫って隠してしまいたくなる藤

臣
だ
っ
た。

第35話 独占

弘明は立場的に言っても、藤臣の社長就任を支持しているグループに属する。

「これで他の重役連中もホッと一息だな。いやあ、本当に良かった良かった」

「ええ、これで督促状のように届く釣書きから、ようやく解放されますよ」

養父の言葉に藤臣も合わせて笑った。

「まあ、驚いた。藤臣さんにもそんな笑顔が出来るのね。十五年も一緒に暮らしていたのに、初めて見たような気がするわ」

ビックリした顔で佐和子が声を上げる。隣では弘明も「本当だ」と頷いていた。

「やあ、ホントに藤臣くんをゲットしたんだな。やるじゃないか。どうだい？ 暴れ馬を乗りこなした感想は？」

そう言って現れたのは大川暁だ。

藤臣は心の中で警報を鳴らした。信一郎の母・加奈子に入れ知恵しているのはこの男に違いない。使い方しだいで、毒にも薬にもなる男だろう。

だが、愛実は見知った顔に出会えて嬉しいらしい。

「あの……大川さんのことは何とお呼びしたらいいんですか？」

「そりゃあ、お兄様って呼んでくれたら最高だけどね。っと、冗談冗談。藤臣くんに病院送りにされそうだ」

彼は当然、信一郎に全治三ヶ月の重傷を負わせたのが藤臣だと知っている。しかも、『初なお嬢さんには気の毒だが、これもいい勉強』そんな台詞を平然と言ったのけた男だ。

愛実は何も知らず、鬼のような男に向かって笑顔を大盤振る舞いしている。

（俺だけに向ける笑顔じゃなかったのか！？）

見ているだけで、藤臣は胃の辺りが焼け付くように痛くなった。

「なあに？ 旧華族の出身で、世が世ならお姫様ってあなた？ でも、今は落ちぶれてアパート暮らしなんでしょう？ お気の毒ね。その歳でお金のために結婚しなきゃならないなんて。しかも相手が売春婦の息子なんて、ホーントお気の毒」

暁の後ろからやって来て、いきなり愛実に噛み付いたのは加奈子の長女、安西朋美あんざいともみであった。

彼女は藤臣と同じ年齢で、七年前に大病院の後継ぎと結婚。五歳の息子と三歳の娘がいる。朋美は母親には似ておらず、男を誘う厚い唇と退廃的なボディラインの持ち主だった。兄弟同様、父親が信二かどうかは疑問だという噂だ。

「朋美さん、もう酔ってるのかい？ しょうがないなあ」

シャンパングラスを片手に、朋美は暁にしな垂れかかる。佐和子は顔を背け、弘明は一瞬だけ顔を顰めた。

「あら、あたしは本当のことを言っただけよ。ま、我が家の男はみーんな似たり寄ったりだから、誰を選んでも同じでしょうけど」

そう言うつと朋美は甲高い声で笑った。

「愛実、加奈子さんのお嬢さんで安西朋美さんだ。ご結婚されてこの家を出られたので」

「おじい様が死んだから、別れて戻って来るかもね。その時は仲良くしてちょうだいね、お・ひ・め・さ・ま」

愛実 は 礼儀正しく挨拶をしようとしたが、その前に、朋美が藤臣の紹介を遮った。そのまま暁に支えられ、ふらつきながらフロアを歩いて行く。

「ごめんなさいね、愛実さん。お嫁に行った先で苦労しているんだと思って、大目に見てやって下さいな」

呆気にとられて朋美の背中を見送る愛実に、佐和子が声を掛けた。「いえ……。うちが貧乏なのは皆さんが知ってることですから。今回、藤臣さんや大奥様に助けていただいて、本当に感謝しております」

何でもないことのように、愛実はサラッと言う。

逆に、藤臣のほうが悪くなり、

「子供を飢えさせないのは親の責任だ。家が貧しいからといって、君が恥じることはない。それに……俺が欲しいのは感謝じゃない」

ふっくらとした頬がドレスと同じ鮮やかな薔薇色に染まった。藤臣を見上げる瞳が、見る間に色彩を帯び……。ジッと見つめていると、まるで万華鏡を覗き込んだ気分になる。

オレンジジュースに濡れた唇がゆっくりと開き、甘い声音を響かせた。

「藤臣……さん。あの、腰に……その。こんなところで」

ハッと顔を上げた時、あんぐりと口を開けた佐和子や弘明が目の前に立っていた。

藤臣は自分でも気付かぬうちに、愛実の腰に手を回して、なんと腕の中に引き寄せていたのだ。

「こ、この分なら、孫の顔もすぐに見れそうね」

佐和子夫婦は引き攣った笑顔を作りながら、藤臣たちから離れて行ったのだった。

くくくくくくくく

藤臣の手が腰に触れた瞬間、愛実の頭は真っ白になった。手の熱さも、力強さも……さつき肩を抱かれた時とは比べ物にならない。愛実は、そのままキスされるのかと思ったほどだ。

「……済まない」

藤臣はフロアの隅に置かれたソファまで愛実を連れて来て座らせた。そして、水のグラスを差し出しながら謝罪を口にする。

「あの、さつき暁さんが仰つてた『病院送り』って、信一郎さんのことですか？ 暁さんは何か知ってらっしゃるんですか？」

愛実の心に不安が押し寄せ、藤臣に質問したが、彼はスッと目を伏せた。

「さあ、どうかな。だが心配は要らない。君には私がいる。それに暁さんは……邸の中で流れている噂を聞いたのかも知れないな」

「どんな噂ですか？」

愛実の質問に顔を上げる。そこには悪戯めいた笑みが浮かんでいた。た。

「君を口説こうとした信一郎を、私が襲つて病院送りにしたそうだ。その上で、君をホテルに監禁して自分のものにした」

「そ、そんなっ！ あんまりです。否定されたんでしょ？」

「なぜだ？ 美馬藤臣という男は、欲しいものを得るためなら手段は厭わない。横から奪おうとしたら、信一郎と同じ目に遭う。」

となれば、全治三ヶ月の重傷を負ってまで、女性を手に入れようとする男は少ないだろうな。君は安全だ」

あつさりと言いつ切る藤臣に、愛実は言葉もなく見惚れていた。

肩を抱き寄せられた時も、腰に手を添えられた時も、心臓が跳ね回っていたが本当は嬉しかった。愛実は懸命に藤臣の好む女性になろうとしたが……。気の利いた台詞の一つも思い浮かばない。考えなしに子供じみた返答をしてしまい、ふと気付けば彼は離れていた。

（どうすれば、藤臣さんの気持ちを引き付けられるの？）

愛実はただ恋する男性の姿を目で追い続け　それは突然だった。

「そんな目は止めるんだ！」

厳しい口調で藤臣は愛実を諫め……。

第35話 独占（後書き）

御堂です。

ご覧いただき、ありがとうございます。

この朋美の設定が「愛人」とは変わっております。

あちらでは次女千穂子の娘（和威の姉）になってますが、こちらでは長女加奈子の娘としてマトメ（？）しました。

引き続きよろしくお願い致します。

第36話 陥穽

「あ、いや、悪い。意味もなく男をジツと見るもんじゃないよ。子供の君には判らないのかも知れないが……」

「ごめん、なさい」

藤臣を見つめることが礼儀に外れたことだとは思わず、しかも？子供？と言われたことで愛実の心は瞬時に萎縮する。

すると、藤臣は焦った様子で言い訳を口にし始めた。

「暁さんなんかもそうだ。彼は頭が切れるし、冷酷な男だよ。この家の人間は全て額面通りじゃない。私以外は決して信用するな。とくに男は年齢問わず、絶対に気を許さないでくれ」

その鬼気迫る様子に、愛実は一層青褪めた。

「ああ、その、だから……怖がらせるつもりはないんだ。ただ、私以外には無闇に微笑みかけないほうがいい」

「じゃあ、藤臣さんになら気を許してもいいんですね。よかった」

愛実がそう言って笑うと、藤臣も呆れたように、それでいて嬉しそうに微笑んだ。

「あの……お義母様は藤臣さんの笑顔を見て驚いていらっしましたけど？」

佐和子の言葉は意外だった。

愛実の知る藤臣は意地悪な笑い方もするが、信一郎の件以降、朗らかな時が多い。愛実にも細やかな心遣いをしてくれ、彼に愛されたらどれほど幸せだろう、と思ってしまう。

だが、藤臣の答えはとんでもないものであった。

「この邸に来て十五年、一度も声を上げて笑ったことはなかった。いや、施設にいたときもそうだ。まだ母や妹が生きていた頃は笑いを覚えていた気がするが……。さつき朋美が言っていただろう。私の母は亡くなる直前、風俗で働き身体を売っていたんだ。母の笑顔も覚えてないな。覚えているのは、『あなたを産まなければよかった』そう言つて、泣きながら殴られたことくらいかな」

愛実は胸が熱くなり、彼の顔が涙に滲む。

だが、それを振り切つて強引に笑顔を作った。

「じゃあ、これからはドンドン笑って下さいね。悲しいことがあつても、楽しかったことを思い出して笑うんです。そうしたら、心が軽くなるから……。大丈夫、何とかなる、さあ頑張ろう！ って思えるの」

「……成せば成る、か。だが、どれだけ頑張つても出来ないこともあるだろう？ 君も絶望を知ってるはずだ」

それは、初めて会った時の愛実の状況を指して言っているのだらう。

藤臣の言う通り、絶望を抱えることもある。旧伯爵家の肩書きなど要らないから、普通の家庭と父を返して欲しいと神様に願ったこともある。

それでも……。

「もう本当に駄目だと思つた時に、藤臣さんに出逢えたの。だから、きつと何とかなるわ。諦めずに、笑って自分を励ましていたら、父もおじい様も見守つて下さると思うから……。藤臣さんの亡くなつたお父様やお母様、妹さんもきつと」

藤臣は背中を向け……。「だいいいな」掠れた声で呟くのだった。愛実はまだ、美馬の実父が一志だとは知らされていなかったのである。

「社長、遅くなりました」

たった今、到着した様子で藤臣の秘書、瀬崎がやって来た。

ブラックスーツでシルバークレーのベストを着た藤臣とは違い、瀬崎は通常のスーツ姿だ。いかにも仕事帰りといった風情である。

「契約書の件で、長倉先生が大奥様のお部屋でお待ちだそうです」
「判った」

藤臣は頷くと、

「愛実、申し訳ないが、しばらくここで待っていて貰えるかな？
二十分も掛からないと思う。ああ、絶対にパーティ会場からは出ないように。この瀬崎を残していくから」

愛実が「はい」と短く返事をする、彼はそのままパーティフロアから出て行った。

「この度はご婚約おめでとうございます」

瀬崎は愛実を見るとゆっくりと頭を下げた。

「ありがとうございます。あの、弟たちがお世話になって……本当にありがとうございます」

愛実は立ち上がると、両手を前で揃えて深くお辞儀をした。弟妹の転校手続きなど、全てこの瀬崎がしてくれたのだ。藤臣の指示とはいえ、どれほど感謝しても足りないくらいである。

「いいえ、社長のご命令ですから。先日は……大事に至らず何よりでした。私の不注意でとんでもないことになってしまい、非常に反省しております」

そう言うと、瀬崎は申し訳無さそうに俯くのだった。

ホテル滞在中に藤臣から聞かされた。

信一郎には充分に注意を払うよう、藤臣の出張中は瀬崎が信一郎の動向を見張っていたという。それが、肝心な時にすっかり見失っ

たというのだ。モーターの特定が少しでも遅れていたら、取り返しのつかないことになっていた。愛実はその風に聞いている。

「いえ、瀬崎さんのせいじゃありませんから。それに……藤臣さんが助けに来て下さったので」

口にしながら愛実は恥ずかしくなる。

あの時、藤臣のすぐ後に瀬崎も飛び込んで来たはずなのだ。そうになると、当然、胸を見られてしまったかも知れない。だが、「見ましたか？」と聞くのも躊躇われて、愛実は何となく居心地が悪くなってしまう。

「あの……ちよつと、失礼します」

「ああ、いえ、私もお供致します。社長命令ですから」

「それは困ります！」

愛実が声を上げると、瀬崎はきよとした目をした。

「あの、化粧室なので……外で待たれるのもちよつと。ドアのすぐ外ですよ？ 大丈夫です。すぐに戻ってきますから」

愛実は瀬崎を押し止めると、慣れないヒールで転ばないように、気持ちだけは小走りに化粧室に向かった。

くくくくくくくくくく

大きなお邸らしく、化粧室は紳士用と婦人用に分かれていた。

愛実が婦人用の扉を押そうとした時、

「申し訳ありません。愛実様は二階の家族用をご使用いただけますか？」

背後からメイド姿の女性に声を掛けられる。その女性には見覚えがあった。藤臣を呼んで欲しいという頼みを断わったメイドだ。
「こちらはお客様用　愛実様はご家族同様に、と藤臣様から申し付かっておりますので」

それが美馬家のルールだと言われたら、愛実には断われない。

「あの、二階の家族用というのは何処にあるんでしょうか？」

愛実の問いにメイドはニツコリと微笑み、「ご案内致します」そう言ったのだった。

「私、藤臣様のお部屋を担当しております、みやちきちやう宮前千里と申します。藤臣様のことでしたら、何なりとお訊ね下さい」

「はい……どうもありがとうございます」

普段であれば、愛実はそれほど警戒はしない。藤臣に言われた言葉も、「男に気を許すな」だった。だが、どうもこの千里は、彼女のほうが愛実に対心を持っている気がしてならないのだ。

そして愛実が思った通り、二階への階段を昇り切った時、彼女は振り向きフツツと笑った。

「藤臣様の、お好みの体位もお教えしますわ」

第37話 契約

愛実は一瞬、何を言われたのか判らなかつた。真つ赤になるまで五秒ほど掛かつたように思う。だが、負けずに言い返した。

「そ、それは結構です！ ふ、藤臣さんから、ちよ、ちよく、直接教わりますからっ！」

そんな愛実の反応を見て、千里は余裕の笑みをこぼす。

「まあ、それじゃ？まだ？なんですか？ 藤臣様もお気の毒に。こんなお子様のお守だなんて」

藤臣の愛人は邸のメイドの中にもいる。それは暁に言われたことだ。和威も、藤臣は何人も女性と付き合っていると云っていた。きっと、目の前の女性がその一人なのに違いない。

だが、彼は結婚までに全ての女性と手を切ると云ってくれた。たとえ本物の結婚じゃなくても、愛実が嫌だと答えたら、そう約束してくれたのだ。

「あら、申し訳ありません。愛実様こそ、お可哀想に。一回りも年上の男性なんて、お若い愛実様から見ればオジサンになりますかしら？」

千里の言葉に、

「案内はもういいです！ 後は一人で行けますから」

愛実はキツパリ言つと千里を追い越し、さつさと二階の廊下を歩き始めた。

「藤臣様がベッドを買い換えられたのよ。これまでのベッドは私の部屋に運ぶんですって。コレがどういう意味か、お嬢ちゃんに判る？」

これまでの慇懃無礼な言葉遣いを止め、千里は本性を出したように話し掛ける。

愛実は振り返るとキツと睨みつけ、「全然判りません！」と答えた。

「藤臣様のお世話はこれまで通り私がするわ。お嬢ちゃんが良い子で若奥様を演じてちょうだい。ああ、心配しないで、妻の座は狙ってませんから。子供は産みたくないし、面倒は嫌いなもの」

千里は好き放題言っただけ階段をとんとん下りて行った。

愛実は決して低いほうではない。一六〇に少し足りないくらいだ。そんな彼女より十センチは高く、バストのカップはツーいや、スリーサイズ上だろう。そして、勤務中だというのにキツイ香水の匂いをさせていた。ジバンシーの？オルガンザ？でないのが、せめても救いか。

（藤臣さんたら、絶対に趣味が悪いっ！秘書の奥村さんのほうが……もうっ！　　いったい何人居るの！？）

モデルの女性が？オルガンザ？の女ひとだろうか？

ひよつとしたら、もつとたくさん居るのかも知れない。だが、それも仕方ないことだった。藤臣ほどの素敵な男性である。たまに意地悪になるけれど、とても優しくて親切だ。時折見せる寂しそうな瞳が、愛実のような若い女性ですら、母性本能をくすぐられる。

千里の言ったようにベッドの上でのことを知ったら、もつと離れられなくなるのだろう。

肩を落として歩いていたら廊下の突き当たりに化粧室のマークを見つけた。そこが家族用なのだ、と見当をつけ、愛実は中に入った。

くくくくくくく

「なるほど、愛実の分はすでに母親からサインを貰っているわけですね」

細かい契約書に署名をしながら、藤臣は呆れた声を出した。

娘を人身御供に差し出し、彼女の母親は成城の家屋敷と数年は遊んで暮らせる金を手に入れたのだ。それも、当の愛実には不利な条件ばかりで。彼女から離婚は言い出せず、事情はどうあれ離婚の際には一円の慰謝料も手に入らない。子供の親権も放棄するなど、愛実であれば承諾するとは思えない条件だ。

おまけに、弥生は自分の面目を保つため、『旧伯爵家令嬢』という肩書きを最大限利用するつもりだ。マスコミにはカビの生えた初恋話を提供し、三流メロドラマよろしく、彼女に白羽の矢を立てたことになっている。

だが、気になるのは愛実に向けられたこの一文だ。

万一、婚約者に変更があっても、西園寺愛実は契約書通りの義務を負うものとする。

これでは、仮に藤臣との婚約が流れても、愛実は美馬家の誰かと結婚しなければならなくなる。不履行となると、家屋敷を返還するだけでは済まず、莫大な慰謝料という借金を背負うことになるのだ。家族思いの愛実のことだ。そうなれば、たとえ信一郎であっても我慢して嫁ぐかも知れない。

もし、藤臣に何かあれば……。

（クソッ！ 死んでも死に切れんな）

「莫大な資産が絡むのだから、当然のことでしょう？ あなたのことは、夫の罪の子として広く知れ渡っています。わたくしが終生心に残していた男性の孫娘を妻にすることで、あなたを認めようと言うのは、対外的にも妥当なところでしょ」

一志の生前でも、藤臣が強制認知を求めればそれは可能だった。だが引き替えに、無一文で放り出されたのでは意味がない。弥生は一志の死後認知が法的に有効で取り消せないと知ったとき、藤臣に交換条件を出したのだ。

周知の事実であつたとしても、藤臣が一志の息子であることは公言しない、と。

弥生にとって大事なものは、美馬の名前と彼女自身の体面を保つこと、それだけだった。

「判っています。ですが、暁さんを使って和威を嚇^{けしか}けるのは止めて下さい。あなたも旦那様も、暁さんを駒のように考えておいでだが、今の和威に御しきれる男ではありません」

藤臣の言葉に弥生は片笑みを浮かべた。

「あらまあ、相変わらず和威さんの味方なのね。でも、和威さんはどうかしら……。愛実さんは母親に良く似ていると言つてはないの。中々の女性のようにですし、あなたも手玉に取られないように気をつけなさい」

藤臣は黙って席を立ち、一礼して弥生の私室を後にした。

洋館の母屋と渡り廊下で繋がった弥生専用の別館がある。母屋と同じように洋風の建築だが少し古い。弥生が生まれた時に建てられたという。後に妹と二人で暮らし、戦火も免れた。母屋のほうは、結婚後に一志がかなり手を入れたらしい。

渡り廊下の途中で立ち止まり、藤臣は煙草に火を点けた。庭の緑が多いせいか、都内の割りに空気が清々しい。そこに白い煙を吐き捨てることに、なぜか罪悪感を覚えた。

パーティ会場は禁煙だ。最近では都内の至る場所が禁煙になっている。いい加減止めようと思いつつ、つつい吸ってしまふ。

（女を抱いてないせいか？ まさか！ これまでも一ヶ月や二ヶ月、平気でセックスを断^たっていたはずだ）

一見するとライターのような携帯用灰皿に煙草を押し付け、放り込んだ。ベストと同じシルバーグレイのネクタイを整え、藤臣が会場に足を向けた時のこと。

廊下を一目散に走って来る人間がいる。

「社長！」

それが瀬崎であることに、藤臣は驚いた。これほど慌てるようなことは……最近で言えば、信一郎の車を見失った時くらいだ。

「瀬崎、愛実はどうした！？」

「それが、化粧室に行かれたままお戻りになれないんです。女性用を確認させてもらったんですが、何処にもいらっしやなくて」

藤臣の全身から血の気が引いた。

第38話 猥褻（前書き）

陵辱とまではいきませんが、サブタイトル通り猥褻な描写があります。苦手な方はご注意ください。R15でお願いします。

第38話 猥褻

大きなお屋敷らしく、そこは通常より広めの化粧室であった。家族用なので明確に男女が分かれてはいない。しかし、天井と床に固定された不透明なパーテーションでしっかりと仕切られていた。

愛実は千里のことを考えながら、用を済ませ、個室の扉を開いた瞬間のこと。

「キャッ！」

なんと目の前に宏志が立っていた。

見れば見るほど彼は兄の信一郎とは似ていない。先ほど会ったばかりの姉、朋美ともまるで違った。彼らの父で美馬本社の社長である信二は未見なので何とも言えないが……。

「あの、すみません。退いて頂けますか？」

宏志は少しだけ口角を上げ、ジッと愛実を見ている。背筋に気味の悪いものを感じつつ、それでも丁寧な声を掛ける。

「ああ、いいよ。おかげで、いい映像が撮れたしね」

嘲笑めいた軽い返答に、愛実は嫌悪感を深めた。最初は何のことか判らず、だが、彼が手にしたモニターに映る個室内の映像に、全身がカッと熱くなる。

「なっ……なんですか？ そんなの、犯罪じゃない！」

「いいの？ そんなこと言って。インターネットでバラ撒いちゃうかな？」

宏志の脅迫は、藤臣に売春の件で脅された時とは訳が違う。あれ

には愛実の過失もあるが、今回は何の責任もない。愛実はギュツと手を握り締め。

「やりたければやったらどうですか？ でも、藤臣さんが黙ってないと思いますけど！」

その反論に、宏志は明らかにたじろいだ。

だが、自らの愚かさから窮地に陥ると、暴力に訴えようとする行動は兄と同じであつた。

「何、エラそんなこと言ってるんだ！？ 兄さんとラブホテルに行つて、藤臣ともやりまくってるくせにつ！ お前、最低の女だな。」

……二度とそんな口きけなくしてやる」

宏志は逆切れしたかのように愛実を罵り始めた。そのまま、彼女を個室に押し込めうとして二人は揉み合う。

愛実は信一郎のことを言われ驚いていた。

彼女にとって不名誉な噂になりかねないので、藤臣が事情を知る関係者に箝口令を敷いたと聞いている。それが宏志の耳に入ったということは、信一郎自身が弟に告げたのだろうか。

「触らないで！ 大声出しますよっ！」

「出してみなよ。この家は無駄に広いんだ。この辺りは僕と和威の私室があるくらいでさ……今日は和威、いないんだよねえ。こんなトコまでだあれも来ないよ」

舌なめずりでもするように、卑猥な顔で宏志はじりじりと近づいてくる。こんな所は兄弟そっくりじゃない、と愛実の心に浮かんできた。その時、ドクンと大きく心臓が跳ね上がったのだ。愛実の脳裏に信一郎に襲われた時のことが次々と流れてくる。殴られた頬の痛みを思い出し、宏志を突き飛ばして逃げなきゃ、と思うのに近づくのが怖くなった。そして、最悪なことに個室の方に後退してしまう。

当然、すぐに背中が壁に当たり……。

（どうして？　今日は婚約発表なのに。どうしてこんな目にばかり遭うの？）

「藤臣には黙っておいてやるよ。その代わり、結婚したら時々僕の部屋に来て楽しませてよ。財産争いや会社経営には興味ないんだよねえ」

宏志の足が個室に踏み込んだ。

「宮前も悪い女だよなあ。ま、愛人が正妻を罫に嵌めるなんて、よくあることが」

ようやく、愛実も気が付いた。千里にわざと二階の化粧室に連れ来られたのだ、と。だが、その時には眼前に宏志の顔が迫り、腐臭のする吐息に愛実は顔を背け　。

「痛いっ！　いた、いた、た……」

ふいに、宏志が悲鳴を上げた。

開いた扉の隙間から腕が伸び、その手は宏志の髪を鷲づかみにしている。

「邸内で襲おうなんて、お前にそんな度胸があったとは知らなかったな」

藤臣の声だ。と思った直後、宏志は髪を引き摺られ個室の外に連れ出された。

「み、宮前だよ。ア、アイツが、チャンスを作ってやるからって……痛いよ、放してくれよつ。本気じゃなかったんだ。……カンベンしてよお」

宏志はすでに半泣きだ。

ホッとして脱力しそうになる愛実だったが、これだけは言っておかなければならない。

「個室の中をカメラに撮るなんて、ひどいわ。全部消して下さいっ！」

愛実の言葉に藤臣は状況を察したらしい。宏志がコソツとポケットに仕舞おうとしたモニターを取り上げ、床に叩きつけた後、革靴で粉々に踏み潰した。

藤臣は宏志の髪から手を放すと、彼の襟首を掴み、さらに首を腕で押さえ込む。わずかに首が絞まり、宏志は怯えた目で藤臣を見上げていた。

「信一郎は手の骨が碎けて全治三ヶ月だ。お前は何処を碎かれない？」

宏志は声もなく、痙攣したように顔をブルブルと左右に動かす。

「女が欲しけりや風俗に行つて来い。間違つても、愛実を想像しておつ^た勃てようものなら……踏み潰すぞ。判つたな」

藤臣の言葉に震え上がり、宏志は転がるように化粧室から出て行くのだった。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

念のため、と古参のメイドに金を掴ませ、宏志を見張らせていたのが正解だった。何か携帯ゲーム機らしきものを抱え、化粧室に行ったと聞き駆けつけたのだ。まさか盗撮用の小型カメラまで用意していたとは思わなかったが……。

「どうして……どうして、皆こんなに酷いんですか？ 宏志さんだけじゃなくて、パーティフロアでもそうだし、それに、宮前ってメイドさんも」

愛実の声が震え、それはすぐに泣き声に変わった。

藤臣は千里の名前を言われたことに、ドキツとする。誘惑に乗って数回関係しただけで、愛人の頭数にすら入らない女だ。無論、千里本人がどう思っているかは判らない。

藤臣はソツと手を伸ばし、愛実の肩を抱いて慰めようとした。ところが、彼女のほうから藤臣の懷に飛び込んで来たのだ。

「愛実……悪かった。まさか、宮前まで絡むとは思わなかったんだ。だが、会場から出るなど言っただけだぞ」

「宮前さんが、二階の家族用を使うように、って」

経緯とベッド云々の話を聞いた時、藤臣は思わず頭を抱えた。愛実のほうは、言葉にするうちに嘆きが怒りに替わった様だ。

「別に全然構わないんですけど……でも、だったら結婚の誓いを守るとか、そんな格好の良いことを言わないで欲しかったです」

愛実の声音に嫉妬の色が滲んでいる。やはり、愛実の気持ちは自分に向いているのだ、と思い、彼は嬉しさがこみ上げて来た。

しかし当の愛実は、そんな藤臣の様子に不満を覚えたらしい。

「わたし、何がおかしいことを言いましたか？」

「あ、いや……失礼。ベッドは新しくする予定だ。その時は使用中の物は業者に引き取ってもらう。それと、過去のこととは勘弁して欲しい。約束はちゃんと守るよ。私は……結婚はしないつもりだったが、結婚に対する理想はある。不実な真似は絶対にしない。だから、君には信じて欲しいんだ。頼む、愛実」

彼は愛実の目を真っ直ぐに見つめて言った。

その時、自分がどれほど彼女の信頼を欲しているか判ったのだ。

それは、子供が親に縋るような目だったと思う。

愛実も食い入るように見つめ返して、「もちろん……信じてます」と一言口にした。

心が吸い取られて行くのを感じる。少しだけ涙の残った瞳が、余計に藤臣を惹きつけた。それは心だけではなく、次第に身体も……そして唇も近づき。

第39話 密会（前書き）

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

第39話 密会

直後、化粧室の扉が開く音がした。

藤臣は咄嗟に、愛実を抱きしめたまま個室に入り込む。個室のドアはかなりしっかりした作りで、ノブを回して開ける外開きだ。カチリとドアを閉めると、鍵を掛けず二人は息を詰めて様子を見守った。

「あ、あの…… どうして、隠れるんですか？」

愛実は空気を震わすような声で藤臣に尋ねた。

「いや、済まない。つい」

確かに、二人は隠れる必要などない。誰に見られたとしても「二人きりになりたいのは判るが、今日の主役だろう？」とからかわれるのが関の山だ。

だが、藤臣はもうしばらくこのままで居たかった。

愛実を取り巻く環境は厳しいものがある。誰かが彼女を守らなければならぬ。ならば、美馬家の騒動に巻き込んでしまった責任は、藤臣が取るべきだ。彼はそんな風に思い始めていた。

問題はその責任の取り方であった。

愛実が望むなら、あえて結婚に期限はいらぬのではないかと。自分はどうせ、まともな恋愛感情など持てない人間だ。セックスさえ出来れば、女なら誰でも同じである。だったら、それが愛実であっても問題はないだろう。最初の予定通り、？偽りの？愛の言葉をささやき、ごく普通の結婚にしまえばいい。

愚かな藤臣は、その考えがさも正論のように思えてきて、彼はゴクリと唾を飲んだ。

「もし……人が入って来たら」

愛実は潤んだ瞳で不安そうに彼を見上げる。

「あれは男の靴音だ。こっちは来ないさ」

声に出来ない言葉で伝え合つたため、ギリギリまで顔を寄せ合う。

愛実の吐息を感じた瞬間、柔らかい唇が耳元を掠めた。

（この結婚が本物になれば、愛実の全てを俺のものに出来る！）

邪な思いが藤臣の中を駆け巡った。

コツコツと重みのある音がタイルに響く。男性用に向かつて、しばらくして戻って来た。洗面台のほうは絨毯が敷かれているため足音は聞こえないが、後は手を洗って出て行くだろう。

……と思つた時だった。

再び化粧室の扉が開き、同時に、「あ、やっぱり、こんな所にいたのね。探したんだから、曉」それは、朋美の声であつた。

く　＊　く　＊　く　＊　く

「オイオイ、酔ってるんだろう？　休んでたほうがいい」

曉は口に咥えたハンカチで手を拭きながら、鏡に映る朋美に向かって言つた。

朋美の姿はお世辞にも、次期病院長夫人というものには程遠く見える。セクシーな黒のドレスはだらしなく着崩れしており、アップにした髪もあちこちが解ほれていた。

だが、パーティ会場で酔って騒いでいた時に比べれば、かなりし

すっかりした足取りだ。

「ここなら誰も来ないでしょ」

言うなり、暁の背後から首に腕を回す。

暁は少し頬を歪めるが、「……しょうのないヤツだな」振り返り、朋美の腰に手を添え、口づけた。

化粧室の中に唇の重なる音と、布地越しに互いの体を弄る弄るが響き渡る。

「おじい様が死んでから一度も会ってないのよ。どうして誘ってくれないのよお」

唇が離れると朋美の口から愚痴がこぼれた。

「どうせ、あなたには遊ぶ相手がたくさんいるんでしょうけど……。まさか、金目当てにあんな女子高生にまで手を出してないでしょうねっ」

「俺が出してどうするよ。金にはならんだろうが」

暁の声は普段よりトーンが落ちている。それが彼本来の姿であった。

「だって若い子が好きなんですよ？ あなたが初めてあたしに手を出した時、まだ十六だったのよ」

「あんどきゃ、俺も大学生だっただろうが」

深い関係の男女の間でのみ通じる、クスクス笑いが広がった。

その間も、朋美は暁のネクタイを緩めボタンを外し始める。

「おいおい、脱がすなよ。こんなところでこれ以上出来るかよ」

「入り口の鍵は掛けたわ。じゃあ、下の方に聞いてみましょうか？」

朋美はフツツと笑いながら、洗面台の前に敷かれた赤い絨毯の上に跪く。暁のスラックスのジッパーを下ろし、その奥を手で探り始めた。

剥がれかけた口紅が、暁の下半身を赤く塗る。

しばらくして暁は降参したかのように、

「ああ、判った、判った。でも、ゴム持ってたのか？」

朋美は口を離し、「ないわ。平気よ……そのまま来て」自ら下着を下ろして片足から外しながら答えた。

暁は立ち上がった朋美の腰を掴むと、洗面台の上に座らせ
二人は忙しなく体を重ねた。

く　　く　　く　　く　　く

二人の関係は知っていた。

藤臣が養子になって間がない頃のこと。暁も邸内に住んでおり、この二人は夜な夜な密会を重ねていたのだ。当時の暁は藤臣の隣の部屋で、嫌でも目に……いや、耳に入ってきた。

暁の父・弘明もやがて気付き、すぐに息子を邸から追い出したようだ。だが二人はその後も関係が続け、朋美の家出と同時に妊娠が発覚し、とうとう祖父・一志の耳にも入ってしまった……。

キスまではまだ許せる。藤臣も苛立ちながら、さっさと出て行ってくれることを願った。

だがまさか、こんな場所で朋美が口で始めるとは……。さすがの藤臣も面食らっていた。こんなことなら、暁ひとりの時に出て行けばよかった。だが、こうなってしまうてからでは甚だ顔を合わせ辛い。

ドア越しに聞こえるジッパを下ろす音や衣擦れの音、そして暁の小さな呻き声に藤臣の頭は切れそうになる。

しかも、

「藤臣さん……急に静かになりましたけど」

愛実には行われていることが判らないのだろう。話し声が聞こえなくなると、背伸びをして藤臣の耳に口を寄せた。

(……ま、まずい)

愛実今日のドレスに合わせ、薄っすらと化粧をしている。

つけなくても充分なほど桜色にふっくらとしている唇だ。そこが今日はルージュで艶めいていた。愛実の前では懸命に抑えている欲望が、背後の音で後押しされ微妙にエレクトする。

だが、今さら愛実を突き放すわけにもいかない。

彼が苦悩のあまり返事を出来ずにいると、愛実さらには体を寄せた。

「あの……聞こえませんでした？ もう、出ても平気でしょうか？」

こんな場所で欲情していることだけは、死んでも知られる訳にはいかない。

彼は限界まで腰を引きつつ、「今は、まだ……だめだ」とどうにか答える。

その直後だった。

暁の声が聞こえ　　激しく肌のぶつかる音が、個室にまで届いたのである。

第40話 キス（前書き）

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

第40話 キス

その音は、個室の中で必死に耐える藤臣を地獄に引き摺り込む誘惑であつた。

ただでさえ、下半身は熱く高ぶっている。火に油を注がれ、まさに思考が停止しそうだ。出来る限り、下を向くまいと固く目を閉じた。

背中から襲い掛かるような荒い息。朋美は遠慮もそこそこに、「もつとあ、奥まで突いてえ〜」など廊下まで聞こえそうな声を上げている。

どんな体勢で絡んでいるのか見ることは出来ない。何かがガタガタと揺れ、家具の軋む音が一定のリズムを刻み始める。その状況に男の妄想はマックスまで掻き立てられた。

どれほどきつく目を瞑つても、鮮明に思い浮かぶのは愛実の白い肌だ。ラブホテルで嗅いだ、清潔なペパーミントの香りまでもが甦る。あの漆黒の髪に口づけ、愛実の中に屹立したモノを埋めて突き上げられたら……。

想像するだけで微妙に腰が動き始め、彼は慌てて意識を散らした。その時だ。なるべく離れようとする藤臣とは逆に、愛実はさらに距離を縮めてきたのである。

「藤臣さん……」

小さな声で彼の名を呼び、ギュッとスーツの襟を掴みもたれ掛かってきた。

「藤臣さん……好きです」

瞬間、彼は目を開け愛実を見た。

濁りのない黒い瞳に囚われ 藤臣の中から？理性？の文字が消
失した。吸い込まれるように、艶めく唇を奪う。

そこは固く閉ざされ、簡単に男の侵入を許そうとはしない。だが、
それすらも彼には新鮮で衝撃だった。やがて、愛実が苦しそうに身
を振り……開いた口元から、藤臣は舌を差し込んだ。

愛実は驚いたように硬直し、痛いほど藤臣の腕を握った。

（よせ……もう、止める……早く離れるんだ）

頭の中では警報が鳴り響いている。

それとは逆に、左手を愛実の背中に回し、右手で腰を支えた。思
わず、力一杯抱き寄せてしまう。そして、愛実の手が彼の背中に回
った瞬間 それだけで達してしまいそうになった。

（理性も分別も知ったことか！ 愛実を俺のものにして、それから
考えればいい！）

藤臣はドアに背を付け、寄り掛かるように愛実を抱きしめキスを
続けた。

刹那 彼の背中から圧迫感が消え、体がふわつと宙に浮く。
唐突にドアが開き、彼は地球に重力があることを再認識したのだ
った。

く　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ドアを開けたのは暁であつた。

二人の情事はすぐに終わつたらしく、そこに居たのは彼だけである。身支度を整え、化粧室から出ようとした時、奥の個室から妙な気配を感じたという。何気なくノブを回した途端、まるで自動ドアのような勢いで扉が開き、彼は慌てて後ろに飛び退いた。

「キャッ！」

「うわっ！」

それはまさに不意打ちだつた。

丸つきり支えるものがなくなり、無防備に後ろに転がる。藤臣にすれば、愛実を庇おうと抱きしめるのが精一杯だつた。

「……痛つつ」

思い切り尻餅を付いた上、強かに背中を打つ。まだ頭を打たなかつただけ立派と言つべきかも知れない。

一方、開けたほうの暁も啞然呆然だ。

「これはこれは……先客がいたわけか……参つたな」

確かに、他に言い様はないだろう。

とはいえ、不倫の現場をまともに聞かれたのだ。それを苦笑いで済ませる辺り、藤臣の予想通り、肝の据わつた男だつた。

「……やあ、暁さん。出来ればノックくらいして欲しかったな」

人工大理石のタイルの上に座りこんだまま、藤臣も必死に余裕を見せる。

だが、これほど慌てた藤臣を見たのは初めてだったらしく、暁は笑いを堪えた様子で言葉を返した。

「化粧室の前に大きな使用中の札を用意すべきだな。すまなかったね、愛実さん」

「い……いえ」

あまりの出来事にショックを受けたのか、愛実は藤臣の上で固まっていた。

「抱き合っていたいのは判るが……立てないなら手を貸そうか？」

二人がいつまでも立ち上がらないので、暁がそんなことを口にした。

「あ！ すみません。わたしが上に乗ってしまったて……重かったでしょう？ 本当にごめんなさい」

「いや……」

もつと抱いていたかった。

さすがに、暁の前でそれを口にすることは躊躇われた。愛実を立たせながら、藤臣もゆっくり立ち上がる。

「謝ることはないさ。可愛いフィアンセに上に乗られて、喜ばない男はいないよ。だろ？ 藤臣くん」

（余計なこととは言わずにさっさと出て行ってくれ）

その言葉を飲み込むと、

「それは、ともかく。暁さん、不倫は不味いですよ」

藤臣は矛先を暁の方に向けた。

少しはバツの悪そうな顔をするかと思いきや、「ああ、そうなんだ。朋美とは離れがたくてね」と、実にアツサリ悪びれる様子もな

い。言い逃れは出来ないまでも言い訳くらいするだろう、と藤臣は思うが。

「じゃあ、ずっとですか？　だったらさつさと朋美にも離婚させて一緒になればいいでしょう？　もう、旦那様はいないんですから」

朋美と暁の仲を裂いたのは一志だ。

一志は突然、暁をNYにやった。表向きは栄転だが、理由は朋美の婚約が成立したので、結婚式が終わるまで彼を国外に出したのである。

だが、そんな暁を追おうと朋美が家を出てしまふ。彼女は暁の子供を妊娠していたのだ。そこを水際で連れ戻し、子供を処分させ安西家に嫁がせた。当時、一志は安西家が所有する土地を欲しがっていて、そのための布石というが……。

暁が日本に戻って来た時、彼には重役の娘との挙式が決められていた。

これは藤臣の予想だが、暁が渡米する際、一志は美味しい言葉で彼を騙したのではなかるうか？　帰国後の暁の荒れ様は尋常ではなかった。一志が死ぬなり、離婚したと言うことは……やはり、重苦しい事情があったとは思えない。

藤臣が一志のことを口にすると、一瞬、暁の顔が曇った。

「ま、追々ね。だが、こういうセックスもスリルがあって楽しいんだ。君らもそうだったろう？」

暁は都合が悪くなると、再び話をこちらに振る。

それを言われると……藤臣の中にたった今聞かされた生々しい声が浮かび上がり、落ち着き始めた情熱の熾火おきびが燦り始める。

だが、それは藤臣だけではなかった。

「おっと、愛実さんもおとなしく見えて、スリルを好むタイプかな？」

暁の言葉に彼女を見ると、頬を染めて俯いている。

「愛実で妙な妄想はしないでくれ！」

彼女に向ける暁の視線が気になり、藤臣は叫んでいた。

「夢の中で彼女を脱がしてセックスしたら……君まで出てきてボコボコにされそうだな」

暁は笑いながら言う。

「ええ、そうですね。夢ではなく現実で」

「信一郎くんのように？」

「返事が必要ですか？」

「いや　これ以上は止めておこう。可愛い彼女の前だ」

笑顔の消えた藤臣から、暁は顔を逸らせた。

「先に行きます。　愛実」

ごく自然に愛実の手を握り、暁を残して二階の化粧室を出て行くのだった。

第41話 期待

「あの……あの、藤臣さん。手を……」

掴まれた手が火傷しそうなほど熱い。

何もかもがこれまでの経験とはかけ離れており、愛実の心は混乱を極めていた。藤臣にもどんな顔で話しかけていいのか判らず、彼の顔を見るのも恥ずかしい。

「あ、ああ、済まない」

「いえ……」

二人は階段の下で立ち止まり、互いに沈黙したまま時間だけが過ぎて行く。

こういったことに慣れているはずの藤臣から、何か言ってくれると愛実は期待した。だが、彼も棒立ちで、息をするのも忘れているかのようなだ。

「あ、の……化粧室に行つて来てもいいですか？」

愛実は千里に止められた一階の化粧室を指さし、藤臣に告げた。

鏡に映る自分の顔を見た時……なかなか胸の鼓動が静まらず、何度が深呼吸を繰り返した。

？キス？してしまったのだ。それも？藤臣？と。

常識的に考えれば、婚約者なのだから当然のことかも知れない。だが、愛実の身は安全だと言っていた、あの約束はどうなるのだろうか？

キスを求めたのは愛実からだった気がする。

実を言えば、あの前後のことはよく覚えていないのだ。宏志の行動があまりにショックで……個室を撮影されていたということに動揺して、助けてくれた藤臣に当たってしまった。

それには千里の言葉も影響していただろう。彼女は藤臣との深い関係を示唆して、結婚後もそれを続けると宣言した。宣戦布告されたようで、愛実も珍しくカツとなる。

結婚するのは、藤臣の花嫁は愛実なのに……。

しかし彼にとって、十八歳の花嫁は『対象外』なのだ。少しずつ、チクチクと胸を刺してきた痛みがふいに大きくなり、愛実是我慢出来なくなった。

君には信じて欲しいんだ。頼む、愛実。

藤臣の切ない声が今も耳の奥で響いている。

彼になら、何をされてもいいと思えた。藤臣に信じて欲しいと言われたら、それこそ、何があっても信じるつもりだ。ジツと目を見ていたら吸い込まれるようになって……あの時、キスされるのだ、と思った。

愛実が目を閉じかけた時、誰かが化粧室に入って来たのである。

その先に繰り広げられた暁と朋美の行為は……思い出すだけで、愛実は酷くイケナイことをしてしまった気持ちになる。この場合、過ちを犯しているのはあの二人なのだ。何といっても朋美は人妻、彼女は夫を裏切り、暁と浮気をしていたのだから。

音だけでは未経験の愛実には想像出来ない部分もある。だが、未熟な官能を目覚めさせるには？朋美の声？だけでも充分だった。

『藤臣さん……好きです』

（あぁっもう、わたしは何てことを言ってしまったの！？）

愛実の間近で行われている大人の行為に触発され、藤臣に抱きついていた。胸がざわめき、全身の細胞が彼を求めて……気付いたときには、想いを告白していたのだ。

藤臣は驚いたように目を見開き、その二秒後　二人の唇は重なっていた。

初めてのキスなのに、背中に電気が走ったような不思議な感覚だった。舌を……押し込まれた時はさすがに怖くなったが、それでも藤臣を突き飛ばすことなど出来るはずがない。

愛実 は鏡の中の自分をまじまじと見つめた。頬がピンク色に上気していて、瞳も潤んだままだである。そっと両手を頬に添え……左右の小指で唇に触れた。

いつの間に曉たちの行為が終わり、朋美が化粧室を出て行ったのかも判らない。それほどまで夢中になって、彼の唇を受け止めていた。もし、暁が扉を開けなければ、藤臣はどこまで愛実を求めてくれただろう。

そこまで考え、愛実の心臓はトクンと高鳴った。

（告白してキスされたってことは……藤臣さんもわたしのことを？）

俄に浮上した可能性に、鏡の中の愛実 は相好が崩れた。彼女は左手のエンゲージリングをそっと包み込むように撫でる。

（これって……本物の結婚になるの？　ずっと藤臣さんの傍に居られるかも知れない）

愛実 は心から、結婚式が待ち遠しいと思うのだった。

くくくくくくくくくく

（俺は頭がおかしくなったのか？）

階段の下で立ち止まり、恥ずかしそうに俯く愛実を見た瞬間。

藤臣は彼女を抱き上げ三階の私室に駆け上がり、ベッドに押し倒そうかと真剣に考えていた。

化粧室前の壁にもたれ掛かり、腕を組んでなるべく冷静になろうと努力する。

幸いと言っべきか、暁の不意打ちで下半身は落ち着きを取り戻していた。だが、この調子ではどこまで持つか判ったものではない。

愛実の口から藤臣への想いを聞き、予想が当たっていたことに彼の中のストッパーが外れた。堰を切ったように感情の波が押し寄せ、気づいた時には奪うように口づけていた。

（なんという様だ。約束も誓いもあったもんじゃない！）

藤臣は髪の中に手を入れ、掻きまわるようにする。

その時、空いた皿を抱えパーティフロアから出て来た年配のメイドが彼の前で立ち止まった。メイドは藤臣の顔を物珍しそうに見ている。直後、ハツとした顔をして「失礼しました」と厨房の方に足早に消えて行く。

今度は逆だ。厨房から戻って来た別のメイドが、またまた藤臣の顔を凝視する。

「どうしたんだ？ 私の顔に何か付いているのか？」

きつめの口調で問い掛けると、そのメイドも「いえっ！ 申し訳

ありません」叫ぶように言い、立ち去る。

（何なんだ！？ 俺が何をしたって言うんだ！）

その時、義父の弘明と執事の糸井が何事か話しながら藤臣の前を通り掛った。執事は彼の顔を見るなり気まずそうに視線を逸らす。しかし弘明のほうは、苦笑しつつ藤臣の前までやって来た。

弘明は胸ポケットから白いハンカチを取り出し、藤臣に向かって差し出した。

「珍しいな、君がそんなところを見せるなんて。まあ、愛実さんの口紅と同じ色だから、問題はないんだがね」

藤臣はハツとして口元を押さえた。

「なるほど、皆が顔を背けて笑うはずだ。……ちょっと失礼します」

藤臣は出て来た愛実を弘明に任せ、入れ替わるように紳士用に駆け込んだ。

鏡に映る自分の間抜けさに、彼は笑うしかない。セックスは排泄と変わらないがキスは違う。そのせいか唇を重ねることに抵抗を感じ、何年もして来なかった。当然、口紅のことなど考えたこともない。

あれは素晴らしく甘い、身も心も蕩けそうな？キス？だった。

愛実も決して嫌がってはいなかったように思う。それも当たり前かも知れない。なぜなら、愛実が『藤臣が好き』なのだから……。

抱き締めた彼女の身体も、熱く高ぶっていた。もっと、もっと味わってみたい。もっと強く深く、何度も、何度でも、愛実と唇を……いや、体を重ねてみたかった。

だがそれは、『好き』という気持ちにつけ込むことになる。

藤臣が狂おしいほど渴望しているのは、ただの色欲だ。愛実をセックスの対象に見ているに過ぎない。どうやら藤臣の中には、制服姿の少女に対する歪んだ欲望があったようだ。新雪を踏み荒らし、我が物にしたいという汚い欲望が。

（このままじゃ、遠からず愛実本性を知られる……もし、そうなら）

藤臣が頭を冷やしパーティフロアに戻った時、そこは異様なムードに包まれ……。

第41話 期待（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

エントリーしておりましたアルファポリスの恋愛大賞が終了致しました。

ありがたいことに終始一桁の順位にいたように思います。

（追記・最初の頃に二桁もあったとか：ごめんなさい、本人なのに覚えてませんorz ずっと見てくれてた方かな？教えてくれました！どうもありがとう（^^）／）

ご覧下さった皆様、さらにはご投票下さった皆様、本当にありがとうございます。うございました。

応援メッセージもたくさん頂き、嬉しい限りです（感涙）

あと2回（多分）で4章が終わります。

今後ともよろしくお願い致します（平伏）

第42話 艶聞

「君はどんな魔法を使っただい？」

弘明と一緒にパーティフロアに戻るように言われ、愛実が藤臣の言葉に従った。本当を言えば外で彼を待っていたかったのだが、ほんの数分離れるだけだと自分を言い聞かせる。

すると、弘明が愉快そうに藤臣の変化を愛実に尋ねたのだった。

「別に、魔法なんて……。わたしのほうこそ、いつも藤臣さんに助けて貰ってます」

藤臣はいつも愛実の窮地に現れる。魔法を使っているのは、彼女ではなく藤臣のほうだろう。さっきのキスも……恋の魔法にかかられた気分だ。思い出すたび頬が熱くなり、愛実はふわふわした気持ちでつい笑みを浮かべてしまう。

その時、愛実の背後から陰のある声が聞こえた。

「愛実様、お聞きしたいことがあります」

それは藤臣の愛人を名乗る千里であった。

白いブラウスに紺色のロングスカート、白い前掛けを付けた彼女は意地悪そうな笑みを浮かべている。

藤臣は、「約束は守る」「不実な真似は絶対にしない」そう言っていた。でも過去は……彼は千里にも、あんなキスをしたのだろうか？ 愛実の中に芽生えた女の感情が、千里に対する笑顔を引き攣らせる。

「なんででしょうか？」

「ハンカチを落とされておりませんか？　これを拾ったのですが」それは確かに愛実のハンカチだった。

化粧室で見つからず、備え付けのエアタオルを使用したのだ。

「はい、わたしの物です。わざわざどうも、ありがとうございました」

気に入らない女性とはいえ、礼はちゃんと言っべきだ。愛実はそう思い頭を下げた。

ところが、受け取るうとした愛実の前で、ハンカチをふつと上に持ち上げ、ひらひらさせる。

「いつ何処で落とされたか、覚えておられます？」

「え？　いいえ……落としたことに気付いたのがついさっきなので」

すると、千里は片側の口角を吊り上げ、笑いながら言ったのだ。

「そうでしょうねえ。暁様との逢引現場ですもの。やることに夢中で、お気づきじゃなかったんでしょうねえ」

彼女はいきなり大声で、それも、とんでもない内容を口にした。

周囲の人間は驚き、一斉に愛実を見る。

「なんっ！？　仰る意味が判りません！」

「いやですわ、とぼけて……。私、見たんですよ。二階の化粧室でコソコソと会われてたでしょう」

横から、「君、めったなことを言うもんじゃない。使用人の分を弁えなさい！」弘明が千里を叱り付けるが……。

「僕も聞いたよぉー」

ヘラヘラと笑いながら、口を挟んできたのは宏志だ。

「僕の部屋は近いからね」。すっごい女のヨガリ声が廊下まで丸聞こえだったなあ。確か……愛実さんの少し後に、暁さんが入って行

ったのは見たけどね」

千里と宏志はグルなのだ。

そもそも愛実を二階に連れて上がったのも、この二人の企みである。仮に暁が化粧室に入る所を見たのだとしても、宏志は藤臣が中に居たことを知っているはずだった。

（まさか……暁さんと朋美さんも？）

朋美はともかく、暁までもが彼らと組んでいるとは思いたくない。だが、藤臣は暁を『冷酷な男』と言っていた。それを考えれば、愛実はいったい誰を信じ、誰に警戒すればいいのだろうか？

困惑する彼女に追い討ちを掛けるように、

「あら、暁さんはホント、面倒な相手に手を出すのが好きだから……ねえ、弘明さん」

嫌味たっぷりに、加奈子は囁し立てた。

弘明は加奈子が苦手らしい。彼女の参戦に、愛実を庇う言葉が出て来なくなった。

この加奈子の台詞に、愛実に加奈子だけでなく弘明も、暁と朋美の關係を知っているのだ、と気がついた。思えば、初対面の朋美の態度は普通では考え難いものだ。暁にしなだれ掛かり甘える姿は、まるで夫婦か恋人同士に見えた。

この加奈子の言う？面倒な相手？とは間違いなく朋美のことなのだ。

宏志や加奈子の加勢に気をよくしたのか、千里は更に声を上げる。「それだけじゃありません。ゴミ箱にティッシュが捨ててありました。詳しく言わなくてもお判りでしょうけど、持ってきてお見せし

てもいいんですよ。愛実さんのハンカチは、そのゴミ箱の横に落ちてたんですから。私……藤臣様がお気の毒で」

千里はわざとらしく頬を押さえた。

当の暁に否定して貰おうとフロアを見回すが、彼の姿はどこにもない。

だが、朋美は加奈子のすぐ後ろに立っていた。彼女の表情は凍りつき、愛実と視線が合った途端、顔を逸らせたのだ。彼女にとって是不倫の関係である。余計な口を出して、喘ぎ声の張本人が自分であると暴露されるのが怖いのかも知れない。

「愛実様、答えて頂けませんか？ 大奥様はとても厳しい方ですのに、このことはご存知なんでしょうか？ 私どもにすれば、とても若奥様なんて呼べませんわ」

愛実は迷っていた。

真実を言えがいい。だが果たして、暁と朋美の情事をバラしても良いものだろうか？ 加えて、宏志の悪事を明らかにすれば、母親の加奈子はムキになって否定してくるだろう。それに、藤臣と千里の関係は絶対に口にしたくない。

上手くかわす言葉が見つからず、愛実は無言で唇を噛み締める。

「答えられないという事は、お認めになるんですね？」

千里は勝ち誇ったような顔になる。

「まあそうなの？ あなた、親族を集めた顔見せの席なのよ。それを、なんてふしだらな……」

加奈子が大仰な仕草で愛実を糾弾しようとした時。

「私が強引に引つ張り込んだんです。婚約したんですから、少しは

大目に見て貰えませんか？ 伯母上」

そう言って姿を見せたのは藤臣だった。

「それは……どういう意味なの？ 藤臣さん」

険を含んだ加奈子とは対照的に、答える藤臣は至って柔らかな口調だ。

「彼女に上の階を案内していたんです。ついでに二階の化粧室に寄って……詳細はご容赦下さい。暁さんは主役が引き籠もるなど、探しに来てくれただけです。まあ、彼には少々、恥ずかしい所を見せてしまいました」

藤臣は照れ笑いを浮かべつつ、愛実の横に立ち、当たり前のように腰を引き寄せた。

二人の間に親密な空気が流れる。それは男女の関係を匂わせるのに充分なもので……千里の勘違いで話は落ち着いたのであった。

「あの、藤臣さん、ありがとうございます」

（やっぱり、来てくれた！）

愛実の心は浮き立っていた。

他の誰が信じられなくても、藤臣だけ信じて待っていればいい。彼は愛実のヒーローなのだ。白馬に乗った王子様のように、飛んできて愛実を助けてくれる。

恋に浮かれる彼女は嬉しさのあまり、自分から藤臣に寄り添った。直後、さり気ない動作で藤臣は愛実から離れたのだ。

「宏志の阿呆はもう逃げやがったな……。宮前の件はちゃんとしておく。二度とこんなことはない」

藤臣は舌打ちして辺りを見回しながら言う。

ズキンとした胸の痛みを感じつつ、愛実も周りに目をやった。場違いな普段着姿の宏志はどこにもいない。藤臣の登場に大慌てで逃げ出したようだ。千里すらその辺にはいなかった。

そして……次に愛実が美馬邸を訪れた時、藤臣の逆鱗に触れた千里の姿は消えていたのであった。

第43話 迷走

藤臣が運転する車に乗るのはこれで二度目だ。

一度目は信一郎に襲われた時で、愛実とはほとんど覚えていない。あの夜もポルシェだったはずだが、愛実の中ではハンドルを握る彼を見るのは初めての気分だった。

ギアをチェンジする指先がカッコよく見えるのはなぜだろう。ちらつと視線を上げると、前髪が少し乱れて額にパラパラと落ちていた。プライベートではいつも前髪を下ろしたままだ。そして、仕事に行く時だけ綺麗にセットする。

ほんの短い期間だったがホテルの一室で藤臣と一緒に過ごし、愛実は彼のいろんな面を知った。

愛実の場合、どんなことでも記念や思い出に、と色々残してしまう。ホテルに置かれた冊子や、彼と一緒に入ったお店のコースターまで。よろしければどうぞ、とお店の人に一枚貰い、愛実は笑顔で礼を言った。小さな頃から集めた思い出の品は、ダンボール箱に入った宝物だ。

だが、藤臣は違った。

必要なものを最小限、というのが基本らしい。写真の類が嫌い、携帯カメラで撮ろうとしても嫌がられる。過去はさっさと忘れ、未来に過大な期待もしない。それはひどく刹那的で、愛実には殺伐とした生き方に映った。

（わたしが藤臣さんを変えられたら……今よりもっと好きになったら、二人で一緒に未来を語れるかも知れない）

そんな愛実の胸に、わずかだが影を落としていたのは藤臣の些細な仕草だ。

傍に寄ろうとする彼女とは逆に、藤臣は離れようとした。最初は気のせいかと思ったが、何度も続くと愛実是不安になる。

だが今の彼女は、感情の大部分が？初めてのキス？で占められていた。小さな不安など、見えなくなるくらいに。

ポルシェが西園寺邸の門の前に停まった。

数年間誰も住んでいなかったせいで、邸内だけじゃなく庭も荒れ放題だ。庭師に頼む余裕がないため、愛実が弟妹に手伝わせてせつせと手を入れている。特に門扉の辺りはお客様を迎える為に、真つ先に綺麗にしたばかりだ。

愛実が車から降りると、藤臣も降りて来た。

車内ではずつと難しい顔をしたまま、彼は無言で……。愛実から話しかけるタイミングが掴めず、結局、会話のないまま家に着いてしまった。

門の前で愛実は立ち止まる。

別れ際のキスというのは映画やドラマでもよく見かけるものだ。ひよつとしたら、と愛実は密かに期待していた。

愛実がそつと藤臣を見上げると、彼は呼応するように視線を逸らせたのである。

「さつきは済まなかった。暁さんたちに当てられたらしい。……男って奴はこれだから始末に負えないな。もう、二度とあんなことはしないつもりだ。君が結婚を取りやめる気になってないといいんだが」

それは愛実が一番聞きたくない言葉だった。

心底申し訳なさそうな……藤臣の謝罪。積み上げた期待は脆くも

崩れ、独りで浮かれていた自分がとんでもなく恥ずかしい気持ちになる。

「い……え、特に気にしてませんから。あれくらい……何でもありません」

胸の奥から押し出すように答えた。

喉が詰まって苦しい。息をするだけで、涙が零れそうになる。

「ああ、それは良かった。だが、誰とでもしないでくれよ。朋美のような真似をされたら、私の恥になるから困る」

「……判ってます。お話がそれだけなら……おやすみなさい」

愛実はずつと頭を下げ、藤臣に背中を向けた。

背後で運転席のドアが閉まり、続けてエンジン音が聞こえた。あとという間に車は見えなくなる。辺りは水を打ったように静まり返った。

温かかった心が氷水に浸されたように冷たくなって行く。立っているのも辛くなり、愛実が門のすぐ内側に座り込み、声を殺して泣くのだった。

愛してる。本当の結婚にしないか？

そんな風に言われるとばかり思い込んでいた。だが、この結婚は取り引きなのだ。愛実の一家が救われて、藤臣にとっても都合が良かっただけのことなのに。

あのキスには、特別な意味は何もなかった。

弘明の言葉にも気を良くして、愛実が勝手に浮かれていただけで

ある。

（もう絶対、勘違いしない。藤臣さんが好きって態度は取らない。もう……これ以上、好きにならない）

初めてのキスと失恋は、愛実の心を頑ななまでに藤臣から引き離した。

今度は正式な婚約パーティがある。そして、準備が整いしだい結婚式が待ち構えているのだ。それは愛実が初めて好きになった彼と……でも、決して振り向いてはくれない男性と。

薄いボレロ越しに、春の夜風が肌に染み込んで行く。心も体も、愛実は凍えそうに寒かった。

くくくくくくくくくく

しばらく走って藤臣は路肩に車を停めた。抱き付くように、ハンドルに顔を伏せる。

（愛実を泣かせたかも知れない……）

迂闊にも近づき過ぎた。あんな風にキスしたことで、愛実に期待を持たせてしまったのだ。衝動に突き動かされ、彼女を欲しいと思う時はいい。だが、その熱が引くと後味の悪さだけが彼の中に残った。

愛実を妻にして、ごく普通の家庭を築くことが出来たらどれほど幸せだろう。
だが。

藤臣が愛実に告げた『祖母の財産を相続したい理由』のほとんどが嘘なのだ。会社を継ぎ、美馬邸を彼の名義にした時は……会社も家もバラバラにして叩き売る。家族の将来も、社員の生活も知ったことではない。

ただ？美馬？の名が付いた全てを踏み躪り、粉々にしてやりたい。その一念で、彼は生きてきたのだ。

（この結婚が、人を不幸に陥れる為だと知れば……愛実はどうするだろう）

憎かった。？美馬？の全てが、自分の中に流れる血さえも、藤臣には憎くて堪らない。愛など、生まれた時から一度も与えられた記憶がない。愛実は、藤臣の両親も彼を見守っている、と言ったが……それはあり得ないことだった。

一志が藤臣に遺産を残したのは、息子が彼ひとりだったからに過ぎない。

貧しい家の出身だった一志は、その商才だけで身を立てた男だ。美馬の婿養子になり企業家としては出世したが、弥生の両親が存命中は何一つ自由にならなかったという。

彼が暴君に変わったのは、弥生の両親が立て続けに亡くなった後だった。そうでなければ、藤臣を引き取ることなど不可能だっただろう。自分が駒にされた腹いせに、一志は他の人間を駒にした。そして今度は、藤臣が彼らを駒にする番だ。

愛実は決して、恵まれた人生を送っているとは思えない。なのに、誰も恨まず人間を信じる強さを持っている。藤臣とは生きる世界が違ふ。

（だが、後から付け足した言葉は……あれは……）

心にもない悪態をついたのは「何でもない」という愛実の言葉に
擡もたげた男の嫉妬。捨て切れぬ恨みが藤臣の目を曇らせ、愛実を
求める心に目隠しをする。

彼は出口を失った愛情を抱え、闇の中にアクセルを踏み込んだ。

第43話 迷走（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

今回で第四章が終わり、次回から第五章へと進みます。

ちょっと切ない引きですが…

次章開始まで、少しお時間を下さい。

来週中には始めますので、よろしくお願い致しますm——m

第44話 整理

深夜二時、藤臣は祐天寺駅に程近いマンションを訪ねていた。入り口の見える場所に車を止め、彼は携帯電話を掛ける。

五回コールして相手が取るなり藤臣は言った。

『私だ。今から行く』

『えっ……ここに来るの？ 本気で？』

電話の相手は仰天して、それ以上は言葉も出ない。

『何か、不味いことでもあるのか？』

『そ、そんなはずないじゃない。ここに来てくれるなんて、初めてだから……うれしいわ』

その取ってつけたような台詞に藤臣は苦笑して電話を切った。女優業にも色気を見せているようだが、この大根ぶりでは話にならない。彼は煙草に火を点け、「三十、いや、二十分もあれば充分か……」そう呟いた。

目立つ車だが、ちょうどマンションの玄関口からは死角だ。もともと、マンション自体が引込んだ場所にある。最寄の駅まで徒歩三分、都心にも近く隠れ家的マンションと言うのが？ 売り文句？ だったように思う。そのため、外見はかなりシンプルで入り口も狭く、四階建て、総戸数十四戸という小さめのマンションだった。

そこは、藤臣が愛人の長瀬久美子に買ってやったマンションだ。だが、来たのは今日が初めてで、彼はオートロックの番号すら聞いてなかった。

二十分経ったが人が出てくる気配はない。諦めて藤臣はマンションの専用パーキングに停め、エントランスに向かった。ドアホンを鳴らすが中々出ない。その時、ちょうどエレベーターの扉が開いた。

降りて来たのは水商売風の若い男だ。酒の匂いをプンプンさせている。その中に男性用コロンの香りも混じっていた。男はすれ違い様、チラリとこつちを見た。

その思わせぶりの視線に気付かない振りをする藤臣だった。

くくくくくくくくくく

「随分、酒臭いな」

ドアが開くなり、藤臣は我が物顔で部屋に入って行く。

久美子は慌ててスリッパを差し出した。

「眠れなくて……少し飲んだの」

濡れた髪をかき上げながら、久美子は答えた。

特に変わった間取りでもない、一LDKのマンションである。案内の必要もなく、藤臣はつかつかと奥の部屋に入って行った。彼は上着のボタンだけ外して、カウチソファに座り込む。

その瞬間、室内の空気がふわっと広がり、さっき嗅いだばかりのコロンの匂いが彼の鼻腔をくすぐった。

（まあ、こんなもんだな……）

片笑みを浮かべ、藤臣は尋ねる。

「オートロックを開けるのに、あんなに時間が掛かるものなのか？」

「シャワーを浴びてたのよ。あなたが来るって言うから」

甘い声で言いながら、久美子はナイトガウンを脱ぎ捨てた。彼女は黒いシースルーのベビードールを着ている。ショーツも黒のTバックで、生地は必要最小限といったものだ。

「ねーえ、藤臣さん、どうしたの？ 部屋には来ないって言ったくせにいい。そんなにあたしが欲しかった？」

久美子は藤臣の隣ではなく、膝の上に乗リ掛かった。品しなを作りながら、彼女は両腕を藤臣の首に巻きつかせる。

こういう女の仕草に満足していたはずだった……これまでは。

愛実を見るだけで欲情し、頭の中はセックスで一杯になる。まるでやりたい盛りの中学生だ。おまけに下半身の反応も中学生男子と大差ない。それが、久美子の誘惑には沈黙したままだ。

彼女の顔を見る前は、

（別れ話をする前に、性欲の処理だけさせてもらおう……少し余分に払ってやればいい）

嫉妬を含む愛実に対するやり場のない感情を、久美子にぶつけるつもりだったのだ。

「下りてくれないか？ これじゃ真面目な話が出来ない」

藤臣の冷やかな声に久美子も何か感じ取ったらしい。

「いやだわ、そんな怖い顔して……」

無造作に彼女の腕を払いのけ、藤臣はソファの隅に座り直す。

もしこれが愛実であれば、間違いなく泣き出しただろう。愛実は藤臣の実像とは掛け離れた位置に、理想の男性像を重ねている気がしてならない。女を道具のように扱う彼の本性を知れば……「好きです」という言葉も取り消すだろう。

一方、久美子はそんな藤臣しか知らない女だ。彼のつれない態度は慣れているらしく、まるで気にしていない様子で、「飲む？」と新しい缶ビールを差し出した。藤臣が断わると、久美子は自分で飲み始める。

「そうだわ、思い出した！ ねえ、来月は東部デパートの開業記念パーティなんですって？ T国ホテルであるそうじゃない。もうっ、どうして早く言ってくれないのよ。今からじゃ、新しいドレスが用意できないわ」

唐突に声を上げ、久美子は缶ビールをテーブルに置いた。心底困った表情で、ソファの背に肘を掛けて額を押さえている。

「 必要があるのか? 」

「何言ってるの!? あたしが着飾らないと、あなたがパーティで恥を掻く事になるのよ。そうでしょ? 美馬社長さあん」

どうやら久美子は完全に、今度のパーティにも藤臣のパートナーとして出席すると決めているらしい。確かに、これまで大きなパーティには久美子を伴うことが多かった。マスコミの目を引き、記事にするための手段だ。お手軽に宣伝効果が得られる、といったところか。

だが今回は、愛実のお披露目がメインのパーティだ。久美子に出席番はない。

「いや」

藤臣は煙草を取り出すと火を点け、短く希望を伝える。

だが、久美子は納得出来なかったようだ。

「それってどういうこと? まさか、年増の秘書と出る気じゃないでしょうね。あんなガチガチで色気のない女をエスコートするつもり? そんなの笑い者になっちゃうわ。秘書には秘書の仕事だけさせてりやいいのよ。あたしと一緒にのほろがマスコミも集まるに決まってるんだからっ」

大仰な手振りで、久美子は二歳しか変わらない由佳を年増呼ばわりした。

藤臣にはよく判らないが、この久美子是由佳に妙な対抗心を持っているらしい。由佳のほうもそのようだが、利口な彼女はそれを表には出さない。

そんな久美子のクレームを無視すると、藤臣はテーブルに置かれた陶器の灰皿に煙草の火を押し付け、ソファから立ち上がった。

「ねえ、何とか言つてよ、藤臣さん。仕事関係で呼ばれたパーティ以外は、トクに東部デパート主催の時は全部パートナーはあたしじゃない! 第一、デパートのイメージモデルなのよっ! ねえったら! 」

面倒な話は早く済ませるに限る。藤臣は久美子が外しかけたネク

タイを両手で締め直した。ブラックスーツにタイはシルバーのままだが、さすがにベストは脱いでいる。

「パーティの席で、婚約を発表する」

一瞬、何のことが判らなかつたらしい。久美子はポカンと口を開けたまま、呆然と藤臣を見上げていた。しかし、見る見るうちに彼女の顔は上気して、両手で頬を押さえたのだった。

第44話 整理（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

第五章スタートです。

少し長くなるかも…

よろしくお願い致しますm——）m

第45話 悪党

久美子は驚き、声を失った。

「この間も急に呼び出されたのよ。なんだかセックスの雰囲気も変わってきたし、いよいよあの男もあたしから離れられなくなったってことかしら？」

ほんの数十分前、この部屋のソファで男と戯れながら口にした言葉だ。

藤臣が来る直前に慌てて追い出した。若い男との浮気がバレて怒鳴り込んで来たのか、とビクビクしていたが、どうやら違うらしい。そして藤臣が口にした言葉。それは彼女の脳内で、『パーティーの席で、私たちの婚約を発表する』に都合よく変換されていた。

「ねえ、待って、ちょっと待って。いきなり、そんなこと言われても……あたしにも心の準備が」

藤臣は久美子の体に夢中なのだ。だからこそ、周囲から『公私混同・女の言いなり』と噂されても、久美子をイメージモデルに抜擢してくれた。

このマンションもそうだ。名義は藤臣のままだが、久美子の好きに使っている。海外出張にも彼女を同伴し、少しねだればブランド品も買いたい放題だ。そんな様子が写真週刊誌に掲載され、久美子は『御曹子の意中の恋人』『未来の社長夫人』と書かれたが、彼は一切否定しなかった。

（とうとうあたしのモノになったんだわ！）

この時の久美子には、怪訝そうに見下ろす藤臣の視線など気付くはずもなく……。

「準備？」

「ええ、そうよ。だって、あなた結婚はしないって……だから、あたしもずっとそう思ってたんだもの」

少し間を空けて藤臣は、「こっちにも都合があつてね。事情が変わったんだ。不満なのか？」と尋ねて来た。

「まさか！？ イエスよ。もちろん、イエスだわ。ああ、夢見たい！ 大丈夫よ、ちゃんと判ってるから。全てあなたの都合に合わせるわ」

婚約発表なら記者会見もあるかも知れない。

日本で一、二を争う財閥の御曹司に見初められて、億万長者の花嫁になる……久美子は夢のような出来事に酔っていた。

「それで、一つだけ確認しておきたいんだけど……。あの秘書はどうするの？ ええ、もちろん、あなたの好きにしてくれていいのよ。あたしは何人愛人がいても平気だわ。でも……」

次の瞬間、藤臣の相好が崩れた。

彼女は微妙な笑みを気にも留めず、彼の返事を待つ。

「ああ、なるほど。いや、私は結婚の誓いは守るつもりだ。全
ての愛人と手を切る」

久美子は顔を輝かせた。

（やったわ！ あたしの勝ちよ！）

心の中でガッツポーズをする。

藤臣の愛人兼秘書である奥村由佳は、有名私立大学を卒業していた。一方、久美子は高卒だ。そのため、ニューヨーク・パリ・ロンドンなど会議を伴う海外出張には一度も連れて行って貰ったことがない。久美子連れ回すのは、主に視察やレセプションに招待され

た時だけである。

初めてデパートの仕事で顔を合わせた時、「英語も話せないなんて……」そう言って鼻で笑われたことは、今でもしつかり覚えてい

る。でも、これからは違う。

由佳は久美子に対して、「奥様」と頭を下げる立場なのだ。久美子は今夜ほど彼女に会いたいと思ったことはなかった。

くくくくくくくくくく

最初は、久美子は何を言ってるのか判らなかった。

てつきり 自分との関係はどうするのか、契約を解消するなら違約金を払え、そんな言葉を待っていた。ところが、妙にニコニコとし始め、藤臣に抱きつかんばかりである。果ては、なぜか秘書のことまで口にして……。

ようやく、久美子がとんでもない勘違いをしていることに気付いた。

（何をどうすれば、そんなことを思いつくんだ？）

呆れ返ったが、これに乗らない手はない。先に言質を取っげんちてしまえばいい。

「じゃあ、それでいいんだな、久美子。 久美子！ 聞きいてるのか？」

藤臣の苛立った声に、久美子は頬を弛めつつ答えた。

「ええ、そう言ってるじゃない。嬉しいわ」

「このマンションだが、君の名義に変える用意がある」

「そんな……マンションなんて」

ついこの間まで、契約が終わったなら名義を自分にして欲しいと擦り寄っていたのが嘘のようだ。確かに社長夫人となれば、こんな数千万円程度のマンションなど、今更、に違いない。

「それから、東部デパートのイメージモデルの件だが」

「判ってるわ。モデルはすぐに辞めます」

「辞める？ 契約は来年の三月まであるんだが」

藤臣の言葉に久美子は気取った笑みを返した。

「いやあだ、もう……これから覚えなきゃならないことがたくさんあるじゃない。それに、社長夫人がモデルなんておかしいわ。あなただってそう思うでしょう？」

久美子が「社長夫人」と口にした以上、はつきり言わねばならない。

（それにしても……いい加減、気付きそうなものだが）

藤臣はため息を吐き、改めて久美子に告げた。

「久美子、君は人の話を聞いているのか？ 私は今度のパーティーで婚約を発表し、来月には丁国ホテルで挙式披露宴が決まった、と言ってるんだが」

「そんな、来月なんて早過ぎるわ！ ウエディングドレスだってすぐには……レンタルなんてあたしはイヤよ！ 第一、恥を搔くのはあなたよ」

「済まないが、私の挙式披露宴に君を招く予定はない。六月の挙式は花嫁も納得していることだ。ドレスの心配まで君がする必要はないよ。そういうことだ。私の都合に合わせてくれて感謝する」

藤臣は心にも無い感謝を口にする、上着のボタンをはめながら玄関に向かった。

その後を、久美子は小走りに追いかけて来た。

「待つてよ！　あなたは今、あたしにプロポーズしたんでしょ！？」
彼女は藤臣の左腕に縋りつく。

「プロポーズ？　……何のことだ」

「パーティで婚約を発表をするって、私たちのでしょう？」

「私の、だ」

「……他の、愛人とは手を切るって……」

久美子の声が途切れ、指先はワナワナと震え出す。

「全ての、と言っただろう？　君も了承してくれたじゃないか」

「ふざけないでっ！　こんな……こんな、人をバカにしたやり方……
…訴えてやるっ！」

予想通り、久美子は金切り声で叫び始めた。

「わずか一年半の愛人関係で、どれほどの慰謝料が取れると思ってるんだ？」

「婚約者も同然よ！　週刊誌に『結婚秒読み』とか書かれても、あなたは否定しなかったじゃない」

「肯定もしてない。君との付き合いはマスコミを利用した宣伝効果の意味もあった。このマンションは私の誠意だ。法的手段に訴えると言うなら、好きにすればいい。だが、君はすでに不相应なものを手にしている。弁護士にでも相談するんだな」

藤臣は抑揚もつけず、一気に言い放った。そのまま久美子の手を振り払い、靴を履く。

「許さないわ……こんな急に、ついこの間だって、あたしを呼び出して抱いたくせに……」

「宣伝費以上の金を、君にはつぎ込んでやったんだ。言われるままに脚を開くくらい、当然だろう？」

小馬鹿にした藤臣の言葉に、久美子は真っ赤になって手を振り上げた。だが、その手は彼の頬に触れる前に押さえられる。

「離しなさいよ！ 引っ叩いてやるわ！」

「女に叩かれる趣味はない。それと、女には手を上げない主義なんだ。ありがたく思え」

久美子は手を放された瞬間、玄関に座り込んだ。そんな元愛人には一瞥もくれず、藤臣はマンションを後にしたのだった。

第45話 悪党（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

ヒーローにあるまじき悪党ぶりですが…（^^;）

「こんな時だからこそ、一息できるものが…」そういったお声を頂き、ありがたい限りです。

おそらく、避難されてる方が目にされる余裕はないでしょうが…微妙な辺りで不自由に耐えておられる方の気休めにでもなれば、と思っております。

更新がんばります。

引き続きよろしくお願い致しますm（——）m

第46話 停滞

五月吉日、丁国ホテルで東部デパート創業七十周年の記念パーティが開催される。

日本最大級の宴会場？孔雀の間？が使われ、招待客は軽く二千人とも。ここ数年、これほどまで盛大に行われたことはない。東部デパートの場合、バブル経済の最盛期で迎えた五十周年以来の規模であろつ。

丁国ホテル、インペリアルフロアの一室。本皮のリクライニングチェアに座り、オットマンに足を投げ出しながら、藤臣はため息を吐いた。

テーブルの上には週刊誌が無造作に置かれている。美馬グループの記事が掲載されたものばかりだ。

「本当に手を切られるとは思いませんでした」

瀬崎は感心したように声を上げた。

久美子との関係を清算する為、手切れ金としてマンションを渡すという書類一式を目にしたせいだ。女性問題に関して、藤臣はほとんど信頼されていなかったとみえる。

「だが、サインせずに逃げ回っている。馬鹿な女だ。これ以上粘っても条件が悪くなるだけなんだがな」

ルーズに見えて、久美子は金には細かい女だ。藤臣との関係を一切他言しないという条件で、イメージモデルは契約満了まで続けら

れるように配慮した。加えて、それまでの月極め手当ても一括で支払うようにしてやったのだ。これ以上の条件はないはずだった。

「裏で入れ知恵する人間がいるのでは？」

瀬崎は書類を見ながら言う。

「そんなはずはない。ばあさんも、現社長の信二も、久美子との繋がりは皆無だ」

「暁さんはどうでしょう？ 信一郎様の件でも、色々暗躍されていたようですし……」

香港の一件だろう。暁がいち早く写真を手に入れたのは調査済みだ。情報を得ただけか、または、その情報元が久美子である場合も考えられる。

「まったく神出鬼没の奴だな。女なら誰でも、か……豚のように雑食な男だ」

悪態をつく藤臣に向かって、「そうですね。雑食など、ろくなことにはなりません」しみじみと瀬崎が言う。

（俺にも反省しろってことか…… ったく）

藤臣は咳払いをして、話を変えた。

「愛実の様子はどうか？」

「社長とお二人の時間がまるで取れないことを、非常に悲しんでおられました。結婚に向けてのスケジュール調整でお忙しいのです、と説明しましたが」

婚約披露パーティから、ひたすら愛実を避けてきた。

理由は簡単だ。二人きりになれば、欲望を抑える自信がないからである。少しでも時間が出来れば、思い出すのは愛実とのキスだ。出来ればもう一度、さらにはもっと先まで、そんなことに意識が集中している。

つい先日、会議中にボンヤリして「ご婚約が決まって、気もそろですな」そんな言葉で重役連中に笑われたばかりだ。

こんな調子で新婚旅行に行き、同じ部屋で寝起きして、平静でいられるのだろうか？ 藤臣にはどうも心許なく、余計に愛実の顔を見るのが怖かった。

藤臣が無言でいると、

「愛実様は社長のことを好きでいらっしやるようです」

瀬崎がポツリと言った。

「それはっ！ いや、それは、別に俺が仕向けた訳じゃ……」

(……いや、あのキスは、仕向けたことになるのか？)

次第に声が小さくなり、藤臣は再び黙り込む。

「よろしいと思いますよ。このまま愛実様を妻に迎えられて、普通の家庭を築かれてはどうでしょう？ 復讐の形は一つとは限りません。社長が幸せになれることも、充分な復讐では？」

瀬崎は藤臣の積み重なった憎しみを知っていた。全て承知の上で、彼は補佐してくれたのだ。そして生真面目さゆえに、藤臣の気持ちに復讐以外に向けようと努力している。

「そうだな……あの外道が生きていれば、俺もそう出来たかも知れん。だが、さつさと死んだ拳げ句、感謝しろとばかりに認知して財産を残しやがった。叩き壊してやる以外に、どんな仕返しがあるんだ？」

「では約束通り、愛実様を形ばかりの妻にして、いずれ自由にして差し上げる、と」

「……ああ……そのつもりだ」

瀬崎は息を止め、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「その時は社長、私が愛実様に交際を申し込んでも構いませんか？」

正式な婚約者お披露目当日、瀬崎から正面切って言われるとは思わず……言葉を失う藤臣だった。

くくくくくくくく

二人の婚約が発表されたのはパーティ前日のこと、スポーツ紙朝刊がそれを報じた。

『財界のプリンス・美馬藤臣氏（二十九歳）ついに結婚！ 婚

約者はなんと十八歳の女子高生・西園寺愛実さん』

『美馬グループの次期総帥・美馬藤臣氏に十八歳の花嫁！ 旧華族のご令嬢・西園寺愛実さんは現役女子高生』

愛実の学校名からフルネーム、ツーショットの写真入りで載せられたのだ。もちろん、藤臣側から提供したものだと聞いている。

美馬の祖母・弥生と愛実の祖父・西園寺亘は旧知の仲で、縁組は弥生が熱望するものだった。しかし弥生は政略結婚を望まず、孫息子たちと愛実を引き合わせただけに留める。

その中で藤臣と愛実が惹かれ合い、親交を深めることに。結果、愛実の十八歳の誕生日を機にプロポーズして結婚が決まった。愛実はまだ若く、高校在学中だ。だが二人は弥生の年齢や体調を考慮した上で、今年の六月、丁国ホテルにて挙式披露宴を行うことに決した。

それに先がけて、藤臣が社長を務める東部デパート七十周年記念パーティーの席上にて婚約発表を行う。

以上が記事の内容であった。

パーティー当日の朝、母は華やいだ衣装に身を包み嬉しそうだ。愛実は自分よりはしゃいでいる母を、思いのほか落ち着いた気持ちで見ている。

藤臣と婚約する、そんな書類に愛実がサインをしてから、母がお金のことで煩く言わなくなった。瀬崎に確認したところ、藤臣が現金を渡したはずはない、という。そうならば、金の出所は弥生で間違いないだろう。

あの親族に向けた婚約披露パーティー以降、藤臣と二人きりで会うことはなかった。藤臣に避けられている気がしてならない。それも瀬崎に伝えたが、「気のせいですよ」と笑顔で返された。

（多分、わたしが「好き」なんて言うってしまったから……）

あのキスは単なる『当てられただけ』のキスだったのだ。大人の女性なら軽く笑って流してしまうようなキス。それなのに、愛実から真剣な表情で想いを告げられ、藤臣は困っているのだろう。

今度会ったら「好き」を取り消そう。何でもない顔で「キスくらい平気」と言ったら、またホテルで過ごしたような時間を持てるかも知れない。

その感情が、すでに「好き以上」であることに気付き、涙が込み上げてくる愛実だった。

第47話 記事

今、愛実がいるのはホテルの美容室だ。パーティ直前にヘアメイクをしてもらっていた。

愛実より遥かに年上の美容師たちは、当然主役である彼女に気を使い、完全にお姫様扱いである。その反面、これまで藤臣が噂になった女性たちとまるで違うので、色々気になるのは確からしい。

「今朝の新聞を読ませて頂きました。まあ、本当にお幸せそうで……お似合いですわ」

美容師は数人いて、皆が同じように頷いている。全員が綺麗に眉を描き、鮮やかな口紅を塗り……当たり前だが、仕事をしている大人の女性ばかりだ。愛実には気後れすることこの上ない。

それだけでなく、愛実自身が彼とは歳が離れていて、不釣合いだと感じているのに。お世辞と判る分だけ胸が切なかった。

「ありがとうございます。でも、十二年も離れていますから。わたしはこういった席に出るのも初めてで、何も判らないんです」

「あら、年齢なんて関係ありませんわ。こちらのパーティドレスも美馬様がお選びになられたとか。わたくしどもも、お嬢様のご希望に添って最善の仕事をするように、と美馬様から申し付かっておりますし……。こんなに愛されておいでで、羨ましい限りですわ」

愛実は髪を梳く美容師の言葉に驚いた。まさか、藤臣がそんな気遣いを示してくれたなんて。

「それは、藤臣さんから直接ですか？」

パツと明るくなる愛実の声とは逆に、美容師のトーンは下がった。「あ、いえ……直接ではなかったような。秘書の男性からお電話い

ただいて。あ、でも、美馬様のご命令と仰っておられたので」

それは、おそらく瀬崎であろう。彼なら、命じられなくても愛実の気持ちを考え、手を回してくれるはずだ。

ここしばらく、瀬崎と話す機会が多くなっている。

理由は簡単だ。藤臣が仕事と言って断わるたび、瀬崎が申し訳無さそうに愛実の相手をしてくれる。彼女が聞かなくても、「結婚式や新婚旅行の予定を空ける為に、懸命に仕事を片付けておいでして……」そんな風に説明してくれるのだ。

困っていることはないか、欲しいものはないか、と心配してくれるのも瀬崎だった。そして、藤臣の命令だと言って様々なフオーローしてくれるが……きっと瀬崎の配慮に違いないと愛実は思っている。そしてこのパーティドレス。

花嫁衣裳を思わせる純白のドレスだった。丈が膝より少し下で、スカート部分のシフォンが柔らかいピンクでなければ、ウエディングドレスと間違いそうである。ピンクのショールにローヒールのパンプス。長い髪はピンクのリボンと一緒にふんわりと編み込み、生花で留めた。

美容師はこの髪型も藤臣の指示だというのが……。

「子供っぽく見えませんか？ 藤臣さんには、余計に不釣合いに思えて」

言った後で、愛実美容師たちの気分を害したのではないかと気になり始める。彼女らの仕事ぶりに文句を言うつもりなど更々ない。愛実が閉口していると、

「まあ、とんでもありませんわ！ 髪型もドレスも、よくお似合いでしてよ。お若くて可愛いお嬢様の長所が引き出されていて……自然が一番ですね。美馬様に合わせたファッションは、あと十年してからで充分じゃないかしら」

優しい笑顔で言われ、愛実の顔も綻んだ。

くくくくくくくく

『現役の女子高生が社長夫人へ』 『東部デパート美馬社長の十八歳の花嫁』

マンションのリビングに数枚のスポーツ紙が散乱していた。どの見出しにも、藤臣の記事にはそういった謳い文句が書かれている。

『旧伯爵家のご令嬢』の文字も多い。

しかも、婚約者の愛実はおどした笑顔をカメラに向け、まるで垢抜けない田舎娘のようだ。そんな小娘の薬指に光っているのは三カラットのダイヤモンドリング。ティファニーの商品で軽く八桁はする品だと本文に書いてあった。

（散々遊んだ挙げ句、こんな捨て方……許せない。絶対に許さないわ！）

久美子は缶ビールを片手に部屋の中をうろつろした。

そのついでとばかり、床に広げた新聞の愛実の写真を踏みつけにする。とくに指輪の辺り このエンゲージリングを貰うのは自分だったのに、という思いが強い。

（ 結婚？ それも女子高生ですって？ 冗談じゃないわ。一生結婚はしないなんて、あたしには言いながら……ぶち壊してやる）

藤臣が久美子を捨てたという噂は瞬く間に広がった。

すると、手の平を返したように多くの人間が久美子の近くから去

って行つたのだ。女優デビューの話も「なかったことに」なんて、あんまりではないか。所属事務所の社長にすら、東部デパートの契約が切れる来春以降、事務所との更新もなしと言われた。藤臣のバックアップがなくなつた途端、久美子には用無しと言わんばかりだ。そして、彼女を切つたのは事務所だけではなかった。

「久美子さん、さあ……東部の社長さんと別れたんだ」

藤臣が訪ねて来た夜、会っていた男は歌舞伎町のホストだった。

その男が、久美子の顔を見るなり言つたのだ。

「だったらさ、うちの店にはもう来れないよね。俺たちも別れようか」

金なら心配はいらない。藤臣には充分なものを貰っているから、久美子はそう言つたが、男は軽く笑いながら彼女の手を振り解きいなくなつた。携帯番号も変えられ、店にも要注意客とされて入れなくなつたのだ。

（幸せになんかさせるものですか。十八歳の花嫁ですつて。こんな何の苦勞も知らない小娘が社長夫人だなんて。こんな子供に負けるなんて、絶対に許さないんだから）

久美子は双眸に憎しみの炎を灯し、写真の愛実を睨んだ。スポーツ紙を拾い上げ、ビリビリに破り捨てる。そして、肩で息をしながら……ニヤリと笑つたのだ。

彼女が時間稼ぎのように逃げ回っていたのには、もちろん理由があつてのこと。

（美馬藤臣はあたしのものよ。必ず妻になつてみせるわ！）

久美子是不敵な笑みを浮かべながら……そつと下腹部に手を添え

た。

第48話 衆目

藤臣のエスコートで、愛実会場に足を踏み入れた。

とくにライトが当てられるわけではないが、やはり、周囲の視線は一気に集中する。誰もが女子高生の婚約者に興味津々といった様子だ。

頭の中は真っ白になり、愛実の目には赤い幾何学模様の絨毯と多くの足しか映らなくなった。彼女が俯いているせいなのだが、今度は数え切れない足の本数に圧倒されてしまう。会場の熱気が愛実の耳に流れ込み、ひそひそ話や笑い声が全て自分のことのように感じてくる。降り注ぐシャンデリアの光さえ、愛実の幼さを責めているようで……彼女は居た堪れなかった。

「大丈夫。何も心配は要らない。私が傍に居る」

藤臣の左腕に絡めた愛実の指先に、彼の右手が重なった。小刻みに震える愛実の手をギュツと握り、耳元で「大丈夫だ」と繰り返す。今日の彼はジョルジオ・アルマーニ・ハンドメイド・トゥ・メジヤーのタキシードを着用していた。体にピッタリフィットして、洗練された藤臣のイメージをさらにクールに魅せている。綺麗にセツトされた前髪と仮面のような笑顔が彼を遠くに感じ、愛実はその前髪をくしゃくしゃにしたい衝動に駆られていた。

（もう……わたしったら、なに馬鹿なこと考えてるの）

愛実は深呼吸して、声を出さずに藤臣の腕を握り返した。

パーティーでは久しぶりに母方の親戚に顔を合わせた。

愛実の父が生前、親戚中に借金をし回ったせいである。母は厚顔にも借金を重ねようとしたが、愛実にすれば顔を合わせるのも辛かった。疎遠になっていたが、今回のパーティーに合わせて藤臣が全て返済して親戚一同を招いてくれたのだ。

彼らは口々に「綺麗になったねえ、愛実ちゃん」「これでお父さんもホッとしているよ」「本当におめでとぅ」と祝ってくれる。

父があればほど迷惑を掛けたのに、こうして東京まで来てくれた親戚たちの心遣いが、愛実は嬉しかった。

今回は表向き、東部デパート創業七十周年記念パーティーである。

婚約発表はついでのような扱いだが、内実、弥生が次期役員会で藤臣を社長に推薦する、という発表を兼ねていた。

現会長である弥生は、娘の夫である信二を一旦社長に据え、孫息子の信一郎か和威に後を継がせるつもりだ、と言われていた。藤臣がいくら優秀でも所詮は養子。事情を知る者の中では、愛人の息子を後継者にはしないだろう、といった噂も流れていたのだ。

そんな中、結婚を条件に弥生が藤臣を後継者と認めた、と経済界に広まり……。その真相を確かめるべく、多くの関係者が招待に応じた。かつてないほど盛大な規模になったのは、そういう事情もあったのである。

愛実が藤臣に説明されたことを思い出しながら、少しずつ落ち着きを取り戻していた。

こうして眺めると、男性客は年配の人が多く感じる。ちらっと見掛けた和威が一番若いくらいで、二十代らしき人々はほとんどいない。藤臣は常に年上の人たちに囲まれ、それでいて気後れる様子もなく対等に談笑していた。

そんな藤臣を見ると、愛実は落ち込む一方だ。冷静になればなるほど、差が歴然としてくる。

彼女にとっては何もかもが初めて世界だった。美馬邸の親族を集めたパーティとは客層も違う。煌びやかな衣装にも、豪華なホテルの内装や様々な思惑を含んだ空気など、あまりに場違いだ。

たまに秘書の奥村がやって来て、藤臣の近くで耳打ちして去って行く。今日の彼女は、かつちりした印象はそのままだが、エレガントな黒のスーツを身に着けていた。動作も自然で、おどおどしている愛実とは比べ物にならない。マナーは全て付け焼刃で、相手が誰かも判らず、愛実には気の利いた受け答えも出来なかった。

「まあ、可愛いお嬢さんね。美馬さんがご結婚なさらなかったのは、こんなお嬢さんを隠しておられたからなのね。悪い方」

愛実はおちこちで「可愛い」「お若い」と言われた。お世辞と嫌味の両方なのだろう。

不安に押し潰されそうになる愛実を、藤臣はその都度庇ってくれた。

「さなぎが蝶になるのを待っていたんです。今はまだ、羽が柔らかくて羽ばたけません……あと数年で素晴らしく美しい蝶に育つはずだ。最高の花嫁ですよ」

人前だから、と判っていても藤臣の言葉は嬉しい。

中には西園寺家の窮状を知っていて、

「西園寺愛実さんとおっしゃったかな？ お父上が事業に失敗して大変だったそうですね。随分な借金を残されたとか……」

「そうそう……愛実さんはうちの系列のレストランで、遅くまで働かれていたとか。美馬社長とのご結婚が決まって一安心ですわね」

「お血筋のよろしい方は、お金には無頓着でいらっしゃるから。でも、可愛いお嬢様ですもの……お父様も草葉の陰でホッとして

おられますわ」

愛実がアルバイト三昧だったことを揶揄して、さも財産目当ての結婚であると言わんばかりだ。必ずしも違うとは言いい切れず、愛実は笑みを絶やさずにいるだけで精一杯だった。

そこに、酷く辛辣な言葉遣いで藤臣が口を挟んだ。

「どうでしょうか？ 施設育ちの私生児に、娘を嫁にやりたくなかった、と ご存命なら反対されるかも知れませんか」

藤臣を薄い笑みは、剃刀の刃のように彼らに襲い掛かる。

「仮に 昨今の不況で会社が傾いても、彼女なら赤貧にも耐えてくれるでしょう。私も後顧の憂いなく仕事に心血が注げますよ」
？優秀だが先代の操り人形？と言われていた藤臣の思いもよらぬ反撃に、多くの人間はタジタジになり逃げ出した。

「藤臣さんたら……メチャクチャだわ。あれじゃ、文句があるなら会社を傾けても勝負するぞ、って言ってるようなものですよ」

周囲に誰もいなくなり、愛実は話しかけた。

すると、藤臣は忌々しげに彼らの背中を見送りつつ、

「言ってるんだ。私にしても、美馬の家に引き取られるまでは、鉛筆一本にも不自由する生活だった。一度地獄を見た人間と、天国しか知らない連中とじゃ、勝負になるわけがない」

そう答えたのだった。

藤臣はウェイターを呼び止め、トレイからペリエのグラスを二つ取った。「ノンアルコールの炭酸水だ」そう言って一つを愛実に渡す。

「ありがとうございます」

愛実は家族がいるから救われている。でも、藤臣には誰もいない

のだ。それがどれほど切なく寂しいことか。

(…………彼の家族になりたい…………)

ふいに湧き上がった想いが愛実の心を席卷した。

息苦しさを振り払うように、彼女は藤臣を顔を見上げたのだ。せめて、見つめるくらい許されるのではないか、そんな想いを込めて視線を注いだその時　同じタイミングで、藤臣が見下ろしたのである。

第49話 前兆

藤臣は一瞬で後悔した。

愛実の想いの籠もった眼差しに、全身が絡み取られ硬直する。あの意味、メデューサの瞳に囚われたも同然であった。しかし、その視線は藤臣を石ではなく人間に変えていく。負の感情に固まった彼の外壁が、音を立て剥がれて行くのだ。あちこちから真実の心が見え、生身の彼が姿を現す。

美馬という死神に魅入られ、地獄を目指していた男にとって……それは天使の誘惑だった。

今日の愛実とは本格的にドレスアップしている。美馬邸で行われたパーティーの時より、メイクも髪型もプロの手が入っていて、最初に出会った時から比べ物にならないほど魅力的だ。

黒目の大きな瞳、決して高くはないが小ぶりな形のよい鼻、輪郭のはっきりした唇に朱色の鮮やかなルージュが艶めき、藤臣は舌先でなぞりたい衝動に駆られた。あの日、この唇に自分の唇を重ねて、口紅の色が移るくらい押し付けあった。白い肌が上気して見る見るうちにピンク色に染まるのを、彼は目の前で見たのだ。

愛実の肩は儂く、腰も細いが胸は見た目よりボリュームがある。信一郎に襲われた時、不可抗力にも目にした乳房を思い出し……ついつい視線を下に向けてしまった。

オフショルダーでパフスリーブの袖が愛実の愛らしさを際立たせている。だが、美馬邸のドレスより胸元の開き具合が大きかった。おまけにコルセットで締められている効果なのか、バストがグツと押し上げられているようだ。淡いピンクのショールの隙間から、クツキリ覗く谷間に藤臣は慌てた。

（し、しまった！ 試着に立ち会うべきだった）

花嫁を思わせる白と袖の可愛さに惹かれ選んだが、着た所を確認しなかったのは彼のミスである。途端に、彼は他の男の視線が気になり始めた。

しかし、それは藤臣の杞憂なのだ。なぜなら、愛実の真横に立ち、上から見下ろさなければ谷間など見えるはずがない。頭に血の昇った藤臣は、自分が特別席にいることすら気付いてはいなかった。

「……藤臣さん……」

それは首筋を羽毛でくすぐられるような、ふわふわした声だ。愛実に名前を呼ばれ、彼は視線を上げた。今日は髪にも生花を飾っている。淡いピンクの薔薇にかすみ草を散らし、編み込んだ長い髪は片方に纏めて垂らしてあった。うなじに流れる二、三本の後れ毛が、初々しい色香を漂わせていて……。

ここはホテルだ。当たり前のように、この上には数え切れないほどのベッドが用意されている。このまま愛実の手を取り、その一つに駆け込みたい。藤臣の中で欲望が嵐のように荒れ狂い始めた。

その時、唐突に愛実が彼の腕に触れ、顔を近づけて来たのだ。

（これは……キス、してもいいんだろうか？）

愛実も彼と同じ想いでいるのかも知れない。

藤臣が不埒なことを考えた瞬間

「藤臣さん……藤臣さんたら！ スピーチの時間だと皆様が来られてるんですけど……。どうかなさったんですか？」

藤臣はハツと我に返った。

周囲には東部デパートの重役と、瀬崎や奥村をはじめ秘書たちも揃っている。

（俺は……何をやってるんだ）

「あ、ああ、判った。愛実、君も一緒に来てくれ。壇上で、隣に立っていてくれるだけでいいから」

そう言つて愛実をエスコートしながら、なるべくゆっくりと歩く。とにかく、頭の中からとんでもない妄想を追い払わなくては話にならない。心と身体を落ち着かせるのに、さすがの藤臣も数分を要したのだった。

くくくくくくくくくく

「より一層の努力と研究を重ね、デパート業界のリーダーシップを取るべく、社員一丸となつて戦つていく所存です。尚、私事ではありますが、このたび縁あつて婚約が整い、来月早々にも結婚の運びとなりました。婚約者の西園寺愛実さんです」

会場から拍手とお祝いの声が上がる。

愛実は、その数センチ高い壇上から見下ろす光景に気後れし、一旦下げた頭が中々上げられない。

「……ありがとうございます。ここにおいて頂きました皆様を手本とし、経営者としてだけでなく、良き家庭人となれますよう、努力

していききたいと思っております。どうか、よろしくご指導ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。　ご静聴ありがとうございます。最後までどうぞ、ごゆっくりお楽しみ下さい」

これで二人の婚約は公になったのだ。はたして、この婚約は本当に偽りなのだろうか？　そんな想いを抱え、愛実是不思議な気持ちで藤臣を見つめていた。

これだけの規模になると、開始直後に挨拶をしても来られていない客も多いという。かといって最後では、多忙な客は引き上げてしまった後である。そのため、大よそピークと思われた時間を見計らい、スピーチを入れるのだ、と壇上まで歩く間に藤臣に教わった。

さっきの彼の瞳は、美馬邸の二階でキスした時と同じ色をしていた。こんな大勢の人がいる中で、藤臣は何をする気だろう、と愛実はドキドキだった。

そして今は、打って変わって企業家としての言葉を紡ぎ出す彼に、憧憬の念を抱いている。

ひたすら彼を見つめていたが……藤臣の挨拶が終了すると同時に、愛実も慌てて深々とお辞儀をしたのだった。

壇上から降りる時、先に降りた彼が待っていてくれた。当たり前のような動作で愛実の手を差し伸べる。パンプスを履いた彼女に対する気遣いが、愛実はとても嬉しかった。

大きな手が愛実の指先を包み込む。どうすれば、彼にこの想いを伝えられるのだろう。「好き」と言うだけで迷惑がられてしまったのに……。

（藤臣さんの家族になりたいなんて言ったら、余計に嫌われるわ）

好きじゃないけど抱いて欲しい。セックスを経験してみたい。そんな奔放なフリをしたら、彼の好みの女性になれるのだろうか。

（でもそれって、わたしは彼に抱かletただけなの？）

好きな想いと性的関係にはならないという約束が、お金の問題も絡んで二人の間に巨大な壁となり立ちはだかつている。愛実は何が何を求めているのか、しだいに混乱し始めていた。

このままだと、愛実は形だけの妻となり、夫に片想いしたまま一度も抱かれることなく離婚するのだ。その後、彼は他の女性と愛し合い、結婚するのだろうか。それを想像した時、彼女は嫌でも気付かされた。藤臣に抱かletたい訳ではなく、自分は愛されたいのだ。と。なんと身の程知らずで大それた夢を抱いてしまったのか……切なさに彼女は眩暈を覚える。

直後、藤臣の隣に秘書の瀬崎がスツと近寄った。

その瀬崎の顔色が心なしか蒼白に見え、愛実は驚く。つい先ほどまで、彼はいつもと変わらぬ笑顔だった。ところが、瀬崎の報告を聞くなり、藤臣の眉間に皺が寄ったのだ。奥歯をギリツと噛み締める音まで聞こえ、愛実は何事が起こったのか不安になる。

藤臣は二丁三度頷くと愛実に近づき、「面白くないだろうがすぐに追い払う。少しだけ、我慢してくれ」そう、耳元で囁いた。

「あの……一体、何が」

愛実の小さな問いかけは、周囲のざわめきに掻き消されてしまう。そして、正面の人垣が見事に割れ、その向こうに独りの女性が姿を現した。どこかで見た顔だと思えば、受付にも貼ってあった東部デパートの宣伝ポスターだ。

デパートのイメージモデルであり、藤臣の愛人
あつた。長瀬久美子で

第50話 爆弾

「とうとう知ったみたいよ。あのオンナ」

「……は？」

それは藤臣の秘書、奥村由佳の言葉だった。

昨日、ここで最終打ち合わせをした時に愛実は彼女から言われたのだ。

由佳は受付の位置に貼られた等身大のポスターを指差し、

「コレよコレ。私はそれなりのスキルを持つてるし、今のポジションを失うわけにはいかないから、専務を怒らせる気は全然ないわ」

かなり砕けた口調で言った。以前、ホテルの一室で顔を合わせた時とはだいぶ違う。ちなみに、由佳は藤臣の本社専務としての秘書なので彼を「専務」と呼ぶ。瀬崎もそうなのだが、彼は東部デパートにも出入りしているので「社長」と呼んでいるらしい。

「でも……このオンナは違うわよ。マスコミがチャホヤするから完全に勘違いしてるもの。？自分は特別？って本気で思ってるわ。一番、利用されてるのも知らないで……専務にとって女は単なる道具に過ぎないのよ。あ……あなたは別よ、何と言っても大奥様のお声掛けりですもの」

啞然とする愛実に、由佳は齒に衣着せぬ物言いだった。

由佳はどうやら、元々さっぱりした性格の女性みたいだ。向上心があり、男性並の出世欲もある。藤臣と関係したおかげで、秘書室でも優位な立場でいられた。生活も随分潤ったし、愛実との結婚で藤臣が社長……それも総帥となるのであれば、自分は完全な勝ち組

だ。由佳は愛実に対してそこまで言つてのけたのである。

とても学校と自宅、精々バイト先くらいしか世間を知らない愛実には、敵いそうにない女性だった。

「それに、適当に女をあしらつていた専務が、婚約を機に操を立てるなんて信じられないわ。あなたは専務にとつて本当に？特別？なんでしょうね。気付いてないのは……コレだけよ」

由佳はそう言うtposterを手の甲でパンパンと叩いた。

藤臣との結婚には取り決めがある。由佳が知っているのは週刊誌に書かれていたことだけで、弥生が自分の財産を愛実に相続させるつもりだとは知らない。その契約書に書かれた全ての条項を、愛実が熟知している訳でもなかったが……。

愛実には、由佳が無理をして藤臣を忘れようとしているのではないか、と思えてしまい申し訳なくなる。

「あの……どうも、すみません」

「やめてよ。逆でしょ？」

由佳は笑いながら言う。婚約者だと聞きながら、ホテルで張り合うような真似をしたことを言っているのだろつ。確かに、言われてみればそうかも知れない。

「それに、専務のセックスつて自分本位じゃない？ 最中でも醒めた目でこつちを見下ろしてて、ゾツとすることもあつたわ。あなたには悪いけど、幸せを感じたことは一度も無いわね。あの人と結婚して、一生あの目で見られるのかと思つたら……悪いけどパス。あなたはよく平気ね？」

？セックス？の言葉に愛実は頬を赤らめた。

平気も何も、抱かれたことがないのだから何とも言い様がない。それに、藤臣が愛実を見つめる瞳は、常に燃え盛る炎のようだ。醒めた目で見られたことなど一度もない。初めて逢つた時から、ずっ

と……。

「平気と言っか……あの、キスとか……どうでした？」

愛実は思い切って尋ねてみる。どうしても、あの美馬邸でのキスの意味が知りたかった。

「どうって言われても……」

由佳は言い難いと言っより、何と答えたらいいのか判らない、といった様子で口を開く。

「キスなんて……いくら頼んでも、一度もしてくれなかったわね。ホテルで会って一回したらお終い。結構淡泊なんじゃないかしら？」

くくくくくくくく

モデルだけあって身長は見上げるほど高い。多分、藤臣の愛人だと言ったメイドの千里より高いだろう。ハイヒールを履いているので尚更そう感じる。スレンダーで顔の小さい綺麗な女性だった。

関係のある女性とは結婚までに全て手を切る。

藤臣はそう言った。それには、この久美子も入っているはずだ。

「どうなってるの？」と聞いたことは一度もないが、約束を破るような人じゃないと愛実は信じている。

彼女は肩より少し長い髪を明るい茶色に染め、緩く内巻きにして垂らしていた。ドレスは体の線がくつきりと浮き出るマーメイドライン。シンプルなデザインがスタイルの良さを際立たせている。しかし……そのドレスに周囲の招待客は口をあぐりと開けたままだ。

それもそのはず、彼女はなんと純白のドレスを身に纏っていたのである。

まるでウエディングドレスのようだ、と愛実はいや、誰もが思ったことだろう。

「お待たせしてごめんなさいね、藤臣さん。あなたが教えて下さるのが遅いから、ドレスを用意するのに時間が掛かってしまったの」

久美子は髪を手で払いながら、藤臣に向かって話しかけた。

「……ああ、あなたはもういいわよ。下がって頂戴。身代わりご苦労様」

藤臣の左側に立つ愛実には一瞥もくれず、追い払うように手をひらひらさせた。久美子は彼の右肘辺りに腕を絡ませ、そのまま身体をピッタリと寄せる。

「さあ、行きましょうか」

彼女は藤臣に向かって艶然と微笑み、促したのであった。

愛実は言葉もなく驚いていた。

チラッと由佳に視線を向けると、こういうオンナよ、と言わんばかりに彼女は目で合図した。愛実は何とも言えない顔を由佳に返す。

（わたしは……どうすればいいの？）

そう思った瞬間、藤臣は久美子の指に自分の手を重ねる。

「失礼、長瀬くん。これまでは、東部デパートのイメージモデルである君にパーティでの同伴をお願いして来たが……」

一気にその指を引き剥がすと、彼は愛実の手を差し伸べた。

「私の婚約者で西園寺愛実さんだ。これからは彼女が傍にいてくれるんでね。もう妻の代わりは必要なくなった。君は下がってくれて構わない。パーティを楽しんでくれ」

間違いようもない言葉で久美子は拒絶され、瞬時に青褪める。

周囲も事情は判っているのだらう。捨てられた愛人の姿から目を背けながら、失笑が広がった。

愛実はどうにも居た堪れない。とはいえ、愛実から声を掛けられるのは久美子にとって更なる侮辱だらう。藤臣に手を引かれるまま、その場から立ち去ろうとした。

「何を言うの、藤臣さん！ あなたはあたしと結婚するのよ。世間の人もそう思っているわ。それに、あたしを捨てるわけにはいかないんだからっ！」

背後で久美子が叫ぶ。同時に、藤臣の口元から舌打ちが聞こえた。彼は目で瀬崎を呼びつけ、「長瀬くんは私に話があるようだ。別室に案内してくれ」短く小さい声で命じた。

瀬崎も心得たとばかりに頷き、部下たちに指示して久美子を取り囲んだ。そのまま、会場の外に連れ出そうとする。

だがその時。

「触らないで！ 乱暴にしてお腹の子供に何かあったらどうするの？ あたしは美馬社長の子供を妊娠してるんだからっ！」

久美子の甲高い声に、辺りは一瞬でざわめいた。

第51話 開眼

藤臣は冷静な表情を繕いながら振り返った。

久美子は利口な女ではない。だからこそ、楽に利用してこれたのだ。だが、これほどまでに馬鹿な女だとも思わなかった。

ここで藤臣の顔を潰せば、モデルとしての仕事を失うところではない。高額の違約金や慰謝料を請求される可能性があることに、なぜ気付かないのだろう。

この時、藤臣は久美子の妊娠発言を全く信用していなかった。

久美子はピルを飲んでいるはずだ。そうでなくても、彼自身が避妊を忘れたことなど一度もない。

だが、問題はこの場所だった。婚約披露を兼ねたパーティの席上で、周囲には招待客が大勢いる。そして、婚約者の愛実も傍らにいるのだ。ここで藤臣が激昂して、愛人関係を肯定するような発言でもしようものなら……まさに修羅場だろう。

一刻も早く、久美子をこの場所から排除しなくてはならない。ところが、その内容が内容なだけに、瀬崎たちは久美子の腕を取ることにすら躊躇していた。

「この間、あたしの部屋に来てくれた時の子供じゃないわ。ほら、この子は先月……そう、香港に行く前に授かったのよ。ピルも完璧じゃないのね。あなただって心当たりがあるでしょう？ あの時、とっても無防備に愛してくれたわ。あたしにはあなたの子供がいるのよ！」

藤臣が反論できず、瀬崎たちも動けないのをいいことに、久美子は言いたい放題であった。

「もちろん判ってるわ。会社の事情で婚約を押し付けられたんでしよう？ でも事情が変わったのよ。政略結婚をやめて愛する女性を選んだって言えば、世論は喝采するわ。ね、藤臣さん、あたしと子供を捨てないで……」

まさに一世一代の名演技と言うべきか。藤臣は怒りを通り越し、感心していた。寧ろ、頭にくるのは久美子ではなく部下や会場スタッフのほうだろう。

（何のための秘書なんだ！ どうして誰もこの女を引っ張り出さない！）

ポカンと口を開けて見ている警備員にも怒鳴りつけたいところだが、それでは余計人目を引いてしまう。何より、動揺する姿など一切見せるわけには行かない。

だが、藤臣にもようやくこの女の狙いが判った。

目的は愛実なのだ。愛実を傷つけるために、こんな派手なシチュエーションを選んだと見える。そしてそれは、藤臣に対して予想以上の攻撃力を示していた。

妊娠を盾に脅されるなど、今に始まったことではない。藤臣自身は久美子の言葉など、完全に笑い飛ばせるが……愛実はどうだろうか？

なんと彼は、愛実の反応が恐ろしくて隣が見れずにいた。

強気に出たい。だがそれで愛実を傷つけたら……。もし彼女が泣き出して、この場を立ち去るようなことになれば、全てお終いである。

破談になるだけならいい。どうせ藤臣のような男が妻に望める少女ではない。所詮、下種な女が似合いのろくでなしだ。愛実が困らぬよう、当座の金は藤臣が慰謝料として渡せばいい。

問題はあの契約書だ。愛実は他の三人の誰かと結婚する義務が生じる。

（なんてことだ！ クソ婆のほくそ笑む顔が目には浮かびやがる）

さすがの美馬も、弥生に太刀打ちするほどの金は無傷では動かせない。それに、愛実が断わるだろう。馬鹿をやった信一郎や宏志も論外……結局、愛実は和威を選び、弥生の一人勝ちだ。

そこまで考え、久美子の裏に弥生の命令を受けた暁がいるのでは？ という瀬崎の言葉が思い浮かぶ。

一方、久美子は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、藤臣を見上げていた。

久美子にとつても相打ち覚悟の作戦になるはずだ。これだけ大勢の前で公表したということは、父親はともかく妊娠は事実なのかも知れない。

このままで明日のスポーツ紙の朝刊は美馬家の醜聞で埋まるだろう。

藤臣と久美子は真正面から睨み合い、一言も発しない。

瀬崎は力尽くで久美子を排除していいのかどうか迷い、社長の次の指示を待った。

そして、周囲の客は固唾を吞んで茶番を見守るしかなく……。この三竦みの状態に終止符を打ったのは、予想外にも愛実であった。

「あの……わたしにはよく判りませんが……。こちらの方は藤臣さんにお話があるのでは？ 藤臣さんが一緒に行かれたほうがいいと思います。わたしは会場にありますので」

藤臣はその落ち着いた声に驚いて隣を見る。

愛実の表情は泣くでも怒るでもなく、少し困ったように、だが微笑んでいた。

（な、なんで、愛実はこんなに冷静なんだ？ この数日ですっかり気が変わって、俺のことなんかどうでもよくなったのか！？）

真摯な想いを寄せられることに困り果て、逃げ回っていた自分の行状は棚上げだった。嫉妬で泣き喚いてくれない愛実の様子に、藤臣は理不尽にも怒りすら覚える。

だが、声を荒げたのは彼ではなく、久美子だった。

「あたしはここで話しても構わないわ！ 二人つきりより、大勢の方に聞いて頂きたいくらいよ。あなたには申し訳ないけど……。公の席ではつきりして頂かないと、お腹の子供が可哀想でしょう？」

愛実の態度に驚いたのは藤臣だけではなかったようだ。

久美子は愛実を甘く見ていたに違いない。十八歳の小娘など、婚約者が愛人を妊娠させたと知るだけで、簡単に追い出せると思っていたのだ。それが逆に、あっさり会場から追い払われそうなのは久美子のほうだった。

「お腹にお子さんがいらつしやるなら尚のことです。失礼ですが……藤臣さんは不実な方ではありません。静かな場所で、ちゃんと話し合って下さい」

藤臣は愛実の姿に見惚れていた。

彼女の瞳は、藤臣を？ どうでもいい？ のではなく？ 信じている？ と言っている。何の根拠もないはずだった。キスしながら不誠実な態度を取り続け、「好き」の言葉に逃げ回っている男を……それでも「不実ではない」と言いきる。

この瞬間、藤臣の心は百八十度舵を切った。

「ああ、そうだな。君の言う通り、長瀬くんとは話し合いが必要らしい。しばらく独りにするが、誤解を解いてすぐに戻る。……申し訳ない」

藤臣は愛実の手を握り、ジッと目を見つめて言った。

すると、彼女はさっきよりも確かな笑みを返し、小さく「はい」と答える。

「さあ、長瀬くん　こつちだ」

久美子の悔しそうな顔を冷酷な視線で一睨みすると、藤臣は愛実に背を向け歩き出した。

第52話 子供

(……これから、どうなるの……?)

笑顔で送り出したものの、愛実は内心パニックだった。

政略結婚をやめて愛する女性を選んだ……

久美子の言葉は衝撃的ではあるが、当然のような気もする。愛実が同じ立場であつたなら、やはり自分を選んで欲しいと思うだろう。ただ、藤臣の体面を潰すような、こんなやり方は……。

久美子を非難する感情が自分の中に芽生え、愛実の胸はチクリと痛んだ。

(あの女にも事情があつたのよ。わたしは幸運なことに、藤臣さんに助けられてぬくぬくしてるだけじゃない)

彼女を悪く思うのは失礼だ。妬みそうになる気持ちを愛実は必死で抑える。

藤臣は辛い思いをして育つた分だけ、我が子を大事にするだろう。少なくとも、このままにはしないはずだ。弥生は藤臣のことを亡き夫の後継者として発表した。今更、私生活を理由に取り消したりしないのではないだろうか？

でも、弥生がこのまま愛実に遺産を譲ると言い張つたら……？

それに、これほどまで盛大に発表してしまった後だ。？旧伯爵家のご令嬢？という肩書きを持つ愛実と婚約解消するほうが、藤臣のイメージダウンになるかも知れない。

その時は愛実と形ばかりの結婚をして、予定通り二丁三年で離婚。ほとぼりが冷めた頃、久美子と再婚するのがベストだろう。

（でも……わたしはどうやって結婚生活に耐えたらいいの？ 夢も見られないなんて）

今この時も、藤臣が久美子の肩を抱き慰めている姿を想像すると……。愛実は鼻の奥がツンとして、涙が込み上げるのをグツと堪えた。

はたと気付けば、周囲のほとんどの人間がヒソヒソささやきながら愛実を見ている。ハンカチで覆った口元は、おそらく失笑で歪んでいることだろう。

もしここで愛実が涙をこぼしたら、非難は藤臣に行く。万一、彼が失脚して信一郎が後継者になれば、愛実は家族のため、自分を襲った男に嫁ぐ羽目になるかも知れない。

藤臣を守りたいのは愛しているからだ。

でも、愛実が家族を守る義務も放り出せずにいた。行動は同じであつても、動機となる思いがまるで違う。ただ純粹に愛せないことに、愛実は挫けてしまいそうだった。

「判らない子ね。天然も度が過ぎると、ただの馬鹿よ」

身動きの取れない愛実の傍に近づき、由佳が小声で話しかけた。

その声は明らかに怒っている。

「どういう意味ですか？」

「私があなたなら、愛人の分際で身を弁えろ、と一喝して会場から叩き出してたわ。そうすれば専務も、普段通り冷酷に振る舞えたのに」

由佳の言葉に愛実 は涙が引つ込んだ。

藤臣は由佳の言うような冷酷な男性ではない。もしそうなら、愛実を助けてくれたりはしないはずだ。愛実 は由佳にそう告げるが…

…。

「は？ 何言ってるの？ 私は入社して五年になるのよ。だったら教えてあげるけど、専務には私の前にも秘書室に愛人が居てね……」
ある時、彼女は呼ばれてもいないのに、藤臣を驚かせようとホテルの部屋を訪ねたという。するとそこには別の女性が……。二人は顔見知りで、嫉妬心より虚栄心から女同士の喧嘩はエスカレート。後日、社内でつかみ合いの大喧嘩に発展したことを知り、藤臣は即座に両方と別れた。

「二人とも地方の子会社に飛ばされてお終い。専務が私を口説いたのはその翌日、『野心は持たず、余計なこともするな。君には妻の座と子供以外は欲しい物をやる』ってね　そういう男よ」

愛実はいれるより藤臣が可哀想だと思った。

彼を愛していれば、相手の女性ではなく藤臣自身に怒っただろう。彼の近くには、そんな言葉を受け入れる女性ばかりだったのだ。この由佳との関係を愛実に告白した時、

誠実でない女性しか知らないんだ

当惑したような顔で藤臣は言った。

あの言葉は彼の本音だったのだ。ならば、あの久美子はどうなのだろう。お金や見栄や体裁ではなく、心の底から藤臣を愛してくれているのだろうか？

愛実は一旦唇を噛み締め、ゆっくりと口を開いた。

「藤臣さんは、優しくて誠実で思いやりがあって……人の心の痛みが判る人です。わたしは、わたしの目に映る彼を信じます」

「じゃあ、愛人に子供を産ませて、あなたに育てるって連れて来たら？　どうするのかしら、奥様は」

由佳は少し意地悪そうに笑った。

その嫌味を、愛実 は真正面から受け止める。

「彼が望むなら。子供に罪はありませんし……。でも、子供のためには彼女と結婚するべきです。大奥様にはわたしからもお願いするつもりです」

「若いわねえ……。あの男をおとぎ話の王子様だとも思ってるの？」

由佳の表情は少し柔らかくなり、物分りの悪い生徒をたしなめる女教師のような顔になった。

子供だと、何も知らないと言われたらその通りだろう。それでも愛実 は引くつもりなどない。

「奥村さん……。わたしは十八ですが人生の厳しさはよく知っています。だからこそ、理想は捨てたくありません。一度や二度、思い通りに行かなかったからと諦めるなんて、残りの六十年ずっと諦めて過ごすことになると思いませんか？ わたしは人生を諦めないために、藤臣さんとの結婚を選びました。例え結婚できなくても、結婚して離婚することになっても、好きになったことは絶対に後悔しません！」

くくくくくくくく

（ここがインペリアルフロアのスイートなんだわ）

久美子は特別なフロアに降り立ったことを確認し、優越感に浸った。

妊娠のチャンスはずっと狙っていた。何度か風呂場で迫り、その都度追い払われたのだ。でも、香港に行く前の彼は違った。何処か

浮き足立っており、切羽詰まった彼をさらに煽って……。

「こちらです。どうぞ」

第一秘書の瀬崎が鍵を開け、藤臣と久美子に入室を促した。

「待って！ ロイヤルスイートじゃないの？」

「あちらは？ ご婚約者様？ の控え室となっております」

瀬崎の口調は慇懃無礼で、久美子を軽蔑しているのは明白だった。

「そんなつ。あたしは……」

「ガタガタ言うなら叩き出すぞ。さっさと入れ」

一泊で五十万円とも百万円とも言われるスイートに通されるものだとはかり思っていた。久美子はがっかりしながらも、藤臣に急かされ中に入る。中は一般の部屋より少しグレードアップした程度の広さだった。スイート仕様だが、インペリアルフロアと言ってもピンからキリまであるらしい。

入るなり、藤臣は無造作にタイを緩め、カマーバンドを外した。疲れた素振りでソファに体を沈める。

大きなため息と共にテーブルの上に置かれた煙草ケースから一本抜き取り、大理石のガスライターで火を点けた。

「妊娠は事実か？」

唐突に核心をついた質問をされ、久美子は飛びつくように答える。

「もちろんですよ！ 嘘なんて吐くはずないわ！」

「診断書か妊娠証明書を出せ」

「まさか、診断書を取り上げるつもりなの？」

「……そんなことに何の意味があるんだ。さっさと見せる」

久美子はバッグから診断書を取り出しおずおずと差し出した。

「まだ七週目だから妊娠証明書はもらえなかったの。ねえ、これも見て。エコー写真よ。ちゃんと心臓も動いてるのよ」

藤臣は診断書を手に取り、ざっと目を通した後、産婦人科に確認を取るよう瀬崎に命じた。

（いくらでも調べるといいわ。本当のことなんだもの）

久美子は胸の内で笑いながら、煙草の煙りに顔をしかめ手で払った。

すると、藤臣が煙草の火を消したのだ。これまでの藤臣からは考えられない行動だった。久美子がある人から聞いた通りである。この男は女には冷たいが、子供に対しては異常なほどの責任感を見せる。そう、十年前も……。

「あたし、本当は子供が欲しかったの。こうなって驚いたけど、でも大切に育てるわ。お願い……産んでいいって言って」

久美子はあるだけの母性を総動員して、藤臣に泣きつく。

彼は深く息を吐きながら一言、「……仕方ないな」そう答えたのだった。

第53話 欺瞞

「子供は君の好きにするといい」

藤臣はいささか投げやりに言った。

その瞬間、久美子の表情がパツと変わる。すぐに繕うが、生来の狡猾さなど簡単に隠せるものじゃない。

「嬉しいわ！ 産んでいいのね。じゃあ、もちろん結婚してくれるのよね」

「勘違いするな。私が妻にするのは愛実だ」

久美子は目を剥き怒鳴り始めた。

「あたしのお腹には子供がいるのよ。あなたの子供が！ 忘れたの？ 香港に行く前の夜、確かにあなたは避妊しなかったじゃない！

あの時の子供よ。ゼツタイ間違いないんだからっ！」

藤臣は苦虫を噛み潰したような顔で久美子から目を逸らした。

愛実と出会って間もなくの頃だ。弥生の邪魔が入り思い通りに事が進まず、また、愛実に妙な欲望を感じて持て余していた。いつもなら、付け込まれる隙など作らないはずが……ほんのわずか油断した。

久美子が妊娠のチャンスを狙っていたのは知っていた。わざわざ病院を指定してまで処方させていたピルだが、実際のところ飲んでいなかったに違いない。

だが、それも何秒かで我に返った。すぐに彼女から離れ、中にも射精してはいない。確率は限りなく低いはずだ。

とはいえ、性的関係があった以上、女が言い張れば泥沼になるのは目に見えている。

（クソッ！ 忌々しい！）

藤臣は戻って来た瀬崎に合図して調査書類を出させる。瀬崎は何か言いたげな顔つきで、茶封筒をブリーフケースから取り出し手渡した。

こついう時に備えていた書類だ。出来れば使わずに済むことを願っていた。

「久美子……シユンと言う名前の二十二歳のホストは知ってるな」
まるで無関係なことを言い出され、彼女の目は一瞬泳いだ。

「な、何？ 誰よソレ……。話を逸らさないで！ 今、あたしたちが話してるのは」

「覚えてないのはおかしいな。私が初めてマンションを訪ねた夜、直前まで会っていた男じゃないか。週のうち五日は、あの部屋に泊まって行く。君は毎週歌舞伎町のホストクラブに通い、彼を指名している。渡した金の半分は、奴に消えているんじゃないのか？」

「そんなこと……違うわ。違うのよ……」

久美子の顔色が青くなってきた。視線は彷徨ったまま中々固定しない。

藤臣の眼差しはそんな久美子と書類の間を往復しつつ、「そんな関係が昨年夏から、もう十ヶ月か」バサッとテーブルの上に封筒ごと書類が投げられた。

勢いで封筒に入った数枚の写真がテーブルの上に散らばる。

そこには久美子が若い男と腕を組んでラブホテルに入って行く所や、マンションのベランダでキスをしたり、ホストクラブで騒いでいる写真もあった。

「待って……ねえ、待ってよ。気晴らしよ。だって、あたしのことなんてほったらかしだったじゃない。あなたにも他の女性がいたで

しょ？ でも、この子は」

「君がわざわざホストの血液型を確認した理由は何だ？ 私と同じO型の男を選んだ訳は？ 髪もストリートで長身の男と指名したそうじゃないか。香港に発つ前夜、君はホテルに泊まらずマンションに戻り、この男を呼び出して無防備なセックスをした」

藤臣の失敗に付け入り、久美子は是が非でも妊娠したいと計画した。独身主義で有名な藤臣である。まさか翌月に婚約するなど想像もしなかったはずだ。

妊娠をマスコミに流せば、社長である彼を追い込める。子供をダシに使えば、藤臣なら嫌々でも結婚するだろう。血液型さえ一緒なら怪しまれない。久美子はホストにそう話して協力を頼んだ。

藤臣はこれまで、久美子の男関係に興味のある素振りなどしたことがなかった。彼女にすれば、上手く騙していると思い込んでいたに違いない。

だが、女には散々痛い目に遭わされてきた藤臣である。例のホストは久美子に対して特別な感情など全く抱いてはいなかった。藤臣の情報源がそのホスト自身だとは、久美子は夢にも思っまい。

「こちらの条件を言おう。今すぐ、君の妊娠と私は無関係だという書類にサインするんだ。なら、君のことは訴えない。だが、あくまで私の子供だと言い張るなら裁判になる。もちろん中絶は強制しない。鑑定の結果、私の子だと証明されたら子供は認知して引き取る君には相応の慰謝料を支払おう。だがもし私の子でなかった場合君には名誉毀損の慰謝料と、多大な損害賠償を請求する」

藤臣の表情は非情なまでの冷酷さを映していた。ついさっき、愛実の前で見せた穏やかな笑顔とは百八十度違っている。同一人物とは思えないほどだった。

「生まれて……あなたの子だったら……あたしが育てるわ。その時は結婚して一緒に……」

語るに落ちるとはこのことだ。久美子は藤臣の子供でない可能性を口にした。

だが 「ふざけるなっ！」

彼は身を乗り出し、テーブルを思い切り叩いた。その威嚇めいた行為に久美子は震え上がる。

「金の為に子供を産むような女に、俺の子供を渡して堪るか！ どんなことをしても取り上げてみせる！」

愛もなく、妻にもなれないと承知で、藤臣の母は彼を産んだ。それが金以外の何の為だろう。

叶うなら三十年前に戻り、生まれ落ちたばかりの自分の首をこの手で絞めたいくらいだ。何も知らず、何の罪も犯さぬうちに殺して欲しかったと何度願ったことか！

子供など欲しくない。美馬の血が流れた子供など、悪魔を増やすようなものである。

「いいか？ マスコミの目を引く広告塔だと思うからこそ、好きにさせてやったんだ。だが、結婚の邪魔だけはせん！ 俺の子供だと自信があるなら産めばいい。違った時は……貴様の人生は終わりだ」

藤臣は冷酷だが短気でも粗野でもない。そんな男が感情を剥き出しにして怒り狂う姿に、久美子は完全に気圧されていた。

「わ、わかったわ……悪かったわ。ごめんなさい……子供は堕ろす

から。あなたの結婚の邪魔はしない。だから、コレまで通り……」

「認めたな。告訴は勘弁してやる。イメージモデルは本日付で解約。マンシヨンは今月中に出て行け。以上だ」

「待って！ 契約は来年の三月までであつたはずじゃ……」

「婚約披露パーティをぶち壊し、満座の席で私に恥を掻かせて何が契約だ。貴様にもう広告塔に価値はない。自分のやったことの愚かさを知るといい。シンデレラの時間は終わりだ」

藤臣は吐き捨てるように言つと席を立つた。

愛実に言われるままパーティ会場から離れたが……。今頃彼女は婚約者の不品行を理由に、謂れのない非難的になっているかも知れない。

（ 傍にいと約束したのに ）

考え始めれば愛実のことばかり気に掛かつた。

出て行く藤臣の背に縋り、久美子は懸命に甘えた声を出す。

「あたしの体は？ 良かつたでしょう？ あんなに気に入ってくれたじゃない。充分に楽しんだはずだわ」

土壇場で口に出来るのはセックス以外にはないらしい。

藤臣は鼻で笑つと、

「汚い手で触らないでくれ。君の体で楽しんだことは一度もない。誰でも良かつた。その程度だ」

一瞥もくれず、久美子を振り払つた。

「このクソ野郎！ あんたみたいな男、死ねばいいんだ！ 地獄に堕ちちやがれっ！」

背後で喚く久美子の声がしだいに聞こえなくなる。

「瀬崎……」

「マスコミは押さえました。会場の方は健気にも愛実様が独りで応対しておられます。大奥様がすでに引き上げられていて幸運でした。それと、彼女が子供をどうするか……見届けます」

「すまん」

さすがの彼も、これ以外の言葉は出ない。

「珍しいですね。ですが、謝る相手が違います」

瀬崎はニコリともしせずに答えた。

第54話 誤解

「美馬社長に限って、ねえ」

ホホホ……中年女性の甲高い耳障りな笑い声が周囲に広がる。

「こんなに可愛い婚約者がいらっしやるんですもの」

「きつと何かの間違いに違いありませんわ」

彼女らはそんな言葉で表向き愛実を励ますフリをしている。

だが、由佳には仮面の裏の興味本位が見て取れ、小さくため息を吐いた。

藤臣と久美子の関係は周知の事実だ。マスコミにあれだけ騒がれ、藤臣も何処吹く風で出張先のホテルでは久美子と同衾していた。

この女性たちは、その辺りの話を愛実オハサマに聞かせてやりたいたくて、うずうずしている様子だ。

「あなた……本気で好きなの？ 専務のこと」

由佳はついさっきの愛実の台詞を聞き、びっくりしたのである。

全てが全て？ 今時の女子高生？、その一言で集約されると思うほど由佳は単純ではない。清楚や純真、潔癖、そんな呼び方が似合うような女子高生も存在する。中身はそうであっても、この年代の少女は背伸びするのだ。それがやがて身に付いてしまい、気付けば戻れない場所まで来てしまっている。

由佳もそうであった。十代の頃は「愛のないセックスなど論外」そう思っていたのに。いつの間に、仕事のために上司と寝るようになったのだろう。

「好き、だったらいいませんか？」

愛実はその答え、一瞬、泣きそうに頬が歪む。

もしここで、婚約者である愛実が泣き崩れてしまったら……事態は收拾不可能になる。由佳はすぐさま彼女を連れて、パーティ会場から出ようと考えた。

しかし、愛実はグツと口元を引き締め、近寄って来たS銀行の頭取夫人に笑顔を見せたのだ。

（こんな子を騙すなんて……専務は何処まで冷酷なの？）

由佳には藤臣が「優しくて誠実で思いやりがあつて……人の心の痛みが判る人」だとは、どうしても思えなかった。

だが、藤臣が愛実に向ける視線は男のソレだ。

久美子のような女は、どれほど手厳しく捨てられても自業自得だろう。所詮、キツネとタヌキの化かし合い。久美子ほど性質は悪くないにせよ、由佳にしても同じ穴のムジナである。愛実には「悪いけどパス」なんて軽口を叩いたが、藤臣の妻の座に憧れなかったと言えは嘘だった。

藤臣は愛実の心を弄び、ベッドに連れ込もうとしている。「後悔しません！」　愛実は十年後、さっきの言葉を後悔しないだろうか？

由佳は、愛実に対する嫉妬が消え、まるで保護者とも言つような不思議な感情を持ち始めていた。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

周囲の悪意が疎ましい。

女性たちの好奇の眼差しと上辺だけの慰めもうるさいが、男性た

ちの視線は悪質だった。それも時間が経つことに厳しくなる。

「愛人の独りもコントロール出来ないとは……」

そんな言葉も愛実の耳に届いた。

藤臣の属する社会は、愛人を持つことに対して寛容である。由佳に教えてもらったことだ。しかし、管理できずにスキャンダルが表沙汰になると、仕事での評価も落ちる。？無能？だと言われるらしい。

今回は愛実が会場に留まったことで、藤臣の評判は最悪なことにならず済んだ。噂話は広い会場の一部でストップし、やがて、新たな噂が流れ始める。

例のモデル、貢いでたホストに捨てられて少しおかしいらしいわ。最近、奇行が目立つんですって。妊娠もでたらめですってよ。

釈明ではなく、噂話として流布させた瀬崎の作戦であった。

愛実がその噂を耳にした頃、

「ご歓談中恐れ入ります。愛実様、美馬専務がお戻りになられました。こちらに」

由佳が大きな声で周囲の女性たちを追い払ってくれた。愛実はホッとして相好を崩し、由佳に「判りました。ありがとうございます」と伝える。

由佳の背後に藤臣の姿が見えた。真っ直ぐ、愛実に向かって歩いてくる。

「悪かったね、席を外してしまつて。話し合いは終わった。誤解が解けて、彼女にはお帰り頂いたよ」

藤臣は落ち着いた様子で淡々と愛実に報告した。

どんな形かは判らないが、決着がついたということなのだろう。

（わたしはどうなるの？　このまま……婚約者でいていいの？）

それを確認したいが、ここではとても尋ねられない。

愛実が何も言えずにいと、藤臣は幾分冷ややかな視線を由佳に向けた。

「奥村くん、君が愛実に付いていてくれたのか？」

「はい。他の方は専務の命令で会場を出られましたので」

由佳を見る藤臣の目に、なぜか陰しい光がよぎった。

直後、愛実ハッとする。

藤臣はひょっとして、由佳と愛実の関係がホテルで顔を合わせた時のままだと誤解しているのでは？　彼女は慌てて口を開いた。

「奥村さんはずっと傍にいて下さったんです。打ち合わせの時も、とても親切にして頂いて……」

愛実の言葉に藤臣だけでなく、庇われた由佳本人も目を丸くしている。

「そうか……。君は優秀な秘書だ。婚礼までひと月もないので準備を手伝ってやってくれ。それと、公式な席での役割を、愛実に教えてくれたらありがたい」

由佳は啞然とした後すぐに表情を引き締め、

「専務にご信頼いただき光栄です。愛実様にご不自由な思いをなさいませんよう、心を尽くさせていただきます。ただ……」

藤臣に微笑を作り、それをそのまま愛実に向ける。

「愛実様にご不快でなければ、ですが」

確かに、藤臣の愛人だった女性だ。愛実のほうか「嫌だ」と言い出してもおかしくないのかも知れない。

でも由佳は藤臣との関係をひけらかし、愛実を馬鹿にするような言い方はしない。婚約を機に藤臣とは仕事だけの関係に戻ったと言いい、それは嘘ではないと思う。

「不快なんてことはありません。こちらこそ、よろしく願いします」

ニツコリと答える愛実だった。

「藤臣さん、一体どういうことかしら！？　女が乗り込んで来たんですって！　娘は正式な婚約者なのに、こんな席で恥を搔かされるなんて！」

随分離れた場所に居たのだろう。愛実の母が、背後に叔父夫婦を引き連れてやって来た。

「結婚を前提だというから、旅行も許可しましたけど……。旧伯爵家の娘を、それも十八歳の女子高生を疵物にして捨てるおつもりじゃないでしょうね！」

母は血相を変えて藤臣に噛み付いた。母にすれば、やっと取り戻した上流階級の暮らしである。何が何でも手放すまいと必死なのだ。

「お母さん、やめて！　余計なことは言わないで」

ようやく藤臣が戻って来てくれたのに。美馬邸のパーティ以降、愛実を避けていた彼が、やっと笑顔を見せてくれるようになったのだ。もし怒らせて、今度は結婚式まで会えないようなことにもなれば……。

だが藤臣は、そんな愛実の母に平然と笑顔で返した。

「それは誤解です。ご覧の通り、何処にも女性などおりません。勘違いした女性が騒いだようですが、すでに解決済みです。今も来月の挙式について話していたところですよ」

母は周囲をきよろきよろ見回し、「本当なの、愛実」と聞いてくる。

愛実が頷くと、

「まあ、ごめんなさいね、藤臣さん。わたくし驚いてしまって。気分を害されてませんかしら？」

「いいえ。それも全て私の不徳の致すところです。結婚後は誠実な夫になると約束しますので、お義母さんもうぞご安心下さい」

藤臣を取り巻く空気がこれまでと違ってすることに気付き、悲しい予感に囚われる愛実だった。

第55話 釈明

「申し訳なかった」

ロイヤルスイートに足を踏み入れるなり、藤臣は愛実の頭を下げた。

パーティが終わり、最後まで残った招待客を見送つてすでに二時間が経過している。愛実のドレスは独りでは脱げず、美容室の女性に手伝ってもらい私服に着替えた。複雑な編み込みだった為、髪も美容師に解いてもらう。リボンと生花を取り外せば、愛実の髪はクルクルと波打っていた。

愛実の着替えが終わったと聞き、やって来た藤臣の第一声がそれであった。

「本当に……何と言えはいいのか……済まない」

愛実が何も言わないので、藤臣はただ謝罪を繰り返す。

（どうして謝るの？ やっぱ、わたしとはもう……）

その殊勝な態度が、ますます愛実を瀬戸際に追い詰めた。

「あの……お聞きしたいんですけど」

「判つてる。何でも答えよう。だが一つだけ約束してくれ、私との結婚を取り止めにしない、と」

「そのために、お聞きしたいんですが……」

「いや、駄目だ。まず約束が先だ。来月の結婚式は中止にはしない。それでいいね？」

愛実は一瞬、胸が浮き立つ。

だが、そんなはずがないのだ。藤臣が愛実のような少女を選ぶわ

けない。ということは……。

（そんなに弥生様の遺産と総帥の椅子が大事なの？ 奥村さんが言うような、冷酷な人だなんて思いたくないのに）

それくらいなら、まだ正直に話してくれたほうがマシだ。

子供が生まれるから会社を犠牲にしても愛する女性を妻にしたい。そう言われた時は、愛実は懸命に笑って「おめでとうございます」と答えるつもりだった。好きな人の幸福を願うのに年齢は関係ない。そう思っていたのに……。藤臣は愛実との結婚を変更しないという。

愛実が藤臣を見てゆっくりと口を開いた。

「絶対に、嘘は吐かないで下さいますか？」

「判った。お互いに約束だ」

くくくくくくくくくく

全ての計画は変更だ。愛実を表面上ではなく、事実上の妻にする。どんな手段を使っても、彼女を自分の許に留めておきたい。必要なら、？愛？という言葉を利用してでも。

自分の中に？愛？などという崇高な感情は残っていない。十代の始めからセックスを覚え、情欲に塗れて生きてきた。男としての自分は骨の髄まで腐り切っている。だが人として……わずかに残った分別が、自分から愛実を遠ざけようと努力してきた、はずだった。

（駄目だ……もう駄目だ。愛実が欲しい。たとえ傷つけることになったとしても……）

藤臣は必死に考える。

何も初めから傷つける必要はない。女性の機嫌を取ったり、顔を窺ったりしたことはないが、愛実をすんなり手に入れる為なら、それも仕方がない。

二人きりになっただけなら責められるのは確実だ。まずは機先を制して謝ろう。藤臣は謝罪の言葉だけを何度も頭の中で繰り返す、ロイヤルスイートまで歩いて来たのだった。

「赤ちゃん……本当にいらっしゃるんですか？」

愛実の声は震えている。

一方、藤臣は可能な限りの冷静さを装い答えた。

「彼女が妊娠しているか、ということなら、事実だ。診断書とエコー写真を持っていたし、彼女が受診した産科医の確認も取れた」

「それは……藤臣さんの？」

咄嗟に、違う！ と叫びたかった。

だが 藤臣さんは不実な方ではありません。

彼女はそう言い切ってくれたのだ。久美子との交際が明らかである以上、ここで否定すれば純粋な愛実の目に？ 不実？ だと映りかねない。彼は慎重に言葉を選ぶ。

「正直に言おう。可能性はある」

瞬く間に愛実の瞳が翳った。それを見せまいと彼女は俯き唇を噛み締める。

藤臣は内心舌打ちしながら、慌てて言い募った。

「待ってくれ。だが、極めて低い可能性なんだ。第一彼女には、私

以外にかなり親しい関係の男性がいる」

そう言つと、さつき久美子に見せた写真を大理石のテーブルに置いた。それも久美子の時とは打って変わって、一枚ずつ丁寧に並べる。卑猥に見えるショットは全て抜いてあつた。

「歌舞伎町のホストクラブの男だ。週に五日はこの男を部屋に泊めていることが判つた」

愛実は困惑した様子で写真を見つめている。

「で、も……藤臣さんの子供だつて言つたのに。それは彼女の嘘なんですか？ それとも……何かの検査をして……」

「君に、あまり聞かせたい話じゃないんだが。私は似たようなケースで二度ほど痛い目に遭つてゐる。一度目は不可抗力、二度目は子供に執着したせいだ。そのせいで、こういつたことは慎重にしてきた」

愛実は何処まで話せばいいのだろう。

やれピルだコンドームだと話しても、面食らうに決まつてゐる。

しかも、誘惑されてコンドームなしで挿入してしまった。だが、彼女の体内で射精はしていないので妊娠の可能性は低い、と。

(……そんなこと、言えるはずがない……)

「交際相手の女性にも充分注意してもらつて、もちろん、私自身も注意は怠らない。ただ、一度だけ不注意に関係した記憶がある。氣付いてすぐに止めたが……」

「あ、あの……？」

直接的な言い回しを避け、藤臣はセックスを想像しづらい言葉を選んだ。そのため、注意だ不注意だと言われても、愛実にすれば禅問答に聞こえるだろう。

「ああ、その……どう言つたらいいのか。要するに、子供の父親は生まれてから正式に鑑定しなければ、おそらく彼女にも判らない、と言つことなんだ」

愛実には信じられない世界なのだろう。開いた口が塞がらないといった様子だ。

「そんな……結婚した後で、生まれた子供があなたの子供じゃないとなったら……その子供はどうなるんですか？」

「ちよūdい例がある。和威がそうだ。彼のように、父親の戸籍から抹消され、私生児となるんだ」

愛実はこの時、和威の出生の真実を初めて知ることになった。

そんな彼女の様子に藤臣は少し後悔する。これで、愛実は和威に必要な以上の同情を見せるかも知れない。そんなものは目にしたくなかった。愛実には藤臣の方だけ見ていて欲しい。

「あの……じゃ、これからどうするんですか？」

「え？」

和威に対する嫉妬が心の大半を占め、藤臣は今自分の置かれた立場を失念する。

「長瀬さんの赤ちゃんです！ 生まれたら……どうなるんですか？」

愛実の口調は思ったより激しい。何に怒っているのか……その時、藤臣は気付いたのだ。愛実の辞書に中絶という文字がないことを。それを伝えなければならぬことに、彼は躊躇した。

だが、嘘は言わない約束だ。藤臣は決断を久美子に委ねたことを、そしてその答えはおそらく中絶に行き着くであろうことを、正直に話した。

「そんな……もし、藤臣さんの子供だったらどうするんですか！？ 取り返しのつかないことになるんですよ！」

「君の言い分は判る。私の子供だったらいい。だが、違ったらどうするんだ？ 相手の男は二十二歳と若く、彼女とはもう別れたと言

っている。養育費どころか認知すらしないだろう。結婚など論外だ。しかもその可能性が極めて高い。そんなリスクを彼女に背負えと言えるのか？」

卑怯な言い方だと判っていた。本当に誠実な男であれば、わずかな確率でも責任を取るといっだろう。いや、そもそも誠実な男がこんな事態に陥るわけがない。

（その上、無垢な少女をこの手で穢すんだ……久美子に言われた通り、間違いなく地獄に堕ちるな）

隣に座るだけで花の残り香に心を奪われ、緩くカールした髪にすら欲情を覚える。藤臣は自分で自分を持て余し……。

第56話 正論

藤臣が心の内が判らず、愛実は混乱の只中にいた。

今までの彼とは態度が違う。どこか頼りなげで、一つ一つ言葉を選ぶようにしている。愛実の写真を見下ろし、久美子の裏切りが藤臣にここまで動揺を与えているのだと思い、切なくなった。

「……済まない。感情的になった。自分の責任は判ってるんだ。逃げるつもりなどない。私の子供であるなら、出来る限りのことはしてやりたいと思う。金で済ませるんじゃなく、手元に置いて育てたい、と。君には申し訳ないが……」

「それは……それは私に」

生まれて藤臣の子供だと判ったら、出て行ってくれということだろう。か。愛実にそこまで尋ねる勇氣はない。

ところが、藤臣は予想外のことを言い始めたのだ。

「愛人に産ませた子供を引き取って、十八歳の君に母親代わりをしてくれというのは酷い話だと思う。もちろん君が嫌だと言うなら、無理強いはいしない。本邸には住ませないし、育児には乳母を付けるだから……」

「待って！ ちょっと待って下さい。わたしと別れて、彼女を妻として迎えるんじゃないんですか？」

驚きのあまり、つい口にしてしまった。

（本当はそうしたいけど……そんな風に言われたらどうしよう）

藤臣と久美子は愛し合っていたはずだ。久美子はそう言ったし、それに……藤臣は間違はなく彼女と会っている。信一郎に傷つけられた愛実をホテルに匿っていた時も、結婚を口にしながら久美子と

……。

「だって、藤臣さんは長瀬さんを愛していらっしゃるんでしょう？
あの人から、ジバンシーの？オルガンザ？が香りました。藤臣さんのスーツからも何度か……」

それは数年前、母が好んでつけていた香りだった。そうでなければ愛実には香水など判るはずがない。

藤臣はこんな写真を撮らせるほど久美子に執着している。興信所に頼んだのは、彼女を愛しているから。そうでなければ浮気など怪しむこともないだろう。

愛実はこの時、自分の中に芽生えた感情を持て余していた。

藤臣が他の女性を妊娠させたかも知れない。その事実より、冷静な彼を振り回す久美子に対して、愛実には強い嫉妬を感じた。それでも藤臣は、愛実との結婚を強行するという。そんな彼に不信と嫌悪を覚えながら……心のどこかで、自分を選んでくれたのだという優越感も生まれる。

理想と恋情の間を心が往復し、愛実には何が正義なのか判らなくなってしまう。

そしてその想いは藤臣にも伝わったようだ。

彼は久美子との関係に愛情はなく、ビジネスだったと説明を始めた。

「私は父親としてならどんな責任も取る。だが、長瀬は私を愛しているから取り戻したかったんじゃない。妊娠を利用して社長夫人の地位を掴もうとしただけだ」

その証拠に、実子であれば裁判にしても引き取ると宣言すれば、久美子は途端に堕胎を口にしたという。結婚も出来ない、養育費も取れないとなれば、子供は不用だと言わんばかりだ。「そういう女

性もいる」と説明されても、愛実には久美子の気持ちがどうしても判らない。

すると藤臣は殊勝な表情で口を開いた。

「君の言う通り、誠実でない女性を選び続けた私の責任でもある。だが、どうあっても長瀬とは結婚できないんだ」

「相続のため、ですか？ でも、もし長瀬さんが出産を選んだら？ あなたの子供だったら、気が変わると思いますか？ わたしは……子供の面倒を見るのは嫌じゃないです。慎也の世話はわたし がしてきましたから。でも、子供から実の母親を奪うなんて」

「実の親に育てられないのは不幸かい？ だが、私もそうだがおそ らく和威も、実の母から愛された記憶なんてないよ。君はどうなん だ？ 申し訳ないが、君たちの母親が君たちに愛情を注いで子育て しているとは、とても思えない」

藤臣の言葉は愛実の胸に響いた。

母に悪意はないと信じたい。だが、いつまでも自分が一番の女性 だ。今度のことも、『娘を犠牲にした』などという気持ちは欠片も ないだろう。母にすれば、財産も肩書きもある男性と結婚して豊か な生活が送れる。そんな愛実は幸運だと思っているに違いない。

久美子の一件もそうだ。パーティ会場では怒っていたが、仮に事 実だとしても愛実との結婚に変更はないと聞けば、母は文句は言わ ないだろう。

そんな母の姿を思い出し、愛実は閉口するしかなかった。

「反省してる。本当に、今度ばかりは自分の生き方を改めるつもり だ。不実な女性が好きなわけじゃない。金で一定期間の誠実は買え ると本気で思っていたんだ。それが誤りだったと認める。二度と繰 り返さないことを誓う」

「……」

藤臣はこの先の久美子との交渉を瀬崎と弁護士に任せるという。感情的にならないように、そして二度と過ちを犯さないように、金輪際久美子と二人きりで会うことはしない。愛実に向かって必死で言い訳をする。

特別な関係であつた女性が、女性本人ですら父親が特定できない子供を妊娠した場合、彼の言う以上の責任は取れないだろう。

久美子はどうして、藤臣を裏切つたのか……。

ひよつとしたら、もう一人の男性が彼女にとって本命だつたのかも知れない。となると、今度はその男性を裏切り藤臣と愛人関係を続けた意味が判らない。もし、愛実であれば……決して藤臣を裏切つたりしなかつた。それに、不可抗力で父親の判らない子供が出来たとしても、中絶など考えられない。

愛実は考え込み、広いスイートに息詰まる無言の時間が流れた。

「……愛実？ その、君が怒るのも無理はない。だが、移り香はあつたかも知れないが、その全部で関係があつたわけじゃ」

藤臣が更に言い訳を重ねようとしたとき、愛実が口を開いた。

「わたしには出来ません。もしあの時……信一郎さんの子供を妊娠するようなことになつても、中絶なんて……絶対に嫌です。このさき何があつても、それだけは。母は理想の母親じゃないかも知れないけど、わたしが生きているのは母のおかげです。たとえ子供に恨まれたとしても……わたしなら、きつと産みます！」

言葉にしているうちに、愛実は胸が熱くなり……しだいに声が大きくなった。

しかし、よく考えてみると、家族で暮らすことも儘ならない状態なのだ。もし、それが現実になつたら、子供を育てるところか産む

ことすら厳しいだろう。

冷静になればなるほど萎えそうになる心を、愛実はいちいち叱咤した。

（違う！ わたしなら絶対、好きな人以外とはしたくない！ あんなにお金に困ってた時だって……藤臣さん以外の人にはついて行けなかった。この人だから……）

最初に逢った時に恋に落ちたのだ。愛実はあらためて彼を見上げた。

すると、彼女と同じくらい熱い眼差しで、藤臣もジッと愛実を見ている。

「あの信一郎の子供でも……産めるのか？」

押し殺したような声だ。愛実は一瞬迷ったが、「……はい」と答える。

そして次に藤臣が投げかけた質問は

「私の子供でも、産んでくれるか？」

第57話 錯覚

それを口にした瞬間、藤臣は後悔していた。

勢い余って、とんでもないことを言ってしまった。しかも、体はすでに愛実の方を向き、ソファに隣り合って座った二人の距離は限りなくゼロに近い。胸が高鳴り、愛実の体に触れたくてどうしようもなくなる。

「それは……」

しかし、予想に反して愛実は答えを躊躇したのだ。

信一郎の子供ですら産むと即答した彼女が、藤臣の子供は迷っている。彼の心を満たしていた温かい感情が急速に冷え、寒々とした空間に取って代わった。

「なぜだ……なぜ嫌なんだ！？ レイプされた子供でも産むと言いながら、どうして俺の子が産めない！俺を好きだと言ったのは嘘か？ 本当は俺が憎いのかっ！？」

やはり、自分のような人間は誰にも望まれない。生きる意味も価値もないのだ。

（いつそ……この場で愛実を奪ってしまおうか？）

危険な考えが彼の胸をよぎる。レイプも含めて女性に暴力を振るったことは一度もない。だが……。

「だって……藤臣さんは、裁判にしてみても子供は引き取るって言いました。実の母親じゃなくてもいい。離婚の時は置いて出て行けって言われたら……わたしは絶対に嫌です！」

「ちょ、ちよつと待て……待ってくれ。産みたくないとか、欲しくないとかじゃなくて？」

瞬く間に、愛実の瞳から真珠のような涙がこぼれ落ちる。その雫があまりに美しく、藤臣はただ見惚れるだけだった。すると、なんと愛実から藤臣に抱きついたのだ！

「悔しい……藤臣さんの赤ちゃんかも知れないのに。わたしだったら、産んであげるのに……。どうして？ どうしてあの人なんですか？ わたしにはキスだって一度しか……好きって言ったのが迷惑なんですよね。でも……わたしじゃ駄目なら、そんなこと聞かないでっ！」

闇に沈みかけた心に、光の束が降り注ぐ。

やはり愛実を傷つけることなど出来ない。偽りだとしても、彼女の期待に応えられたら……。愛という言葉に保証書は不要だろう。

藤臣はそつと愛実の背中に手を回した。

「今日だって、可愛いって言われるだけで……でも、何年か経ったら、藤臣さんが付き合ってるような大人の女性になれるかも知れない。その時は……もし子供がいたら、連れて行ってもいいって言っ
て下さい……お願い」

愛実の言葉を終わりまで聞く前に、藤臣は一気に唇を奪った。

強く抱き締め、唇を押し付け合い……。ついには体の芯に火が点いた。小さな炎は次第に燃え盛り、彼の控え目な理性を燃やし尽くしてしまう。

藤臣は愛実の頬や脛にも唇を這わせ、涙の跡を拭って行く。そして再び唇を探り当てると……。今度は舌を押し込んだ。最初の時と同じように、愛実の体は硬直する。彼女の緊張が解れるように優しく

背中を撫で、ソフトなキスに戻した。

ふと気づけば、愛実を膝の上に横抱きにして今にも押し倒しそう
だ。

藤臣の体は熱くなり、そのエネルギーはすでに下半身に集まりつ
つあった。

「子供を連れて出るのは許さない」

キスの途中でそう呟いた。すると、愛実は怯えたような眼差しを
藤臣に向ける。

「その時は別れない。愛実……私たちは夫婦になるんだ。子供が産
まれたら、別れる理由はなくなる。そうは思わないか？」

藤臣は愛実の返事を待たず、更に唇を重ねた。

彼の言葉とキスに、愛実も我に返つたらしい。そして自分の太腿
に当たる物体に気づき、彼女は真っ赤になった。藤臣の腕を掴む指
先にも緊張が加わる。

「どうした？」

唇を離し、藤臣はわざとらしく尋ねてみる。愛実はその胸に顔を
埋めて、

「あの……当たってるんですけど」

「ああ、トイレの個室でもこうなつてたよ。気付かなかった？」

愛実はふるふると首を左右に振る。

「君が欲しい……抱きたくて堪らない」

「そんな……駄目、です」

ストレートにぶつけたが、愛実は青褪めて藤臣の胸を押し退けた。
しかし、駄目と言われて今さら引ける状況ではない。

「例の契約のことを気にしてるのか？ あれは弥生様との件だけだ。

私との結婚にも婚前契約書を作るつもりだったが、無しにすればいい。普通の結婚にしよう」

「いえ、だから……ちゃんと結婚してからでないと……本当に赤ちゃん出来たら」

「妊娠が不安なら充分に気をつける。それに万一の時でも、後ひと月もないんだ。別に大したことは……」

「そんな、簡単に言わないで！ 藤臣さんのことは好きだけど……怖いんです。長瀬さんみたいに捨てられたら、って。もし、相続の件がなかったことになったら、わたしは要らないでしょう？ その時、子供がいたら……どうやって生きて行けばいいのか判らない」

特に無神経な台詞を吐いたつもりはなかった。だが、愛実はお口ポロと泣き始める。

「私が君を捨てるはずがない。どうしてそうなるんだ？ 信じてないのか？」

「何もしないって誓ってくれた藤臣さんを信じてました。でも……」

彼はこの時、肝心な言葉を忘れていた。愛実が何を悲しんでいるのか、何に怯えているのか、気付かぬまま見当違いの言葉で彼女を試してしまう。

「ひと月も待てない。他の女のところに行く……と言ったらどうする？」

ヤキモチを妬いて欲しかった。好きな子をいじめる、小学生のやり方である。

「……判りました。それは嫌だから、藤臣さんの好きにして下さい」「え？ あ、いや」

愛実は俯き、震える指で彼の袖を握り締めたまま言う。

「でも、これだけは忘れないで。藤臣さんにとって誰でもよくても、

わたしは違いますから。それと、一度でいいから？好き？って言うて下さい」

その言葉に慌てたのが藤臣だ。

「悪い！ 他の女っていうのは嘘だ。本当に済まない。判った。君の希望通り結婚式まで待とう。もちろん他の女は抱かない。約束する」

愛実の瞳に一瞬で愛の光が甦る。

この目を見るたび、藤臣の胸にスイッチが入るのだ。守ってやりたい、と思う。彼女を傷つける全ての物から庇い、両腕で包み込み、幸福にしてやりたい。その想いが、懸命に彼自身から愛実を遠ざけてきた。

だがもう、堪えきれないことを覚悟したのだ。

わずかな良心に警告ランプが灯る。藤臣はその赤い点滅から目を逸らせた。

「愛実、私は誰にでもキスする訳じゃない。君が気づいたように……こんな風に興奮したりもしない。叶うなら、このままチャペルに飛び込みたいくらいだ。私は……君を愛してる」

「そんな……信じられない」

「こんな大事なことで嘘は言わない。愛実……私のことを愛してくれ。子供を産んで、一生離れないと約束するんだ」

生まれて初めて口にした愛の言葉。それは藤臣に強い酒を一気に呷った時のような、激しい動悸と高揚感をもたらした。

「嬉しい……ずっと藤臣さんのことが好きでした。あなたを愛します。あなたの子供を産んで、一生傍にいます」

「……愛実……」

吸い込まれるように藤臣は彼女に口づけた。

強い保護本能と、それを上回る性的欲望。この二つに負けて、藤臣は愛という言葉で十八歳の少女を騙している。だが、たとえこの欲望が消えても、愛実を無碍に捨てないことだけは神に誓う。彼女が望めば一生夫婦として過ごし、子供に対する責任も全うする。

そのコントロール不可能な想いを？愛？と呼ぶことに、彼はまだ気づいてはいなかった。

第57話 錯覚（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

第五章はこの回で終わりとなります。

次回から第六章…自覚があるのかないのか、いささかお馬鹿な藤臣ですが、しばらく楽しい婚約期間を過ごさせてやって下さい。

そう…しばらくは、ね（笑）

引き続き、よろしくお願い致しますm（——）m

第58話 思惑

「私は……君を愛してる」

藤臣から夢のような告白をされて、ちょうど一週間。彼は西園寺邸を訪れていた。

「でも……そんな、泊まって頂くんなんて」

愛実の母が、ほんの数日間だが家を空けることになったのだ。付き合いが復活した親戚の結婚式に呼ばれたのだという。母が居なくても特に困ることはない。愛実も弟たちも気軽に了承した。

ところが母は「留守の間が色々心配ですの。結婚までの大事な時期ですもの」そう言って藤臣を呼び出したのだ。母に別の思惑があることを愛実は知っていた。

「あなた……藤臣さんとまだ、ですって？　一緒に旅行まで行きながら、一体何をしてるの!？」

正式な婚約披露から、母は嫁ぐ娘にセックスの話題を振りはじめた。どうすれば夫が他の女に走らないか、男と女にはどんな駆け引きが必要か、等々。母は自分が妊娠しやすい体質だったことを挙げ、愛実もそうに違いない、という。結婚が決まっているのだが、多少前後しても構わない、早く子供を作りなさい、とまで言い始め……。

「結婚まではそんなつもりはないの。藤臣さんもわたしの気持ちを理解してくれたわ」

そう言い訳した愛実に、男性に無用な我慢を強いたらろくなことになる、と母は異論を唱えた。そして藤臣を自宅に招いたのである。

心配だから泊まってやって欲しいなど、口実もいいところだ。

「よろしいじゃありませんの。ここからお仕事に行かれたら、ねえ」
そんな母の思惑を知ってか知らずか、彼は気さくに頷き「もちろん、構いませんよ」そう答えたのだった。

婚約披露パーティの夜、二人はあのままロイヤルスイートに泊まった。

藤臣は愛実を放そうとせず、彼女はいつの間にか眠りについてしまふ。そして目を覚ました時には、愛実はベッドの中にいて、傍らに彼が眠っていたのだ。

この人は本当に自分を愛してくれている。これほどまでに大切にしてくれるのは、彼の想いが真実だからに違いない。愛を確信した愛実は、結婚式で永遠を誓おうと心に決めた。

その藤臣が、Ｔシャツに短パンという極めてラフな格好で西園寺邸のリビングで寛いでいる。

彼はソファに腰掛け、左には尚樹が右には真美が座っていた。それぞれが教科書を手に宿題を教えてもらっているのだ。末っ子の慎也はテーブルを挟んで藤臣の前に座り込み、色々口を挟んでは尚樹たちに怒られていた。

「すみません。お仕事で疲れていらっしやるのに……母がとんでもないことをお願いしてしまったから。本当にごめんなさい」

愛実はコーヒーを出しながら、つつい謝罪ばかりが口につく。

「いや、和威が高校を出るまでは、よく勉強をみてやったものだ。

君も後でみようか？」

「い、いえ、わたしは……」

愛実が慌てて断わろうとすると、「美馬さんて何でも知ってるの

よ。お姉ちゃんも教えてもらったほうがいいって」真美が屈託ない笑顔で言う。

でもそれは、後で二人きりになるという意味に違いない。

藤臣のことだから、母の真意も知っているのだろう。彼は弟たちにもこんなに優しく接してくれる。そんな婚約者に、これ以上待って欲しいと言うのは……母の言う通り、愛実が間違っているのかも知れない。

愛実は密かに覚悟を決めると、「じゃあ……後で」曖昧に微笑んだのだった。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

仕事を終えて戻って来たら「お帰りなさい」という声が聞こえた。可愛いハート柄のエプロンをつけ、笑顔の愛実が玄関まで走ってきたのだ。その瞬間、美馬邸には二度と戻りたくない、藤臣は強く思った。

「本当に申し訳ありませんわ。あの子はどういったことに疎くて……。まあ、まだ十八ですものね。あなたが上手くりードして下さらないと」

愛実の母親は誰もいない時を見計らい、コッソリと耳打ちした。

どうやら、愛実が藤臣との関係を話したようだ。それ自体とくに問題はないが……。まさか、花嫁の母から婚前交渉を勧められるとは思ってもみなかった。どうやら彼女は、美馬家との繋がりを確実なものにしておきたいらしい。結婚までひと月もない状況ではあるが、弥生から契約を反故にされることが怖いのだろう。

愛実はい前、

「独身時代は両親に、結婚後は夫に、母は甘やかされて来たんです。だから、わたし以上に世間の厳しさを知らなくて。自分がどんなとんでもないことをしているか、気付けないんです。父が亡くなって何度も説明したんだけど、判って貰えなかった」

母に理解してもらうのは諦めている。そう言って悲しそうな笑みを見せた。

確かに、美馬家の女性たちとは別の意味で、我が道を行くタイプの女性のようなのだ。

（この女は……『こういつたことに疎い』娘が、体を売ろうとまでしたことに気付かないのか？）

それだけではない。借金形の愛実が闇金業者に連れて行かれたらどうなるか……そんな想像力すらないとすれば異常だ。

「判っていたはずよ。でも、考えたくないことは考えようとしない人だから……」

藤臣が奇立ちを露わにした時、愛実は、それが母に性格なのだと語った。

藤臣は全てをぶちまけようかと思った。

自分の都合に合わせて愛実を利用し、しかも上手く立ち回り、彼女の為だなんて……人間の屑がやることだ！

しかし次の瞬間、彼は自分の行為を振り返りゾツとした。

真っ先に愛実を利用しようとしたのは藤臣自身であった。巻き込んだのは弥生かも知れない。だが、羽化したばかりの蝶を、蜘蛛の巣から逃がしてやることも出来たはずだ。藤臣はそれをしなかった。あまつさえ自分の手元に囲い込み、とうとう愛の言葉で彼女の未来をも縛ろうとしている。

藤臣に愛実の母を責める資格はなかった。

「すみません。近所付き合いも親戚付き合いもなくなって、わたしも最近はおの子たちを構ってやれなかったから……」

弟妹が部屋に戻り、リビングに二人きりになった途端、愛実再び謝り始めた。

転校や引越しが続き、愛実たちには友人もいなかった。彼らに好意的な来客が珍しかったのだろう。藤臣にしても子供に甘えられるなど、随分久しぶりの経験だ。

「その親戚だが、何か嫌な思いはしていないか？」

「いいえ。この間はわざわざ遠くから来て頂いて、結婚式にも出て下さるそうです。……どうかなさったんですか？　うちの親戚が何か失礼なことでも」

「ああ、いや、違うんだ。君が何もなければいいんだ……」

藤臣は言葉を濁した。

リビングで数学の教科書を開きながら、尚樹は藤臣に尋ねた。

「姉さんがお金のために結婚するなんて思ってます。でも、もしそうなら……僕らのためなんだ。美馬さんはどうなんですか？　どうして、姉さんと結婚するんですか？」

その深刻そうな表情に驚きながら事情を聞き出すと、

愛実のおかげでラッキーだったな。母親に似て、男を誑し込むのが上手い娘だ。

パーティの後、久しぶりに顔を合わせた親戚は、酔った勢いで尚樹にそんな言葉を浴びせ掛けたという。

「愛してるよ、心から。私に金があったのは偶然だ。だがそれを負

担に思うなら、君は一生懸命勉強して、将来、何かの形で返してくれたい」

尚樹は藤臣の返事に安堵した様子だった。

「あの……ご飯もお口に合いませんでしたよね？ でも、高級料理なんて……わたしには作れなくて」

黙り込む藤臣の様子をどう思ったのか、愛実は妙に心配そうだ。

「オムライスは嫌いじゃないよ。亡くなった母が機嫌の良い時に作ってくれた記憶がある。ああ、そう言えば、施設でも日曜の昼食によく出てたな。十歳の頃に戻って、君と人生をやり直せたらいいのに……」

その言葉に深い意味はなく、藤臣は本音を漏らしただけだったが……。

第58話 思惑（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

第6章をスタートします。

どこまで行く気だ、と思っていらっしゃることでしょう（苦笑）
次の7章で完結予定です（^^;）

ちなみにオムライス！

一昨日からツイッターを騒がせているネタですが：

（知らない！と言われる方：気になる！と思われましたら「オムライス 女子力」でググって見て下さい（^^）／

つつい愛実に作って貰いました（笑）

藤臣は意外にお子様なので、ハンバーグもカレーも大好きです。

では、よろしければ、もうしばらくお付き合い下さいませm）

——m

第59話 告白

「ごめんなさい。わたし、何も知らなくて……嫌なことを思い出せてしまつて。本当にすみません」

愛実の謝罪に藤臣は驚いた。

「いや、君が謝ることじゃない。施設でのことは、それほど嫌な思い出と言つわけじゃないさ」

あの女性職員との経験はともかく、母や妹の死を乗り越え、それなりに未来に夢を描いていた時期だ。藤臣にとって最悪なのは、その後だろう。

藤臣は愛実を手招きし、自分の膝近くに呼び寄せた。少し恥ずかしそうに、彼女は藤臣の前に立つ。思わず、調子に乗って膝の上に抱き上げてしまった。

「きゃ！」

「弟くんたちは寝たんだろう？」

「それは……あの藤臣さん」

「ん？ 何だい？」

愛実の髪の毛が好きだ。ただのシャンプーだと聞いても、これまで嗅いだどんな香りより扇情的で彼の心を高ぶらせる。目を閉じ、愛実の髪に顔を埋めていると、そのまま離れられなくなるのだ。

「あの……無理に、我慢してもらつてるんでしょうか？ ここで暮らせるのは藤臣さんのおかげなのに。わたしが我がまま言ってますか？」

藤臣はその言葉に顔を上げ、まじまじと愛実を見つめた。

（どういう意味なんだ？ まさか ）

「わたし……愛してるって言われて、嬉しくて。あなたに甘えてし

まってるのかも知れない。わたし、藤臣さんに嫌われたくないんです。だから……あの」

次の言葉を藤臣は指先で制した。人差し指と中指で唇を閉じさせ、黙らせる。

おそらく彼女の母親だろう。藤臣を呼びつけ、彼を焚き付けただけでなく、純粋な愛実の心につけ込んだのだ。彼女が罪悪感を持つような言い方をしたに違いない。

「愛実　実は、君に話があるんだ」

藤臣は気持ちを引き締めた。愛実から構わないと言われたら、すくにもベッドの飛び込みたいのは山々だ。だが、あの母親の思いつまに操られるのは面白くない。

だが、急に冷静さを取り戻した藤臣に、愛実の顔色が変わる。

「わたしが、何かしたんでしょか？」

怒られると思ったのか、声が少し震えていた。

藤臣は、そんな愛実の指先を握ると、そつと引き寄せ口づける。

「こんなことを伝えるのは心苦しいんだが……長瀬くんは中絶手術を受けたそうだ」

その言葉に愛実は眉根を寄せ瞳を曇らせた。不実な対応を責められる　　と思つた藤臣は早口に言い訳を始める。

「君の言いたいことは判る。でも、これが彼女の決定なんだ。例の……ホストにも結婚を迫つたらしい。結局断わられて。どうしようもなかったんだろつな」

ふいに愛実の手が彼の頬に触れた。

柔らかい指先が皮膚の上をゆつくりとなぞる。

「大丈夫、ですか？　でも、藤臣さんも悪いんですよ。絶対なんてないんだから……誰とでもなんて、二度としないで下さい」

黒い瞳が心配そうに覗き込んだ。

藤臣には、久美子の子供が自分の子とは到底思えない。彼女自身も同じに違いない。だからこそ、出産を選ばなかったのだろう。

実際のところ、もし久美子が子供を産み、それが藤臣の子供だと証明された場合、彼が親権を得るにはかなりの金と時間を要したはずだ。結婚していれば容易だが、そうでない場合、法律というのは甚だ未婚の父親には不利になっている。

だが、愛実の目を見ていると、これ以上の釈明は出来なかった。

「……判ってる。約束した通り、二度と君以外の女性には触れないけど、君が気を遣う必要はないんだ。私のこれまでの行いを見れば、簡単に体を許す気になれなくて当然だろう。君には手を出さないと、自分で言い出した契約も反故にしてみましたし……」

殊勝に言い始めた藤臣に愛実は無言で身を寄せる。

「長瀬さんはあなたを裏切りながら、どうしてパーティの席で自信満々に言えたんでしょうか？ 子供の父親なんて、調べられたらすぐにバレてしまうことでしょうか？」

愛実には不思議な話だろう。だが、藤臣にすれば簡単なことだった。

藤臣は結婚しないと言い続けてきた。しかし、後継者を得る為の結婚なら、彼は受け入れると思われていたのだ。藤臣は過去の経緯から、妊娠には過剰なほど警戒している。と、同時に、彼が子供を捨てないことは知れ渡っていた。可能性があれば藤臣は首を縦に振る。そして、結婚後すぐに第二子を作れば、簡単には別れられなくなる。久美子はそう判断したのだろう。予想外は、愛実の存在だった。

もし、愛実との婚約話がなく、久美子が公式の場で妊娠・結婚を匂わせれば、藤臣は体面を優先して結婚したかも知れない。……だが、その考えは愛実には伝えなかった。

代わりに彼が口にしたことは、

「私が二十歳の頃だ。二つ年上の女性と……交際してて、彼女に子供が出来たんだ。血の繋がった家族が欲しかった私はすぐに結婚を申し込み」

ようやく美馬の家に慣れた頃のこと。

東恭子は同じ大学に通う真面目な優等生だった。地味なタイプの女性で藤臣の趣味ではなかったが、失恋してヤケ酒を飲む彼女と遭遇し、その勢いでホテルに行ったことがきっかけだった。

翌朝、藤臣と関係したことを知り、恭子は真っ青になる。しかし彼氏を忘れる為だろうか、藤臣が誘うと数回ホテルに付いてきた。この関係を？交際している？と呼ぶには些か無理があるのは承知だ。彼女に対する感情に、愛も欲望もなかった。だが、藤臣が関係した女性の中で、恭子は唯一誠実と呼べる部類の女性に違いなく……。

妊娠を告白された時、彼の中で本能が目覚めたのだ。

守ることの出来なかった妹の存在が彼の胸に甦る。家族は取り戻すことは出来ない、だが、新たに作ることは可能なのだ。藤臣は生きる目標を見つけたかのように、恭子に結婚を申し込み、その想いは一気に炎上した。

「養父母をはじめ、先代や弥生様も大反対でね。けど、押し切って結婚することになった。そして挙式当日……彼女は来なかったんだ」「どうしてですか？ そんな……子供もいるのに。あ、まさか」

愛実はアクシデントを想像したようだ。あの時の藤臣も一緒であ

った。

「事故とかじゃない。彼女は自分の意思で来なかった。はっきり言えば……他の男と逃げたんだ」

祭壇の前で待ちぼうけを食わされ、藤臣は大恥を搔かされたのだ。直後、恭子の両親が慌ててやって来て、書き置きを残して娘は出て行ったしまった、と告げた。

恭子が一緒に逃げたのは、別れた恋人だと判明する。藤臣は二人を探して見つけ出した。

「男と逃げるならそれでもいい、だが、私の子供を渡すわけには行かない！」

そう言った藤臣に恭子は「あなたの子供じゃない」と答えたのである。

病院の検査で、妊娠の時期は藤臣と関係する前、と判明したという。しかし、すでに藤臣が結婚の準備を進めていて、誤解だったと言い出せる状況ではなかったのだ、と。

「彼女は困り果てて、別れた男に相談したらしい。男は美馬の名前に怖気づいたものの、一緒に逃げようと言ったそうだ」

そもそも、失恋に付けこんだのは藤臣のほうである。ましてや、金ではなく愛情を選んだ女性を、藤臣に責めることは出来なかった。「思えばあれで怖くなったんだな、誠実ってヤツが。とことん女に虚仮こけにされる運命なんだと思ったら……」

「わたしは逃げたりしません！ あなたを置いて逃げたりしないわ」

愛実の腕が首に巻きつき、ふわふわした唇が藤臣の唇に押し当てられた。拙く、そして甘美な誘惑は、無意識で藤臣のスイッチをオンにしてしまい……。

第60話 静夜

他人の思惑に乗せられるのはご免だ。

そんな根拠のないプライドなど、愛実のキスは見事に粉碎してくれた。柔らかな唇が欲しくて堪らなくなり、藤臣はそのまま愛実の腰を抱き締めた。

そつと重なるだけのつもりだったのだろう。その唇を激しく吸い上げられ、愛実は慌て始める。

「ふ、藤臣さん……あの」

「黙るんだ」

藤臣はそれ以上の隙間を与えなかった。

一気に愛実を抱き上げ、階段を上がり彼女の部屋に向かう。愛実の部屋はリサーチ済みだ。弟妹の部屋からは少し離れ、真下は母親の部屋だった。ノブを回した後、ドアを背中を押して開ける。常夜灯の下、室内には年代物の学習机やシングルベッドがぼんやりと浮かび上がった。それは、小学生の頃から変わっていないのではないかと藤臣に思わせた。

そのまま、勢いに任せて愛実をベッドに押し倒す。

（愛実が悪いんだ。無意識で誘惑する彼女が……。ただでさえ我慢してるのに、キスなんかされたら）

次の瞬間、ベッドの頭もとに置かれた写真立てが目に入った。

祖母や父親も一緒の家族写真と、どこから手に入れたのか藤臣が一人で写っている写真が並べてある。トクン、と藤臣の心臓が高鳴る。愛実は特に嫌がる様子ではないが、きつく目を閉じ、指先が微

かに震えていた。

不意に、下半身の猛りに冷水を浴びせられた気分になり、藤臣はベッドサイドに座り込む。

「ここまでだな。今夜は……この辺で止めておこつ」

「それで、構わないんですか？」

「もちろんだ。はじめから、そのつもりだったんだから……」

心にもない言葉を口にして、いささか恥ずかしい。だがまさか、ヤル気満々だったが家族写真の前に臆したとは言えないだろう。

「この写真は？ いつの間に私の写真を？」

話を逸らす目的で藤臣は質問を試みる。すると、戻って来たのは予想外の答えだった。

「香港に行かれたときの写真です。あの……信一郎さんから頂いて長瀬さんと一緒に写ってるのはちょっと……でも、藤臣さんだけの写真があったので、つい」

その答えに、藤臣は開いた口が塞がらない。

愛実も腹が据わっていると言うべきか、それとも天真爛漫さの勝利だろうか。もし藤臣なら、信一郎に関わるものなど処分しただろう。ましてや長瀬の存在を思わせる写真であるなら……。

藤臣がそのことを口にすると、

「でも、藤臣さんが助けに来てくれたから……嫌な思い出だけじゃないです」

はにかみながら、愛実は答える。

彼女は少しクシャクシャになった髪を手ぐしで整えながら、ベッドの上にちょこんと座っている。頬を薄っすらとピンク色に染め、その姿を見ているだけで再び戦闘態勢に入るのは、悲しい男の性^{さが}であろつ。

今すぐ立ち上がり部屋から出るべきかどうか、藤臣は真剣に悩んでいたのである。

く*く*く*く*

やはり、藤臣が冷酷だなんて信じられない。

彼が苦しそうに口にした十年前の話に、愛実はずいぶん慈しみの気持ちを抱いていた。家族のいない藤臣にとって、子供の存在はどれほどの喜びだったろう。誠実な愛情に負けた傷は深かったに違いない。女性に誠実さを、求められなくなってしまうほどに。

（わたしが家族になろう。この人の子供を産んで……本当の家族になりたい！）

愛実に芽生えた強烈な感情が、キスを誘発した。

藤臣から「愛してる」と言われたことも、後押しになっている。自分は藤臣の愛を得て、本当の妻になるのだ。それは彼を独占してもいいということ……藤臣が他の女性のもとでネクタイを外したりしたら、愛実に怒る資格があるということだった。

ふわふわした気持ちで藤臣のキスを受け止めていたら、あっという間に愛実は自室に連れ込まれ、ベッドに転がされていた。

藤臣が望むなら、このまま特別な関係になっても構わない。仮に子供が出来たとしても、藤臣は喜んで大切にしてくれるだろう。大事なのは二人の関係で、周囲にどう思われるかじゃない。

だが、彼を突き動かした情熱は瞬く間に消え去り、愛実の心だけ高ぶった場所に取り残されてしまった。

（やっぱり、体が藤臣さんの好みじゃないんだわ……）

胸は巨乳には遠いが、貧弱と言われるほどではないだろう。とはいえ、セクシーと言われるほど色気があるとは思えない。単純に力ツプのサイズだけなら由佳や久美子にも劣らない。それでも、彼女たちのほうが数十倍セクシーであった。

愛実にもそう見えるのだ。藤臣はもっと感じているだろう。

「すみません……わたしが何も判らなくて、藤臣さんもその気にならないんですね……」

シングルベッドの上に座りこんだまま、愛実はポツリと呟いた。

藤臣は息を呑むように固まっている。愛実はそんな彼の様子を感じ取り、余計なことを言ってしまった、と後悔した。

「君は……まったく、少しは男心も判ってくれ」

前髪をかき上げ、藤臣はため息と共に愛実の耳元で囁いたのだ。仕方なさそうな声とは裏腹に、表情は糸が切れたように緩んでいる。彼は愛実の頬に軽くキスすると、細くしなやかな彼女の指を握り……情熱の場所へと導いたのだ。「きゃっ！」ほんの一瞬で愛実は手を引っ込める。

それは、短パンの中に隠した凶器のようだった。体に押し付けられたことはあるものの、手で触れるのとは訳が違う。セックスというものを身近に感じ、愛実はあらためて？結婚？の意味を実感した。

「怒ったかな？」

「い、いえ……」

「その気になってない訳がないだろう。だが、これまでのように簡単に考えたくないんだ。本気で反省して、態度を改める。その決意を証明したいから、待つと言ってる」

愛実の指先を握ったまま藤臣は切々と訴えた。

「あの……ヤキモチ妬いてもいいですか？」

「は？」

「浮気しないで、とか。他の人と噂になるのも嫌……とか」

藤臣の手に、もう一方の自分の手を重ね、愛実は懸命に言葉にした。

「ああ、いいよ。もちろんだ。君は妻になるんだから」

「他の人とはキスもしないでね」

「してないよ。この十年、君以外の女性とはキスしてない」

その台詞と同時に、愛実の唇にキスが降り注いだ。

藤臣のキスは唇だけに留まらず、愛実の首筋や胸元、肩や腕にまで、服を脱がさずになぞれる場所は全て口づける。それは例えようもなく優しい愛撫で、愛実は安心感に包まれ彼に身を委ねた。

「藤臣さん……お願いがあるの」

「何でも聞こう。こんな穏やかな気持ちになれたのは生まれて初めてだ。君の願いなら、何でも叶えてやる」

「朝まで、こうして抱き締めていてくれますか？」

「……」

「結婚とか、本当は凄く不安だったから……。でも藤臣さんとなら……わたし、あなたに出逢えて幸せです。本当に、夢みたいになんか」

愛実はそつと藤臣の背中に手を回し、ギュツと抱きつく。それは、抱き合っただけで、愛を感じられるだけで、言葉に出来ないほどの幸福があると知った夜だった。

しかし同じ夜、藤臣が一睡もできなかったと知るのには、愛実が彼

の妻になった後のこと。

第61話 発情

随分久しぶりに、愛実が美馬邸を訪れた。

藤臣の養父母が彼女を食事会に招いたのだ。学校帰りの愛実は制服のままである。髪を縛る黒いゴム、白いハイソックス、そして学生力バンを手にした婚約者の姿に、藤臣は息を飲んだ。

（駄目だ……俺は一体どうなったんだ？ どうして白いソックスに欲情するんだ！）

瀬崎運転の社用車から降り立つ愛実の姿を見た瞬間、全身の血が燃え盛った。禁欲生活の影響か、ここ数日の睡眠不足が祟っているのか。

愛実は毎夜、彼の腕の中で幸せそうに眠っている。そんな彼女を無下に突き放すことも出来ず、大人の余裕を見せている藤臣だったが……すでに限界だ。

「藤臣さん！ あの、お招きありがとうございます。それに、弟たちのためにわざわざ家政婦の方を回してくださいさって」

「えっ？ あ、ああ……それは瀬崎に命じたんだ。君にはこの屋敷に泊まって貰う予定だからね」

スーツの袖に飛び付いてくる愛実を可愛らしく思いながら、逃げ出したい衝動に駆られる。だが、それをしてしまえば、愛実再び藤臣の気持ちを疑い始めるだろう。ここは彼にとって正念場であった。

そんな藤臣の姿を見て苦笑しているであろう瀬崎に視線を向けるが……。

彼は藤臣の様子に気付くこともなく、真剣な眼差しで愛実を見ていた。その瞬間、藤臣は制服姿の婚約者を強引に腕の中に囲い込む。

「あ、あの……」

愛実は面食らったように藤臣を見上げる。

「さあ、食事まで私の部屋で休むといい。案内するよ」

藤臣は彼女の肩を抱き寄せるとそのまま歩き始めた。途中でピタリと足を止め、振り返る。

「瀬崎、ご苦労だったな。この後の予定はなかっただろう？ 直帰してくれて構わない」

彼は気付かれたことを悟ったのだろう、「はい。それでは失礼致します」今度は目を逸らしたまま、深く頭を下げたのだった。

この時、藤臣は確信した。瀬崎は愛実を諦めていない。彼は藤臣が言った『彼女が望めば……俺が断わる理由などないだろう？』それを実行するつもりでいることに気付いたのだ。

（いい歳をして、まさか本気で惚れたのか？）

藤臣は瀬崎と二歳しか変わらないことを棚に上げ、心の中で文句を言う。

その時だ。

「あの、車の中で瀬崎さんに聞きました」

愛実の沈んだ表情と声に藤臣の心拍数は跳ね上がった。

（何を……言っただ）

密告されて困る悪事は、過去を掘り起こせば際限なく出てくる。

藤臣は上手くごまかすことも出来ず、ただ唾を飲み込んだ。

「長瀬さんがモデルを辞めて田舎に帰られた、と。最後に小さな雑

誌に色々掲載されるかも知れないけど、デタラメばかりだから気になさらないように、と慰めて下さいました」

久美子の話だったことに藤臣はホッと息を吐く。

結局、久美子は所属事務所の契約も切られたようだ。愛人^{パトロン}である藤臣の金の力に胡坐をかき、自分を磨く努力を怠っていた彼女に新しい道は与えられなかった。彼女は仕返しとばかり、三流誌のインタビューに応じたと聞いている。

「ああ、そうらしいな。捏造記事を載せて、ペンは剣よりも強し、と叫びたがる小さな出版社もあるんだ。一々相手にするのも馬鹿らしくてね。君に実害があるようなら、きちんと対処するが」

「い、いえ。そうじゃないんですけど……」

「どうした？」

「長瀬さんは、あんなに美人でスタイルも良くて、立派なお仕事もされていたのに……こんなことになってしまつて。それって複数の男性と……そうなつてしまつたからですね？ 一度経験してしまつたらああいうことつて、誰とでも出来るようになるんでしょうか？」

愛実 は 俯き 悲し そう に 話 した。

彼女の言わんとすることは判る。久美子の場合、無闇に体を提供せずとも、充分に男を惹き付ける容姿をしている。仕事もして金銭的に困っている様子もないのに、ということだろう。だが、藤臣には理屈で判つても感情で理解しがたいものだった。

所詮、？たかがセックス？だ。誰とも肌を合わせたことがなく、それを売ることに、清水の舞台から飛び降りるような覚悟を決めていた愛実には判らないのかも知れない。その点、久美子は藤臣と同じ穴の貉だった。自分の欲望に正直で、金と男だけじゃなくモデルとしての成功や将来の確約まで手に入れたかつたのだろう。

一方、愛実が望むのは愛情だ。藤臣とも、？愛し合いたい？のであつて？セックスしたい？わけじゃない、と言つたろう。それが単なる愛という言葉にデコレーションされたセックスとも気付かず。近い将来、藤臣は彼女に真実を教える。その時は、愛実も久美子のようになつてしまふかも知れない。

（朱に交われれば……か。それなら別れが楽になるな）

胸の内で毒づきながら、なぜか気持ちはざわめくばかりだ。本心は、愛実だけは愛情を求め続けるのではないか、そんな期待が心を掠めた。

しかし、何も答えず眉を顰める藤臣の様子に、愛実误解したらしい。

「ごめんなさいっ！ 変なことを言つてしまつて……忘れて下さい」
あからさまではないにしてもセックスに関する話題を口にしたことに、藤臣の機嫌を損ねたと思つたようだ。

「いや、そうじゃないんだ。君には？誰とでも？とは思つて欲しくなくて……。私だけでいいと言つてくれないか？」

「当たり前ですっ！ そんな、藤臣さんと結婚するのに……本当の結婚だつて仰つたでしょう？ あなた以外の人とは一生しません！

……あ」

またもや力強く肯定したことに気付き、愛実は見る間に真っ赤になつた。

「それは……嬉しいな」

藤臣は自分の声に驚いた。まるで発情期のオス猫さながらの声色だ。湧き出す欲望を隠すことも出来ず、赤く染まつた愛実の頬に触れた。

藤臣の部屋は三階、ここはまだ二階にも上がっていない。せめて

自分の部屋に入ってから……。そう思うものの、部屋に入ったらどこまで進むか見当もつかない。

「ふ、ふじおみ、さん」

上ずった愛実の声を聞いた瞬間、彼女の吐息すら奪いたくなった。問答無用で壁に押し付け、可憐に震える唇に口づける。愛実の手から学生力バンが滑り落ち、中二階の踊り場に転がる音がした。

使用人なら、通りかかっても知らん顔をしてＵターンするだろう。彼女の家に泊まる時はエスカレーターしないように最近ではキスも我慢しているのだ。愛実を手に入れるため、この我慢大会はあと二週間続く予定だった。

「藤臣……さん……ここ、階段です」

「知ってるよ。ここならキス以上には進めない」

「で、でも、キスだってこんな場所じゃ」

「もちろん、その気になればキス以上も可能だが……それは結婚してからだ」

藤臣の口づける場所が、唇から頬を伝い首筋に移る。化粧品の匂いのしない肌がこれほどまでに魅力的だと思ったこともなかった。愛実には出来る限りこのままでいて欲しい。他の女のようにしないためには、どうすればいいのか……。

そんなことを考えながら、無意識のうちに手が半袖ブラウスの胸もとに移動し、えんじ色のリボンに触れた瞬間　中二階から咳払いが聞こえた。

第61話 発情（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

長らく更新が滞ってしまい、申し訳ありませんでした。
事情は活動報告に書かせていただいた通りです。

もう大丈夫ですのでご安心下さいませ（^^）／

「ゝ愛人」と揃えようと二文字のサブタイにしたのですが…
こんなに長くなるとは思いませんでした。

サイトに移すときは何か別の方法を考えます（苦笑）

もしダブってましたら、こっそり教えてやって下さいm（——）m

引き続きよろしくお願い致します。

第62話 血縁

藤臣はハツとしてキスをやめ、中二階の踊り場に視線を向ける。

冷やかな眼差しで二人を見上げていたのは、美馬和威であった。

「邪魔するつもりはないんだが、こっちも仕事帰りなんだ。ここを通らなきゃ自分の部屋に行けないもんでね」

紺のスーツに同系色のネクタイ、ビジネスバッグを抱えたごく普通の会社員スタイルだ。ただ、上着のボタンを外し、ネクタイを弛めた姿はどこかだらしく感じ、これまでの和威とは随分印象が違ふ。

由佳との情事の現場に和威が愛実を連れて現れたあの日、藤臣は彼を本社に呼びつけた。

信一郎が愛実を襲ったこと。藤臣が彼女を救い出し、結果、二人でホテルに宿泊するようになった事情などを説明する。簡単には納得出来ないまでも、愛実が藤臣を信じると言う以上、和威に出番はない。彼は黙って引き下がったはずだった。

だが思えば、和威は身内に向けた婚約披露には欠席。丁国ホテルのパーティーは顔を出したようだが、一度も話はしなかった。この間、藤臣は自分のことに必死で、和威のことまで考える余裕はなく……そう言えばつい先日、『和威の帰宅が遅くなった。女でも出来たのではないか』そんな話題をどこかで耳にした気がする。

藤臣は軽く頭を振ると気を取り直し、

「やあ、済まないな。婚約中なんだ。大目に見て貰えたらありがたい」

和威は何も答えず、愛実から離れようとしないうちに藤臣の背後をすれ

違った。その時だ。

「待て、和威。お前……こんな時間から飲んでるのか？」

「……大した量じゃない」

「まだ六時にもなっていないんだぞ。それに、一般社員が帰宅するには早過ぎる時間じゃないか？」

遅くなる分には和威も男だ、気付かない振りをするのが礼儀だろう。だが、何の肩書きも持たない和威が、普通に仕事を終えて帰宅するのは七時を回るはずだった。さらにどこかで飲んでくるとしたら、もつと遅くなる。

「……体調が悪くて早退したんだ」

「一杯飲んだら良くなる病気か？ 病名を知りたいか？」

言われるまでもなく本人も判ったのだろう。和威はカッと頬を染め、藤臣に向き直り怒鳴りつけた。

「あんたには関係ない！ 僕のことは放っておいてくれ！ 邪魔なら叩き出せばいいだろう？ あんたにはその資格があるんだからな
っ」

藤臣は和威の口調に驚いた。

どれほど怒りを露わにしても、藤臣にこんな言葉をぶつけたことはなかった。飲酒の影響といっても、泥酔や酩酊には程遠い。

それは飼犬に手を噛まれた気分だった。藤臣もいささか頭にきて言い返す。

「そんなに出て行きたいなら今すぐでも叩き出してやるぞ。だがその前に、シャワーでも浴びて頭を冷やせ。和威、お前だけは信一郎さんや宏志くんとは違うと思っていた。私や弥生様の期待に背くなわざわざ自分から居場所を失くすような、馬鹿な真似はしないでくれ。……いいな」

声も出せず、腕の中で震えている愛実の肩を抱き、藤臣は階段を上がろうとした。

「立派な言い草だね、藤臣さん。さすが、おじい様が期待した一人息子だ」

「……！」

「聞いたよ。？死後認知？だって？ おじい様が遺言で認知して、藤臣さんにほとんどの財産を残したそうじゃないか。おばあ様はこの屋敷だけでも実の孫に残そうとしたけど……それもあっさり藤臣さんに持つて行かれたって言うてたよ」

和威は愛実を横目で見て、意地の悪い笑みを浮かべた。

屋敷の中で唯一味方だと信じてきた藤臣が、実は血の繋がった叔父であることを知り……彼は相当シヨックだったらしい。藤臣は何か言おうと思ったが、おそらく今の和威は何も受け付けられないだろう。

（参ったな……もう少し後だと思ってたんだが。それに……）

真横で愛実が息を飲み、藤臣を見上げている。

その視線をひしひしと感じ、愛実に対する言い訳を考えてなかったことに気が付いた。

「愛実さん、君には幻滅したな。藤臣さんのセックスが素晴らしいのは、多くの女たちから聞いてるさ。だが、まさか君が、その一人になるとは思わなかった」

「和威、文句があるのは私に對してだろう？ 愛実を巻き込むな！」
「同じことだ。婚約披露の席を外して、二階のトイレでセックスしてたんだって？ 今だって僕が通るかからなければ、どこまでヤル気だったんだ？ 二ヶ月前の君とは別人だな」

和威は愛実を鼻で笑った。その態度は藤臣にはとても看過できず……力で和威を黙らせるべく、愛実から離れようとした。だが、そんな藤臣の手を愛実はギュツと掴む。

「和威さん……あなたが仰るとおり、わたしは藤臣さんに出逢って変わりました。彼を愛されてると知って、とっても欲張りになったと思います。でも和威さん、あなたも二ヶ月前とは別人です。初めてお会いした時、宏志さんの言葉遣いが我慢ならないと仰ってたじやありませんか!? 今のあなたは、あの時の宏志さんと同じです」

それは藤臣のどんな説教より、和威の胸に堪えたようだ。和威は愛実から視線を逸らせると、一言もなく二階の廊下に走り去る。

「済まない、愛実。和威はどうやら私が思う以上に、君に本気だったらしい。でも冷静になれば……」

「和威さんのことより……。先代の社長さんは、藤臣さんの本当のお父様だったんですか?」

即答できず、黙り込む藤臣だった。

くくくくくくくく

そこは広くて寂しい印象の部屋だった。

愛実は初めて藤臣の私室に通され、そんな感想を抱いた。豪華な調度品が揃い、重厚なデスクもある。二間続きで奥は寝室、専用のバスルームにトイレもあり、ホテルのスイートルームのようだ。

「あの……ここで生活されてるんですね?」

「生活？ ああ、まあ、寝る為に戻るだけだが、これも生活だろうな」

部屋は綺麗に整頓され、余分なものは何一つない。出しっ放しの本であったり、ソファの背に掛けられた室内着であったり、そんな藤臣の残り香のような物が一切ないのだ。

「なんだか、家って言うより……ホテルの部屋みたいですな」

愛実は思った通りの感想を口にした。

言った後に、藤臣が気を悪くしたのではないかと案じたが……彼は気にしてはいないようだ。

「家族と暮らす場所が？家？なら、私に？家？はない。美馬一志は生物学上の父親ではあるが、私の家族じゃなかった」

和威の変化に愛実も驚いていた。あれほど言葉を選んで、丁寧に愛実に接してくれた人が、どうしてあんな風になってしまったのか。だがそれには、美馬邸での婚約披露の一件も関係していたのだ。

宏志と結託したメイドの千里に追い詰められ、助けてくれたのは藤臣だった。あの時は浮かれていて何も考えなかったが……。

親戚一同を前にして、藤臣は愛実とトイレの中で？親密な関係を持った？と告白したのも同然であった。せめて和威にくらい事情を説明したい。だが、あんなキスシーンを見られてしまったのは、容易には信じてくれないだろう。

驚きはそれだけじゃない。

和威が藤臣に言った、『おじい様が期待した一人息子』その一言は愛実に衝撃を与えたのだった。

第63話 地雷（前書き）

軽い性的な描写があります。 R15でお願いします。

第63話 地雷

「どうして……本当のことを話してくれなかったんですか？」

美馬家に漂う、藤臣を取り巻く微妙な空気。それに愛実も気付かなかった訳ではない。

でもまさか、弥生の夫が妻以外の女性に産ませた子供だったなんて。だからこそ、弥生は藤臣を選んで欲しくなかったのだ。自分の血の繋がった孫と結婚して、この屋敷を継いでもらうために愛実を相続人に指名した。

「どうして？　これがそんなに重要なことだったのかな？」

「重要です！　そんな……わたし、何も知らなくて」

愛実はただ、弥生に申し訳ないことをした、その思いだけだった。しかし、そんな愛実の言葉に藤臣の形相が変わったのだ。

「知ってたらどうだと言うんだ！？　弥生様のために私から和威に乗り換えるのか？　私を好きだと言ったのは嘘か？」

「それは……そうじゃなくて」

藤臣との出会いは偶然ではない。弥生が愛実の名前を出したからだと聞いている。それがなければ、あの夜、愛実は金融業者の男たちに連れて行かれていたはずだ。

弥生の思惑はともかく、西園寺の祖父を思い出し、愛実の名前を挙げてくれたことが全ての切っ掛けだった。確かに、弥生の眼差しから優しさや思いやりを感じ取ったことはない。愛実のことを誰かが？　旧伯爵令嬢？　と呼ぶたび、表情の端々に不快感を滲ませるほどだ。

だが、自分に娘しかおらず、いきなり孫と同じ年頃の息子を家に連れて来て後を継がせると言われたら……。

藤臣に非はないが、弥生の悔しさも容易に想像できる。

「じゃあ、どうして黙っておられたんですか？ 藤臣さんのご両親の話が出た時に、実の父は亡くなられたおじい様だと、教えて下さっても良かったじゃないですか！ 重要なことじゃないんでしょう！？」

口にした後、愛実はハツとした。

藤臣だけを責めるのは間違っている、と。なぜなら弥生も、藤臣の養父母である弘明・佐和子夫婦も、誰も愛実に伝えてはくれなかった。それに藤臣の母親は三十代で亡くなったはずだ。今年亡くなった美馬一志は八十を過ぎていた。ざっと計算しても、藤臣の母親は親子ほども歳の離れた男性の子供を産んだことになる。

（もし、わたしなら……。自分の口から言うのは辛いかも知れない）

「あ、あの……ごめんなさ」

謝ろうと口を開いた時、彼の手が愛実を引っ張り、ソファの上に押し倒した。

「じゃあ、こう言えばよかったのか？ 入り婿の一志は女房の親の目を盗み、京都で女遊びを繰り返した。母もその一人だ。息子が欲しいなんて奴の言葉を真に受け、俺を産んだ途端……弥生の耳に入り捨てられた。だが、弥生はそれだけじゃ足りず……京都の置屋に手を回して、母が芸妓として働けないようにしたんだ！」

藤臣の目が燃えるようだ。これほどまで苦しそうな顔は初めて見る。愛実は瞬きも忘れ、食い入るように彼を見つめた。

「母は酔うと俺を殴った。それも泣きながら……。だが奴と違って、俺を捨てて行くようなことはしなかったさ。普通の男と一緒になれば、きつとごく普通の優しい母親になったんだろう。母が死んだ時俺は八歳だった。施設に入る時も、奴は俺を無視したんだ。三

十で父親に認知されたことを、喜ばないといけないのか？ 弥生を
氣遣う義務が、俺にあるのかっ!？」

愛実 は 藤 臣 の 傷 に 触 れ て し ま っ た こ と を 後 悔 し た 。

藤 臣 は 泣 い て は い な い 。 そ れ が 悲 し く て 、 愛 実 の こ め か み に 涙 が
伝 う 。 言 葉 に な ら ず 、 ジ ッ と 彼 の 目 を 見 つ め る 。 す る と 、 彼 は 愛 実
の 両 手 首 を 掴 ん だ ま ま 、 覆 い 被 さ る よ う に キ ス し て 来 た の だ 。

熱い吐息が愛実の唇から首筋に下りた。片方の手が自由になり、
同時に制服のリボンが解かれた。ボタンが一つ、二つと外され、白
いブラジャーが露わになる。熱い唇は肩紐を外しながら膨らみを辿
り、その先端を目指していた。

（藤 臣 さ ん は 、 こ こ で わ た し を 抱 く の ？ ）

お互いに愛を伝え合い、夫婦となることが決まっているのだ。切
っ掛けが何であれ、誰かの思惑があるにせよ、それでも愛し合っ
ている。弥生を傷つけるとしても、愛実には藤臣以外の男性は選べ
ない。可能なら、相続人から外して欲しいくらいだ。

以前なら、そうなれば藤臣から見捨てられると思ったが今は違う。
？ 藤 臣 に 愛 さ れ て い る ？ そ の 想 い が 愛 実 を 強 く し た 。

ギョツと目を閉じ、愛実 は 彼 に さ れ る が ま ま だ 。

ボタンの三つ目も外され、ブラジャーから白い乳房が弾け出た。

そこを藤臣の唇に囚われ、愛実の全身に電流が走った。

「あつ……やあ……っ」

二人の息遣いだけが広がる部屋に、その声は予想外に響いて……。
次の瞬間、藤臣は飛び退くように愛実から離れたのだ。

「す、まない。少し、頭を冷やしてくる」

口元を押さえ、喘ぐように言うと彼は部屋から出て行ってしまふ。

愛実の体から藤臣の熱が消え、彼女は身震いした。無防備にはだけた胸元がやけに冷たい。心細さと切なさ、涙が止まらない愛実だった。

くくくくくくくく

「お料理は好きなんで……あ、でも凝ったものは出来なくて。カレーとかハンバーグなんですけど」

愛実がいつも家族にご飯を作っていることを話すと、弘明と佐和子はにこにこ聞いてくれた。

久しぶりに顔を合わせた大川暁も同様で、「それは羨ましい」などと言つて藤臣をからかっている。

問題は……。

「まさか、うちでそんな物を作る気ではないでしょうね？ 我が家にはちゃんとコックがいるのよ。あなたは社長夫人になるんですからね。自分でキッチンに立つような、そんなみつともない真似は許しませんよ！」

そう叫んだのは佐和子の姉、加奈子であつた。信一郎・宏志の母親だ。この日は珍しく、夫の信二も同席していた。

「まあまあ、それはゆっくり覚えていくことだろう。あまり煩く言うものじゃないよ」

信二は一見すると温厚な紳士だ。年齢相応に下腹も出ており、どつしりと落ち着いた印象である。だが、ふとした瞬間に見せる愛実の全身を舐めるような眼差し……。それを感じるたび、背筋がゾクツとする。爬虫類を思わせる視線に、どれほど頑張っても彼女の笑顔は引き攣つた。

「そんな甘いこと言ってるから、繋ぎ社長なんて情けないことになるんですよ！」

株主総会で藤臣の次期本社長就任が議決されたことを受け、加奈子は現社長の夫に不満をぶつけた。

しかも副社長の信一郎は、肩書きはそのままでオーストラリアの支社長として飛ばされることになったのだ。例の事件以降、屋敷に寄り付かなくなり、仕事もおざなりだという。もちろん、今夜の夕食会にも兄弟揃って欠席だった。

弥生も食事は自室で取ると言い、和威も具合が悪いから、と部屋に籠もったままである。屋敷は一気に三女夫婦の天下となり、加奈子の焦りや苛立ちは、愛実の目にもよく判った。

「全く、お母様も何を考えてこんな娘を……」

尚も愚痴を吐き続ける加奈子に向かって、これまで黙っていた藤臣が口を開いたのだ。

「ご不満なら、この屋敷を出て行かれてはどうですか？ 加奈子さん……いや、お姉さんとお呼びしましょうか？」

それはまるで挑戦状を叩き付けるような、藤臣の爆弾発言だった。

第64話 挑発

微妙にそれぞれの気配が変わり、愛実は食堂内の気温が一二度上がるのを感じ取った。テーブルに置かれたデザートシャーベツトも、室内の熱気で形が崩れ始める。

皆が息を呑み、普段なら軽口を叩く暁ですら沈黙を守っている。

藤臣は愛実を抱こうとして止め、しばらく間、部屋に戻って来なかった。次に顔を見せたのは、夕食会の用意が出来たと言い、食堂までエスコートしてくれた時……。

食事が始まって、隣に座る愛実に視線すら向けてくれない。

（まだ……嫌われたと決まった訳じゃないもの）

愛実は可能な限り明るく振舞った。

結婚したら藤臣に尽くす妻になる。彼のためならどんなことでもする。その想いを、誰より藤臣に伝えたい。彼の怒りが鎮まることだけを祈りながら。

だが、藤臣が加奈子に牙を剥くのを見た時、気付いたのだ。

愛実は迂闊にも過去の傷に触れてしまった。しかもまだ、癒えていない傷口に。藤臣は怒っているのではなく、傷つき　振り上げた拳を何処かに叩きつけずにはいられないのだ、と。

「そ、そんなこと……公言なさってよろしいのかしら？　お母様が聞かれたら」

加奈子の声は上ずっていた。

しかし、その表情からこの場に居る誰もが……食堂の隅に控える執事の糸井まで、藤臣の立場を承知していたと判る。

「聞かれたら、何です？」

藤臣の声は変わりなく冷静だ。無表情のまま、デザートスプーンで洋梨のシャーベットを掬って口に運んでいる。

「お母様は絶対に公言しないことを条件に、認められたはずですよ！ それを……こんな風に」

「……だから？」

藤臣はスプーンを置くと水のグラスに手をやった。

「結局、弥生様も判っておられるんだ。あなた方に彼女の唯一の財産　この美馬邸を残しても、現金欲しさに売り払われるってことを、ね」

「そ、そんなことはしませんわ！」

加奈子は血相を変えて怒鳴るが、

「では……相続税はどうやって納めるつもりですか？　祖父　いや、父の相続税を支払うために、金を融通したのはこの私ですよ。弥生様もそうお若くはない」

攻撃的な言葉を残し、コーヒーを断わって藤臣は席を立った。

一志は株券や債権・預貯金などすぐに換金可能は財産はほとんど藤臣に残した。不動産や貴金属・絵画などを妻や三人の娘に残したのだ。この不況下に、高額な美術品に金を出す投資家やコレクターはそうそう見つからない。

それだけでなく、娘たちは高齢の両親の遺産を見込んで、多額の借金を抱えていた。藤臣以外の誰に継がせても、この美馬邸は売却され金に換えられることは間違いない。

仮に、愛実が和威を選んだ場合、本社の新社長となる藤臣の協力なしでは、屋敷の維持も難しかったはずだ。

最後に、愛実と食堂に残った暁はそんなことを話してくれた。

「弥生様が生きてる間は、加奈子さん一家もここに住めるけどね。亡くなったら……君たちしだいだろうな」

「わたしは……わたしは」

誰も追いつく気はないと言いかけ、愛実は躊躇した。今はないが、ここに信一郎が戻ってくると考えたらずつとする。それに、宏志も和威も住んでいるのだ。藤臣はこの屋敷を手に入れたがっている。結婚後にここに住むのは必定だろう。

黙り込む愛実に暁はさらに言葉を続けた。

「それと、弥生様は執念深い人だよ。本気で藤臣に譲るかどうか……まだ油断しないほうがいい」

「油断って……和威さん、とか？」

久しぶりに顔を合わせ、様相の変わった彼に驚いたばかりだ。

「和威は可愛いもんさ。この僕だって、金欲しさに君を罠に嵌めるかもしれない」

暁に正面から見つめられ、愛実はドキンとした。

その瞬間、トイレでの出来事が脳裏をよぎったのだ。

「あのっ！ 余計なお世話かも知れませんが……ふっ、不倫は良くないと思います！」

「……え？」

「朋美さんです！ 愛し合っているなら、ちゃんとなさったほうが……」

暁と朋美の経緯を聞いたのはつい最近だ。

朋美の母・加奈子や、暁の父・弘明までもが知っていて目を瞑っている理由が判り、愛実は同情した。美馬一志という男性はなんて罪作りの真似をしたのだろう。藤臣のことだけでなく、暁にしても気の毒でならない。

朋美には夫や子供がいる。それをどうするかは他人が口を挟むことではないが……。

「今のままは……誰にとっても良くないんじゃないかと」
すると、暁はフツと醒めたような笑顔で答えた。

「そうだね。でも、歳を取ると面倒になるんだ。今さら……軌道を修正したって」

「今さらって、人生はまだ半分以上あるんですよ！」

愛実が美馬家の人たちに会って思ったことはそれだった。皆、何かしら諦めている。これも全て一志の影響なのだとしたら……。

愛実はすつくと立ち上がり、

「わたし、藤臣さんの傍にいます。この先、何があっても一生傍に居るって約束したんです。だから……弥生様が何を考えているとしても、わたしが藤臣さんの傍を離れなければいいことでしょう？」

大丈夫です！」

力強く宣言した。

この時の愛実は、？愛し合う二人に乗り越えられないものなどない？そう信じていたのだった。

くくくくくくくくくく

食堂に愛実を独り残してきてしまった。

藤臣がそのことに気付いたのは部屋に戻った後である。

愛実に責められ、我を忘れた。ここまでコントロール出来ない事態に直面したのは、初めての経験だ。藤臣は激情的な自分に驚いていた。

（カエルの子はカエルって奴か？）

自嘲気味に笑ってみる。

藤臣にとって、仕事でもプライベートでも、一志に似ていると言われるほど屈辱的なことはない。その度に彼は自分を追い込み、心の内で復讐心を燃やすのだ。

少し頭が冷え、藤臣は部屋から出ようとした。

夕食会に出なかったとはいえ、和威はともかく、あの宏志が屋敷内にいる。愛実が独りでいたら、どんな悪さを企むか知れない。ふいに、信一郎に殴られた時の愛実の姿が浮かび、藤臣は怒りを新たにした。この次、わずかでも愛実を傷つけたら、オーストラリアどころではすまない。

（地獄に飛ばしてやる！）

部屋から出ようとしたその時、扉が外から開いた。

「あ……藤臣さん。あの、わたし、この部屋に戻ってきて良かったんでしょうか？」

今の愛実は制服姿ではなかった。

夕食会の前に、少し大人びたモノトーンのワンピースに着替えている。藤臣が用意したものだ。

「ああ、もちろんだ。済まない……おとな気ない真似をしてしまった。君も気まづかっただろう。本当に悪かった」

不意打ちで愛実の顔を見たせいだろうか、ごく自然に謝罪の言葉が口をつく。

すると、愛実はホツとしたような笑顔を見せる。

「……良かった。もう二度と、藤臣さんが口をきいてくれないのかもって不安だったの。ごめんなさい。話すか話さないかなんて自分で決めることなのに……。藤臣さんのお父さんが誰かなんて、どっちでもいいことだから。誰でも変わらず、わたしはあなたが好きです」

藤臣の両腕に手を添え、彼が最も欲しかった言葉を口にした。

不覚にもこぼれそうになる涙を堪え、藤臣は愛実を抱き締めただのである。

第65話 信頼

愛実は藤臣の腕の中で目を閉じた。何を求められても、彼を信じて従おう。

そう心に決めながら……。

「愛実……実は、行きたい場所があるんだが」

そんな決意とは裏腹に、彼は愛実を自分の体から引き離す。そして、少し照れたような笑みを浮かべたのだった。

母屋から直線距離で五十メートルほど離れているだろうか。藤臣が連れて行ってくれたのは改装半ばの洋館であった。ちょうど木立の中央に建ち、母屋からは木が目隠しになっている。豪華な造りの母屋に比べ、やけに地味な印象だ。

「全面的に改装してるから、あと二ヶ月は掛かるそうだ。でも、夏休みに入れば一ヶ月はハネムーンに出るだろう？ 戻ってきた頃に完成していて、ここで新婚生活を始められる」

戦後すぐに建てられた年代物である。土台がしっかりしている為、内装のみ大幅に変更した。元々は、弥生の妹夫婦が暮らす為に建てられたものだという。しかし完成したときには妹夫婦の状況が変わり、別々の相手と生活を送ることになってしまい、新築の洋館は無用の長物と成り果てた。

その数十年後、藤臣や和威の避難場所、或いは暁と朋美の逢引現場として活躍したのである。

「加奈子さんや佐和子さんご夫婦がお住まいになっても良かったん

じゃないかしら？」

今でこそ築六十年を過ぎているが、加奈子が婿を取った三十四年前ならそのまま住める状態だったのではないだろうか。

愛実の感想に藤臣は困ったように笑いながら教えてくれた。

「確かに。だが、弥生様の考えなんだ。男というのは目を離したら何をするか判らない。婿養子に迎えた以上、羽目を外さないように親が目を光らせていないと。そう言つて、家人は母屋に住むことを命じた。だが私の場合は、この離れにでも住まわせたいみたいだったけどね」

藤臣にしてもそのほうが気楽だったに違いない。

だが、弥生は彼にも母屋に部屋を与え、食事と一緒に取ることを強制したのだ。それは家族として迎えたというより、素行不良の彼を見張る為だろうと藤臣は笑った。

「一般教養が無さ過ぎて、会話には一切加われなかったな。義務教育は終えてたけど、ともに勉強はしちやいなかったからね。中学を出たら車の整備工でも大工でも、とにかく住み込みで手に職をつける仕事を探すつもりだったんだ」

彼は軽く言つが、愛実には身につまされる言葉だ。

それだけではない。藤臣にとって、弥生をはじめ全員が敵のようなものである。その敵地に、十代の少年がたった一人で挑んだのだ。どれほどふんだんに食べ物が並んでいても、パンの一個、肉の一片だつて、彼にとっては石を飲み込むようなものだったろう。

「エントランスは増築したんだ。ちょっと待つて、補助の電気が点くはずだ」

藤臣は床に這う外部電源のコンセントを差し込んだ。夜でも作業できるくらい、周囲がパツと明るくなる。

「まあ……なんて素敵……」

彼が増築したという一階のエントランスホールは二階まで吹き抜けになっていた。天井はドーム状で採光を重視した設計のようだ。二階へ上がる螺旋階段はエントランスに張り出したバルコニーに繋がっている。まだ出来上がってはいないが、白を基調にしたシンブルなデザインは新婚家庭のイメージにピッタリで、愛実はず声を上げてしまう。

彼に促されるまま、靴を脱がず、螺旋階段の向こうに見える廊下を進んだ。

正面はリビングであつた。左手には大きな窓枠が見える。右手にはまだ天板の張られていないカウンターがあり、ダイニングとの仕切りになっていた。

「足元気をつけて。この向こうはキッチンだ。以前は厨房として独立してたんだが……」

藤臣に手を引かれ連れて行かれた先には、最新式のシステムキッチンが入っていた。

気に入らなければ愛実が使いやすい物に変更可能だという。

「凄い……でも、わたしがキッチンに立つてもいいんですか？」

社長夫人がキッチンに立つようなみっともない真似はするな、と加奈子に叱られたばかりである。

「伯母の言葉は気にしないでいい。こっちに住むことは、弥生様には了解済みだ。新妻の手料理を期待してもいいかな？」

藤臣に両肩を掴まれ、耳元で囁かれた。

愛実はドキドキしながら答える。

「はい、もちろん！ お弁当だって作れますよ」

「それは楽しみだ」

キッチンまでは外付けの明かりがきていなかった。ダイニングとの境にドアがないので光は射し込むが、どこか薄暗く……その気がなくともムードを盛り上げる。

二人はどちらからともなく指を絡めるように繋ぎ、寄り添ったままリビングに戻った。

エントランスから繋がる廊下はリビングの中を突き抜けるようになっていて。リビングの向こうに見えたのは裏庭ではなく中庭。中庭の中央にサンルームのような廊下があり、突き当たりに重厚なオーク材を使った両開きの扉が見えた。

「あの……ここは？」

「夫婦の寝室だ」

愛実の鼓動は速まった。

扉は昔のままだという。あまりに立派で、現在の基準でも安全性に問題がないのでそのまま使ったらしい。他にもそのまま利用したものがあり……。

扉を押し開け中に入ると、藤臣は内側の壁に付けられたスイッチを押した。こちらは別電源で、先に仕上げた為すでに電気が通っているという。

煌々とした灯りの下、二十畳くらいの寝室にクイーンサイズの天蓋つきベッドが横たわっていた。部屋の真ん中辺り、ヘッド部分が壁にピタリと付けられている。マットやレースのカーテンは新品だが、天蓋部分を含む本体がイタリアから直輸入したアンティークで、六十年前に弥生の父が取り寄せた物だった。

「あの……大きな、ベッドですね」

我ながらなんて陳腐な感想だろう。

「まあね、この方が遠慮せずに愛し合えるだろう？」

ベッドを目にするだけで、愛実の額には薄っすらと汗が浮かんだ。そんな愛実を楽しむように、藤臣は夫婦生活を想像させる言葉を口にする。

（一体、いつからこんな準備を？ 本当の結婚にしようって仰ったのは、婚約披露の時なのに）

言葉にはしなかったが、藤臣はそんな愛実の気持ちに気付いたようだ。

「驚いたかい？ 母屋の空気にはウンザリしていたからね。この屋敷を出ることは出来ないが、結婚を機に別棟を建てようと考えた。その時ここを思い出したんだ。寝室の絨毯と壁紙は真っ先に替えさせたんだが、ベッドはギリギリまで悩んだ」

あの婚約披露パーティの後に、ベッドはそのままでもいい、と業者に伝えた。藤臣はそのことを嬉しそうに話す。

「それと、君とちゃんと家庭を築くつもりだという証に」

彼が案内してくれたのは、寝室の奥に作られた続きの間だった。木の香りのする真新しい扉を開くと、そこは十五畳くらいの洋室だった。

もとは書斎だったらしい。寝室と同じく重厚な扉がついていて、それをもっと開閉しやすい軽いものに替え、全体を明るく優しいイメージにしつらえたと説明する。

「ここは？」

「転んでも大丈夫なように……柱もドアも天然木で角は取ってある。床もコルク材だよ。未来の子供部屋だ。……気が早すぎるかな？」

愛実は言葉もなかった。無言で彼の横顔を見つめ続ける。

「愛実……ベッドカバーやシーツはまだだが、新しいマットは入ってるんだ」

藤臣の声は掠れていた。

「だから？」

「いや、だからって、その」

愛実は藤臣のワイシャツの袖を抓むと、少しだけ引っ張った。

「藤臣さん。あの……お願いがあるの」

彼女の耳に、藤臣がゴクリと唾を飲み込む音が聞こえ……。

第66話 艶事（前書き）

軽い性的な描写があります。 R15でお願いします。

第6話 艶事

「わたし……一日でも早く、あなたの赤ちゃんが欲しい。そうしたら、本当の家族になれるでしょう？」

見上げる愛実の目に、灯りが反射して煌いている。薄っすらと浮かべた涙はダイヤモンドの雫のようで……藤臣の胸にも光を与えた。「愛実、式の前にフライングをしても怒らないのか？」

「こんなことを言うわたしは、嫌いですか？」

「いいや、好きだよ」

脳裏をよぎる様々な言い訳は心の隅に押しやった。

愛実の細い腰を抱き寄せ、そのまま唇を重ねる。制服姿の彼女も愛らしかったが、少し大人びたシックな洋服も愛実の瑞々しさを損ねることはなかった。……藤臣^{オトコ}の体に火を点けるほどに。

藤臣は床と同じくコルク仕様の壁に、彼女の背中を押し付けた。

愛実が逆らわないのをいいことに、熱いキスを繰り返す。手は次第にスカートの裾に入り込み、彼女の太腿を撫で始めた。ほんの一瞬、愛実は怯えたように体を強張らせる。

「嫌なら早めに言ってくれ。あと少し進んだら……止まれなくなる」

そう言いながらも、指先が愛実の太腿から離れない。きつく閉じた脚を割り込み、指の腹で内腿を擦った。その柔らかい感触に藤臣の呼吸は乱れ、意識も飛びそうになる。ここで「やっぱり怖い」と言われて、本当に止められるかどうか……微妙であった。

「イ……や、じゃないです」

文字通り？蚊の鳴くような声？だ。

愛実の言葉に、藤臣の自制心は脆くも弾け飛んだ。彼女を抱き上げ、寝室に戻り、メイキングされていないベッドに押し倒す。

新品のマットは安ホテルのような軋んだ音は出さず、二人分の体重を容易く受け止め、逆にゆりかごのような優しい余韻を残した。覗き込んだ愛実の瞳は、不安を孕みながらも期待と愛情の色に染まっている。

藤臣は心臓がバクバクと音を立てるのを感じた。初体験の時ですら、これほどの期待と緊張を覚えた記憶はない。それが……いい歳をした男が手に汗を握り、指先が震えているのだ。

必要以上に我慢をしていたせいだろうか。それとも、愛実の体にとんでもなく期待しているのか。

（落ち着け！ これじゃ挿入まで持たないだろうがっ！）

男の本能 顕著な反応を見せる下半身を鎖でグルグル巻きにして、押さえ込みたい心境だ。

愛実はそんな藤臣をどう思ったのか。

「あの……電気……消さないんですか？」

尋ねたいわけではなく、消して欲しいのだろう、と言うことはすぐに判った。

他の女であれば、「うるさい」「関係ない」とさっさとコトを進めていただろう。だが、愛実にそんな冷たい態度は取れない。嫌われるのも、泣かせるのも嫌だった。

「あ、ああ……電気か。判った、すぐに消してくる」

滑稽なほど浮かれた声だと自分でも思った。

あたふたとベッドから這い下り、扉近くのスイッチを消す。すると、一瞬で室内は真つ暗だ。ベッドの両サイドには、ベッドと同じくイタリア製アンティークのフロアランプが置かれていたが、コンセントは差し込まれていないらしい。

かろうじて、隣の子供部屋の灯りがドアの隙間から射し込んでいた。藤臣はそれを頼りにベッドに戻る。我ながら、何をしているのだろうと笑いが込み上げてきた。

「あの、藤臣さん？ 怒ったの？」

「どうして？ 笑ってるんだ。こんな経験は初めてだ。君と同じ、高校生に戻った気分だよ」

愛実 は体を起こしたようだ。しかし、隣部屋から漏れる程度の灯りじゃ、彼女の表情は見えなかった。

「高校生の藤臣さんに……わたしも会ってみたかった」

艶麗さをかもし出す愛実の声を頼りに、闇の中、藤臣はマットの上に指を這わせた。すると、すぐに柔らかな指先を見つける。なめらかな肌を伝い、藤臣の指先は腕から肩へ、首筋、顎と触れながら少し湿った唇まで辿り着く。

「今の私でも、充分に君を満足させられると思うよ」

「ふ、藤臣さん……そういう意味じゃ……」

見つけ出した唇に、吸い寄せられるように口づけた。

愛実 もだいぶ、キスに慣れてきたらしい。微かに開き、藤臣の舌を待ち受ける。求められるまま、スルリと中に滑り込み、遠慮がちに差し出された彼女の舌に絡めた。

激しいキスに、首回りを締め付けるネクタイが邪魔だった。彼はネクタイを緩め、スーツの上着を脱ぎ捨てる。

（まったく。家族の夕食会でネクタイ着用なんて……面倒な）

心のうちで悪態をつきつつ。放り投げた上着は、かろうじてベッドの端に引っ掛かっている。

「あ、あの……藤臣さん？ スーツは掛けておかないと、シワに……」

愛実は無垢な少女かと思えば、妙なことに気が回る娘だ。

「そんなものは忘れてくれ。今は……俺のことだけ考えるんだ」
キスだけで、藤臣の心も体も一瞬で押し上げられ、気が狂いそうになる。ズボンの前が窮屈になり、暴れ馬を押し込めているようだ。出来れば、スカートをたくし上げ、ショーツを引き摺り下ろし、前戯なしでさっさと繋がりたい。だがそんな真似をすれば、朝の光がこの部屋を満たした時、愛実の頬に涙の跡を見ることになるだろう。自己嫌悪の穴に埋まるのは、愛実のファーストキスをトイレで奪った時だけで充分だ。

ゆっくりと愛実を押し倒し、布地の上から彼女の胸に触れた。

「あっ……んん」

愛実の声を聞いた瞬間、藤臣は我慢にも限界があることを悟った。彼女を横向きにして背中 của ファスナーを下ろす。ワンピースの上半身を脱がせ……闇に慣れた藤臣の目に、下着姿の愛実が映る。

「愛実……愛してるよ」

こういう時はそう言すべきだ。

そんな打算で口にしたはずの「愛してる」は、彼の心に正体不明の波紋を描いた。甘やかな波はどんどん広がり、彼の心を覆い尽くしてしまいうさだ。

愛してる。愛してる。愛してる。愛してる。

このままいつそ、「愛してる」の波に飲み込まれてもいいかも知れない。

藤臣の指がブラジャーの中に滑り込み……。

直後、携帯電話のコール音が寝室の静寂を突き破った。藤臣が脱ぎ捨てた上着から聞こえる。仄かに点滅する光も見え、艶かしい空気が消えていく。

「あ、あの、電話が……」

「無視しよう。大したことじゃない」

「でも……」

確かに、コール十回を超えても切れる気配がない。電話の音は？出るまで鳴るぞ！？と聞こえる。

（チツ！ 部下ならクビにしてやる！）

舌打ちして藤臣は愛実から離れた。

上着の内ポケットから取り出した携帯画面に映っているのは？瀬崎？の文字。

（コイツ、どこかで見てるんじゃないだろうなっ！？）

『俺だ。こんな時間になんだ！』

『……こんなと言われましても。まだ十時にもなっていないませんが』
言われてみればその通りであった。

『そ、それはともかく。お前、直帰したんじゃないのか？』

思わず立ち上がり、はみ出たワイシャツをズボンの中に押し込み

ながら、藤臣はカーテンのない窓から外を窺った。

『……』

『今、どこから掛けてるんだ？ まさか、屋敷の中からじゃないだろうな』

『社長、結婚までは控えると仰っていたのでは？』

『……お前に関係ない。プライベートに口を出すなど、何度言わせる』

『では、はっきりと聞かせて下さい。愛実さんを愛している、と。

弥生様が亡くなっても離婚しない。そう社長の口から聞けば、私は
』

瀬崎の口調はいつもと少し違った。どこか疲れたような、藤臣に対する苛立ちも伝わってくる。

『どうした、瀬崎。何があった？』

藤臣の声も、瞬く間に緊張を含んだものに変わり……。

第67話 伏兵

『美馬帝国、新社長に愛人とご落胤！？ 社長就任のために決めた十八歳の花嫁は単なるお飾り？』

そんな煽り文句が書かれた女性週刊誌が愛実の手の中にあつた。

愛実はその夜、新婚夫婦の寝室で朝を迎えても構わない、そんな覚悟で藤臣のキスを受け止めた。だが、瀬崎の電話で婀娜^{あた}めいた空気は一掃され、なんと、愛実が藤臣に実家まで送り届けられたのである。

「問題が発生してね。今夜は屋敷に戻れないと思う。私のいない屋敷に、君ひとり置いてはいけない」

藤臣の表情は強張っていた。

そして、翌々日に問題の週刊誌が発売されたのだ。

そこには藤臣の愛人の存在が書かれていた。それは愛実が思いもよらぬ名前で……。

しかも心ない記者が学校の正門に待ち構え、生徒らにインタビューを始めた。そのせいで愛実はいくら登校出来なくなってしまう。もちろん彼女には何の責任もない。表向きは？ 処分？ ではなく、自主的な判断？ であつた。

「あの子が東絵美^{あずまえみ}、今年十歳よ。その隣が博之^{ひろゆき}四歳。あの二人が専務のご落胤^{おとし}って言われてるけど…… ああ、ほら、今出て来たのが東恭子。十年前、専務に待ちぼうけを食らわせた女」

そこは、愛実が信一郎に襲われた時、藤臣と一緒に過ごしたホテルだった。

二人が泊まったのと同じ部屋、というのにショックを受けながら……。愛実是由佳に頼み込み、ここを連れて来て貰ったのである。ホテル内にあるキャラクターショップに恭子は子供連れで入り、それぞれに何か買い与えて店から出て来た所だった。

確か、藤臣の二歳年上だと言っていた。真面目で地味な優等生タイプと評していた気がする。そんなことを愛実がポツリと呟くと……。

「そうね。デパート内の勤務評定もそれなりに優秀よ。子供の病気で急に休むことがあって、昇進からは外されてるみたいだけど」

そうなのだ。恭子はなんと東部デパートの婦人服売り場に勤めていた。入社したのは三年前で、その前年に恭子は前夫と離婚している。しかも、恭子の採用は藤臣が独断で決め、人事部に口を利いていた。

そのことが週刊誌に書かれ、二人はただの愛人関係ではなく、いわゆる？内縁の妻？ではないか、と。偽装の意味もあり、恭子に仕事を与えている。十歳の長女は言わずもがなで、離婚後半年で生まれた四歳の長男も、藤臣の子供である可能性が高い。

「でも、どうして？ 四年前に離婚したなら、藤臣さんの子供だったらずくに再婚したら良かったんじゃない……」

「先代がお元気だったもの。十年前のことはよく判らないけど。先代も大奥様も大反対だったと聞くわ。週刊誌にもそう書かれてたでしょう？」

「……はい」

藤臣は、子供の父親が元恋人だと判った恭子が、その男性と相談

して結婚式当日に逃げたのだ、と話してくれた。

でも週刊誌には……。

恭子が知人に語った話として、『何のとりえもない女と結婚するなら、藤臣が美馬グループに入る必要はない』先代社長がそんな言葉で彼女を脅した。彼女は『色々なことが怖くなって逃げた』とい最近知人に告白した、と書かれてあった。

「まあ、この手の告白は完全に信用するわけにはいかないけれど。問題は、その相手をわざわざデパートに雇ったことね。しかも本名の？東恭子？じゃなく、別れた亭主の苗字？石川？を使ってることから」

「じゃ、四歳の男の子も藤臣さんの？」

愛実の問いに由佳は軽く首を振った。

「それは判らないわ。戸籍上で言うなら、二人とも前夫の子、になってるけど」

モデルの長瀬久美子やこの奥村由佳に比べ、恭子はかなり地味な女性だ。自宅もアパート住まいだという。もし藤臣の愛人と子供なら、彼がアパート暮らしをさせているとは思えない。

「まあ、あなたの目に映る専務はそうなのかも知れないけど……」

？美馬藤臣は愛人と子供をホテルに匿っている？ 愛実のもとに届けられた匿名の手紙。藤臣にはとても聞けず、瀬崎に話すチャンスもなかった。そんな時、結婚式の打ち合わせに訪れた由佳に、愛実は頼んだのだ。すると、由佳は翌日にはこのホテルを探し出してくれた。

「こんな場所で匿ってるなんて、どう考えても怪しいわ。美馬グループの実権と、美馬家の個人的資産。専務はその両方を手に入れようとしてるんじゃないかしら。大奥様もご高齢だし……もって四、五年。馬鹿をみたくなければ、今のうちに自分の取り分はしっかり確保しておくのね。お金の掛かる家族がいるんでしょう？」

おそらく入院中の祖母やお金にルーズな母のことだろう。
愛実は俯きながら胸の中で繰り返した。

（「愛してる」って言うてくれたもの。藤臣さんを信じる。絶対に……）

）＊～＊～＊～＊～

愛実を自宅まで送り届けた後、藤臣は本社に向かった。
途中、瀬崎とのやり取りを思い出す

『社長　東恭子さんを覚えておられますか？』
『なんだ、いきなり』
『では、石川恭子さんなら、どうです？』

携帯から思わぬ人物の名前を聞き、藤臣は動揺した。なぜなら、
瀬崎に？石川恭子？の存在は話していなかったからだ。

（一体何なんだ！？　結婚まで後二週間だっていうのに！）

本社の専務室に瀬崎がいた。他の秘書や社員はおらず、彼ひとり
だ。

そして見せられたのが、女性週刊誌の記事だった。

「明後日に発売されます。止めるのは無理でした。申し訳ありません」

「謝る必要はない。馬鹿馬鹿しい」

瀬崎が入手したゲラ刷りの原稿を、彼はテーブルに放り投げた。
「何が内縁の妻だ。十年前に結婚する予定だったんだぞ。俺の子供じゃない、と逃げたのは向こうだ。昔話を持ち出すにも程がある！」

どうせ、この？知人？とやらが情報を売ったのだらう。久美子が知り得たはずはないので、裏で糸を引いているのは弥生か信二か、または暁という可能性もある。

問題は恭子だ。彼女がこんなすぐにバレる嘘をつくとは思えない。それに藤臣との復縁を狙うなら、ここまで何度でもチャンスはあったはずだ。彼女は親子三人の静かな暮らしを望んでいた……。

「瀬崎、この一件で彼女らはどうなる？ 仮名になっているが、まさか、インタビューに行くような記者はいないだろうな？」

藤臣は不安になり、瀬崎に尋ねた。

しかし、返って来た予想外の厳しい声に、藤臣は驚く。

「東……いえ、石川恭子さんと呼びすべきでしょうね。社長が真っ先に心配されるのは彼女たちなんですね」

「なんだ？ 何が言いたい？」

「この記事を目にして、ご婚約者である愛実様がどれほど傷つかれるか、お考えにならないのですか！？」

藤臣はフツと笑った。

「なんだ、愛実のことか。十年前の経緯はすでに告白済みだ。お前が心配するようなことじゃない」

愛実は彼を抱き締め、自分なら絶対に逃げたりしない、と言ってくれた。藤臣が事実無根だと話せば、彼女が傷つく可能性など皆無である。

「社長、今一度、聞かせて下さい。愛実様は社長から愛を告白された、と喜んでおられました。この結婚は本物になったのだ、と。過去を捨てて、愛実様と新しい人生を始めたい、と……社長に口から

聞かせて頂けませんか？　お願いします」

瀬崎は思い詰めた表情で一息に言つと、両手を体の脇につけ、頭を下げた。

「愛実には……出来る限りのことをする。彼女が望むように。俺の傍に居たいと言つなら、一生居てやるつもりだ。子供も、彼女が望めば産ませてやる。それだけだ」

愛されていると信じさせ、一生騙し続ける。彼女の笑顔を守るために。

藤臣の答えを聞き、かなり長い間、瀬崎は目を閉じていた。

しばらくして彼は口を開き、「東恭子さんが社長に話があると言つておられます。ご長女の絵美さんについて、極めて重要な」そう言つたのだつた。

第68話 宣告

「……さん。藤臣さん、お口に合いませんか？」

飛び込んできた愛実の声に、藤臣はハツとして顔を上げた。

彼女は心配そうに藤臣の顔を覗き込んでいる。

「いや、済まない。美味しいよ。カレーサンドなんて初めてだ」

例の週刊誌のせいで愛実が学校を休んでいると聞き、藤臣は彼女を昼食に誘った。謝罪のつもりだったが、彼女はバスケットにサンドイッチ持参でやって来たのだ。

「一杯作ったらカレーが余ってしまつて。サンドイッチにすると、また気分が変わつて美味しく食べられるから」

結局、コーヒーを入れて東部デパートの社長室でランチを取っている。

愛実が藤臣の『美味しい』の言葉にニコニコ笑いながら、

「カレーうどんも美味しいですよ。今、色んな料理の作り方を尚樹や真美に教えているんです。わたしがいなくなっても大丈夫なように……」

「料理は家政婦がやってくれるだろう？ それとも、こちらから回した家政婦に何か問題でも？」

西園寺家には十分な生活費を渡している。まさか母親ひとりで使い切っていることはあるまいが。藤臣は、いまだに愛実の弟妹が困っているのかと心配になった。

すると、愛実は慌てた様子で、

「い、いえ、問題なんて。婚約が決まつて、美馬の家から充分なお金を頂きました。でも、母に任せるのは不安なので……。なるべく尚樹に、と思つていゝんです。それに、人生なんていつどうなるか

判らないから。自分のことは自分で出来るように、食事くらいは作れないと」

その言葉に、少なからず藤臣は傷ついていた。

藤臣は頼りにならない、あてに出来ない、と言われたようだ。いつもなら、ムツとして言い返すのだが……。今は、後ろめたさが先に立ち、強気に出ることが出来ない。

つくづく、弱さを隠すために吼えていた自分を思い知る。

「その……愛実、週刊誌の記事なんだが……」

サンドイッチをコーヒーで飲み込み、藤臣は口を開いた。

「前に、話して下さった方、ですよ？」

「そうだ。実は、東部デパートの本店で働いて貰っている。離婚した時に就職の相談を受けてね。離婚後に妊娠が判って、妊婦という面接すら受けさせて貰えないって。何とかして子供を生みたい、という彼女の気持ちを酌んで、就職を世話したんだ。誓って言うが、それだけだ」

出来るだけ平静に、だが一息に言って藤臣は肩の力を抜く。

「あ、はい。判ってます」

「……え？」

「だって、もし自分のお子さんだったら、藤臣さんが放っておくはずないでしょう？ それに……結婚しようって言うくらい好きだった人が困ってたら、助けたいって思いますよ。小さなお子さんがいたらトクに。だって、藤臣さんて優しいから……」

愛実はいつもの様子で屈託なく笑っている。

今の藤臣に、その笑顔は直視出来ないほど眩しかった。

「学校には私が話をしよう。君が休まなければならぬ理由はないんだ」

「いえ、結婚式の準備もありますし……。進学しないので大丈夫です」

藤臣が何度勧めても、愛実は大学には行かないという。国立に入るほどの勉強はして来なかったし、お金で入学出来る大学には行きたくないのだ、と。

「君には、迷惑を掛けてばかりいる。本当に……。済まない」
口をつくのは謝罪ばかりであった。

愛実もそう思ったらしく、

「それ以上謝らないで。その代わりに、お願いを聞いてくれますか？」
「何かな？」

「？愛してる？って言うて下さい」

「ここで？」

らしくもなく、藤臣は上ずった声で聞き直した。

愛実はジッと彼を見上げ、無言で頷く。その瞳の奥で、心細さに震える少女の影がよぎった。

「愛してる。愛してるよ、愛実」

数日前、心を満たした熱い言葉は、今は刃となり胸に突き刺さる。
藤臣は恭子の言葉を思い出していた。

くくくくくくくくくく

「ご無沙汰しております。こうして対面でお話させて頂くのは、採用して頂いた時以来で……」

東恭子は四年前と変わらぬ質素な服装をしていた。何の変哲もない白いシャツに、通販で買ったようなベージュのスーツ、くたびれ

たローヒールのパンプスが目に映る。化粧もファンデーションと口紅だけのようだ。度のきつい眼鏡をかけ、緊張した面持ちでホテルの一室にいた。

「挨拶はいい。週刊誌が昔話を掘り返したようだ。そのことで君たち一家に迷惑を掛けているなら、相応の対処をしよう。働き辛いようなら、別の職場を用意することも……」

「そうじゃありません！」

思い掛けない恭子の叫び声に、藤臣は驚いた。

部屋の隅に立つ瀬崎に視線を向けるが、彼は正面を向いたままで思惑は覚れない。

「判った。用件を聞こう。だが私はそれほど暇じゃない。さつさと済ませてくれ」

いつにも増して冷ややかな声で言うと、目に見えて恭子は竦みあがった。

彼女は二、三度深呼吸をして、手にしたハンカチをギュツと掴み、漸う話し始める。

「ずっと、黙っているつもりでした。でも、夫に出て行かれて……。私、あなたが怖かったです。何を考えているか判らなかつたし、石川のことを愛していて、彼と結婚したくて……」

さっぱり要領を得ない話に藤臣は懸命に苛々を抑えていた。

「でも、離婚して困っている私に手を差し伸べて下さって……。私はひよつとしたら、とんでもない間違いをしたのかも知れないと思い始めたんです。どうしようか迷っていて、そうしたら、あなたが結婚すると聞いて……」

次の瞬間、藤臣はため息と共に腰を浮かせた。

「東くん、済まないが要点を言ってくれないか？　まだ時間が掛かるようなら、話したいことが決まってから」

「絵美はあなたの娘なんです！」

室内の空気が一瞬固まる。藤臣の動きも同様だ。

「なんの冗談だ？　十年前に君は、違うと言って俺を捨てたんだぞ！　忘れたのかっ！？」

「あの人と……石川と結婚したかったの。だから……同じ血液型だから……。ずっと黙っておくつもりだったんです！　でも……色々あつて」

「自分が……何を言ってるのか判ってるのか？　二人の男を手玉に取った拳げ句、子供まで利用した最低の母親だと告白してるんだぞ！」

冷静さをかなぐり捨て、藤臣は掴みかからんばかりに恭子に詰め寄る。

「社長　落ち着かれて下さい」

逆に、妙に冷ややかな瀬崎の声に、藤臣の怒りは矛先を変えた。

「落ち着け、だと？　お前は話の内容を知っていたようだな。なぜ言わなかった？」

「……」

黙り込む瀬崎の胸倉を掴み、藤臣は怒鳴った。

「お前たちはグルか？　瀬崎、誰に頼まれたっ！？」

それを見ていた恭子は、弾かれたように立ち上がり頭を下げる。

「す、すみません。私が瀬崎さんに相談したんです！　そうしたら瀬崎さんが……」

四年前、恭子は藤臣に邪険に追い返されることを覚悟していた。ところが、予想に反して出産まではパートタイムの、そして出産後は正社員の職を恭子に与えてくれたのだ。

その後、長女の小学校入学に合わせてランドセルと祝い金が届いた。差出人は不明であったが、恭子の心当たりは藤臣だけだった。娘の絵美は家を出た父親が後悔して、自分の為に贈ってくれたのだと無邪気に喜んでいたが……。石川は若い女と暮らしており、子供たちの養育費すら支払いを拒んでいた。

藤臣は傲岸不遜でどうしようもない男性だと思っていたのに。それがもし、間違いであつたら？

そして恭子から相談を受けた瀬崎も、すぐに彼女を信用したわけではなく……。

「DNA鑑定を受けるように言われて、それで」
「受けたのか？ 瀬崎、俺の了解も取らず、そんな真似をしたのかっ？」

藤臣は俄かに信じられなかった。藤臣を蔑ろにして、そこまで勝手な判断で動く男だとは思っていなかったからだ。

「申し訳ありません」

余計な言い訳は一切せず、瀬崎はただ謝罪を口にした。

藤臣のデータは一志と鑑定した時のものが保管してある。同じ会社に頼めば、検査は容易なはずだ。

「それで……結果は出たのか？」

「はい。社長と東絵美さんとは、九十九パーセント以上の確率で親子関係にある、と」

それは藤臣にとって、死刑宣告にも等しい言葉であった。

第68話 宣告（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

とんでもないトコで終わってますが、ここで第6章ラストです。
次回から最終章に入ります。

さあ、どうなりますか…

花婿チェンジでもタイトル（十八歳の花嫁）に偽りなしってことで
（こらっ！）

いや、ハッピーエンドですから。

良かったら、最後までお付き合い下さいませ（^^）／

第69話 窮地

「何で、今、なんだ！ どうして今になって」

恭子が引き上げ、瀬崎の前で藤臣は何度も同じ言葉を繰り返した。

「瀬崎 彼女が美馬の婆さんと繋がっている可能性は？」

「ない、とは言い切れません。ですが、事実は事実です」

瀬崎は淡々と答える。

なるべくマスコミに知られまいと、普段利用しない高級ビジネスホテルのスイペリアルームを使っていた。部屋はそう広くはなく、調度品もごくシンプルなものばかりだ。藤臣は立ち上がると白い小型冷蔵庫の扉を開き、缶ビールを取り出して一息に呷る。

まるで水を飲んでいるようだ。何の味もせず、おそらく何本飲んでも酔えないだろう。

「社長、このことが外部に漏れたら……」

「判っている」

藤臣は今年の八月に三十歳になる。

恐ろしく若い年齢で社長に就任することが決まっていた。彼の年齢がネックとなり、傘下企業や取引先銀行、株主、本社の重役まで反対者は多い。藤臣が本社の大株主であること、先代社長の一人息子であること、そして現会長である弥生バックアップの後見。それらの条件が整い、やっと漕ぎ付けたものだった。

それがもし、彼に責任はないにせよ？ 隠し子？ の存在が発覚したら……。

元々敵の多い藤臣のこと、ターゲットは絵美だけでは済まないだろう。博之も藤臣の子供ではないかと騒がれ、否応なしに恭子親子

を巻き込む羽目になる。反対勢力はここぞとばかり、藤臣の様々な過去まで引つ張り出し、再び後継者問題が勃発するのは目に見えていた。

「愛実様のことは……どうなさいますか？」

瀬崎がポツリと呟く。

愛実なら、絵美の存在を聞いても藤臣を責めるようなことはしないだろう。だが、今回の一件に足元を掬われ、藤臣の力が弱まった時が問題だ。

「弥生様はその機を逃さず、社長を失脚に追い込むでしょうね。その為なら、系列の二、三社くらい倒産させることも厭わないでしょう」

「ああ、やるだろうな、婆さんなら」

「あの時……愛実様が信一郎様に襲われたあの時なら、間に合ったはずです。弥生様が拘る美馬邸を和威様に譲ることで、愛実様を自由にすることが出来たはずです。あの時なら……」

瀬崎の言う通りであった。

愛実の母が馬鹿な契約書にサインをする前なら、藤臣が美馬家の全てに拘ったりしなければ、ここまで追い込まれる事態には陥っていなかったはずである。

せめて婚約発表前、或いは結婚後であってもよかったのだ。愛実を美馬家の相続問題に巻き込まず、窮地から救うだけの金を用意してやることも出来た。社長として正式に就任した後なら、絵美の存在を公表しても、反対勢力を黙らせるだけの力があつたのに。

考えれば考えるほど、恭子の言動に奸計があるような気がしてならない。

まさに、今の藤臣は四面楚歌の状態だった。

重苦しい沈黙の後、瀬崎が口を開いた。

「最良の手段は……東恭子さんの主張を完全に無視することです。十年前、彼女から婚約を破棄したことは明白ですから、理由をつけて解雇通告をし、関係を切って下さい。参考までに……ご長男の博之くんと親子関係は認められませんでした」

「なっ!？」

藤臣は息を詰まらせながら、用意周到な秘書を怒鳴りつけた。

「瀬崎！ お前、彼女の長男が俺の子供だと疑ってたのかっ!？」

「社長が私を通さず、極秘扱いで恭子さんを雇用されていましたから。しかも、苗字まで変えて。充分に疑わしい行動だと思いますが」

藤臣は頭に血が昇り、そのせいで頬が赤く染まった。

「お前に隠したんじゃない！ 美馬の爺さんがいたからだ！ 東部デパートの重役になったばかりで、俺の周囲にはヤツの息が掛かった連中がうじゃうじゃいたんだ。仕方ないだろうが！」

「では、逆にお聞きします。どうして、そこまでして彼女を助けたんですか？」

「……」

子供を抱えた恭子の姿は、母の姿に重なった。それに恭子は、藤臣の会った女性たちの中で唯一、お金より愛情を選んだ。その愛情は彼に向けられたものではなかったが……。

「親子鑑定の報告書は全て破棄すれば済みます。どちらにしても、絵美さんは石川氏の実子となっており、これは法律が変わらない限り動きません。遺伝子上の親子関係が証明されたところで、社長には何の義務も権利も発生しないのですから」

恭子が養育費を請求できるのは前夫・石川だけだ。絵美には戸籍

上の実父が存在する。恭子は藤臣に認知請求もできなければ、それを証明するDNA鑑定を要求することもできない。

知らぬ存ぜぬをつき通せば済むことだと瀬崎は言う。

だがそれは……。

「俺に 子供を捨てろって言うのか？ あのクソ爺のように！ 勝手に死ねと放り出せ、と！？」

藤臣は目の前にあるビールの缶を横に薙ぎ払った。中身の残った缶は壁にぶつかり形を変え、液体を撒き散らしながら床に転がる。そんな藤臣を、瀬崎は微動だにせず見下ろしていた。

「では、美馬邸の権利を諦め、愛実様との婚約を解消なさって下さい。恭子さんと結婚して、絵美さんと特別養子縁組をすれば、実父に近い権利を有することが出来ます。弥生様と上手く交渉すれば、美馬邸から出ることもなくても、グループの実権はそのまま引き継ぐことが出来ます」

美馬邸から離れることは、事実上、一族から離れるも同様であった。グループの実権だけ引き継いでも、結局、美馬の資産を増やすだけになりかねない。

それだけではない、弥生と取り引きをするということは……。

「その交渉材料に愛実を使えってことか。今度は色仕掛けで、愛実に俺の為に和威と結婚してくれ、と頼めってことだな」

藤臣は背もたれに体を預け、両手で顔を覆った。

ここまでくれば、最早、笑うしかない。

自分を地獄に叩き落とした美馬家を掌中に納め、握り潰してやりたい一念で、憎い連中に頭を下げてきた。そして、こんな愚かな男を本気で愛してくれた愛実に、ただ応えてやりたいと願った。

だが、恭子はともかく、絵美には何の責任もない。

藤臣が認めた？愛を選んだ女？は、十年前、我が子の幸福よりも自身の愛を選んだ。しかし今回、恭子が藤臣に突きつけた要求は、決して彼女自身の欲望を満たすことではなかった。

『マスコミのカメラマンに写真を撮られたり、親から聞いた子供たちに色々言われて……絵美は自分たちのことだと気付いたようなもの。あの子は父親が出て行ったことを自分のせいだと思ってるの。弟が父親の顔を知らないのも自分のせいだって。もの凄く不安定になっ
ていて……お金も何も要らない。悪いのは私だと言ってくれたらいい。ただ父親として、絵美の存在を認めてやって欲しいの。お願いします』

世間には一切公表しなくていいから、と恭子は膝に額がつくほど頭を下げた。

「瀬崎、何かないのか？ 何か……俺に取れる手段は残ってないのかっ！？」

「ありません。選んでください、社長。後手に回って追い込まれてからでは遅いんです。本社の実権さえ残れば、将来別の形で家屋敷を奪い取る機会もあるでしょう。但し、その時は……」

復讐を手放せない藤臣が、全てを奪い取る相手は和威。

そして彼の妻になっているであろう愛実を、破滅に追い込むことであつた。

第70話 固執

レンタルでいい、と言う愛実にウェディングドレスを作るように迫ったのは藤臣だった。

出来上がったのは何と挙式三日前。レースのフレンチ袖がついた、可愛いAラインのドレスだ。胸元とスカートの裾部分にビーズが縫い付けられてあるものの、基本シンプルなデザインで藤臣が選んだ中から愛実が決めた。レースの刺繍が施されたトレーンも取り外し可能で、チャペルでは着用し、披露宴会場では取り外す予定であった。

「姉さん、メチャクチャ綺麗だ……」

「ホントに？」

尚樹の称賛に、愛実はドレスを着たままクルリと回り、にっこり笑う。

「羨ましい！ 私も着たい！」

「真美は自分がお嫁に行くときに着られるでしょう？」

T国ホテルの衣装ルームで的一幕だ。

ちょうど休日ということもあり、愛実は弟妹を連れて来ていた。本来なら一番気になるはずの花嫁の母は不在である。母は娘より自分が着飾ることに夢中なのだ。

（お母さんがいないほうが気が楽なんて……お互い様かも知れない）

そんなことを考え、愛実は胸の内で苦笑する。それに、ドレス姿が一番見て欲しいのは藤臣だった。もちろん彼も来ていたが、

『欧米では新郎が結婚式の前に新婦のドレス姿を見るのは不吉らしい』

そう言っ、ひとり一階のラウンジで待っている。

「あの……他の新郎の方も、ドレスは一緒に選んだりしないものですか？」

愛実是不安になり衣装ルームの担当者に尋ねてみた。

「いえ。日本では気になさる方は少ないかも知れません。一緒に選ばれたりなさいますよ。あ、でも、美馬様はドレスのデザインをご存知ですし、すでに新郎様のお衣装も決まっておりますから」

ドレスを選ぶ必要もなく、そのドレスに合ったタキシードを決める訳でもないから同席しないのだろう。担当の女性は愛実の心中を察し、色々な理由を口にする。

そう言われたら、もう決まっているのだから当日のお楽しみにしてもいいかも知れない。愛実もそんな風に思い始めた。

結局、ウエストを少し詰めて貰うだけで、それ以上の手直しは不要となった。愛実たちは一時間程度で衣装ルームを後にする。

その時、スタッフ五名が整列して見送ってくれた。

「僕たちにここまでしなくてもいいのに……」

尚樹が小さな声で呟く。愛実も同じ気持ちだが、「あちらはあちらでお仕事なのだから」そんな風に声を掛けたのだった。

一階ロビーに下りると、一段下になるラウンジを見回した。焦げ茶色のソファに、藤臣は長い脚を持て余し気味に組み、ゆったりと座っている。

今日は深い藍色のスーツであった。滅多に見かけない色合いなの

で、おそらくオーダーメイドなのだろう。眉根を寄せ、煙草を燦らせる指先に愛実は胸をときめかせる。

煙草そのものは、本人にも周囲にも健康に害を与えるものだ。愛実が妊娠したら禁煙する約束を取り付けている。だが、その仕草に大人の男性を感じ、高ぶる気持ちを押さえ込むことは難しかった。

一歩二歩と藤臣のもとに近づく。

もう、気付いてもいいくらいまで近寄っているのに、藤臣は一向に顔を上げる気配もない。視線を下けたまま、目に映らない何かを彼はジッと睨んでいた。

ここ数日、愛実と一緒にいても藤臣の心はどこか遠くにあることがほとんどだった。

愛実を見る瞳は変わらずに優しい。別れ際には必ず『愛してるよ』と囁き、キスしてくれる。以前のような深く官能的なものではなかったが……。

『あと数日の辛抱だ。結婚式を終えるまで待ったほうがいい』
まるで自分自身に言い訳するように、愛実と距離を取っている。

(こんな時、大人の女性ならどう対応するのかしら?)

藤臣がおかしくなったのは、例の記事が週刊誌に掲載されてからだった。

由佳は怪しいと言っていたが、藤臣はキツパリと否定してくれた。だが今の彼の態度を見れば、由佳が正解なのかも知れない、と思わざるを得ない。

藤臣は恭子を愛しているのだろうか?

もしそうなら。

藤臣は愛実と結婚する。弥生に万一の時は愛実がああ美馬邸を相續し、すぐに彼は全てを自分の物にするだろう。そして愛実を追い出し、恭子を妻に迎えるのだ。

その時、愛実にも子供が出来ていたら、彼はどうするだろうか？

（もし、子供を置いて出て行けって言われたら……）

「美馬さん！ どうしたんですか？」

「あ、ああ。お帰り。お姉さんのドレス姿はどうだった？」

藤臣の数歩手前で考え込む愛実と違い、尚樹たちは飛びつくように、彼に声を掛ける。「綺麗だった」「お姉ちゃん、すっごく似合ってたよ」などと口々に話していた。

「それは三日後が楽しみだな」

そんな風に答えつつ、藤臣は煙草を消しながら席を立った。

「じゃ、禁煙席のほうに移ろう。アフタヌーンティーを用意させてるんだ」

「あ……慎也は紅茶はまだ」

愛実は慌てて言うが、

「心配は要らない。子供たちでも大丈夫なように、ジュースも頼めるように言っているから、安心なさい」

藤臣の笑顔にホッと息を吐く愛実だった。

くくくくくくくくくく

「恭子は俺との結婚を望んでる訳じゃない。十年も隠し通したんだ。寧ろ、よほど俺が嫌いなんだろう」

藤臣はそう思ったかった。

「最近の和威は、今ひとつ仕事に熱心とはいえない。あんな状態の男に愛実は託せない。瀬崎、あと二ヶ月半だ。九月一日付けで俺の

社長就任が決定する。そこまで、何としてもマスコミを黙らせ、婆さんを押さえ込むんだ！」

恭子に弥生がコンタクトを取ればお終いだ、という瀬崎を説得し、時間稼ぎの策を取らせている。

だが、瀬崎の様子がこれまでとは微妙に違う。もし、彼に見放されたのだとしたら……。その時は、最後の味方をも失ったことになる。藤臣にはそれが恐ろしかった。

そして昨晚、弥生は夕食の席で愚痴とも嫌味とも取れる言葉を吐き始めた。

「週刊誌に何やら騒がれていた女は、藤臣さんが十年前に結婚したと言った女でしょう？　なんて迷惑な方かしら。美馬家にあれほどの恥を掻かせながら……今さら」

食卓を囲んでいた加奈子も、久しぶりに母親に迎合する。

「あら、責任は藤臣さんにあるんじゃないかしら？　あの女をパートの人事部に雇うよう、口を利かしたのは藤臣さんご本人とか……」

「まあまあ、彼はまだ独身なんだ。どんな女性と付き合おうとも、彼の自由だよ。ただ、結婚するなら決着はつけなとね」

加奈子の隣にいた夫の信二までもが口を挟んだ。

この信二が東部デパート内の情報に精通しているのには理由があった。つい先日、東部デパートの社長秘書、浅野めぐみが信二の愛人だと判明したのだ。

彼女を社長秘書に登用する前、徹底的に調べたはずであった。しかし、登用後の関係までは予測出来ない。浅野には結婚間近の恋人がいて、既婚者になることを見越しての昇進であった。それが相手の借金と浮気で破談になり……。信二との関係は金銭的な問題も大き

いようだ。

しかし、道理で筒抜けになるはずである。秋の移動で秘書を変えねばならない。藤臣はそう考えていた。

「どちらにしても、さつさと系列会社から追ひ払いなさい。子供の父親が誰だろうと関係ないでしょう。馬鹿な女に関わってこれ以上美馬の名前に傷をつけるようなら、わたくしにも考えがありますよ」

弥生の言葉に答えることなく、深く思いに沈む藤臣であった。

第71話 忠言

夕食が終わり、和威は三階の藤臣の部屋を訪ねた。

彼の不貞は明らかなのに、愛という言葉だけで簡単に許してしまう愛実が判らない。条件は同じはずなのに。いや、自分のほうが愛実と年齢も近く、誠実に彼女に尽くす自信がある。自分と結婚するほうが、絶対に幸せになれるはずだ。

和威の中で日を追うごとにその想いが強くなった。

そして知ったのが、祖父一志の遺言と藤臣の本当の立場である。

彼は血の繋がらない従兄ではなく、本当の叔父だった。生きている間は妻に頭の上がらなかった祖父が、死んだ後に一矢を報いた形だろうか。祖父は自分名義の資産ほとんどを藤臣に残していた。そんな中、この美馬邸だけは弥生に残された唯一の財産だったらしい。道理で、弥生がどんなことをしても、せめて家屋敷だけでも和威に残そうとするはずだ。血が繋がらないどころか、夫が愛人に生ませた息子である。自分が生まれ育った家まで渡すのは確かに辛いだろう。

藤臣のためにも、そして愛実のためにも、和威が何も知らないのは不公平だと言い、真実を教えてくれたのは瀬崎であった。

最初はそれを素直に受け入れられず、弥生の元に駆け込み問い質したのだ。弥生はあっさり認め、逆に、見込み違いだったと和威に冷たい視線を向けた。

そして和威が自滅の道に踏み出した時、叱り飛ばしてくれたのも瀬崎だ。

『いい加減、目を覚ますべきでしょう。従弟であれ甥であれ、社長が美馬家の中で一番買っているのはあなたです。仮に敵対するにしても、このままでは戦う前に負けを認めるようなものですよ』

だが、瀬崎はなぜ、藤臣が隠そうとしている一志との関係を自分に教えたのだろうか。

和威は疑問を感じ尋ねた。

『社長は和威さんに期待しているものの、まだまだ半人前だと思っておられます。でも、そうではない、と示して欲しいのです。私もそうですが、社長ご自身も、まだまだ人生を達観する年齢ではありませんから……』

瀬崎は寂しそうに笑っていた。

「どうしたんだ。今日は酔ってないのか？」

先日、自分をコントロール出来なくなり、酒の勢いで藤臣や愛実には八つ当たりしたことを思い出す。

「あの時は……すみませんでした。愛実さんにも、失礼なことを言ってしまった。あの日、彼女がこの家に泊まらなかったのは、僕が原因ですか？」

愛実と一緒にの時に謝ろうと思っていたのだが、思わず口にしてしまった。

藤臣は苦笑しながら首を振った。

「いや、お前のせいじゃないよ。朝食や夕食に同席するようになって良かった。あのまま、信一郎さんや宏志くんのように、この家から離れて行くんじゃないかと心配していたんだ」

「宏志はこの家に居ますよ。ヤツに出て行く勇氣なんてあるもんか」

「彼は？居るだけ？だろう。滅多に顔も見ないし、食事も部屋で取

つてる。家族とは言えないさ」

特にどこがおかしいという訳ではない。
だが、どことなく藤臣の印象がこれまでと変わってきていた。

「藤臣さん、何かあつたんですか？」

「どうしてだ？」

「さっきのおばあ様の様子といい、信二さんたちの口調といい、また何か起こってるんじゃないかと思って。僕だっていつまでも半人前じゃない。ちゃんと聞かせて欲しいんだ」

上手くは言えないが、何かが違う。いや、戻ったと言うべきか。次第に力を付け始め、加奈子や信二らの口を押さえつつあった藤臣が、一志が生きていた頃に戻ったかのようだ。苦悩に満ちた表情、とても、数日後に結婚を控えた花婿の顔ではなかった。

次の瞬間、藤臣はクツと意地悪そうな笑みを作り、

「相変わらずだな、和威。何が起こっているのか、自分も知りたいと思うなら、確かなルートを作って調べ上げる。尋ねて教えて貰える事実が、真実とは限らないんだ。それに、せっかく手にしたカードを……驚かせるだけで効果的とは言えない使い方をするな」

結局、軽くかわされただけだった。

何の収穫もないまま和威は部屋に戻った。すると、ドアの前に執事の糸井が立ち……「大奥様がお呼びでございます」そう口にしたのである。

くくくくくくくくくく

藤臣や弟妹とアフタヌーンティを楽しんだ翌日のこと。

結婚式を二日後に控え、愛実は何となく落ち着かずじつにいた。ドレ
スも決まり、何もかも順調に行っているはずなのに。

出会いの気まずさが、いつまでも引つ掛かるのだろうか？ それ
とも、弥生の好意で相続人にして貰いながら、彼女が最も疎ましく
思っているはずの藤臣を夫に選んだことか……。

藤臣はほとんどの財産を相続したと聞く。ならば、弥生が家屋敷
だけは血の繋がった孫に残したいという願いを聞き届けてはくれな
いだろうか。今のままで維持できるのは彼だけ、という話だ。しか
し、藤臣の援助があれば、どうにかなるのではないか。

美馬を跡形もなく潰したい、という藤臣の復讐心など、愛実が知
るはずもなく……。

弟妹が学校に行った後、愛実は家のことを家政婦に任せ、自分は
荷物の整理をしていた。母は最近夜が遅く、昼頃まで寝ている。今
日は午後から、一人で祖母の見舞いに行く予定だ。

会ったたびに『はじめまして』を繰り返す。それでも彼女の名前を
聞くと、嬉しそうに微笑んでくれる。

『まあ、愛実さんと仰るのね。旦那様と約束しているのですよ。娘
が生まれたら？愛実？にしましょう、と。彼女の人生に美しい愛の
花が咲き、実り多いものでありますように……』

それは、娘に恵まれなかった祖父母が、愛実の名前に籠めた願い
であった。

古いアルバムから祖父母が並んだ写真を見つけ、愛実はいざしく見つめ続ける。祖父は弥生のことを覚えていただろうか。覚えていたとしても、弥生のように考えたかどうかは判らない。

その時、家政婦が来客を告げた。

「当然、お邪魔してしまつて。忙しいとは思つたんですが……」

そう言つて、以前と同じソファに腰掛けているのは和威であつた。「いえ、古い写真を整理していたんですが、思い出ばかり浮かんできて……なかなか進みません」

愛実は笑顔で答えた。

最初、和威の来訪と聞き少し怖かつた。

もし彼が信一郎や宏志と同じような真似をしたら……。とりあえず家政婦に近くに居て貰うことにした。いざとなれば母も家の中に居る。最初は、美馬家の四人のうちなら誰でも、と言つていた母だが、この期に及んで藤臣との縁談を壊す気はないだろう。

しかし予想に反して、和威は以前の落ち着きを取り戻していた。

「結婚式は明後日ですよ……今さら、と思われるかも知れない。でも、結婚式の前に君が知つておくべきだと思つて」

「どうか、なさつたんですか？」

和威が感情的になつてしている様子はない。その分、愛実の胸は得体の知れない不安で一杯になつた。

「例の週刊誌だけど……。十歳になる娘さんの父親は 藤臣さんで間違いなかつたんだ。DNA鑑定の結果が出たらしい。聞いて……ないよね？」

一瞬、胸が詰まり言葉が出て来ない。

そして、やっぱり、と思った直後、藤臣の言葉を信じよう、と思
い直す。

彼女は目を閉じ、軽く首を振った。

「藤臣さんは違つと仰いました。だから、彼を信じます」

「東さんにもう少し待って欲しいと言ってる。無事に結婚して、社
長に就任したら……子供の父親になる、と。それがどういう意味か、
君も本当は判ってるんじゃないのか？」

和威の言葉に、愛実は耳を塞いだ。

第72話 恋心

『ご覧なさい、和威さん。藤臣さんがとんでもない真似をしてくれました』

そう言つて弥生が差し出したのはDNA鑑定の報告書、そのコピーだ。外国の検査専門会社を使ったのか、全文が英語であった。弥生曰く、弁護士の高倉に命じて東恭子とコンタクトを取らせ、証拠を手に入れたという。

ざっと目を通して、和威は真っ青になる。

『あなた方がどう思っているかは判りませんが、わたくしは亘さんのお孫さんを救いたかっただけなのです。あの時代は身分が煩くて……随分、辛い思いを致しました。だからこそ、愛実さんの気持ちを汲んで、本来なら許したくはない藤臣さんとの結婚を認めたのです』

そう言われたら、確かに弥生の立場で藤臣を認めるのは苦しかったに違いない。

藤臣から、？自分で調べる？？教えて貰ったものは真実とは限らない？そう言われたばかりだったが……。素直なのは彼の長所であり、欠点ともいえよう。

『でもねえ……和威さん、こういった事実が出てきて、愛実さんはお幸せになれるのかしら？』

和威は弥生に、結婚式まで四日しかない、と答えるが……。

『まだ四日もあるんですよ。和威さん、あなたには後悔しないで欲しいの』

弥生は笑みを湛えて和威を見つめていたのだった。

和威は西園寺邸から追い出されるように出て来た。
何を言っても、愛実が藤臣を信じるの一点張りである。

それでも、丸一日悩んだのだ。あらゆる情報に通じている暁に相談しようか、とも考えた。しかし、暁が知らなかった時が問題だ。
和威は意識せずに、藤臣を追い込む側に回ってしまう。

この場合、瀬崎に尋ねるのが一番だと思うが……。それこそ、自分ではどうすることも出来ない、半人前です、と降参するようなものである。

ならば、愛実に直接尋ねよう、と考えたのだ。

愛実が藤臣から全てを聞いていて、それでも彼を選ぶと言うのなら、自分も二人の味方をしよう。弥生が藤臣の後見を辞めぬように頼んでもいい。和威が愛実と結婚したくない、家も継ぎたくないと言えば、さすがの弥生も藤臣に託さずにはいられないだろう。

藤臣は過去の心的外傷トラウマを乗り越えるため、病的なほど女性に冷たく当たり、セックスだけの関係を築いてきた。

逆に、和威は女性と距離を取ることで、心の安定を築いたのだ。そんな和威の一番近くに来た女性、それが愛実だった。弥生の思惑は明らかだ。だがそのせいで、和威は恋愛の対象として愛実を見つめ、性的関心も芽生えた。

和威にとってそれは、初めての恋だった。

くくくくくくくくくく

（デパートまで来て、わたしは何を聞くつもりなんだろう……）

愛実とは威の言葉に動かされ、藤臣に会いに来てしまった。

電話を掛けようか、とも考えたが、大事なことなので顔を見て話したい。でも、藤臣は怒るかも知れない。どうして信じないんだ、と。信じたいから来たのだ、とそんな愛実の想いを受け止めてくれるだろうか？

愛実の顔を見るなり、受付の女性が立ち上がって頭を下げてくれた。

「いらつしゃいませ、西園寺様。社長とお約束でございますか？すぐに連絡を……」

「あ、いえ、すみません。あの……急にきて驚かせてみたくなつて来客中でなかったら、このまま通して頂きたいのですが……」

こんな子供っぽい言い訳が通用するのか、と思ったが、意外にも受付の女性は笑顔で通してくれた。

愛実も会釈して専用のエレベーターに乗る。

社長室の階で降りるときはドキドキだった。エレベーターの扉が開いた瞬間、藤臣と顔を合わせたらどうしよう。或いは、社長室に彼がいなかったら？いつまで待つつもりか、愛実は何も考えていなかった。

金色のプレートに？社長室？と書かれたドアの前に立ち、愛実は深呼吸する。ノックをして数秒待つが返事がなく、愛実はもう一度ノックした。

「……失礼します」

小さく声を掛けながら愛実はドアを開け、中に入った。いつも彼

が座っている社長の席は空だ。トイレだろうか、と思った時、さらに奥の小部屋から人の話し声が聞こえた。

その小部屋には、手前には社長室用の備品や消耗品が、奥には重要書類を保管する金庫が置かれてあるという。中に入るつもりはなかったが、愛実はそのそと小部屋に近寄った。すると、声の主は藤臣　　どうやら携帯電話で話しているようだ。

（どうして、こんな中で電話なんか……）

愛実の胸に疑問と不安が浮かぶ。

「判った、長倉が動いてるんだな。いや、駄目だ。否定は出来ない。後で認めても、俺が娘を否定した事実が残る。それだけはしたくないんだ。だから、判つてると言つてる。婆さんとは今夜、話をつける。いや、愛実には言つな。彼女は何も知らなくていい」

藤臣が携帯電話を切り社長室に戻った時、そこには誰もいなかった。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

東部デパートを後にした愛実が向かったのは田園調布の美馬邸である。

たった一人、呼ばれてもいないのに美馬邸の門をくぐったのは初めての経験だ。そしておそらく最後になる、と愛実は心に思っていた。

藤臣の『愛している』を信じたかった。いや、嘘ではなかったと、今も信じている。

でも、ここ数日の彼を見ていれば判る。あれほどまでに藤臣を苦しめているのは愛実なのだ。愛実との様々な条件が課せられた結婚は、藤臣に多大な負担を掛けている。

一度全てをリセットしたい。財産も義務も、何も無いところから始めて、それでも藤臣が愛実を選んでくれたなら……。彼の過去に何があっても、例えば子供が居たとしても、自分も藤臣の愛に応えよう。

愛実はそう心に決め、弥生のもとを訪れた。

「成城の家は出ます。精算して頂いた両親の負債も、将来、姉弟で働いて必ず返します。ですから、わたしを相続人から外して下さい。元々、このお屋敷は藤臣さんのものになる確率が高かったと聞きました。でも、そうなって欲しくないという、おば様のお気持ちも……」

ガチャンと大きな音がしてティーカップが割れた。

弥生が持ち上げたカップを大理石のテーブルに落とした為である？アラビアンナイト？が描かれたマイセンのカップは、見事に二つに割れていた。

「あら、失礼。わたくしは構いませんよ。でも、契約不履行となれば……これまでお渡しした分の倍返しとなるのだけれどよろしいかしら？」

その金額は愛実の予想を遥かに上回り、途方もない金額だった。しかも西園寺の親戚だけでなく、母方の親戚たちも保証人として

名を連ねているという。彼らは美馬と通じること多大な恩恵を蒙ることになった。しかしそれは、かなりのリスクを伴うもので……。しかも、愛実の心一つに掛かっていたのだ。

愛実たち一家だけでなく、親戚一同を路頭に迷わせかねない事態に、彼女の決断は鈍る。

「ねえ、愛実さん。全てを手に入れようなんて、むしが良すぎるというものではなくて？」

藤臣が我が子を守りたいというなら、この家を諦め、愛実との結婚も白紙に戻すはずだ。それをせず、明後日の挙式披露宴も変更しないと言っなら……。

「随分、薄情な方ですこと。美馬と古くからお付き合いのある会社のオーナーさんには、昔^{かたぎ}気質の方もいらっしやいますからね。さあ、どう思われるかしら？ 世論も馬鹿に出来ませんものね。株価が落ちれば、株主さんも黙ってはいませんかでしょうし。でも、決めるのは藤臣さんですよ」

メイドが割れたカップを拾い、手早く辺りを掃除して部屋から出て行く。どこか懐かしく感じるマイセンのカップを、愛実は切ない思いで見送り……。

「でも、あなたがそれほどまでに仰るなら、方法もないわけでは……」

弥生の言葉に愛実は飛びつくように声を上げた。

「どんな方法ですか？ わたしに出来ることなら」

「ええ、あなたしか出来ませんよ」

弥生は別のメイドが持ってきた新しいティーカップを手し、蛇が獲物を狙うような、冷やかな笑みを愛実に向けた。

第73話 決断

弥生は何を、誰を愛しているのだろうか？

愛実の胸に疑問がよぎる。とても祖父・亘を慕い続けてきたとは思えない表情だ。かといって、亡くなった夫を愛していたと言っなら、どうして今になって亘の孫である愛実を呼び寄せたりしたのだろう。

彼女自身の孫である和威に接する時でさえ、弥生の中に彼を思う愛情が見えない気がする。

愛実に判ることは一つだけ、弥生は藤臣を憎んでいる、ということ。ただ、それだけだった。

何も言えず、無言で座る愛実に弥生は言葉を続けた。

「藤臣さんが決断できずに苦しんでいる、というなら……あなたが決めればよろしいではないの。簡単なことですよ。明後日の結婚式、花婿を和威さんにしたと言えば良いのです」

弥生は微笑みを浮かべ愛実に告げる。

「わたくしはね、愛実さん。あなたに財産を譲りたい、と言っているのです。その後のことまで、何も命令していませんし、そんなこと出来ませんでしょう？ わたくしも齢八十……お迎えもそう遠いことではありませんよ。生きている間に和威さんのお嫁さんを見たかっただけですもの」

その後……弥生が亡くなった後、愛実が藤臣に屋敷を譲りたいなら好きにすればいい、といった内容の言葉に、愛実は切なくなる。

確かに、大きな屋敷を維持していくことがどれほど大変か、愛実
は経験から知っていた。西園寺邸ですらそうなのだから、この美馬
邸となれば大変どころではないだろう。

和威は東部鉄道の一社員だ。いずれ出世するにしても、それまで
の間に掛かる相続税や固定資産税、修繕費や人件費などとても賄え
るものではない。そういつたことも含めて、藤臣でなければ維持で
きないと弥生も判っているのだ。

「藤臣さんがね、わたくしや夫を恨んでいることは承知しています
よ。だからこそ、この屋敷も全てご自分のものになさりたいのでし
ょう。それに、あなたのことを可哀想に思っているから……」

「可哀想なんて……違います、そうじゃなくて」

「あなたは藤臣さんを愛してらっしゃるでしょう？ でも、藤臣さ
んが候補から降りてしまわれたら、どうなるとお思い？」

愛実はこの時初めて、母がサインした書類の重さに気付いたのだ。
自分たちだけならいい、どれだけ苦労しても時間が掛かってても、
借りた物を返すのは当然のことである。だが、親戚一同を巻き込ま
ないためには、愛実は他の三人から結婚相手を選ばなければならな
い。

愛する人の選択を待つ自由など、愛実にはなかったのだ。

人生は簡単に途中でリセットすることは出来ない。どれほど誠実
に生きているつもりでも、正しくあるようと努力しても、ふいの嵐に
巻き込まれて思わぬ迷路に迷い込んでしまったとしても……。

愛実は自分の運命が、この美馬家から逃れられないものであるこ
とを悟った。

私は……君を愛してる

君の願いなら、何でも叶えてやる

君とちゃんと家庭を築くつもりだという証に

長く、甘い夢を見ていた気がする。

夜はもう遅かった。愛実が美馬家の車で送ってもらい、家に着いたのは夜の十一時を回っていた。受験生の尚樹はともかく、中一の真美は寝るように叱り、逆にぐっすり眠った末の弟・慎也の部屋も見回る。母は今夜も帰らないと連絡があったらしい。

母がどこで何をしているのか知らない。だが、今の愛実にはどうでもいいことに思える。

（駄目よ……こんな気持ちになったら駄目。わたしが諦めたら、本当にお終いなだから……）

自らを励ますものの、どうにも愛実の中に力が湧いて来ない。真っ暗な中、リビングのソファに、ただボンヤリと座り込んだ。

無為な時間が過ぎ、突然、玄関の呼び鈴が鳴り響いた。

愛実がハツとして時計を見ると、すでに日付けは回っている。こんな遅くに人が訪ねて来るなど、かつて借金取りに追われていた日々以来であった。

誰か判らないまでも、応対しないわけにはいかない。来訪者はまさに借金取りよろしく、忙しなく呼び鈴を鳴らし続けていた。

「どなたですか？ お引取り頂けないなら、警察に連絡します！」

玄関の扉越しに愛実が毅然と答える。

「開けてくれないか？ 婚約者の来訪だ。いや……元婚約者と言うべきかな？」

それは藤臣の声であつた。

愛実が自分の意思で和威を選んだ。

それは決して、弥生の言葉を信じたからではない。愛だけを理由に、藤臣を選んで欲しかった。唯一つの問題は、愛実が藤臣を待てる立場になかったことだろう。

藤臣が悪いわけでも、弥生が強制したからでもなく、西園寺家の抱えた借金の子。そして、それを背負うと決めた、愛実自身の責任だつた。

「弥生様から聞いた。結婚式は……もう明日なんだぞ。正気か？」

「あの週刊誌に書かれていた十歳の女の子……本当は、藤臣さんの子供なんですよ。」

リビングまで藤臣を通したものの、二人は立ったままだつた。愛実はソファを挟んで、真っ直ぐに藤臣を見る。

すると、これまでスツと視線を逸らしていた藤臣も、今回ばかりは小揺るぎもせずに見つめ返した。

「……ああ、そうだ」

その言葉に愛実の肩からフツと力が抜け、泣き笑いのような顔になった。

藤臣はそんな彼女をどう思ったのか、急ぎ込んで話し始める。

「説明させて欲しい。決して君を騙していたわけじゃない。私も知らなかったんだ。本当だ！あの記事が出た時、マスコミが昔のことを掘り返したただけだと思っていた。それが……どうしてこんな」

「お子さんのこと、ちゃんと考えてあげて下さい。わたしには」

「君は許してくれると言ったはずだ！過去は許す、と。約束してから一度も裏切ってはいないし、裏切るつもりもない！」

「じゃあ……どうするんですか？このままじゃ」

「落ち着いた後で金を払う。他に手はないんだ。でも今は認めるわけにはいかない。今、グループ本社の実権を失えば君を守ることが出来なくなるんだ！」

やはり、藤臣を苦しめているのは自分の存在なのだ。
愛実 は唇を噛み締め、顔を上げる。

「藤臣さんは本当のことを知りながら、わたしには何も話して下さらなかった。そうでしょう？」

「それは……君に心配を掛けなくなかった。それだけだよ」

「違うわ。今は認められない、でも、否定もしない。そう仰ったでしょう？わたし、今日、社長室に伺いました」

「知ってる。受付の社員に聞いた。だから何だ？」

「藤臣さんはあなたの実のお父さんとは違う。絶対に自分の子供を見捨てるような人じゃない。それに、相手の方は一度は結婚しようとなさった方じゃないですか。愛していらしたはずです。わたしのことは、守って下さらなくても平気です。わたしは……和威さんと結婚します」

愛実 は涙腺をきつく締め、藤臣に向かって笑顔を作る。
ところが、彼女の目に映ったのは、信じられないほど頼りなげな藤臣であった。

「……君も、土壇場で俺を捨てるんだな……」

あまりにも悲しげな瞳に、そうじゃない、と叫びそうになる。

その時だ。車の排気音がして、西園寺邸の前で停まった。直後、再び玄関の呼び鈴が鳴る。それは先ほど、藤臣が鳴らしたより激しく……愛実慌てて玄関に向かった。

「私です！ 瀬崎です」

その切羽詰った声に愛実だけじゃなく、彼女の後ろから駆けつけた藤臣も驚きを隠せない。

愛実が鍵を開けるなり、瀬崎は飛び込んできた。

「瀬崎、何時だと思っている！　ここまで追いかけて来なくても、私は逃げも隠れも」

「夜分遅く申し訳ありません。社長、恭子さんが自殺を図りました」

第74話 切願

深夜の病院ほど心細さの募る場所はない、と愛実と思う。
彼女は東恭子が運ばれたという病院までついて来ていた。

「瀬崎、恭子は無事なんだろうな？」

「何も判りません。子供が昼間からベッドで眠ったままの母親を案じ、ホテルのフロントに連絡したようです」

愛実是由佳に教えてもらい、恭子たち親子を見に行ったときのことを思い出していた。

おそらく、あのホテルにずっと隠れるようにしていたのだ。子供たちは何日も学校を休んでいるのかも知れない。それを思うと胸が痛んだ。

瀬崎の手配で、美馬グループの影響力が大きい病院に恭子は運ばれていた。

病院に着くと、睡眠薬を適量より少し多めに、それもアルコールと一緒に飲んだせいだと言者は説明する。恭子もすでに意識が戻っており、医者の質問にも『量を間違えただけ』と答えたという。

それを聞きながら、横で安堵の息を吐く藤臣に、愛実は一切ないものを感じていた。

処置室の前の廊下にベンチが並んでいた。そこには母を心配する十歳の少女と四歳の少年の姿が。その姿は父が亡くなった時、病院の廊下で震えていた愛実たち兄弟に重なった。

二年前の五月、愛実たちの父が自宅で倒れ、病院に運ばれた。父

の事業の資金繰りを心配していた祖母は、驚いた様子で家の中をただウロウロ歩き回り、母は父の傍に座り込み泣きだした。愛実が救急車を呼び、父の名を呼びながら家族を励ました。病院の廊下はひどく無機質で、冷たく感じたのを覚えている。

結局、父は一度も意識を取り戻すことなく、翌日には帰らぬ人となった。愛実詳しい病名まで聞かされてはいないが、ストレスが原因の心臓発作だったという。

祖母と母が呼ばれ医者話を聞く間、愛実たちは廊下のベンチに座り……ただ、震えていた。中一の尚樹は小学生の真美の手を握り、愛実が眠ってしまった四歳の慎也を抱えて。あの時ほど、人の温もりが欲しいと願ったことはなかった。

「もつと小さな病院だったな……母が運ばれたのは……俺は、生後半年の妹を抱き締めていた」

愛実の隣に立つ藤臣が、彼女と同じように二人の子供たちを見つめ、ぽつりぽつりと話し始める。

藤臣が八歳で母親を亡くしていたのは聞いていたが、その原因は義理の父親であった。彼の母親に風俗で働かせ、稼いだお金を全て取り上げていたという。どれほど具合が悪くても、無理やり働かせられ……倒れて病院に到着したときには、死亡が確認されたのだった。

「母が亡くなって、わずかな保険が下りた。奴はそれが欲しくて俺たちを施設に送らず、面倒を見ると言ったんだ。だが、半年も経たず金は底をつき……奴は俺たちをアパートの置き去りにして女と逃げた。俺は必死で妹の面倒をみたけど……すぐに食い物がなくなつて」

藤臣たちが住んでいたアパートは、およそ近所付き合いがあるよ

うな地区ではなかった。彼はそれまで一度も学校に行かせてもらえなかったという。

誰にも頼れず、日に日に弱っていく妹のために、藤臣は店先から牛乳を盗んだ。それが店主に捕まり、警察に通報され、ようやく藤臣と妹の忍は保護されたのだった。

しかし……。

「忍はもう息をしてなかったよ。……冷たく、硬くなった小さな指を、俺は一生忘れない。あの男は逮捕されて刑務所に入った。だが、たった五年で出て来たんだ！ 我が子を殺してもそんなものさ」

藤臣の心の傷は、自分が父親に捨てられたことだけではなかったのだ。

以前、加奈子が言っていた『父親と言えば、あの刑務所に入った男……』の意味がようやく判った。どうして、誰もが藤臣を傷つけようとするのだろう。

愛実は、隣に立つ藤臣の瞳が常夜灯に煌いた瞬間を目にする。彼が少年に思え、抱き締めたい衝動に駆られた。

（あなたを愛してる、と。いつまでも、あなたがわたしを選んでくれる日を待ってると言えたら……）

だが、それは言えなかった。

弥生は、藤臣が明後日の愛実との結婚を強行するなら、会社にも影響が出る、と言っていた。そのうえで、愛実^せに決断を急いだのだ。その答えは愛実にも判った。弥生は何が何でも花婿を和威に替えようと考えている。愛実に時間を与えないのは、西園寺の家族を貶めたいわけではなく、これが藤臣から美馬邸を取り戻す最後のチャンスだから……。

愛実はこちらまで、多少腑に落ちないことはあっても、弥生には感謝の気持ちを忘れずにいた。

だが今は、これほどまで過去に苦しめられている藤臣に、どうして手を差し伸べないのか、と口惜しくてならない。

（藤臣さんを本当に救うことができるのは……）

くくくくくくくく

愛実が幼い姉弟に我が身を映したように、藤臣もまた、自分の姿をそこに見ていた。

『愛実さんが和威さんとの結婚を承知してくれましたよ。ああ、ご安心なさい。あなたを次期社長として変わらず推挙しましょう。そのためには……誠実な印象を残しておくことが大事でしょうねえ。お子さんのために、新しい美馬邸を建てて移られるといいわ。会社のことはよろしくお願いしますよ。お元気でね、藤臣さん』

ほんの数時間前、弥生が勝ち誇った顔で藤臣に言った台詞である。藤臣は一言も言い返すことができず、無言で美馬邸を飛び出し、愛実のもとに駆けつけたのだ。

不満があるなら真つ先に、藤臣に話してくれると思っていた。まさか、弥生を頼るとは思ってもみなかった。そして愛実であれば、藤臣のどんな過去も罪も許してくれると信じていたのに。

愛実との結婚を白紙に戻したいと思ったことは一度もない。今となつては会社の実権も、愛実を守るために維持したいだけであった。だが、弥生の姿を見るたび、あの美馬家の人間と話すたび、藤臣の

中に憎しみが甦るのだ。三十年間、積み積もった恨みが錘おもりのように、藤臣を美馬という地獄に引き摺り込む。

『会社のことはよろしくお願いしますよ』

弥生の声がいつまでも耳の奥でこだましていた。

（しかし……恭子は何でこんな真似を？）

睡眠薬の服用が藤臣のせいであれば申し訳ないと思う。

だが、幼い子供たちを残して、万一のときはどうするつもりだったのか。二人の姿を見ていると、腹立たしさすら覚える。

そのとき、愛実が何を思ったのか子供たちの傍に歩み寄った。

「大丈夫よ。お母さんは間違えて薬を飲んじゃっただけだから……すぐに良くなるって」

ベンチに座った二人の前に屈み込み、愛実は笑顔で話しかけた。

見知らぬ女性の言葉に、姉の絵美は弟の博之を抱き締め、きつい眼差しを向ける。

「……知らない人とは話さないように言われてますから」

「そう、お母さんに？」

「はい。それとも……病院の人ですか？」

愛実は小さく首を振り、数メートル後ろに立つ藤臣に視線をやった。

「あの男の人が、お母さんのお友達よ。同じ会社で働いているし、お母さんが大学生の頃からのお友達なの。だから、きっとあなたたちの力になってくれるわ」

その言葉に、藤臣は鼓動が止まった錯覚に陥る。愛実が突然そんなことを言い出した理由も、自分がどう動けばいいのかも判らない。だが、絵美は勢いよく立ち上がると、呆然と佇む藤臣の前までやって来た。

「美馬社長さんですか？　あなたが、あたしの本当のお父さんなんですか？」

「……」そのストレートな質問に藤臣は即答できない。

「お母さんがお酒や睡眠薬を飲むようになったのは最近なんです。お母さんは、お父さんがいなくなってすごく苦労して……。お父さんがいなくなったのは、あたしが本当の子供じゃなかったから。」

お母さん、昨日、言っていました。社長さんに、こんなに迷惑かけるつもりじゃなかったのに、って。あたしたちにも……。学校に行けなくなつてごめんねって。でも……。学校に行けなくてもいいから、本当のお父さんのことは二度と聞かないから……。もとのお母さんに戻って欲しい」

気丈に藤臣を睨んでいた絵美の瞳に大粒の涙が浮かぶ。そして、元どおりに三人で暮らしたい、そう言ったとき、彼女はポロポロ泣き始めた。

目の前の少女を選べば、二度と愛実のもとには戻れない。そしてそれは、弥生に負けを認め、膝を屈するも同然となる。藤臣は数秒目を閉じ、覚悟を決めて口を開いた。

「そうだ。私が君の父親なんだ。君のお母さんや、君たち姉弟が幸福になれるよう、私にも力を尽くさせて欲しい」

藤臣は少女の前に跪き、その肩を抱き締めた。

それは二十二年前、母を失ったときに彼が願った？優しい手？であつた。

第75話 別離

車は藤臣のポルシェではなく、瀬崎の国産車であった。

慣れていないはずの右ハンドルだが、元々運転が好きなせいだろうか、難なくこなしている。

愛実 は運転する藤臣の横顔を見るのが好きだった。窓の縁に肘を置く仕草も、シフトレバーを操作する指先も、助手席に座って見ているだけで愛実の心は浮き立った。

最悪の形で出会いながら、愛実にとって彼は最初から特別な人だと感じていた。時には厳しい言葉をぶつけられることはあっても、最後には必ず優しい言葉をくれる。何度も助けられ、不器用で判りにくい思いやりと傷つきやすい心を知った。一人ぼっちで生きてきた藤臣の家族になりたいと本気で思っていた。

『そうだ。私が君の父親なんだ』

藤臣の告白は愛実が促したも同然である。

彼は父親だと認めただけで、恭子を愛していると言ったわけでも、愛実への愛を訂正したわけでもない。だが絵美のために、藤臣は娘の存在をごまかすことはしないだろう。

あの弥生が藤臣の弱点を見つけて見逃すはずがない。もし、愛実が逆らえばきつと……。

「愛実、夜中に……付き合わせて悪かった」

随分長い時間無言であったが、ようやく藤臣から口火を切った。

「……いえ。大したことがなくて、本当によかったです」

子供たちは母親と同じ病室で一晩過ごすという。明日には恭子も

退院できるそうだ。事後処理に瀬崎が病院に残り、藤臣が愛実を自宅まで送り届けることになった。

「和威との結婚だが……無理にする必要はない」

「でも、契約書が」

「あれは何とでもなる。俺が弥生と話して決着をつける。元々、美馬家の問題だったんだ。それに君を巻き込んでしまった。……後悔してる。済まない」

それは今まで聞いたことがないほど、頼りなげな藤臣の声であった。

「そんな、そんな風に言わないでください。はじめから間違いだつた、みたいに……」

「間違いだつたんだ、はじめから。弥生の策略を知って、誰よりも先に君を見つけ……俺のモノにするつもりだった。だがその前に、弥生に手を打たれて……。後は知ってのとおりだ。美馬の屋敷が欲しかった、そして、君を抱きたかった。手段が違っただけで、俺も信一郎の同類だ」

藤臣の言葉とともに、車は西園寺邸の前に停まった。

「美馬の人間はこんな連中^{クズ}ばかりなんだ。契約書は俺が必ず無効にする。だから……」

「一つだけ教えてください。“愛してる”って言葉は本当でしたか？」

愛実の質問に一呼吸置いて、藤臣は答えた。

「俺に相談もなく、花婿を替えたのは君だ」

「わたしは……藤臣さんを愛してました。でもお子さんの存在を放置して、わたしと結婚することは立場的に問題になる、と。それに、弥生さまとの確執を知った今、これ以上、藤臣さんひとりに迷惑は掛けられません」

藤臣と結婚するのだから、何も問題は起こらない。母が交わした契約書の内容を知っても、愛実はそれほど大変なこととは思わなかった。

弥生にしても、まさかこんな直前で藤臣に隠し子問題が持ち上がるとは、想像できなかっただろう。

責任は取らなければならない。たとえ十八歳でも、自分自身で決めたことなのだから。

「美馬家の方がどんな方たちであっても、わたしはわたしです。藤臣さんのことが好きだから、これ以上傷ついて欲しくないんです。和威さんはそれでもいい、と言ってくれました。どうか、わたしを守る為に、苦しい決断なんてしないでください」

愛実はバッグから淡いブルーグリーンのリングケースを取り出した。中に収まっているのは、婚約指輪としてもらった三カラットのオーバルダイヤモンドリングである。

「これをお返しします」

「返されても困る。叩き売っても一千万は下らない。何かのときの為に持っておいたほうが無難だ」

そう言うと、藤臣は最初に会ったときのように冷たく笑った。

愛実はふるふると首を振り、そつとコンソールボックスの上にケースを置いた。

「最後のお願い、きいて貰えますか？」

「何だ」

「最後に、もう一度だけ……キス……して欲しくて」

そんなことを言っつもりはなかったのだ。

でも、気が付けば、愛実は藤臣にキスをねだっていた。最後の思い出にたった一度だけ……。

しかし、藤臣の答えは。

「断わる。さっきの答えだ“愛してる”の言葉は全部嘘だよ。君を抱きたくて言っただけだ。判ったかい、お嬢ちゃん」

彼はハンドルを抱きかかえるようにして、こちらを見て意地悪く笑った。

「藤臣さん……」

愛実はくるつと背を向ける。車のドアを開け、外に飛び出した。そしてドアを閉める間際、車内を覗き込み、

「ありがとうございます」

愛実は精一杯の笑顔を見せる。

そして彼女は身を翻し、門に向かって歩き始めた。

本当に抱きたいだけなら、いつだって何度だってチャンスはあった。今だってそうだ。“愛してる”と言われたら、明日のことも考えず愛実^{ほんとう}は彼に身を投げ出すだろう。

真実の藤臣は、家族思いで誠実で温かい人なのだ。そして今の愛実には、彼に何一つ与えてあげることが出来ない。愛実がどれほど母に困っても、勝手にしろとは言えないように……。彼は絵美を見捨てては幸福になれない。

彼女が門に手を掛けたとき、背後に足音が聞こえた。

愛実が振り向く寸前、力一杯抱き締められ　その香りは間違いなく藤臣だった。

「藤、臣……さん？」

「愛実……どうか、幸せに」

それは、ほんの一瞬のこと。

愛実は無動だにできぬまま、嵐が過ぎ去るように藤臣は立ち去り、車のエンジン音が聞こえた。愛実は無れ落ちるように座り込み、古い木製の門に体を預け、泣き続けたのだった。

くくくくくくくく

娘を自分と同じような目にだけは遭わせたくない。

恭子が何を藤臣に望んでいるのか、あらためて話し合う必要があるだろう。

そして愛実は……。

彼女の人生にもう一度選択肢を与えてやりたい、と思った。強引に巻き込んでしまったせめてもの罪滅ぼしに。たとえ、美馬の屋敷や社長の椅子を諦めることになっても。彼はこのとき、初めて十五年間積み上げた復讐心を手放した。

だが、もう遅かったのだ。

藤臣は通り掛った橋の上に車を止め、外に出た。どの辺りを走っているのか、自分でも見当がつかない。ただ、二車線の道路に車は数えるほどしか走っておらず、欄干沿いの歩道に一定の間隔で灯る街灯が物悲しさを醸し出していた。

泥沼と化した藤臣の人生に、これ以上愛実を引き摺り込むことは出来ない。そして愛実が和威との結婚を望むなら、和威が美馬家の主となれるようサポートするだけだ。

決して忘れることなど出来ないと思った憎しみは、手放した瞬間
形を失い霧消した。

藤臣は愛実から返されたリングケースを開ける。

そしてダイヤの光に目を細めた直後、川に投げ捨てた。

『 “愛してる” の言葉は全部嘘だよ 』

そう言葉にしたとき、やっと彼は気づいたのだ。愛実に言い続けた “愛してる” が心からの言葉であったことに。

かけがえのないものを失った。

指が白くなるほど、藤臣は強く欄干を握り締める。車のヘッドライトに映し出された背中では、いつまでも、小刻みに震えていた。

第76話 後悔

結婚式前日

花婿が美馬藤臣から美馬和威に替わったと発表された。会社をはじめ、式場も大騒ぎとなる。そんな中、和威は自分の気持ちに戸惑っていた。

愛実を愛している。

彼女の心がどこにあっても、藤臣と一緒にいるより、自分のほうが幸福に出来るはず、だった。

『和威さんのことは好きです。でも、急にこんなことになって……。夫として愛せるようになるまで、色々なことは待っていたきたいのですが。……だめ、ですか？』

彼女がセックスのことを言っているのだ、とすぐに判った。愛実に頼まれ、『ノー』と答えられる和威ではない。ましてや女性に無理強いするなど、和威が最も厭う行為だ。

『待つよ。君が僕を愛してくれるまで。君のために精一杯頑張ってみせる。君がいてくれたら、頑張れるような気がするんだ』

そう答えた和威に、愛実は歯を食い縛って微笑んだ。

藤臣が弥生に怒鳴り込んだことは聞いている。だが、まだ和威のもとに来てはいなかった。すぐに和威を責めにやって来ると思っていたのが、肩すかしで……。どうにも気持ちが落ち着かない。

（僕は藤臣さんが怖いのか？ それとも……）

朝一番で発表され、和威はその準備に追われた。親族用のタキシードからフロックコートに衣装を変える。そして愛実も、『違うウエディングドレスを着たい』と言い出し、周囲を困らせた。だが、和威はそれを認めたのだ。

決まっていたドレスはデザインから藤臣が指示したものだという。愛実がそれを着たくない気持ちは痛いほど判る。

既成のドレスの中でサイズが合うものとなれば限られていたが……。愛実の『ありがとう』という言葉は和威の胸に刺さった。

自室で考え込む和威の耳に糸井の慌てる声が届いた。美馬家の執事が声を荒げるなど滅多にないことだ。

「どうしたんだ。いったい……」

和威が廊下に顔を出すと、糸井が必死で止めようとしているのは藤臣だった。従兄……いや、叔父の姿を見て、和威はゴクリと唾を飲み込む。

「糸井、いい加減にしないか。私は何をすと言っんだ」

「いえ、しかし」

「和威に話があつて来ただけだ。和威、中に入れてくれるか？」

藤臣が騒動を起こすと思っているのか、廊下の向こうには興味本位で見ている宏志の姿もあった。

和威は深呼吸してドアを大きく開け、

「どうぞ、藤臣さん。来られると思っていました」

可能な限り余裕の笑みを作り、藤臣を招き入れたのだった。

ソファに座るように勧めるが、藤臣はそれを断わる。「そう長い話じゃない」彼はそんなふうにした。

「僕のことを怒ってますよね？ おばあ様の言いなりで、尻馬に乗って女性を手に入れるなんて……卑怯だと言いたいんでしょう？」

判ってます、でも」

「落ち着け、和威。私はお前を責めにきたわけじゃない」

藤臣は妙に落ち着いた様子で和威の肩に手を置いた。

「まずはお前に謝りたい。長い間、騙していて悪かった。ただ……先代は生前、私を息子とは認めようとしなかったんだ。亡くなっていきなり父親だと認められても、困惑しただけだった」

和威には訳が判らない。なぜ、出生の話になるのだろうか。やはり、愛実のことはこの家を相続する為だけの道具に過ぎなかったのか。そう思うと、理不尽にも怒りがわき上がる。

「話はそんなことなんですか？ 愛実さんのことは……」

その時だ、スツと藤臣は体を引くと、頭を下げた。

「愛実を頼む。美馬家の騒動に巻き込み、結果的に彼女の一生を美馬家に縛り付けることになった。どうか、幸せにしてやってほしい。私は一連の騒動の責任を取って、本社取締役を辞任した。東部デパートの社長も、副社長に任せるつもりだ。騒ぎが収まるまで、私が東京にいないほうがいいだろう。この家も出る。和威、次の社長はお前だ」

これまで見たことのない藤臣がそこにいた。

まるで憑き物が落ちたかのような悟り澄ました表情に、和威は何と答えたらいいのか判らない。

「ま、待ってくれ。僕は、愛実さんと結婚してこの屋敷を相続することにした。でも、藤臣さんを会社から追い出すつもりなんてない！ これまでどおり」

「判ってる。お前がトップとしてやっていけるようになるまで、サ

ポートするつもりだ」

「いや、そうじゃなくて！」

「悪い、和威。私にとって？美馬？にはもう何の興味もないんだ。働く意味も目的もない。気が狂うほど欲しかったモノは、憎しみの作り出した幻だった。和威、私のような生き方だけはするな。どんな力にでもなる。だから、愛実のことを頼む」

自分のほうが愛実を幸せに出来る。

その思いを藤臣本人に肯定されたとき、和威の心は迷宮の真ん中に放り出されていた。

く*く*く*く*

「大事に至らなくて良かったです」

瀬崎は一旦子供たちをホテルに引き上げさせ、恭子の退院手続きのため、再度病院を訪れていた。

彼が恭子から相談を受けたのは五月のこと。

瀬崎は最初、恭子は金目当てに違いない、と考えた。藤臣に知らせる必要もない。DNA鑑定を要求すればアッサリ引き下がるだろう、そう思ったのだ。しかし、恭子は鑑定をあっさり了承する。

そのとき初めて、藤臣が瀬崎にも内緒で恭子をデパートに採用していたことを知った。

『四年前、夫に行け、仕事とお金に困って美馬社長に相談したんです。すると、助けてくださって……。私、十年前のことを後

悔しました。今さら、やり直したいなんて言えませんが……。でも、絵美のことだけは話しておかなくては、と』

藤臣に知らせるのは鑑定結果が出た後でいい。瀬崎はそう判断し、藤臣と一志の親子鑑定を頼んだ外国の会社に依頼したのである。そこにはまだ藤臣のDNAサンプルが保存してあった。

そして結果は……。

瀬崎にとって、愛実とは本当に健気な少女であった。藤臣の言葉を全て信じ、頼りきっている。

一方、藤臣もこれまでとはまるで印象が違った。潰すために美馬の家屋敷と会社を手に入れる、そんな妄執から一刻も早く目を覚まして欲しいと、瀬崎は常に願っていた。

藤臣は一志とは違う。本来の彼は、愛する者のため必死になれる人間なのだ。

瀬崎の実家は農家をしている。決して裕福ではなく、しかも彼は兄弟が多い。数年前、瀬崎の母が心筋梗塞で倒れた。すぐに手術が必要だと言われたとき、その全ての手配をしてくれたのが藤臣だった。

彼にとって藤臣は親友であり、信頼できる上司であり、手の掛かる弟でもあり……。

怒りや憎しみは人が立ち上がる力になる。だが、そこからは何も生まれない。それを藤臣に知って欲しかった。

瀬崎は何度となく藤臣に尋ねた。愛実を本当に愛しているのだろう、と。

だが、

『俺は誰も愛せない。愛実のことは一生騙すつもりでいる』
そんな言葉でこまかし続ける。

その答えに、瀬崎は藤臣を庇うことを止めたのだ。逆に彼を追いつめ、最後の最後で本当に欲しいものを選んでもらおうと考えた。愛する女性と我が子を天秤に掛けるのは辛いはずだ。それでも『辛い』と認めることから、藤臣に気付いて欲しかった。

瀬崎は藤臣が小細工できないタイミングを見計らい、マスコミを使った。一部の記者が暴走したせいで子供を巻き込んでしまったのが計算外だ。

そして、結果的に藤臣が子供を選んだとき、愛実の被害を最小限に抑えるため和威に自覚を促した。彼女が藤臣の金銭的援助を受け取ってくればいい。だが、潔癖な愛実が破談になった相手の援助を受けるとは思えなかったからだ。

「社長は娘さんが望めば……実の父親として認めてもらえるよう、努力するとおっしゃっておられました。鑑定結果を提出し、法律の特例を適用してもらおうよう働きかけたい、と」

DNA鑑定の精度が上がり、子供の父親が明らかに違うと判断された場合、特例として実父の名前が変わったという判例がある。藤臣は本気で子供を取り戻すつもりのようなのだ。

喜ぶかと思った恭子は俯いたまま顔も上げず、

「あの……ご結婚は……」

「婚約は解消されました。一連の騒動の責任を取って、全ての役職を辞されるそうです。しばらく東京を離れることになりそうですが……。ご一家やお嬢さんのことはちゃんと考えておられますので、ご安心ください」

瀬崎は「退院の手続きをします」そう言って病室を後にした。もう夕方と呼ぶに相応しい時間帯だ。普通ならこんな時間に手続きはできないものだが、多少の無理を頼むためにこの病院に運び込

んだのである。

エレベーターに乗ろうとしたとき、瀬崎は恭子の保険証を預かっていないことに気がついた。

引き返し、病室のドアをノックして、ほぼ同時にスライドさせる。室内に目を向けた瞬間、恭子は窓枠に足を掛け、飛び降りようとしていたのだった。

第77話 真相

結婚式当日　美馬邸は静かな朝を迎えていた。

花婿になるはずだった藤臣の部屋には誰もいない。モデルルームのような室内は、主を失ったかのようにシンとしている。彼が朝食の席に着くこともなかった。藤臣は式への参列も強制されてはならず、弥生をはじめ誰も彼の名前を口にしなかった。

その一方で……。和威は一睡もせず、窓の外が黒から水色に変わる間、自室のソファに座り中空を見つめ続けていた。

愛する女性を妻にする。

それは真実であるはずなのに、どこか虚しさが漂う。和威の心はほんの数日前の藤臣と同じく、虚空を掴むように、必死で腕を伸ばしていた。

欲しいものを手に入れる。手段など関係ない。本当に望んでいるものは力尽くで奪う。一旦手に入れたら、誰を傷つけたとしても決して離してはいけない。それは、悪意の連鎖に囚われた美馬家で生きる為の、悲しい手段であった。

美馬家の呪縛から逃れられない人間、その最たるものが弥生である。

リムジンが玄関口に横付けされ、弥生は杖をつきながら後部座席に乗り込む。その後ろには和威の姿も見えた。

突如、猛スピードで美馬の正門を抜け、リムジンの後ろに急停止した車が一台。

その運転席から転げ落ちるように飛び出てきたのは、藤臣の秘書、瀬崎幸次郎であった。

「美馬会長、お話があります」

瀬崎は肩で息をしている。走ってきたのは車だ。それは、いかに彼が興奮状態であるかを示していた。

「瀬崎と言いましたね。見て判らないのですか？ わたくしはこれから、和威さんの結婚式に出席するのですよ。話は後日聞きましょう」

そう言うつと弥生は手で払う仕草をした。

門脇の警備室から駆けつけた警備員が瀬崎の腕を掴もうとする。

「あなたはご自分が何をしたか判っていらっしゃるのですか！？なぜ、美馬の家とは一切関係のない東さん一家まで利用して……。愛実さんもそうだ！ 半世紀以上前に西園寺家の方が何をしたかは知りません。でも、愛実さんには何の関係もない！ 美馬社長もそうです。生まれてきたのは彼のせいじゃない！ なのに……いつまで彼を傷つければ気が済むんだ！」

それは、瀬崎が東恭子から聞いた話を、一晚掛けて探り出してきた真実であつた。

くくくくくくくくくく

「美馬さんを選んでいたら良かったのかも知れない。でも、私は石川を愛していたんです」

窓から身を乗り出す恭子を室内に引き摺り込む。

そして瀬崎は、信じられない告白を聞いたのだった。

恭子は生活に困窮して藤臣を頼ってしまった。そして彼の誠意を知るものの……。

人の心は思いどおりに動かせるものではない。どれほど酷い男であつても、不実で父親に相応しくない男であつても、恭子は夫に戻つて欲しいと願つていた。そんな別れた妻の本心を知る石川は、養育費を払うどころか金を無心してきたのだ。

そして先月、恭子は石川から『やり直したい』と言われた。一も二もなく受け入れる恭子に、石川はある条件を突きつける。

『でも借金がある。いや、お前に払ってくれとは言わない。返すアテはあるんだ。もちろん、お前にも協力してもらふ必要があるんだけど……』

それは美馬を罫に嵌める協力だつた。

確かに十年前、恭子と逃げたことで石川は職を失い、彼の人生はホワイトカラーから派遣社員に落とされた。愛を選んだと言えば聞こえは良いが、貧しい生活を？愛？の一言で乗り越えられる期間は、そう長くはない。石川は藤臣だけでなく、恭子も、娘の絵美すら恨み始めたのだ。

恭子と別れても、彼の人生が浮上することはなかった。『あいつのせいで』その思いが人生の錘おもりになつていゝとは、なかなか気付かないものである。そこに、甘い餌を投げ込まれたら……。

石川はそれに飛びつき、恭子や子供たちをも引つ張り込んだ。

まず、いきなり藤臣に訴えては駄目だ。同意のもとに鑑定などしては、すぐに真実が明らかになる。秘書の瀬崎を信用させ、彼が藤臣に内緒で鑑定に持ち込むようにする必要がある、と。瀬崎は案の定、同じ会社に鑑定を依頼した。

石川の言つたとおり、絵美が藤臣の実子と鑑定されて、恭子は恐ろしくなる。

だが石川は、

『俺たちのせいにはならないから心配するな。鑑定した会社のミスなんだよ。大騒ぎにならないうちに決着はつくからさ。借金を払って、店でも開ける金を貰って、家族で遠くに行ってやり直そうぜ』

確かにそうだ。恭子はDNA鑑定に判断を任せただけ、その会社を選んだのは瀬崎である。石川には、藤臣から金を取れ、とは言われていない。金銭的なものは、石川にその話を持ち込んだ相手とやり取りしているようであった。

だが、当初、恭子が仮名で週刊誌に載るだけのはずが、娘の写真まで目の部分を隠しただけで載せられてしまう。恭子たちはアパートで暮らすことも出来なくなり……。そして絵美は自分の出生を疑い始めたのだ。

『もういいでしょう？ もうお金は受け取ったんでしょ？ 絵美には嘘をつきたくないの。美馬家の人には酷いことを言われたし、実家の親にも迷惑を掛けて……。私たち、家にも戻れなくなっただけども、美馬社長の……。藤臣さんのせいじゃないわ。四年前、あなたが残していった借金、彼が払ってくれたのよ。お願い、彼には幸せになって欲しいの』

『ああ……。判ったよ』

恭子が石川と連絡が取れたのはそれが最後だった。

娘の名前で石川の戸籍を確認すると、彼はすでに三年前、別の女性と入籍し子供まで生まれていた。そして、恭子が唯一知っていた石川の連絡先、携帯電話は即日解約されたのだった。

「十年前、私が石川と逃げて、私たちの実家は莫大な慰謝料を美馬家に請求されたんです。親には二度と顔を合わせられないほど、迷惑を掛けました。石川も少しでも美馬の息の掛かった会社には、就

職できず……。私、少しでも石川の役に立ちたかった。社長はあんなに成功しているんだから、少しくらい……。そう思ってた」

石川が姿を消し、恭子はやっと判ったのだ。

自分たち親子は利用されただけ、ということに。しかも、偽りがバレたら全ての責任は恭子にくる。鑑定を請け負った会社のミスだと言い切れる彼女ではなかった。絵美からは本当の父親を教えて欲しい、と言われ。しかも絵美は、自分のせいで離婚したと思っている。

耐え切れず、恭子は藤臣をせつついた。いつそ鑑定結果を公式に否定してくれたらいい。新しい生活を始められるお金さえ貰えたら、子供を連れてどこか遠くに逃げよう。そう思ってたのだ。

「なのに、美馬さんはそんなことは出来ないとおっしゃって」

恭子は睡眠薬を飲んでも眠れなくなり、昨夜は、ついつい過剰に飲みすぎてしまった。

ところが目を覚ました彼女に絵美は言ったのだ。

『美馬社長さんていい人だよ。あたしがいいって言ったら、ちゃんとしたお父さんになってくれるって。博之のことも一緒にいいって言うてくれたよ。ねえお母さん、これからは幸せになれるね!』

屈託のない絵美の笑顔に、恭子は背筋が凍りついた。取り返しのつかない罪を犯してしまった、と。

婚約者から藤臣を奪い、藤臣からは仕事を奪った。真実を知れば、絵美は二度と母親を信じようとしなйдらう。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。もう誰とも、生きて合わせる顔はないんです!」

恭子の告白に青褪めたのは瀬崎である。

鑑定を依頼した会社は海外で、美馬家の誰にも知られてはいないはず……。

そのとき、瀬崎は一つの可能性に気が付いた。弁護士に提出した藤臣と一志の親子鑑定書類、社名は伏せたものの担当者のサインは入っていたはずだ。こういった仕事を請け負う会社は、世界にそう多くはない。原本を手にすることが出来る人間であれば、調査することは金さえあれば容易い。

もしそうであれば、瀬崎はまんまと罠に嵌まり、藤臣を失脚させる側に加担したも同然だ。

「一つだけ確認させてください。絵美さんは、社長の子供ではないんですね？」

感情を殺し、出来るだけ穏やかに問い掛ける。

「……はい……」

恭子の返事に、瀬崎は拳を握り締め、目を閉じた。

第78話 悪鬼

瀬崎の叫びは、美馬邸の瀟洒な佇まいを揺るがすほど悲痛に満ちていた。

見送りに出ていた執事の糸井をはじめ、使用人たちもなんとも言い難い表情だ。彼らもおそらく、同じ思いを抱きながら長年勤めて来たのだらう。

六月の生温かい風が、弥生の白くなつた髪を数本靡かせ……。彼女は少し、不快そうな顔をする。

「だからなんです？」

「……美馬会長……」

小揺るぎもしない弥生の態度に、瀬崎は何も言えない。

「わたくしが何をしたと言うのです？ 他の男性と逃げて、美馬家の顔に泥を塗ったのですよ。慰謝料を請求されて当然ではありませんか。愛実さんにしてもそうです。身売りされるほど困っていらしたのでしょうか？ 感謝されこそすれ、恨まれる覚えなどありません。藤臣さんは……あんな汚らしい子供が美馬を名乗るなんて！」

藤臣のことになり、弥生の表情は変わった。

杖を持つ手をわなわなと震わせ、目をぎょろりと剥き、顎をしゃくりながら言葉を続ける。

「あのような下賤な者は、生まれて来なければよかったのです。愚かな母親と共に死んでくれたらよかったのに……。藤臣のせいでの三十年、わたくしは心休まる日がありませんでした。先に夫が死んで、やっとこの家から追い出せると思った矢先に！ 家も会社も、全部あの女の息子に奪われそうになるとは」

それは瀬崎だけでなく、周りにいた全員が声を失うほど驚いていた。

「おまけに、夫に似たのでしょうね。娘たちは下半身にだらしがなく。期待を掛けた佐和子は石女で……。娘の亭主も孫も、藤臣ひとりに敵わないとは。ああ、情けないこと」

瀬崎は呼吸を整え、なるべく穏やかな声で伝えた。

「美馬会長　すべて、あなたのお子さんでお孫さんだということ
を、忘れないで頂きたい」

「……わたくしの？」

弥生は驚いたような顔をして、噎しわがれた声でフツツと笑った。

「そうそう、わたくしたちに娘が生まれたら？愛実？と名付けよう。
そう、あの方はおっしゃったのですよ。それを　生涯独身であられたならともかく、若い妻を娶り、孫娘に？愛実？の名前をつける
なんて！　ええ、そうですね？西園寺愛実？はわたくしのモノ。」

瀬崎……不満ならお前が買い戻してごらんなさい」

弥生は人生の終盤を迎えた人間だ。たった三十そこその瀬崎が情に訴え、説き伏せられるはずがない。いや、おそらくどんな人間にも不可能だろう。

瀬崎は説得の相手を変えた。

弥生の後方に立ち、暴言を吐く祖母を啞然と見つめる和威に問い掛ける。

「和威様、申し訳ありませんでした。私が間違っております」

和威はハツとして瀬崎に顔を向ける。

「美馬社長……藤臣様はこの家を酷く憎んでおられた。でもあの方は、本当は家族のことを第一に考える、優しい方なのです」

恭子の娘が藤臣の実子と判明したとき、それを知った瀬崎は胸が高鳴った。

愛実との出会いは藤臣の凝り固まった憎しみに亀裂を入れたが、溶かすまでは至らなかった。だが、実の娘であれば……。異父妹を

守れなかった藤臣は、愛する誰かを守り抜くことを切望しているはずなのだ。

「私は和威様に協力するような真似をしました。知り得た事実、理性を失ったからです」

唇を噛み締める瀬崎に、和威は尋ねた。

「いつたい、何があつたんですか？ おばあ様が、藤臣さんをよく思っていないのは、今に始まったことじゃない。それをなんでこんな日に」

訝^{いぶか}しがる和威の手をトントンと叩き、「さ、行きますよ」弥生は何もなかったように車に乗り込む。

「東恭子さんの娘さんは、社長のお子さんではありませんでした。何者かが東さんの元夫に金を渡し、復縁を希望していた東さんに偽証させたのです」

鑑定を依頼した会社に連絡を取ったところ、すでに担当者は辞めていた。

直ちに検査書類を確認させ、判明した事実はいずれも。

鑑定結果が、一志と藤臣のものと丸々入れ替わっていたのである。数値が不正操作されているならともかく、丸々となると、故意ではなく過失と取られる可能性が高い。瀬崎の知る弁護士はそう言った。それだけではない。瀬崎は秘書の立場を利用して、本人の承諾を得ずに鑑定を依頼した。もちろん、藤臣の名前で。逆に、違法性を追求されるなら瀬崎のほうになる、と。

「一晩では担当者の居所を突き止めることは出来ませんでした。ですが、必ず見つけ出します。そして、東さんの元夫に金を払った人間の名前も」

そんな瀬崎に車の中から弥生が言った。

「おやおや、威勢のよろしいこと。秘書の分際で、それ以上余計な

ことをすれば、ご家族を泣かせることになりますよ」

弥生の言葉は脅迫にも等しい。瀬崎の実家である小規模農家など、彼女にかかれば一捻りであろう。

だが、瀬崎は弥生の言葉を見做し、和威に向かって訴え続けた。
「和威様、社長と連絡が取れないのです。社長は何度も愛実さんを愛していないとおっしゃった。でも、本当は違ったはずですよ」

『美馬を出す』

藤臣からそう告げられたとき、瀬崎は驚いた。まさか、これほど劇的に復讐を諦めるとは思ってもいない。そのとき、彼の胸に動揺が走ったのだ。

藤臣から愛する女性を引き離して、本当に良かったのか？

藤臣は散々女性を振り回し、何人も泣かせてきた。

愛実だけは傷つけないで欲しい。何度も頼む瀬崎に藤臣は、止められるものなら止めてみる、と言わんばかりの挑発を口にした。瀬崎の本心は、藤臣を止めたかっただけかも知れない。

だが、実子であるなら。その子が不遇な立場にいるなら、父親として負うべき責任があるはずだ。

瀬崎は自分の行動を、その一言で正当化したのだ。

「私は自分が正しいと思うことをしました。でも、今は間違っていると思います。その責任は取るつもりでいます。どうか和威様……今、愛実さんと結婚することが正しいのかどうか、もう一度考えてみてください！　どうかっ」

瀬崎は警備員により車から引き剥がされ、彼の鼻先でドアは閉まった。走り去るリズムジンの後姿を、やるせない思いで見送る瀬崎であった。

くくくくくくくく

一方、西園寺邸でも愛実が出発する直前、ひと波乱起きていた。原因は尚樹である。

「どうして今になって花婿が替わるんだよ！ そんなの変だろう？ 姉さんは美馬さんが好きなんじゃなかったのか？」
尚樹にはどうしても納得できないらしい。

淡々と準備を進める愛実の隣で、憤りを露わに姉を責めるのだ。

「いい加減にしない、尚樹。子供のあなたには判らないこともあるのよ。同じ美馬の男性に嫁ぐのだから、大した問題ではないわ」

だが、そんな母の言葉に尚樹は激怒して言い返した。

「あんたは黙ってるよ！」

「まあ！ 母親に向かつてなんて口を聞くんです？」

「父さんが死ぬまで、僕らの面倒をみてくれたのは、入院してるおばあ様だ。そのあとは、ずっと姉さんに頼りつ放しだった。あんたは姉さんに面倒を掛けるだけで、何にもしてないじゃないか！？」

「なんてことを言うの、尚樹さん！ 誰がお腹を痛めて産んであげたと思ってるの？ この私ですよ！」

「産んだだけで母親面はやめてくれ！ 慎也のときに言ってたのを聞いたんだ。胸の形が崩れるから母乳は飲まさないって。有名私立のときには授業参観も来たくせに、公立に移ったらまるで無視じゃないか？ 慎也の入学式だって」

「だから公立など反対だったのです。まったく、庶民と同じ学校に通うようになって、悪い言葉ばかり覚えてきて……」

「それもこれも、全部あんたの」

「もう、止めてっ!」

母と尚樹の喧嘩を大声で止めたのは愛実だった。

第79話 敗残

「尚樹もやめて……お願いだから……慎也が怖がってるじゃない」

愛実は一サーモンピンクのワンピース姿だった。

迎えが来るまでの数時間、家族でゆっくり過ごすはずが……。尚樹が花婿交代を知ったせいで、大騒ぎになってしまった。なるべく式場まで気付かないでいてくれたら、そんなふうに願っていたのに。真美は何も言わないが、それでも気持ちは尚樹と同じらしい。

彼らも、藤臣の隠し子騒動は耳にしており、それが原因でトラブルになったことは察しているようだ。だが、簡単には納得できないのだろう。それほどまでに、弟妹は三人とも藤臣に懐いていた。

「なんだよ、それ。姉さんも思ってるのか？ 同じ美馬の男と結婚するんだから、大して違いはないって。和威さんがどんな人か知らないけど……そんな簡単に結婚相手を替えられるものなのか！？ どうして美馬さんじゃ駄目なんだよ！ あの人には心から姉さんを愛してるって言ってたのに……」

次の瞬間、愛実は一ソファを倒すような勢いで立ち上がっていた。

「じゃあ、お父さんが残した借金をどうにかしてくれるの！？ 借金ばかり増やして、働こうとしないお母さんも。おばあさまの入院費やあなたたちの学費、生活費。どうしたらよかったのか教えて！ こんな結婚なんて……わたしで迷惑は掛けられないのよっ！」

弟たちにこんなことを言うつもりではなかった。ずっと独りの胸に抱え、我慢し続けるつもりでいたのだ。だが、思いがけず尚樹に

責められ、愛実は一瞬、心臓が切れてしまふ。

「これ以上……姉さんにどうしろって言うの？　できるなら逃げ出したいけど、親戚の伯父さんや伯母さんまで巻き込めない……。何もできないくせに、文句ばかり言わないで！」

溢れる涙で尚樹たちの顔が見えなくなった。

そして尚樹も、拳を握り締め泣いていた。奥歯を噛み締め、必死で嗚咽を堪えている。真美は愛実を抱きつく。「ごめんね……お姉ちゃん」涙声でそう呟いた。慎也も、事情が判らないまま、青褪めた顔で今にも泣き出しそうだ。

「僕が……僕と姉さんの歳が反対だったら……」

尚樹はそう言ったまま、今度は唇を噛み締める。

「ごめん……ごめんね。結婚式だからちよつとナーバスなってるの。大きな声出しちゃってごめんね」

愛実はそう言って尚樹の腕を引き寄せた。

何も出来ない、年端もいかない子供なのは、彼らのせいではないのだ。長女の愛実が頑張るのは当然のこと。ここに至るまで、様々な決断をしたのは彼女自身であった。

「和威さんも優しい人だから。きっと、皆も好きになれると思うわ」「でも、お姉ちゃんが好きなのは美馬さんでしょう？　美馬さんはどうするの？」

「藤臣さんは娘さんを守らないといけないの。まだ、慎也と変わらない歳だし……お母さんと弟さんと三人でとても大変そうだから」

それでも真美は不安そうな顔で、

「美馬さんは娘さんのお母さんと結婚するの？　お姉ちゃんのことはどうでもよくなったってこと？」

「違うわ。藤臣さんが誰と結婚するか判らないけど……姉さんがど

うでもよくなつたわけじゃない。親が子供を守るのは当然だもの。子供のことを一番に考える彼が好きよ」

「だったら待つべきだ！」

そう叫んだのは尚樹だった。

「姉さん、僕らはここを出るよ。何度も言っけど、母さんのことは無視していいんだ。親戚連中だって、金に目がくらんで……自業自得じゃないか！ いざとなったら公的施設もある。僕だって中学を出たら働いて」

「あなたはそれでいいかも知れない。じゃ、真美と慎也はどうなるの？ 家族みんなバラバラになるのよ。それに、おばあさまも。お金が払えなくなったら、病院は追い出されるわ」

「そんなの母さんの責任じゃないか！」

「責任がなければ、どうなってもいいの？ 違うでしょう？ 大切に思うから守りたいの。手を差し伸べたいって思うのよ。人の心は義務や責任だけでは動かないわ」

愛実深く息を吸う。

「心配を掛けて、振り回してごめんなさい。すべて姉さんが自分で決めたことだから。覚悟はとうに決まっていたはずなのに、藤臣さんが優しくすぎて忘れていたのよ。でも、もう平気」

弟妹をみつめて愛実は優しく微笑んだ。

「当たり前ですよ。今さらそんな……破談にでもなれば」

入り口に立ち、母はブツブツ言っている。そんな母にも愛実はキツパリと宣言した。

「結婚したら十八歳でもわたしは成人と同等の資格を持ちます。西園寺家の資産はすべてわたしが管理して、お母さん名義ではどんな借金もできないようにしますから。文句があれば、独りでこの家から出て行ってください！」

「なっ！」

絶句する母を真正面から見据える愛実であつた。

く　　く　　く　　く　　く　　く

瀬崎はしばらくの間、玄関前に立ち尽くしていた。為す術を失い、途方に暮れている様子が傍目にもはっきりと判る。

そんな彼に大川暁が近づいた。

「勝負あつた、かな？　弥生ばあさんには誰も敵わないってところか」

「勝者のいない、馬鹿げた勝負です」

瀬崎は吐き捨てるように言う。

その言葉の意味が暁も痛いほど判つた。

どこまで相手を痛めつけても、弥生が満たされることはないだろう。周囲の者を言いなりにさせ、結局、何一つ思いどおりにならなかったと言いつけて死ぬのだ。一志がそうであつたように。

「それでいて、敗者はちゃんといふんだ。妙な話だな」

「暁さんは、この件はご存知なかつたんですね」

「俺がそれほど悪党に見えるかい？」

軽口を叩く暁に瀬崎は小さく首を振つた。

「結婚式には出席されないのですか？」

「出席予定だけどね。さて、どうなるか。瀬崎くんはどうするつもりなんだ？　藤臣くんを探す気か？」

「もちろんです。心当たりを回ってみます」

瀬崎は暁に頭を下げ、自分の車に乗り込み走り去つた。

藤臣は昨夜から姿を消している。

（さて、どこに隠れたか……）

暁は初めて会った頃の藤臣を思い出す。傷だらけの少年は、近寄るすべての人間に怯え、威嚇して回っていた。

当時の暁は、父が何を考えて再婚したのかさっぱり判らなかった。いや、父が再婚するかも知れない、ということは聞いていた。父には十年來の交際相手がいたからだ。今の暁と同じ年の頃に妻を亡くし、それ以降、ずっと付き合っていた女性。ひとり息子が成人してから再婚するのだらうと、暁は単純に考えていた。

ところが、蓋を開けてみたら結婚相手は全くの別人。それも出戻りとはいえ、美馬家の社長令嬢というのに驚きである。

父は家屋敷を売り払い、なんと美馬姓を名乗って美馬の屋敷で生活をはじめたのだ。暁は迷ったが、大学卒業まで世話になることに決める。自分たちとは違う上流階級の暮らしを垣間見たい、そんな浮かれた気分もあった。

（思えば……馬鹿なことを考えたもんだ）

父がどんな気持ちで思い出の詰まった家売り払い、十年も付き合い合った女性と別れたのか、彼は何も知らなかった。そんな自分を思い出し、暁は苦笑いを浮かべながら敷地内の林を抜ける。

彼の目の前に、白い外壁に塗装が済んだばかりの洋館が姿を見せた。まだガラスの入っていない箇所もある。だが、内装工事はだいぶ進んでいた。

吹き抜けの玄関に立ち、暁はぐるりと見回した。

（随分、変わったな）

この洋館は暁にとつても思い出の場所だ。

今でこそセックスを楽しむようになった朋美も、大学卒業間近の暁に初めて抱かれたとき、まだ十七歳。暁が美馬邸を追い出されるまで、二人は古い洋館の一部屋で夢中になつて抱き合つた。

愛実のように、？愛し合う二人に乗り越えられないものなどない？そう信じていた時期が、暁や朋美にも確かにあつた。

廊下をまっすぐ進み、中庭を通り抜け、暁は両開きの扉を押し開ける。

「やつぱりここか。逃げ場所は相変わらずだな、藤臣」

第80話 因果

藤臣は床に座り込んでいた。フランス窓に背中をもたれ掛け、ジツと中空を見つめている。

愛実を連れて来たときより、内装工事はだいぶ進んでいた。今日は結婚式で家人の多くが不在になるため、工事の業者に休みを取らせたのだ。だが、明日には再び業者がやって来る。

愛実との思い出に浸るのは、そこが限界だった。

「やあ、暁さん、ごきげんよう。安酒しかありませんが、いかがですか？」

藤臣は国産のウイスキーボトルを抱え、暁に振って見せた。

「こんなところでヤケ酒かい？ 様は無いな」

いつもどおり愉快そうな口調だが、実際は藤臣を責めているようだ。

「君の秘書は必死だったよ。あの鬼婆と果敢に遣り合ってた。見かけより、肝の据わった男らしいな」

「瀬崎の身の振り方は考えてあるんだが……どうやら、本社に戻らず走り回っているようですネ」

藤臣の近くには数本の空ボトルが転がっている。

それを適当に蹴散らしながら、暁は藤臣に近づいた。

「その顔を見ると、秘書くんが血相変えて走り回っている理由は知っている、ってとこかな」

暁はニヤリと笑った。

瀬崎が自分を嵌めるとは思えない。

だが、藤臣を蹴落としたい人間は嫌というほどいる。そのため、

瀬崎に内緒で別の会社に再鑑定を依頼したのだ。しかし、現存のデータは信用できない。新たにDNAサンプルを採取する必要がある、それにはさすがに藤臣も手間取った。

その再鑑定結果を受け取ったのが昨夜。
勝敗はすでに決した後であつた。

「弥生婆さんも、また随分とえげつないやり方をしたもんだ。まあ、鬼婆のすることだからな。どうせお前さんも、最初から信用してなかつたんだろ？」

暁の質問に藤臣は答えなかった。

絵美が実子であるとは思えない。さりとて鑑定結果を“直感”で無視することはできず……。

弥生はそこも計算していたのだろう。藤臣がわずかでも可能性があれば、我が子を見捨てることはない、と。

「丸一日あつたんだ。逆にマスコミ使つて、鬼婆のやり口を暴露してやれば良かったんじゃないのか？ 向こうも必死になつて潰しに来るだろうが、正面から遣り合えば、この屋敷から追い出すことだって」

「もう止めよう、暁さん。美馬を潰す手駒に、これ以上俺を利用しないでくれ」

「人聞きの悪いことを……」

酔っているとは思えない藤臣の冷静な声に、暁は言葉を失う。

「ああ、判っている。俺が勝手にやってきたことだ。復讐心を燃やして、美馬の全部を手に入れようとした。暁さんはそれぞれに手を貸し、味方だと思わせて、少しずつ奴らの力を削つたんだ。結果的に俺が美馬を潰すと知っていたからだろう？」

藤臣の養父母、佐和子と弘明の結婚は一志が強制したものだ。弘明の前妻 暁の母は癌を患い、何度も手術と再発を繰り返し、若くして亡くなった。そのしばらく後からである。弘明が一志の腹心となり、目覚しい働きをするようになったのは。それは情け容赦ないもので、かつての弘明を知る者から『彼は妻と一緒に良心を埋葬した』といわれたほどだ。

藤臣はその評判を信じ、金と地位を得る為に佐和子と結婚した男と思ひ込んでいた。

「弘明さんは、関連会社の経理部にいた。そして妻の治療費を捻出するため、会社の金に手をつけたんだ」

藤臣がそう言った瞬間、暁の顔色が変わった。

これまでのような半分ふざけた口調が消え、暁は真つ青になり叫んだ。

「二十五年以上前のことだ！ 時効は過ぎてるし、全額完済してるのに……あの男は、俺の将来を引き合いに出して、父さんを縛り付けたんだ！」

弘明は妻を亡くした後、上司に横領の事実を申し出た。金は何年掛かっても返済する、一人息子の為に自分が服役するわけにはいかない。どうか、警察に被害届を出すのは許して欲しい、と願ひ出る。一志はそんな弘明を拾い上げた。吸収合併とは名ばかりの会社乗っ取りや暴力団紛いの地上げ。バブルがはじけた後は、リストラ担当として容赦なくクビを切らせた。

『逆らうなら警察に被害届を出す。お前の息子は犯罪者の子供と呼ばれるんだ』

それは全額完済しても同じだった。公訴時効が過ぎた後も、服役は免れても罪は消えない、そう言つて一志は弘明に人が嫌がる仕事

を押し付けた。

その最大のものが、佐和子との結婚だろう。

「ちょうどあの頃、父さんは覚悟を決めて、付き合っていた女性と結婚する気だった。相手も三十代半ばになっていたそうで、妊娠したって聞いてね」

暁には異母妹が二人いる。十四歳と十一歳の少女だ。

弘明は子供たちの母親・市橋みさきと別れないことを条件に、一志の命令に応じたという。その点でも、藤臣は弘明を誤解していた。彼が好色な男だから、愛人としてみさきを確保しておきたいのだ、と。

そうでない、と知ったとき、藤臣はいかに自分が一志に毒されていたかを思い知る。

この世の中には人を利用する悪党と、利用される愚か者の二種類しか存在しないと、本気で思っていた。

「市橋さんでしたね。彼女は一人で子供を産んで育てると言い姿を消した。弘明さんは同じ苦労するなら、と手元に呼び戻したんだ。二人は愛し合っていたから、苦しくても寄り添って生きる道を選んだ」

「それもこれもあのクソ爺のせいだ！ 父さんの気持ちを知って、俺だけじゃなく、みさきさんまで取り引き材料にしたんだぞ。それだけじゃない、俺が朋美と関係したときだって」

一志は、暁と朋美の結婚を認めると言い、暁に条件を出した。

暁は承諾しアメリカに渡ったのだ。彼がすべてをクリアして意気揚々と帰国した時、朋美は別の男の妻となり、暁には違う花嫁が用意されていた。

そして、父・弘明を縛った鎖で今度は暁を繋いだ。

「そもその原因は、父さんが罪を犯したせいだと言っただろうなだが、最長でも十年の懲役刑に、もう二十五年も服役してるんだぞ！ 美馬という檻に入れられたまま、今度はあの鬼婆だ！ もし信一郎が跡を継げば、きっと父も俺も終身刑になる。その前に藤臣、何としてもお前に継いで貰いたかった。この家を潰すために」

藤臣は暁の中に自分自身を見ていた。

だが、暁は藤臣とは違う。彼は若いうちに朋美と出逢い、二人は不器用ながらも愛し合ってきたのだ。それがたとえ、一志に対する腹いせだとしても。

「だったらもう止めましょう。美馬一志は死んだんだ。長く繋がれていたから、気づかないだけです。もう、弘明さんや暁さんを繋ぐ鎖はどこにもない。弥生婆さんが欲しいのはこの屋敷だけだ。あの人も結局、憎しみに縛られ、この家で終身刑を送っただけの人間ですよ」

「そうしてすべてを和威に押し付けて、自分は綺麗に退場かい？」
暁は余裕を取り戻したのか、口元に笑みを浮かべた。

だが、一志に対する怒りはそう簡単には鎮まらないようだ。彼は藤臣からウィスキーボトルを奪い取り、封を切ると直接口を付けて飲み始める。

「恭子のことは氷山の一角なんだ。俺は……悪事を働き過ぎた。どうせ一志と一緒に地獄に堕ちるんだから、ってね。俺も弥生婆さんと変わらない。自分で終身刑を選んだ愚か者だ」

藤臣はグラスにウィスキーを注ぎ込み、口に運んだ。

「和威なら……愛実がついていればきっと、この家を牢獄から家庭に変えてくれる。俺は、愛実に相応しくない。いつ、後ろから刺されるか判らないような男は……」

そこまで言うとは藤臣は立ち上がった。

いくら飲んでも頭の中は冴えたままだが、体はそうでもないらしい。ふらつく足でどうにか真っ直ぐ立ち、暁の胸倉を掴んだ。

暁が手にしたウィスキーボトルが床に落ち、派手な音を立てて割れる。その芳醇な香りは皮膚に浸透し、飲むより早く酔いが回りそうだった。

「暁さんは、二十歳の頃から朋美に本気だったんだろう!? だったら、グズグズしてないで攫って来い!」

「ならお前も行けよ! 酔ってくだを巻いてる暇があるんなら、式場から花嫁を掻っ攫って来たらどうなんだ!？」

「もう遅い。……もっと早く愛実に逢って、まともな生き方をしたかった。俺の人生でただ一つの善行は、愛実を抱かなかったことだ」

いつそ抱えていたら、愛実のすべてを自分のものにしていたら未来は変わっていたかも知れない。

藤臣は少しだけ、たった一つの善行を悔いた。

第81話 希望

ふと気づけば、部屋の中に暁はいなかった。裏庭は夜の闇に包まれ、美馬邸そのものが死んだように眠って見える。

藤臣は頭を振りつつ起き上がった。睡眠不足と酔いで、気を失うように眠っていたらしい。時計を見るとすでに十二時を回っている。深夜というにふさわしい時間であった。

（式も披露宴も終わった、か。二人は今ごろ……）

あられもない愛実の姿を想像して、藤臣は再びボトルに手を伸ばした。

しかし、周囲に酒らしきものは一切ない。どうやら、酔って倒れこんだ彼を見かねて、暁が始末して行ったようだ。

「つたく、余計なことをしやがって！」

奥歯を噛み締め、藤臣はひとりごちた。

今日くらい、正体不明になるまで酔わなくてはやってられない。

何度も……何度も結婚式をぶち壊しに行こうかと考えた。

だが、壊してどうなるのだろう？

戸惑いながらも藤臣は“我が子”を選んだ。実際のところ、血の繋がった娘ではなかった、というのは結果論である。全部は選べないと言われた時、藤臣は何をおいても愛実の手を取ることが出来なかった。

そして愛実も……。

家族を放り出し、藤臣を信じて待つとは言ってはくれなかったのだ。

（違った……俺が都合のいいことしか言わず、綺麗な言葉だけで、愛実をごまかそうとしたからだ）

すべてを告げて待つて欲しいと言えば、愛実なら信じて許してくれただろう。なのに、隠そうとした。絵美が実子である可能性を隠し、嘘の上に嘘を塗り、どんどん真実を見えなくしたのだ。愛実が混乱して自ら答えを出しても仕方ない。

拳句の果てに逃げ出した。

暁の言ったとおり、絵美が実子でないと知ったとき、戦う意思があれば打てる手はあったのかも知れない。だが、パンドラの箱を開けてしまった藤臣の中に、残っていたのは“希望”ではなく“絶望”だった。

価値のないものを追い続け、意味のない人生を送って来た。三十年間積み上げた恨みは汚泥となり、藤臣の中に蓄積している。それらすべてを洗い流し、人生をやり直そうという気力など、どこを探しても残ってはいなかった。

それでも、明日には立ち上がらなければならない。

せめて表向きだけでも。愛実と和威に祝いの言葉を伝え、何も気にしていない素振りをしなければ。恭子一家の今後も考える責任が藤臣にはある。弥生は情け容赦なく、十歳の少女をも巻き込んだ。絵美自身が大人になり、母親の嘘を理解できるようになるまで、藤臣は父親の役を降りるつもりはなかった。

過去は消せなくても、未来までも土足で汚しながら生きて行く必要はない。今は無理でも、せめていつか……。愛実が困ったときに、今度こそ支えられるような男になりたい。

（でも今夜は……今夜だけはカンベンしてくれ）

藤臣は立ち上がると寝室を出た。中庭の廊下を通り抜け、リビン

グに足を踏み入れる。

サイドボードに随分昔から置かれたままのアルコールが残っていたはずだ。この際、ブランデーでもワインでもいい。とりあえず酔っ払って、自分の無様さ、不甲斐なさを忘れたかった。

カタン……。

物音が玄関のほうから聞こえた気がした。

この洋館は母屋から離れている。正門より裏門に近いが、警備システムから考えて、泥棒が入り込める場所ではなかった。ましてや改装中の館に貴重品が置かれているはずがないだろう。

（糸井か？ それとも、暁さんが戻って来たのか？）

藤臣はリビングから玄関に向かう廊下を進んだ。

螺旋階段の向こう、吹き抜けのエントランスホールに白い影が浮かぶ。彼は目を細めながらゆっくりと近づいた。

ドーム状のガラス屋根から月の光が射し込み、ホールの中央に立つ、たったひとりに降り注ぐ。だが、白く見えたのは月光のせいだけではなかった。彼女は純白のウェディングドレスを着て、佇んでいるのだ。

決してそこにいるはずのない女性。

藤臣はそれが幻でも構わないと思った。おそらく、自分で思うより酔っているのだろう。幻覚か……それとも夢の中か。

ほとんど工事の終わった螺旋階段にもたれ掛かり、彼は一言口にする。

「とても綺麗だ……愛実……愛してるよ」

藤臣自身が選び、彼のために着てくれるはずだったドレスに、愛

実は身を包んでいた。その例えようもなく楚々として愛らしい姿に胸が沸き立つ。

何としても手に入れるため、もう少し頑張るべきだったのかも知れない。和威を蹴落とし、弥生と刺し違えてでも。だがもう……遅い。

明日の朝、立ち上がるだけで精一杯だ。弥生や他の誰かと戦う力が、今の藤臣にはどこを探しても見つからなかった。愛実を守ることは、もう……。

諦め、目を閉じた瞬間、甘く優しい声が耳に響いた。

「わたしも……愛しています、藤臣さん」

くくくくくくくくくく

時間は九時間近く巻き戻る。

結婚式は丁国ホテルのチャペルで行われる予定だった。正午に挙式、十三時から披露宴の予定が、花婿の変更でドタバタになってしまい……。挙式の準備が整ったのが、十六時近くになってしまう。

弥生が言っていたように、簡単に右から左に移せるものではないのだ、と愛実はため息をついた。

いや、正確に言えば弥生は命じるだけだ。彼女にとっては簡単なことに違いない。

そんな中、前日に確認したはずのウェディングドレスに問題が起こったのである。

ブライス・サロン

愛実が花嫁控え室に入り、身支度を整えようとした時、それは発覚した。用意されていたのは、藤臣が選んだドレスだったのだ。

（和威さんと結婚するのに、藤臣さんの選んだドレスなんて……）

担当者はほんの二時間前、ドレスを元に戻して欲しいと美馬家の人間から連絡が入ったという。再度変更となれば、また二時間ほど待つていただくことになる、と。

もうすでに何時間もお客様を待たせている。これ以上、時間を取ることは出来なかった。

式の参列者はだいぶ少なくなったという。理由は判らないが、もうどうでもいい、と思う自分がいることに愛実は何とも思わなくなっていた。

花嫁付添い人と言われる担当者が、愛実をチャペルの前まで案内してくれた。普段なら笑顔で言えるはずの礼も口に出て来ない。それは花嫁の緊張とは少し違うものであった。

和威はすでに扉の前で立っている。だがその顔は、とても人生最良の日を迎えた花婿のものとは思えず……。その時、柱の鏡に映る花嫁の顔に愛実はゾツとしたのである。

彼女は和威と同じ顔色だった。

（どうしてこのドレスなの？ どうして今、これを着なくちゃならないの？）

愛実は浮かび上がる涙を必死で堪える。

自分で決めたことだ。他に手段はなかったのだから。そう思っ
て落ち着こうとした。ところが。

（本当に？ 本当になかったの？）

愛実の中に潜む何かが、心の不安を煽り立てる。

愛だけでは乗り越えられない。そのことを愛実が学んだはずなのだ。

（そうして六十年後も恨み続けるの？ 弥生さまのように）

弥生の姿が自分に重なり、愛実が全身が震えた。

この先の人生、辛いこと・苦しいこと・悲しいことがあるたびに、すべて弥生と美馬家のせいにし続けるのだろうか？ と。

愛実の目の前に、金色の装飾を施された豪華な扉があった。

藤臣との結婚式では弘明が愛実の父親代わりとなり、バージンロードを歩いてくれる予定だった。しかし、和威とは最初から二人で入場することになったのだ。二人で腕を組み、新しい人生を始める証に。

だが、いつまで経っても、和威は愛実と腕を組もうとしない。

式場の担当者が額に汗を浮かべつつ和威にソツと耳打ちするが：

…。彼は唇を噛み締め、扉を睨んだまま微動だにしないのだ。

辺りに、メンデルスゾーンの結婚行進曲が鳴り響いた。ゆっくりと扉が開く。

次の瞬間、和威の唇が切れ、白いフロックコートの襟に赤い血が滴り落ちる。

第82話 反抗

「和威さんっ！ 何をなさってるんですか？」

血の色にハツとして愛実は声を上げた。

ハンカチを探す、ウェディングドレス姿で持っているはずがない。花嫁付添い人の女性が慌ててハンカチを差し出し……。

そのとき、和威の頬に涙が伝った。

「和威……さん？」

「……助けて……くれ。本当は判っているんだ。でも……逃げられない……」

ウェディングマーチが鳴り響く中、愛実と周囲の人間にだけ聞こえる声で和威は呟く。

「おばあ様のやっていることは、人の心を踏み躪る行為だと。不幸の連鎖だと判っていて……僕には断ち切る勇気がない」

和威は両手を組んでいた。まるで神に祈るように。その爪先は肌に食い込み、力を入れ過ぎて白くなっている。

そして彼の声は、水に溺れながら、懸命に助けを求める叫びに聞こえたのだ。

出入り口に程近い辺りから、ガヤガヤとざわめきが広がる。声は聞こえないまでも、和威の異変を察した数人の列席者が騒ぎ始めたようだ。

係員も相手が一般の客であれば、テキパキと判断して動いたのかも知れない。だが、今回の挙式披露宴に関して美馬家に振り回されっ放しの彼らである。それでも状況を考え、花嫁には充分に気を使

っていた。その分、花婿の挙動にまでは注意がいかかったとしても仕方がないだろう。

全く歩き出す気配のない新郎新婦に、音楽の担当者も気づいたらしい。ウェディングマーチがピタリと止まり、ざわめきが一層大きくなった。

「和威さん！ あなたはいったい何をしているのです。これ以上恥を掻かすようなら、わたくしにも考えがありますよ！」

杖をつき、バージンロードを逆に歩いてきたのは弥生である。

関係者は困ったような顔をしているが、彼女に意見する者など、この場に居ようはずがない。

そんな弥生を恨めしそうに睨み、和威は精一杯の抵抗を見せた。

「おばあ様が藤臣さんを罫にはめたんだ。藤臣さんの子供じゃないのを承知で、東さんまで騙して……。この隠し子騒動を仕組んだのは、おばあ様なんだ！」

愛実の胸を様々な思いがよぎる。

もし、和威の言うことが真実なら、藤臣はどれほど落ち込んでいるだろう。やっと無条件に愛情を注げる対象を見つけたというのに、それが偽りだと知れば……。

手にした白バラとカサブランカのブーケを愛実は力一杯握り締める。

一方で、弥生は周囲の好奇に満ちた視線を跳ね返すかのように、平然と口を開いた。

「それがどうしたと言うのです？ 種を撒いたのは藤臣さんではありませんか。わたくしは何も強制しておりませんよ。逃げ出した藤

臣さんに代わり、和威さんとの結婚を提案いたしました。喜んで応じたのは愛実さんなのですから」

愛実是否定したかった。だが……弥生の言葉は足りないだけで間違っではないのだ。

和威も顔を背けただけで、一言も言い返せない。そんな彼を追いつめるように、弥生は言葉を足した。

「嫌なら構いません。わたくしの孫は他にもおります。愛実さんには信一郎さんか宏志さんを選んで頂きましょう」

「そ、そんなわたしは……」

愛実は上手く言葉が出ない。

「あらあら、ご親戚になると思って、色々業務提携が済んでおりますのに。でも、愛実さんがお嫌なら仕方ありませんね。貸し付けた資金の返済方法は、お身内の方と話し合ってくださいな」

弥生の背後で母方の親戚が青ざめるのが見える。愛実の母も同様だ。

「ああ、契約破棄の慰謝料は、和威さんが婚約を破棄した慰謝料と相殺でよろしいでしょう。わたくしも鬼ではありませんからね」

弥生は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、愛実の横を通り過ぎようとする。弥生を支える加奈子も同様だ。一度は諦めたものの、我が息子たちに勝機が出てきたことを知り、喜びに頬が緩んでいる。

「待ってください 判りました。このまま結婚式を続行してください。我がままを言って申し訳ありませんでした」

それは和威だった。

機械的な声で謝罪し、結婚式を続けたいという。それが本心でないのは誰の目にも明らかである。

和威は知っているのだ。藤臣が瀬崎が話したのだろう。信一郎が愛実にしよとしたことを。宏志の破廉恥な行為も聞いたのかも知れない。

だが『助けてくれ』と言った和威の横顔が、愛実の瞳に焼きついて消えない。

そして……愛実は感じ続けた疑問を、弥生にぶつけたのである。

「弥生さま……わたしは藤臣さんに言いました。『おじい様たちの愛情をお金に替えて、踏み躪るような真似は出来ない。お金で心は売れない』と」

愛実がその思いを違えたことは一度もない。

藤臣が好きだから、結婚を承諾した。彼が望むなら、役に立ちたいと願ったのだ。お金で売り渡した心ではない。援助を受けたのは事実だが、それだけは決して違う。

婚約破棄を決めたのも、愛実と絵美の間で苦しむ藤臣を見たくなかったからだ。藤臣は決して子供を見捨てない。もし、愛人であった長瀬久美子が子供を産むことを選んでいたら……我が子でないと判った後も、彼は子供のために久美子を助けただろう。

そんな藤臣だから愛した。

そして、

「和威さんは……わたしが夫として愛せるようになるまで待つと言っ
て下さいました。そしてわたしの為に頑張る、そう仰ったんです」
和威の気持ちに応えたいと思った。

身を焦がすような激しい愛情だけでなく、世の中には、穏やかな
想いで結ばれた夫婦もいる。今は無理でもいつかは。

だがそれは、和威の本心ではなかったのだ。

愛実を思う気持ちに偽りはないのだろう。だが、こんな形で愛実
を手に入れ、美馬家と共に全てを背負って立つなど、和威は考えて
もいなかった。

「弥生さまは、誰のために、何のために、わたしを相続人になさったのですか？ 祖父に対する想いが本物だったと仰るのなら、わたしやお孫さんたちを駒のように扱うのはやめて下さい。どんな業務提携を結び、借用証を交わしたのは知りませんが……わたしとは関係なく、正当な取引をして下さい」

愛実の毅然とした態度に弥生は繭を顰めた。

長い年月、彼女に真っ向から逆らう人間などいなかったに違いない。

「人聞きの悪いことを言わないでちょうだい。取引は正当なものですよ。弁護士に任せたのですからね。わたくしはあなた方一家を助けようとしただけです。感謝されこそすれ……」

「本当にそう思っているのでしょうか？」

「……どういう意味です？」

弥生は目を細め愛実に聞き直す。

「だったらどうして、実の孫である和威さんの心を平気で傷つけるんですか？ どうして、こんなに苦しそうな和威さんを見て、笑っていられるんです？ 本当に、少しでもおじい様のことを想ってくれたなら……これ以上、誰かの心を踏み躪らないで下さい！」

和威を助けたいと思った。

愛実が初めて美馬邸を訪れたとき、緊張する彼女に朴訥でも誠実に話しかけ、笑わせようとしてくれた優しい人なのだ。愛実と藤臣の関係を誤解し、不実な藤臣を責めてくれたのも和威だった。

だが、鋼の神経をした弥生に愛実の願いなど届くはずもなく……。

弥生は鼻で笑うと、

「お話になりませんね。親のいない和威さんや藤臣さんに十分な物を与え、教育を受けさせてやったのはわたくしですよ。後継者にし

ようというのに、何が不満なのか。あなたもそうですよ」

その目は冷たく、愛実の心臓を凍りつかせるように鈍く光る。

次の瞬間、愛実の母が飛び出してきて娘の頬を打った。

派手な音がチャペルに響き　「も、申し訳ありません。娘には私から」母は信じられないほど頭を下げ、愛実にも詫びるように言う。

「嫌です！　わたしは間違ったことは言ってます。愛情も幸せも、お金や権力じゃ絶対に買えない！　そのことは、弥生さまが一番ご存知じゃないですか！？　違うと仰るなら、弥生さまが祖父を愛していたというのは嘘です。わたしたちを助けようとした、という言葉も。誰かのためじゃなく、それは　」

「お黙りなさい！！」

弥生は目を剥き、怒りに任せて杖を振り上げた！

第83話 助勢

愛実と弥生の間に割って入ったのは和威だった。

「もう、やめて下さい。おばあ様、両親に捨てられた僕を面倒みてくれてありがとうございます。僕も美馬を出ます。愛実さん、藤臣さんのところに行こう！」

和威から手を差し伸べられ、愛実は迷った。藤臣の手を放すと決めたのは彼女自身だ。いまさら……そんな思いが胸を塞ぐ。

追い討ちをかけるように母は愛実の腕にしがみつき、泣き言を口にした。

「愛実さん！ まさか、母さんたちを見捨てて行ったりしないわよね？ こうなったのは全てあなたのせいなのよ。あなたが結婚するなんて言い出したから……」

「いい加減にしろよ！ 誰でもいいから美馬の人間と結婚しろって言っただんじやないか！？ 姉さんは美馬さんが……藤臣さんが好きだったんだ。それなのに」

弟の尚樹が母を抑え、悔しそうな声を上げた。

「お姉ちゃん、あたしたちアパート暮らしでいいよ。中学卒業したら働くし、カップラーメンだって慎也と半分こでいい。だから、嫌な人と結婚したりしないで！」

真美も必死になって叫ぶ。

愛実はブーケを床に置くと、走りやすいようにドレスの裾をたくし上げ、弟たちに答えた。

「もう一度、藤臣さんに頼んでくるわ。『わたしたちを助けて下さい』って」

違うホテルのチャペルで藤臣は言ってくれた。

助けてくれる人間は、私には一人もいなかったからね。だから、君を助けない。

婚約発表のときも、

彼女なら赤貧にも耐えてくれるでしょう。私も後顧の憂いなく仕事に心血が注ぎますよ。

大勢の前で愛実を庇ってくれたのだ。

絵美が実子でなく、恭子とやり直すことを考えずに済むなら……。

いまさら、と藤臣に言われたとしても、愛実から放した手なら、自分から追いかけて行かなくては。その思いが愛実に勇気をくれた。

「無駄ですよ。最早あの男に、僅かな力も残っているものですか。和威さんも、愚か者の真似がしたいと言うのですね。情けないこと」
振り上げた杖を和威に押さえられ、仕方なしに下ろしたものの……
弥生の形相は鬼のように歪んでいる。弥生は憎しみを露わにし、愛実に侮蔑の眼差しを向けた。だが、強気な言葉とは裏腹に、皺だらけの手はふるふると震える。

「力があってもなくても、わたしは藤臣さんが好きです。お母さん、ごめんなさい。尚樹、皆をお願いっ！」

愛実は勢いをつけて頭を下げ 駆け出した。

くくくくくくく

せめてドレスを脱いでからという愛実を、和威は引き止めた。

「色々うるさい連中に捕まったら逃げ出せなくなる。とりあえず、このホテルを出てから考えよう」

確かに、親戚たちに泣きつかれたら、それでも振り切れるかどうか判らない。愛実は頷き、和威に付いて行くことにした。

十分後、二人はまだホテルの中にいた。ホテルの入り口付近にマスコミが集中しており、出るに出られないのだ。こういう時に機転の利く側近や秘書など、和威にいるはずもなく。

「愛実さん、僕が彼らを引き付ける。その間にタクシーでここを離れるんだ。まず、瀬崎さんに連絡を取れば……きつとどうにかしてくれると思う」

和威はそんなことを言いながら、愛実に自分の財布と携帯電話を押し付けた。

「そんな……和威さんだけ残ったら、皆さんになんて言われるか」

「藤臣さんは多分、今日明日にも東京から出て行く。ひよっとしたら、日本からいなくなるかも……。子供のことも知っているのかどうか判らない。瀬崎さんも必死で探していたから」

和威はギュツと愛実の手を握る。

「嬉しかった。僕を庇っておばあ様に歯向かってくれたのは、君だけだ。助けてくれて、ありがとう。だから、今度は僕が助けたい」

思えば、和威は一度も愛実を『愛してる』とは言わなかった。

愛実はそんなことを考えながら、

「わたし、藤臣さんを置いて逃げたりしないって約束したんです。だから、彼が何もかも失ったなら、わたしは彼の傍に行かないと……和威さん、ごめんなさい」

愛実の顔を知っている従業員が彼女をそつと裏から逃がしてくれ

た。

出たところにタクシーが待っている、と言われ外に出る。しかし、連絡が上手く取れていないのか、タクシーはどこにもいない。焦る愛実の前に一台の車が停まった。

「早く乗って」

軽四自動車を運転しているのは藤臣の秘書、奥村由佳であった。

「あの、どうして？」

「いいから、早く」

後部座席に乗り込み、ホテルから離れるまで愛実は身を隠していた。

由佳は花婿交代を聞いてすぐ、別の重役秘書を命じられたという。藤臣は自分に付いていた人間が降格や解雇されないよう、全て手配を済ませていた。おそらく事前に、自分の立場が危なくなった時のことを準備していたのだろう、と由佳は言う。

「あの、どうしてここに？ どうして、わたしを助けて下さったんですか？」

「あんなに自信満々に？理想は捨てない？後悔しない？って言うてた世間知らずのお姫様の顔を見たいと思って。どんな顔をして、金の為に他の男と結婚するのかな？ ってね」

由佳は相変わらず隙のないスーツ姿である。

「専務のことだから、今ごろ、新しい女のベッドに飛び込んでるかもよ。あのルックスならホストも出来そうよね。ま、性格的に無理だろうけど」

クスクス笑いながら由佳は愛実をからかっているようだ。

愛実は不安を抱きながらも、

「もう二度と、そんないい加減なことはしないと約束してくれまして！ だから、わたしは信じます」

ドレスを握り締め、自分に言い聞かせるよう語気を強めたのだっ

た。

「ここも駄目ね」

まず着替えようと愛実の実家に戻ったのだが、結婚式の中止が知れ渡ったのか、マスコミに囲まれていた。車に乗ったまま、遠巻きに見ただけで二人はその場を離れる。意表をつく形で美馬邸に返ろうとしたが、やはりそう甘くはないようだ。

時間はどんどん過ぎて行き、渋滞に巻き込まれ思いどおりに進まなくなる。

愛実を車に乗せたまま本社ビル近くの駐車場に停め、由佳は瀬崎を探しに行ったのだった。

まさか、一度近づき離れた美馬邸に藤臣がいるとは思わずもな
く……。

薄暗い駐車場、ルームミラーに映る愛実の顔は疲れ果てて見えた。和威はどうなっただろうか。自分のせいで尚樹が親戚たちに責められてはいないか。思いも掛けず由佳に助けられここまで来たが、この先、もし藤臣に会えなかったら、どうすればいいのだろう。

和威に渡された携帯電話を握り締め、愛実は途方に暮れる。

そのとき、携帯が小さなメロディを奏でながら、小刻みに震えた。

第84話 無垢

『わたしも……愛しています、藤臣さん』

その声はあまりにも現実的で、藤臣は咄嗟に目を見開いた。
酔いと疲労に霞んだ目を二、三度瞬^{しばた}かせる。それでも消えない愛
実の姿を凝視しながら、藤臣は声押し出した。

「い……つみ？ 愛実、なのか？」

「……はい……」

「どうしてここに？ いや、和威は……結婚式はどうしたんだ？
なんでそんな姿で」

藤臣自身、何を尋ねたいのかよく判らない。
だが、一つ思い当たることが浮かんた。

「絵美のことを……聞いたんだな？」

愛実はゆっくりと頷く。

瀬崎がホテルにまで押しかけ愛実と話したのか、それとも、瀬崎
から聞いた和威が……そんなふうを考え込む藤臣に愛実から口を開
いた。

「和威さんが、すべて弥生さまの企みだったと教えて下さいました」
「それで？ 事実が判っても事態は変わらない。俺がろくでなしな
のは、今に始まったことじゃないからな」

藤臣は愛実に飛びつきそうになる気持ちを抑え、自嘲気味に言葉
を繋ぐ。

「君のこともそうだ。この屋敷を、弥生婆さんと揉めることなく手に入れようと近づいた。憎かったんだ。憎くて悔しくて、全てをこの手に納め、叩き壊してやりたかった。そんなことに巻き込むために、『愛してる』なんて君を騙した悪党なんだよ、俺は」

どちらかを諦めれば、美馬グループ内の力を失わずに済んだ。

だが、藤臣を父と信じる絵美を、突き放すことができなかった。同時に、愛実も諦めたくなかったのだ。ぎりぎりまで悩み、迷った挙句、弥生に降参して和威に後を託すことで妥協せざるを得なかった。

藤臣の迷いが愛実にも伝わり、結果的に辛い選択をさせてしまったのである。

しかも“復讐心”を手放したことで、今の藤臣はスクラップ同然だ。

なのにそんな藤臣を、愛実キラキラした瞳で見上げている。

「藤臣さん……あなたを待てなくて、ごめんなさいっ！ 愛してるから、これ以上迷惑を掛けたらダメだって思っただけ。その結果、和威さんまで苦しめることになって……」

「和威を……苦しめる？」

愛実に言われて初めて、藤臣も気がついた。

藤臣が憎むことで美馬家に囚われていたように、和威もまた、弥生に従わなければならない、その思いに縛られていたのだ。愛実に対する芽生えたばかりの恋情に、和威は自分を殺して弥生に従おうとした。だが殺しきれず……土壇場で愛実に助けを求めたという。

「でも、どうしてこの場所が？」

「暁さんが電話で教えてくれました。周りをうろついていたマスコ

「ミも、魔法を使ったみたいに追い払って……。ここまで送ってくれたのは秘書の奥村さんです」

暁が手を回したのは納得できたが、まさか由佳まで愛実の手を貸すとは思わなかった。

その一方で、瀬崎は何処に行ったのだろう。由佳が本社で瀬崎の行く先を当たったが、連絡が取れなかったという。我慢や忍耐力は藤臣の倍もあるが、要領が悪すぎる。藤臣は頭を抱えた。

「あの……藤臣さん、もう一度わたしたちを助けて下さい！ お願いします」

それは、ほんの三日前と変わらぬ無垢な眼差しだった。

藤臣はそんな愛実を見つめながら軽く首を振る。

「君は、正気か？」

「あの……」

「俺は俺は、君が和威との結婚を望むから、奴に全てを譲って手放したんだ！ もう何も残ってない。この上、どうやって君を助けると言っただっ！？」

藤臣の怒声は洋館内の空気を震撼させた。

卑怯な言い方は百も承知だ。愛実にそうしてくれと頼まれたわけじゃない。誰も……いや、弥生以外は、藤臣が実権を手放すことを望んでないなかった。それでも、憎しみと共に全てを放棄したかったのは彼自身だ。

だからこそ、藤臣にはもう、誰かを守って立ち上がるなどできない。

「和威のところまで一緒に行つてやる。君は弟妹を守りたいんだろ

う？　それが出来るのは俺じゃない。俺は……」

「じゃ、藤臣さんのことはわたしが助けます。わたしには弟たちがいるけど……でも、一生懸命頑張りますから」

「……君は、何を言ってるんだ？」

「暁さんが教えてくれたんです。藤臣さんが、わたしともっと早く逢いたかったって。でも、わたしは今で良かったと思っています。だって、そんな小さい頃にお逢いしても、藤臣さんのお嫁さんにはなれないでしょう？」

愛実は首を傾げてふわりと微笑む。

「いや、そんなことじゃなくて」

「わたし、藤臣さんのことを信じています。藤臣さんから離れなきやならない理由がなくなっただのに、離れるのはイヤです！」

「だから……俺には絵美だけじゃない。心当たりだけなら山のように」

余計なことまで口にし、藤臣は舌打ちした。愛実相手にはどうも正直になりすぎる。

その時、愛実は藤臣の近くまで駆け寄った。

そしてようやく、藤臣の目にも真実が映り始めた。純白で傷一つなかったドレスは、間近で見るとかなり汚れ、しわくちゃになっている。所々、ほつれや破れが見えて……それは愛実の表情と同じだった。

遠目には変わらぬ笑みが、近寄ると見るからに憔悴の色を纏っている。薔薇色の頬が青白く瘦け、眼の下隈も痛々しい。それはとても十八歳の少女とも、結婚式を終えた花嫁のものとも思えなかった。

「でも過去でしょう？　今も、未来も、わたしだけですよね？　一日も早く結婚して、藤臣さんの子供が欲しい。そうしたら……子供が可哀想だから、別れたくないって言えるもの」

疲れきった顔で……それでも愛実の胸を張り、藤臣を正面から見つめて笑い掛ける。

「大丈夫です！ わたし、貧乏はへっちゃらですから。高校は辞めて働きます。入院費用が足りなくなったら、おばあさまは家に引き取って、姉弟で面倒をみます！ 苦しくても、お互いに助け合ったら、きっと幸せになれると思うんです」

愛実の声が震えだし、わずかに口元が歪んだ。

「藤臣さん もう一度、愛してるって言って下さい。あの時……病院で絵美ちゃんに手を差し伸べたように。わたしにも、その手を下さい。そうしたら……藤臣さんのことはわたしが守ります」

愛実はそつと手を伸ばした。

微笑んだままの瞳から光が零れ落ちる。

ひと粒……ふた粒……光はポロポロ流れ落ち、闇に吸い込まれるように消えていく。

怖い。

藤臣はそんな思いに囚われ、条件反射のように後退し、愛実に背を向けてしまう。

一度だって、欲しいものを手に入れたことがなかった。大切なものを守れたこともない。いつも何かに怯え、半分以上諦めて生きてきた。諦めることには慣れてる。最初から求めなければいいのだ。愛実の手を取らなければいい。

あれほど激しく藤臣を突き動かした“憎悪”ですら消え果て。

何がそれを消したのか、胸に浮かび掛けたそのとき、藤臣の背中に愛実の手が触れた。一瞬で背筋を電流が走り抜け、全身が硬直する。

「わたしのせいで……ごめんなさい。和威さんは……弥生さまから離れると仰ってました。それと、信一郎さんや宏志さんとは結婚できません。あんなに大切にして頂いたのに……藤臣さんの望みどおりの愛し方ができなくてごめんなさい。迷惑ばかり掛けて……どんなに謝っても許して貰えないかも知れないけど……。幸せになつて下さい。わたしはずっと藤臣さんのこと、信じてます……。さようなら」

背中では震える吐息が……愛を湛えた温もりが……

彼の人生から離れようとした瞬間、藤臣は愛実の手を掴んだ！

第84話 無垢（後書き）

御堂です。

長々とお覧いただきありがとうございます。とうございました。残り2話となりました。

最後まで、よろしくお願いいたします。

第85話 求婚

「君のせいだ。何もかも。正しいと思ってきた全てを……愛実、君が覆していく」

「ごめんなさい……ごめんなさい、わたし」

藤臣の手にあると思い続けた復讐という名の正義も、この世で“愛”と名前が付くものは全て有償だという真実も、愛実が粉々に打ち砕いてくれた。

今、彼の手の中にあるのは、折れそうなほど細い彼女の腕だけ……。

ようやく掴んだ“愛”を彼は壊れ物を扱うように抱き寄せた。

「藤臣さん？ あの」

「俺は君のせいで全てを失った。三十年間積み上げてきた全てを投げ出したんだ。ごめんなさい、の言葉だけで済むと思うな」

「ごめんな……さ」

藤臣は愛実の声を強引に奪う。

それは祭壇の前で交わすはずだった誓いの口づけにも等しい。焦げ付くような感情が少しずつ癒されていく。もうどうなってもいい、と投げ出したはずの未来が、再び彼の前に広がり始める。

「駄目だ。許さない。何があっても君を自由になどしてやるものか！」

愛実を抱きしめ、解けかけた髪に顔を埋めて呻いた。

我ながら支離滅裂だ。まるで脅迫するような口調である。これで

は愛実を怯えさせてしまう。そんな思いが藤臣の頭を掠めた。

しかし、本当の愛など何と言って伝えたらいいのだろう。言葉にした瞬間、全てが消えてしまいそうだ。

戸惑う藤臣より先に、愛実が口を開いた。

「それって、藤臣さんの傍にいていいんですね？　よかった……嬉しい」

「う、うれしい？　それでいいのか？　俺が、怖くないのか？」

「どうして怖いんですか？　藤臣さんはこんなに優しくて温かいのに。いつだって、わたしが苦しくないように、それでいて強く抱きしめてくれたから」

藤臣は恐る恐る尋ねた。

「俺はずっと君を騙していたのに？」

胸の中で愛実は無言のまま小さく首を振る。

「愛していると嘘をついていたんだぞ」

「わたしのこと……愛してないんですか？」

「い、いや、愛してる。今はそう思う。でもあの時は……」

愛実の身体目当てだった。彼女の同意を得る為に、愛の言葉を利用し、本物の結婚にしようとしたのだ。

「あの……何か違うんですか？　“愛してる”は“愛してる”でしょっ？」

その言葉に、藤臣は気づかされた。

懸命に抵抗していたのは自分だけだった、と。心は当の昔に白旗を振っている。

「いや、違わない。ああ、判ったよ。もう降参だ。やっぱり、物分りのいい大人にはなれそうにない。君を俺の人生に引きずり込むことに決めた」

「藤臣さ……きゃっ！」

酔いも疲労も一気に藤臣の体から抜けた。

新たな五感が呼び覚まされ、全身に力が漲り始める。その勢いを借りて、愛実を抱き上げたのだ。

「その代わり　俺が守ってやる。だから、俺のものになれ」

愛実は彼にしがみ付いたまま頷く。

（善行なんぞクソ食らえだ！　十八歳だろうが、この場で抱いてやる！）

最初からそうしていればよかったのだ。自分の女にしていれば、どんな邪魔が入ったとしても、手放そうなんて考えることはなかっただろう。たとえ愛実が身を引こうとしても、鎖に繋いででも引き止めたはずだった。

捉まえた花嫁をしっかりと腕に抱き、藤臣は廊下を引き返した。寝室のドアを体当たりするように開け、天蓋つきのベッドに押し倒す。

マットレスだけで、シーツも敷かれていない。内装工事中のせいか多少の埃は感じたが、今の藤臣を止める力にはならなかった。

愛実にいたってはそんなこと気にもならないようだ。

ただ真っ直ぐに、ひたすら藤臣を見つめている。

藤臣は深呼吸すると、クイーンサイズのベッドに座りなおした。軽く前髪をかき上げ、余裕を取り戻した笑みを見せながら口を開く。

「最後のチャンスをやろう。逃げるなら今だ。　弥生婆さんに手を引かせ、普通の暮らしに戻してやる。本気になればまだそれくらいは……」

「いやっ！」

愛実のはじかれたように起き上がり、藤臣に抱きついた。

「もう離れたくない！ 離さないで……わたしを」

激しい吐息が重なり、二人はもつれ合うようにベッドに倒れ込む。

「藤臣さん……わたし、三十年掛けて、あなたに償いたい。だから

……お嫁さんにして下さい」

唇の隙間から、愛実のプロポーズが聞こえた。

藤臣は先を越されたことに苦笑しつつ、

「いや、駄目だ」

「どうして？ 十八歳だから？」

「三十年分を償うなら倍は必要だ。向こう六十年間、俺から離れることは許さない」

ウェディングドレスの背中についたファスナーを引き下ろし、唇で白い首筋をなぞりながら答える。

「……わたしは何とか……藤臣さんは六十年後も傍にいてくれますか？」

「……」

九十はさすがに厳しいかも知れない。

「ああ、背後霊になって君に近づく男を呪い殺してやる」

彼なりに真剣だったが、愛実はクスクスと笑い始めた。

「いやだ、藤臣さん。どうせなら、守護霊になって守って下さい。

でも……あなたが死んだら、わたしもなるべく早く傍に行きますね」

「来なくていい。六十年が百年でも、俺は君から離れない。 愛してる。今夜、俺の花嫁になってくれ」

純白のドレスがするりと愛実の足から外れた。白いブライダルインナーが闇の中に浮かぶ。シルクのショーツとガーターストッキングに藤臣の目は釘付けになりそうだ。

背中にびつしりと留められたホックを一個一個外しながら、

「一日中、この格好だったのか？ 苦しかっただろう」

ガーターベルトも一体型になったスリーインワンというタイプだ。男の目にはまるで拘束服のように見える。式の間だけでなく、こんな時間まで着ていたとなると、相当きつかったに違いない。

「いえ、最初のサイズより痩せたので、それほど気になりませんでした」

何でもないことのように愛実と言う。だが、細い腰がいつそう華奢になったようだ。

「二度と痩せるほど悲しませたりはしない」

「……はい……」

くくくくくくくくくく

静かなときが流れ、新しい愛が二人を包み込む。

二人きりの世界が寝室に描かれ始め……

……直後、場違いとしか言えない軽快なメロディが、洋館内に響き渡った。その音は、ぎりぎりまで張り詰めた静寂を台無しにする。

「藤臣さん、あの……携帯電話が」

「無視しよう」

「でも、和威さんに借りた電話だと思っんです。和威さんにはお財布も借りたままで。あの」

藤臣は怒りに任せて愛実から体を引き離し、玄関ホールから寝室までの廊下で携帯電話を拾った。

（何が何でも愛実を抱かせない、という呪いが掛かってるのか！？）

非科学的なことを考えながら、彼は手にした携帯に目をやる。液晶画面に浮かぶ文字は予想どおり『瀬崎』であつた。

ピッと通話ボタンを押した瞬間

『和威様！ そのまま愛実様と一緒にホテルからは一步も出ないで下さい。東部の社長である藤臣様と連絡が取れ次第、今後のことを』
『連絡が取れないのはお前だ、瀬崎。結婚式がどうなったのかも知らないのか？』

藤臣とて正確には判らない。だが、少なくとも愛実は藤臣の手に戻ってきた。瀬崎はそんなことも知らず、何処をほつき回っているのか。

『社長！？ いったい何処にいらしたんですか？』

『それはこっちのセリフだ。私じゃなくても本社に一本連絡を入れれば』

『では、ご存知なんです。私もたった今、聞きました。下手をすれば社長まで引つ張られ兼ねません。一刻も早く役員を招集して緊急会議を』

瀬崎の口ぶりから、ただならぬものを感じる。

『待て、瀬崎。和威と愛実の結婚が中止になった件じゃないのか？』
『中止！？ では、和威さんが……。いや、今はそれどころではありません。社長、現本社社長である信二様が逮捕されました！ 重役であつた信一郎様にも逮捕状が出ています！』

第86話（最終話） 愛実

あたふたと過ぎた十八歳の夏が間もなく終わりを告げる。

愛実 は鏡の中で微笑む少女を見つめ、きゅっと唇を閉じた。すると、彼女も少し深刻ぶった表情になる。だが、今日という日くらい、憂いのない笑顔を見せてもいいのではないだろうか？

そう思い直して、鏡に映る少女 愛実の頬がふわりと綻ぶ。彼女はこの日、人生で二度目の結婚式の朝を迎えたのだった。

瀬崎の、信二が逮捕されたという一報は嘘ではなかった。

容疑は有価証券取引法違反 インサイダー取引だ。起訴は間違いないという。信一郎も父親の犯罪に加担しており、藤臣らの説得で帰国、警察に出頭した。これには先代社長である一志の関与も大きく、被疑者死亡で起訴されるという。

当初、創業者一族による計画的犯罪と言われ、藤臣も疑われたのだ。しかし、彼に関する犯罪の証拠は出て来ず、立件されなかった。世間の目はそんな藤臣を、そう簡単に無罪放免とはしてくれなかったのである。

辞意を撤回し会社に残った藤臣は、世間の非難を一身に浴びる破目になった。

婚約破棄や隠し子問題、過去の女性関係、施設職員に対する性的暴行という偽りの事実まで書き立てられたのだ。まるで藤臣が犯罪を犯したような書かれ方である。愛実 は憤慨したが、藤臣はそれらに関して一切の釈明をしなかった。

『美馬グループは製造や流通ではなく、サービス業に比率が傾いて

いる。イメージダウンは必須だが最小限に抑える必要があるんだ」

それはつい先日まで会社を潰すことに全精力を傾けていた男の言葉とは思えない。

『いざ崩壊するとなった時“様を見る”とは思えなかった。美馬の家と社員を守りたい』

彼はグループと社員の生活を考え、非難を自らに向けさせる工作をしたのだ。

七月、臨時の株主総会が開催され、創業者である美馬の人間は、全員が経営陣から撤退した。外部から社長を招き、グループは新生を図るという。それに伴い、矢面に立った藤臣は役職を解かれ、十月から北海道に転勤が決まった。

「あら、同じドレスなのね。それとも今は新調する余裕もないのかしら？」

鏡の中で愛実の後ろに一人の女性が立った。シックなベージュのスーツを着て、胸元には涼しげなコサージュが揺れている。藤臣の元秘書・由佳であった。彼女は相変わらずグループ本社の重役秘書として働いている。

「由佳さん、わざわざありがとうございます」

愛実は笑顔を作って立ち上がった。

「結婚式も自宅の離れなんて。まあ、ここなら周囲の目は気にならないわね」

「わたしがお願いしたんです。せっかく改装して頂いた離れの洋館を、思い出に残しておきたいからって」

今回の一件で、美馬家にはそれぞれに罰金や課徴金の負担が掛か

ることになった。いよいよ追い込まれる前に、と藤臣は土地家屋など資産の売却を決めた。美馬邸も母屋の一角を残し、後は全て売却予定だ。

もちろん、藤臣が改装した洋館も例外ではなかった。

八月の最終週、藤臣と愛実の結婚式のため、洋館は華やかに彩られている。

「でも災難だったわね。成城の西園寺邸まで売却なんて……」

西園寺邸は弥生が会社名義で買い取っていた。会社の資産として計上され、今回売却対象となった。

「仕方ありません。もともと一度は手放したものですから。思い出のある古い家財は引き取らせていただけましたし。それに住む所も幸い……」

今、なんと愛実の一家はこの美馬邸に住み込んでいた。

それには当然理由があり……一番の理由は、

「大奥様の具合ってどうなの？ 発表は脳卒中だったけど」

「えっと、比較的軽いもので、ただご高齢ですから」

長女の婿が逮捕され、亡き夫と孫にも逮捕状が出ていると知り、弥生は倒れた。

幸い、発表ほど大きな病気ではなかったのだが、あれから僅か二ヶ月で弥生は急激に老け込みつつある。杖について歩いていたのが、今は車椅子なしで移動も出来ない。排泄や入浴にも介護が必要だ。「あなたもお人好しよね。メイドは一人もいなくなっただんでしょ？ 家のことをして、大奥様の面倒まで」

「弥生さまのお世話は佐和子さんも手伝ってくれますし、執事の糸井さんも残って下さって……」

加奈子は夫と息子が逮捕されたにも関わらず、次男の宏志を伴い海外に出してしまった。信二と信一郎は刑が確定するまで海外には出れず、マスコミにも知られていない場所に裁判まで隔離されるとい

う。

和威は今月に入り職場に復帰したものの、九月から系列子会社勤務の辞令が出た。なんと全く畑違いの営業に回され、福岡支社に転勤となる。否応なしに屋敷を出ることになり、『何もかも任せることになってしまつて』と悔しそつだった。

そして、佐和子と弘明は。

「でも、驚いたわね。内部告発なんて。あの時、暁さんはご存知だったのかしら？」

信二たちの犯罪を告発した人物、それは美馬弘明であつた。

弥生と藤臣が互いを牽制し合っている隙に、弘明は着々と準備を整えていたのだ。おそらく、暁が弥生の企みに乗つたふりをして、余計に引つ掻き回した。父親の計画を悟られないように。

藤臣はそんなふうに言つていた。

「判りません。でも、藤臣さんのことを嫌つておられなかつたと思います。もしお会いできたら、あの時のお礼を言いたいと思つています」

弘明は離婚届を残し、この家と会社を去つた。暁も退職したといふ。

「……相変わらず、おめでたい性格ね」

言い回しはきついが、由佳の口調は楽しそつであつた。

「奥村さんにも本当にお世話になりました」

「そつね。今も専務のお世話をしてるつて言つたら……どうする？」

「そつそんなこと……ありません！ 絶対に！」

「ふーん。夜はちゃんとお世話してますつてこと」

「いえ……それはまだ……」

実は“まだ”であつた。

一つ屋根の下に暮らしているものの、藤臣と和威は忙しくてほとんど帰って来ない。時間的な問題とは別に、愛実の母が藤臣との結婚に『ノー』と言いはじめたせいでもあった。

十八歳の愛実の母の許可なしには入籍ができない。家や自由になるお金もごく僅かになり、母は親戚たちを巻き込んだ弥生との契約書の無効を条件に出してきた。その手続きに、ここまで時間が掛かったのである。

愛実が諸々の事情を由佳に告げると、

「へえ、よく我慢したわね？　まあ、それどころじゃなかったのかも知れないけど」

含み笑いを感じ、必死に藤臣をフォローしようとする。

「わたしは構わないって言ったんです！　でも、藤臣さんがちゃんと結婚するまで待とうって。なんだか……どうせ呪いが掛かって無理だろうから……とか、仰って」

「呪い？　何、それ？」

由佳の不思議そうな声に、愛実も首を捻る。

「優しくて誠実で思いやりがあって……人の心の痛みが判る人……か」

「え？」

愛実は由佳に問い返した。

「あなたの言った言葉、少しだけ信じる気になったわ。私も恋愛してみようかしら？」

「はい！　あ……でも、藤臣さんは誘惑しないで下さいね」

愛実の心配そうな声に由佳は声を立てて笑った。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

吹き抜けのエントランスホールに色とりどりのフラワーシャワーが舞う。

尚樹や真美が手に花びらの入った籠を持ち、「おめでとう！」言いながら新郎新婦に掛けて回る。いよいよ身内だけの、参列者は十人にも満たない式であった。

シルバーのフロックコートを着た藤臣は、どこか気恥ずかしそうな表情だ。

ドーム状のガラス屋根から降り注ぐ夏の陽射しに軽く目を細める。「藤臣さん……大変なときなのに、わたしのために結婚式を挙げて下さって、ありがとうございます」

愛実が気を回して声を掛けると、藤臣は困ったように笑った。

「君のためじゃない。私たちの結婚式だ。それに……絵美の件はこの先しばらく、君に辛い思いをさせるかも知れない」

恭子一家のことを口にした途端、藤臣の瞳に翳りが見えた。

今回の騒ぎで恭子たちは関東近郊から離れることが決まった。絵美は藤臣を実の父と信じたまま、自分と八歳違いの女性を妻に迎える彼に不満を口にしたという。それを見た恭子が、自分も愛する男性は別れた夫だけだ、と娘を説得したのだった。

“愛人と実子を捨て十八歳の花嫁を選んだ男”

もうしばらくはそんな記事が週刊誌を賑わすかも知れない。

藤臣はそのことに酷く傷つき、愛実に対しても申し訳なさそうな顔をする。

「辛くなんてありません。大好きなあなたの妻になれるんですから」

「一カ月後には遠くに行ってしまう夫でも？」

「高校を卒業したら追いかけて行きます。弥生さまの面倒は佐和子さんが見て下さると言うし、春には尚樹も高校生だから」

寂しくないと言えは嘘になる。

だが、住み慣れた場所を離れ、独りきりになるのは藤臣のほうなのだ。そう考えた瞬間、愛実の胸に不安がよぎった。

「寂しさを紛らわすために、浮気なんて……しませんよね？」

藤臣はぎこちない笑みを浮かべ、

「こんな可愛い奥さんがいるのに、どんな女に目が行くというんだ」
愛実を抱き寄せながら頬に口づけた。

「愛実、今夜は携帯の電源はオフだ。ついでに電話のプラグも抜いておこう。何があっても途中で止めないと約束してくれ」

真面目に言う藤臣が可笑しくて堪らない。

愛実は満面の笑みで「はい」と答えながら、ようやく手に入れた“愛”をしっかりと握り締めた。

｝ f i n ｝

第86話（最終話） 愛実（後書き）

御堂です。

やっと最終回を迎えることが出来ました。

丸8ヶ月、お付き合い頂いた皆様、本当にありがとうございました。

基本、ラストの流れは「く愛人」と同じです。

美馬家は没落の道を辿る運命、というか（^^;）

うーん、最後まで藤臣は愛実とエッチが出来ませんでしたね

可哀想かな？

藤臣救済のため、サイトに移したときには、初夜の番外編（R15）をUPしたいと思います（苦笑）

しかし… ちょっと長くなるかも、と思ってましたが86話24万字超えとは！

4月には終わる予定だったんですけどねえ

どういう計算違いをしたのか（ 計算機が壊れてる？）

基本的に他作品とコラボさせるのは「く愛人」のほうということで、こちらは後日談を書く予定はありません。

最後に

拙作にお時間をいただきまして、心よりお礼申し上げます。
またお目に留まりましたら、よろしくお願い致します。

2011/8/26 御堂志生

（前編）

「よし！」

携帯電話の電源をオフにして、藤臣はホッと息を吐いた。

今日は待望の新婚初夜である。ふたりは今、式を挙げた邸内の洋館にいた。愛実の希望で、今夜一晩だけここで過ごすことになったからだ。

残念ながら、この洋館は来週にも取り壊し、業者に引き渡さなければならぬ。

愛実との新生活を想像して手を加えた新居。この寝室も、そして思いのこもった子供部屋も、何より、愛実の寂しそうな顔がづらい。さらには、藤臣には明日も仕事があり、ろくにハネムーンにも連れて行ってやれないのだ。

今の時期、海外に出るなど逃亡扱いにされかねない。かといって、近場ではどこに行ってもマスコミの餌食になりそうだ。

（おまけに、たったひとりで単身赴任だ。結局、思い出の家も取り戻してやれず、ばあさんの面倒だけ押し付けることになって……）

好きでどうしようもなかった、とはいえ、三十男として分別をつけるべきだったんじゃないか。そんな気持ちも藤臣は捨てきれずにいる。

そのとき、シャワールームから愛実の声が聞こえた。

「あの……藤臣さん」

「どうした、愛実？ なにか問題でも？」

「えっと……その」

実を言えば洋館は改装途中で止まったままだった。

窓ガラスの入っていない部分すらある。寝室だけは藤臣が新婚初夜を過ごすにふさわしく整えたが、ひょっとしたら水回りに問題が起きたのかもしれない。

彼はそんなふうに思い、シャワールームのドアを少しだけ開け、顔を覗かせる愛実に近い。

「あ、待ってください。あの……」

「そんな顔をしないでくれ。君がバスタオルを巻いただけの姿でも、飛び掛ったりしないから」

愛実の慌てた様子に苦笑しつつ、

「何が起こったんだ？ シャワーが止まらないとか？」

藤臣はドアを押し開いた。

「きゃ！ あ、あの……」

胸元で手を組み、愛実は立っていた。

その姿は、なんと白いレースのベビードールにTバックのショーツ！

生地は透け透けで、形のよいバストと……先端のピンクの頂までもが丸見えた。濡れた髪が肩を覆い、その初々しいセクシーさに藤臣は眩暈すら覚えた。

「な……なんてモノを着てるんだ？ いったい、どこでそんな……」

呻くように声を出し、そのまま藤臣は絶句した。

「由佳さんが……結婚祝って。あの……藤臣さんはこういうのが趣味だからって」

頬を赤く染めてうつむき、必死になって愛実は説明する。

（由佳め！ 俺をおちよくりがって）

愛人関係にあった頃より、由佳は藤臣に対してフレンドリーになつていた。

藤臣の地位が落ちたせいかもしれないが、どうやら、愛実と由佳の間には不思議な友情が芽生えているらしい。その影響で、由佳の藤臣を見る目が変わったというべきだろう。

今日の挙式も、愛実の希望で彼女を招いた。

その結婚祝いに持ってきたのがこの“セクシーランジェリーセツト”だという。

「う、ごめんなさい。やっぱり、わたしには似合いませんよね？
すぐに脱ぎます」

愛実は誤解したらしく、半泣きで藤臣に背中を向けた。

「違う！ 違うんだ。そうじゃない……愛実、よく似合ってるよ。
セクシーで、とっても可愛らしい」

藤臣は慌てて愛実を背後から抱きしめ、囁いた。

「……いいんです。そんなムリして褒めてくださらなくても……」
「ムリなんかじゃない。その証拠に」

藤臣はひと足先にシャワーを浴び、バスローブ姿だ。そして、愛実の挑発に一発で昇天しそうな下半身を押し付ける。

「わかるだろう？ ただでさえ魅力的なのに、これ以上いじめないでくれ」

「そんな……いじめてるつもりは」

「ただ、奥村が何を言ったかは知らないが、彼女と付き合いがあった間、こんなものを着てくれなんて頼んだ覚えはない」

「由佳さんとは楽しまなかったってこと？ それとも、藤臣さんの趣味じゃないとか……」

藤臣はなんと答えたらいいのか迷った。

趣味じゃない、と言ってしまえば愛実のことだ。すぐに脱ぐと言

い出すだろう。それはそれで、残念な気がしてならない。

（そう……どうせなら、俺自身の手で……）

藤臣は咳払いをすると、

「奥村とも誰ともそんな楽しみ方をしたことはない。でも……君とは楽しみたい」

「た、楽しむって、どんなふうに？」

「そうだな……とりあえず、ベッドに行こう」

「キャッ！」

愛実を横抱きにして、彼女の額にキスをした。

天蓋から下がったレースのカーテンを藤臣は後ろ手で引っ張った。留め具がはずれ、ふわっとカーテンが下りてくる。ベッドの上は一瞬で外と切り離され、ふたりきりの世界になった。

実に三ヶ月ぶりのセックスである。

いや、愛しい思いをこめて、相手をいたわりたいと思って抱くのは初めての経験だ。それを考えると、藤臣の中に緊張が走った。

「愛実……俺を選んで、後悔してないか？」

愛実の少し火照った頬を撫でながら尋ねた。

「そんな、後悔なんてしていませんし、一生しません」

「愛してる」

柔らかな唇をなぞるように、そっとくちづける。

「あ、あの……」

「わかってる。電気だろう？」

藤臣はベッドのヘッド部分を手で探り、電灯のスイッチを押した。室内は一瞬で暗くなり、代わりにアンティークのフロアランプが

灯る。オレンジ色の優しい明かりがレースのカーテンに反射し、ふたりの世界をふんわりと包み込んだ。

「……キレイ……光の国みたい」

「ああ……君はお姫さまだ」

「じゃあ、藤臣さんは王子さまですね」

「歳の食った不良王子だけどね」

「そんなことないわ！ 世界中でいちばんステキな、わたしだけの王子さまだもの」

愛実は身体を起こし、藤臣の首に手を回して抱きついた。

藤臣はバスロープの紐をほどき、脱ぎ捨てると愛実の腰に手を回す。

「可愛いことばかり言って……俺を狂わすイケナイお姫さまだ」

ふたりは向かい合ったまま、唇を開いてキスを交わした。甘い唾液が愛実の顎に伝い、藤臣はペロツと舌先で舐める。

「やん……藤臣さんのエッチ」

「これからもつとエッチなことをするんだが……」

「ねえ藤臣さん……わたしのお腹に当たってるんですけど……あの、触ってみてもいいですか？」

その言葉に藤臣はドキツとして

（前編）（後書き）

御堂です。

お待たせしました、初夜の番外編です。

前編はサイト・なろうとも同じ。

後編は明日更新の予定です。

小説家になろうではHシーンを控えめに。

サイトはバージョンUPでいかせていただきます（苦笑）

よかったらサイトまでお越しくださいませ（^^）／

（後編）（前書き）

軽い性的描写があります。R15でお願いします。

（後編）

思えば、何度かきわどいところまで進み、そのたびに愛実に誇示してきた気がする。どうやら、男性の象徴の仕組みが気になってしかたがないらしい。

だが……大丈夫だろうか、と藤臣は思案した。いや、愛実が、ではなく、彼自身が、である。

「あ、ああ。いいよ、もちろん。持ち主に似て繊細だからね。優しくしてやってくれ」

愛実は恐る恐る手を伸ばし、指先でそつと触れた。そして、藤臣に言われたとおり、指先で優しく撫でる。ほぼ真上を向いているソレは、彼女のつたない愛撫に反応し、小刻みに痙攣し始めた。

藤臣は奥歯を噛みしめ、懸命に堪える。

（いったい……なんの拷問なんだ）

甘く切ない拷問に、藤臣はギブアップ寸前だ。

「……愛実……そろそろ」

「あ、ごめんなさい！ わたし、信一郎さんのことがあって……本当は少し怖かったです。でも、藤臣さんの平気。だから、あの……何をしたらいいですか？ 何でも、あなたのおっしゃるとおりにします」

愛実は少し潤んだ瞳で藤臣を見上げ。

「うわっ……ちょっと……クッ！」

「きゃー！」

白い液体が飛び散り、愛実のベビードールを汚した。

藤臣は愛実を抱きついたまま身動きが取れない。先端から滴り落ちる雫は愛実の太ももを濡らしていく。

生まれて初めてのフライングに、彼はショックを受けていた。

「あの……藤臣、さん？」

「我慢できなかった……悪い」

愛実はおそらく、何が起こったのかわかっていないはずだ。

（なんてフォローすればいいんだ。……ったく、これくらいで、しっかりしてくれよ！）

愛撫とはほど遠く、口に咥えられたわけでもない。ただ、触れただけで爆発するなんて、藤臣は信じられない思いだ。

愛実を抱いてシャワーに戻り、もう一度仕切りなおして……そんなことが頭に浮かぶがなかなか動けない。

そのとき、

「藤臣さん……大好き」

愛実はそのまま、藤臣の体をぎゅっと抱きしめた。

彼はすぐさま復活を遂げ

ふたりはより深い愛情で結ばれたのである。

く　＊　く　＊　く　＊　く　＊　く

「このベッドは部屋に運ぼう。フロアランプも……いいだろう？」

愛実は初めての行為にぐったりとして彼にもたれ掛かっていた。

藤臣はとっても優しくかった。信じられない場所にまでキスされて、

恥ずかしさと気持ちよさに心臓が口から飛び出してしまいそうな経験をした。

一つになってからも性急には動かず、ゆっくり、ゆっくり、愛実が高まるのを待ってくれた。

そして終わってから、ずっと愛実を抱きしめて髪を撫でてくれ……。『可愛いよ』『素晴らしい』なんて、何度言われたか数えきれないくらいだ。

「大きいから、部屋に入るでしょうか？」

「大丈夫だよ。どのみち、母屋は無駄に広いんだから」

「でも……このベッドで一緒に眠れるのも来月いっぱいなんですよね……」

愛実は急に寂しくなり、涙がこみ上げてきて、声が震えてしまう。半年くらい平気だと本心からそう思っていたのだ。でも、こうして身体を重ねたあとは、切なくて身を切られそうである。この大きなベッドで半年もひとりだと思つと、それが永遠の長さに感じた。

「愛実？ 必ず時間を作つて、毎月戻ってくる。それに、冬休みは北海道まで来るといい。弟たちが心配なら一緒に。電話は毎日するよ……ほかに、私にできることなんでも」

「ううん。ごめんなさい。藤臣さんの温かさを知つて、急にひとりが寂しくなつたの。でも、大丈夫だから……」

藤臣は心配そうに見ながら、

「すまない。本当に、初っ端から、苦労ばかりかけて」

「謝らないで。でも、一つだけ約束を守つてね。浮気だけはゼツタイにしないって」

すると、藤臣は照れくさそうに笑つた。

「もう、できないよ。性欲を処理するだけのセックスなんて、二度としない……いや、できない。“愛し合う”ってことを君に教わっ

たから」

愛実の髪に口づけ、しだいに額、瞼とキスが下りてくる。

「それって……違うこと？」

「ああ、全然違う。こんなに素晴らしい経験は初めてだ。私は今まで何をしてきたんだろう……」

「じゃあ、全部忘れてください。由佳さんのことも、他の女の^{ひと}ことも、全部忘れて。わたしの藤臣さんになって」

愛実は身を乗り出し、藤臣の胸に頬を当てた。

トクントクンと心臓の音が聞こえ、それは少しずつ早くなっっていく。

「東京を離れるまで、毎晩、こうして付き合っただけで欲しい。そうしたら……きっと、ひと月で何もかも忘れられると思う」

藤臣は甘えるように言うと、愛実の髪に顔を埋め、ぎゅっと抱きしめた。

愛実もそんな藤臣をしつかりと受けとめる。

「永遠に、わたしの王子さまでいてね」

「それは今日誓った。この命が尽きて、魂となっても、永遠に君のそばから離れない、と」

「もし、わたしが……とっても嫉妬深い奥さんになっても、嫌いにならないで……」

過去は気にしない、そう言ったはずなのに。

いざ、自分自身が藤臣を知ると、同じ悦びを分け合った女性の存在が悔しくてならない。

（藤臣さんの過去も未来も、すべてを独り占めしたいなんて……）

それは、愛実の心が少女から女になった瞬間だった。

「俺は君のモノだ。だから……捨てたらゼツタイに許さない」

そう言った藤臣は幼い子供のように震えて、愛実を抱きついた。

ふたりの間に隙間ができないように、愛実も彼の抱擁に力いっぱい応える。

「わたし、どんな藤臣さんも好きだから。一生、離れません」

「……愛実、愛してる……」

藤臣のキスが愛実の唇までたどり着き……

ふたりは朝まで、愛し合う悦びを確かめあつたのだった。

） f i n ）

（後編）（後書き）

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

こちらでは少しソフトな描写にさせていただきました（^^;）
サイトでは、もう少し「より深い愛情で結ばれる」辺りが書かれて
ますのよかったです…

どうもありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030p/>

十八歳の花嫁

2011年10月7日02時04分発行